
蒼い星

らんらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い星

【Nコード】

N3077E

【作者名】

らんらら

【あらすじ】

宇宙にたくさん惑星がある。その一つ、少年の住む世界はまだ未開の地。汚れた大気のために【ユニイラ】と呼ばれる植物がなく、では生きていけない世界。主人公の住む街は大切な【ユニイラ】を栽培している特殊な街。だからこそ。狙われたりもするわけで。主人公の少年は十七歳。今日も隣の港町で盛り場をうろろしています。待ち受ける運命に気付くこともなく。

1・隠された街デイラ（前書き）

少し長めのお話ですが。

RPGシナリオとして考えた作品です。

気軽に楽しんでくださいね

1・隠された街デイラ

「蒼い星」

1・デイラ

蒸し暑い、この季節にしてはやけに重苦しい午後。

通りの石畳に濃い影を落として、少年は足早に歩いていた。

港町、アストロードに風のない日は珍しい。かえって潮の香りがしつこく感じる。

少年は、肩に食い込む剣の重みを確認するように、鞘を鳴らした。

まだ、幼さの残る十七歳の彼は、一人きりでこの港町の繁華街に来ている。

昼間でも、酒場からは海の男の歌声やら怒鳴り声が聞こえてくる。

早朝の漁を終え、彼らはすでに一日の疲れを癒しにかかっているのだ。

酒場はすでに少年にとって、馴染みの場所だった。

幼い頃から家にいるのがつまらなくなると、そこに来て男たちの豪快な嘘話や、女たちの香水の香りを感じるのが好きだった。子ども扱いはされるが、それを利用してそこそこいい思いをしていることも確かだ。

酒場の脇を通ると、いつもの野良猫が、長い尻尾をゆらんと揺らした。

少年は一瞬立ち止まると、猫をなでようと、手を伸ばす。気まぐれ

な猫は、ふいと、酒樽から飛び降りて、まるでしてやったりという風にご機嫌な様子で歩き出す。

「ちえっ。かわいくないな。」

ポツリと独り言を言って、少年は再び歩き出した。

懐にある、金貨の重みが、少しくきつきさせる。いつもと違う。

今日このために苦勞してためたのだ。ちゃんと自分で漁師の手伝いをしたり、酒場で皿洗ひしたりして稼いだのだ。母さんにも何に使おうと文句は言わせないんだ。

少年の名は、シンカという。

この町の子ではない。街の少年たちに混じれば白い肌、少しくねりのある金色の髪は目立つが、常によそ者の出入りするこの町では、だからと言って特別に扱われることもない。濃い蒼い瞳は大きく笑うと愛嬌のある顔になる。

この地方の強い日差しは、彼の目を強く射る。

普段は縁のない目的の店を視界に認めると、シンカはさらに足を速めた。軒先の小さな看板が、日差しを鈍く反射するのに目をしばたいて、逃げ込むように入っていく。

店内は少しは涼しい。レンガの土のにおいがすかにする。

シンカは数日前に確認してあったそれをもう一度眺めると、店番の老婆に声をかけた。

「おばさん、この首飾り、ほしいんだ。」

老婆をおばさんと呼ぶのは少年の多少の遠慮だ。だが老婆は少年を見ると、ずるそうに笑う。

「いいのかい？子供が買うには高いと思うけどねえ」

「大丈夫だよ」

にっこりと笑うシンカ。きちんと下調べしたのだ。

「そうかい。十八イルだ」

少年の顔色が変わった。この町の賄いつきの宿で一泊一イル。十五イルでも半月遊んで暮らせるのだ、少年にとっては大金だった。

「この前、聞いたときは十五イルって言ったじゃないか！」

「ぼうや、知らないのかい？輝石は常に値が動くもんなのさ。今ちようど、高い時期でねえ。・・シシシ」

いやな笑い声が更なる不快感を誘う。

「なんだよ、少しくらい負けてくれたっていいだろ！悪徳だな」

三イルは実際少しとは言えないがシンカは食い下がる。一イル稼ぐには二週間市場の荷物運びをしなければならぬ。

「ふん、買わないんなら帰ってくれ。商売の邪魔だよ」

シンカはどうしてもこの首飾りがほしかったのだ。老婆のしわに隠れようとする小さな目を睨み付けた。

明日はミンクの誕生日。この石はあいつの瞳の色に映える。きっと似合う。

そう思って働いて小遣いを貯めたのに、今さら買えないなんて。誕生日は明日なのだ。今日買えなければ、今までの苦労の意味がない。

「さあ、帰ってくれ。……いらっしやいませ」

シンカの背を押しつけて、老婆は立ち上がった。後から入ってきた客に声色を変える。上客なのだろう。

「ボウズ、そいつを買いたいのか？」

振り向くと、シンカより頭一つ大きい、栗色の髪の男が笑っていた。見たことある。誰だったろう、思い出せない。

「俺の頼みを聞いてくれたら、買ってやるよ。」

男は、短くした髪をきっちり整えていて、上質な生地 of 服を着ている。

金持ちらしい。少し、迫力のある顔で笑って見せた。

シンカはまっすぐ見上げて、男を観察した。
本当に、どこかで見たことがある気がする。

「ほしくないのか？」

「あ、ほしい」

ふと口から出た素直な言葉に、男はにやりとした。

仕方ないよな。自分で買わなきゃ意味ない、なんて言っていられないか。

「どんな条件？」

「俺の部下とひと勝負しないか？その背中のものでさ」

男が店の外にいる、男より少し若そうな灰色の髪の男を指差す。店の小さな窓からは、その男の体半分しか見えない。それでも二十代後半くらいで、がっしりしているのが分かる。多分軍隊崩れか何かだ。

「負けたら？」

シンカが背中の鞆を整えながら、問いかける。

「喧嘩なら外でやつとくれ！ほら、ほら」

二人の間に割って入って、老婆が追い立てる。

シンカと男は店の外に出た。

暑苦しい日差しが眼に痛い。五、六人だろうか、男の部下たちの顔は濃い影がさしてよく見えない。皆、シンカをじろじろ見ている。

「負けたら？」

「俺たちに、畑を見せてほしい。」

栗毛の男は意味ありげにウインクした。

畑とは【ユンイラ畑】のことなのか。

「勝てたら足りない分を出してやろう」

男がシンカの頭をガシガシなでるので、その手を振り払う。

「レクトさん。酔狂だなあんた。こんなガキに負けたら勤まらない
っすよ。」

少し変わったなまりで灰色の髪の方が笑った。

「手加減するなよ、ジンロ」

レクトと呼ばれた、栗色の髪の方は煙草を取り出して火をつける。

シンカはぐしゃぐしゃにされた前髪を撫で付けながら言った。

「受けるよ」

シンカは、剣術の大会では町一番だった。

小さな町だから、威張れるほどではないけれど、まあ、やってみてもいい。

殺されることはないだろう。

シンカが剣を抜くと、相手も剣を抜く。

シンロと呼ばれた男の剣は、ひじから手先くらいの長さの短剣だ。
シンカの剣のほうが長い。

こんな条件の相手と戦ったことはない。

シンカが剣を持つ手に力を入れた瞬間、男が剣を肩の高さに構え突っ込んでくる。派手な音をたてて、刃がぶつかった。

1・隠された街デイラ 2

ぎりり……

力は男のほうが強い。

シンカは歯を食いしばった。押し倒されないようにするのが精一杯だ。

ふいに、男が後ろに飛びのく。

弾みでバランスを崩したシンカに、男は左膝蹴りを放つ。

危うく左手をついて、顔を背けてそれを避ける。

その勢いのままシンカは相手の懐に入り裏拳を放った。右ひじ、避けられれば、さらに剣の柄であごを狙う。

男はよけながらもシンカの腕を取ろうとする。

余裕なのだ。見切られている。

シンカはとっさにすり抜けた。

身をかがめた男が、脇を狙って突いてくる。

シンカは、後ろに跳びのく。

強い。

シンカはぞくぞくしていた。それが武者震いなのかなんなのかわからない。

だけど。初めて感じる高揚感は不思議と気持ちのいいものだ。

見物人から二人を隠すように囲む男たち。

その中であって、レクトだけは口元を緩ませて笑っていた。

男との間に三歩の間合いを作って、シンカは再び剣を構えなおす。

つと間合いを詰めながら、下から鋭く剣を振り上げる。

男は的確に捉えて短剣で受け流す。そのまま、力でシンカを突き飛ばす。

その瞬間シンカは男の短剣を持つ右手首をつかむと身を沈め、乗にかかる相手の体を蹴り上げた。
やった、と思ったのも一瞬だった。

投げられた男は、すぐに体制を整える。

間合いを詰め、低い姿勢で突きを繰り返す男。シンカに余裕を与えないつもりだろう。

長剣では不利な間合い。後ろに下がっても、すぐにつめられる。

シンカは三回目の突きを避けつつ、相手の膝に足をかけくると飛び越える。

着地と同時に、背後の男に剣を突き出して、けん制した。

男は無理につめようとせず、間合いを計っている。

攻守の勘は獣のようだ。

表情はないが汗すらかいていない様子にシンカは気づいてしまう。

勝てないかも。

暑さのせいで、汗が頬に伝う。

不思議と息は切れていなかった。

大丈夫。

腹から吐き出す息に力を込め、集中する。

再び男が突っこんできて、刃を合わせた。

間近に見えるジンの四角張った顔にも、うつすら汗が光っていた。
同じだ、俺と。

その時だった。

不意に男が、シンの目につばをはきかけた。

「！」

反射的に、目をこすった。
シンに隙ができた。

剣を持つ右手をひねられ、男はシンに馬乗りになった。

「はあ、は、……俺の勝ちだぜ。レクト。ボウズ、殺されなかった
だけありがたいと思え」

レクトはあからさまに不機嫌な顔をしていた。

「大人気ないな、ジンロ。」

「いいよ。負けたんだ。言っとおりにするよ。」

服を払いながら、シンは言った。実際、怪我の一つ二つは覚悟し

ていた。ジンロと呼ばれた男は、よほど手加減していたのだろう。相手がどうなってもいい戦いであれば、とつくに生きてはいない。シンカには良く分かった。

レクトは、ジンロを含めて五人の仲間を連れていた。

シンカは、約束どおり、彼らをデイラに案内することにした。
「ちよつと、歩くよ」

そういったシンカの後を男たちはそろそろとついてくる。

デイラは、シンカの生まれた街。

そこにはこの国唯一のユニイラ畑がある。ユニイラとは植物の名前で、特別な効能があるので国の管理のもとで栽培されている。その精製工場もデイラにある。

蒸気を使った機械で、たくさんのユニイラの成分を取り出している。それは、【ユニイラのしずく】とかいう薬として聖帝が民に与えるという。

この国の分も隣の国の分も、すべてこのデイラで作られる。貴重だから、嚴重な警備が敷かれる。

つまりデイラは街ごと国の管理化にあつて、他の街との交流を禁止されている。

シンカは我慢できずに、よく隣のこの港町に遊びに来ていた。もちろん誰にも内緒だ。母さんにも幼馴染のミンクにも。

しばらく行くと、シンカは心配そうに男たちに言った。

「なあ、なんで畑を見たいのか知らないけど、悪いことしないでくれよ」

それを聞いて、ジンロが吹く。

「笑うなよ！あたりまえだろ！俺たちにとっては大切なところなんだからさ。」

ジンロの袖を引っ張って文句を言う少年に、レクトは苦笑いだ。

「別に、ユニラを盗んだりしないさ。場所さえわかればいいんだ。あそこには警備兵もいるだろ？安心しろ」

「まあ、ね」

シンカは思う。この軍隊くずれの危険そうな男が六人もいたら、警備兵なんか、いてもいなくても関係なさそうだと。

……だけど、負けたしなあ。

1・隠された街デイラ 3

アストロードから狭い山道を二時間ほど歩くと、デイラの城壁にたどり着く。

デイラは小高い丘に囲まれた地形をしている。丘の手前の門番のいる城壁を越えなければ外からは街は見えない。

街には約二千人が住んでいる。そのほとんどが、ユニイラの工場か畑で働いている。残りはその子供か街の人々に商品売る商人だ。商人の売る物資さえ、すべてこの国、聖帝国ファシオンから支給されるのだ。

二十日ごとに警備兵が交替に来る以外を除けば、この街道を通るものはいない。そんな話をシンカがするとレクトが笑った。

「お前は、なんでアストロードなんかで遊んでるんだ？」

「だって、デイラはつまらないよ。ほらあそこ、この街道の先には城門に門番がいるんだ。だから、俺はいつもこっちから行くんだ」

シンカは城壁にそって北に回り込み、人気のないところで城壁を登る。

城壁を乗り越えたり、くぐったり、割れたところからすり抜けたり、いくつかの抜け道をシンカは知っていた。

シンカは一番ユニイラ畑に近い抜け道まで男たちを案内した。たまに使っ場所だ。

城壁によじ上りそこから指差す。

「おっさん、あそこに見える黒い布に覆われたところがユニラ畑。ここからなら降りて林沿いに近くまでいけるよ」

大人の身長ほどの城壁に、男も登る。

遠くに城壁の先、丘の向こうの海が見える。青くてちらちらと輝いている。デイラの町が一望できるこの場所はシンカのお気に入りだ。ぼんやりしたいときにはここにくる。

「変わらん」

男がポツリとつぶやいた。少年は聞きのがさない。

「来たことあるの？」

「さあな」

城壁に男と二人で腰掛けている。

レクトと呼ばれるこの男は長いまつげと高い鼻、切れ長の黒い瞳。よく見ると端正な顔だ。

女にもてそうだな。

以前も誰かと、こんなふうに座った記憶がある。いつだったか。

不意に思い出した。

父さん！？

じっと見つめるシンカに、レクトは涼しげな視線で返す。

小さい頃、多分五歳ぐらいの頃一緒に遊んでくれた。
そう、確かこんな顔だった。

でも母さんはこの人を「お父さんじゃないのよ」といつて認めなかった。

俺は、……俺はこの人のお父さんじゃないかと、ずっと思っていた。

心臓の音がやけに耳元に感じた。

どうしよう、お父さんなの、って、聞いてみていいかな。
でも俺のこと、覚えてないのかな。

複雑な表情の少年にレクトは笑った。

「ありがとうな。シンカ。こいつは駄賃だ。今日中にあの首飾りほしかったんだろ？」

差し出された金貨を受け取って、それでもシンカは視線を目の前の男に向けたままだ。

「なんだ、急がないと店が閉まるぞ」

「あ、あのさ。また、会えるかな」

それだけ言うのが、精一杯だった。

レクトは、シンカの頭をぐいぐいとなでて言った。

「ああ、すぐに会えるさ」

「ありがと！おっさん」

言うなり飛び降り、再び城壁の外にかけていく。

嬉しくて自然と笑みになっていた。

ずっと、会いたかった。

母さんは教えてくれないけど、お父さんは遠いところで生きているって言った。

金貨を握り締め、シンカは急いでもと来た道に戻っていく。

とにかく早く済ませて、もう一度レクトに会うんだ！
それで、確かめる。

母さんは違うって言うていた、でも。もしかしたら。

「笑うと似ているな」

レクトは少年の後姿をしばらく見つめていた。

「レクトさん、今のうちに済まさないと。寄り道はここまでにしましよう」

シンカが座っていたそこにジンロが足をかけた。

「ああ。仕事だな」

男の端正な顔は表情を変えた。

1・隠された街デイラ 4

「結局、二十イルとられたよ。ちえつ、残ったら母さんに何か買おうと思ったのに」

シンカは薄暗くなりかけた城壁沿いを、デイラに戻ろうとしていた。言葉とは裏腹に、その顔は嬉しさが隠せない。

俺に会いに来てくれたのかな。

でも、それなら、ユニラ畑なんか関係ないよな。

「またすぐ、会えるさ」そう言ってくれた。

シンカは夕日の影になりつつある城壁に、とんとんと調子よく登った。ふとレクトと並んで座った瞬間を思い出す。

緩やかな夕方の涼しい風が、いつもなら頬に当たるはずだった。

畑が林の向こうに見える。

「！？なんだ、よ…」

空が赤い。炎を背にし、林は黒いやせたシルエットを見せる。向こう、ユニラの畑は一面炎に包まれていた。

鼻腔をくすぐるしつとりとした香り。覚えがある。ユニラが焼けているのだ。ユニラを燻すと独特の甘い匂いがする。その煙はユニラの成分を含んで、直接神経に影響するために、吸引すると酔ったようになってしまう。一種の麻薬だ。

「まさか、あいつら、何したんだ！」

畑を囲う石堀はすすで真っ黒になっている。門を護る警備兵が二人、倒れていた。

「！…死んでる」

レクトたち、なのか。

俺が案内したから、だからこんなことになったのか？

ユニイラはこの国の人々には大切なものだ。それをこんな。

シンカはじりじりと熱に火照る頬を両手でばんばん叩くと、一つ息を吐き駆け出した。畑の中、まだレクトたちはいるかもしれない。いつもなら、黒い布に覆われた日陰で、一面にユニイラの緑の葉が広がっているはずだった。

水と植物。

そんな風に燃えるはずのないそれがまるで石炭のようにゴウゴウと眩しい炎を上げ、シートを溶かし巻き上がる気流にねじれたような煙が白く、黒く立ち昇る。

その前に男が立っていた。

レクトだ。

気付いたのかゆっくりと振り向いた。

炎に照らされた笑顔はぞつとさせた。

「おっさん！何したんだ！」

「おや、ついてるな。探す手間が省けた」

シンカは一步下がった。

「なに、してるんだよ！」

その間にも、先ほどの男たちが炎を吐き出す大きな銃で、畑を焼き払っている。青い炎がユニイラをなめると、あっという間に白い灰になる。ユニイラを育てるための栄養の入った液体のパイプが焼けただれ、パイプに沿って炎が走る。

焼け落ちた黒い保護布が赤い炎に包まれてぼとぼと腐ったリンゴ

のように落ちていく。

男たちは顔にマスクのようなものをしていた。
甘ったるいユニイラの匂いと、炎の熱が胸を苦しくする。

見たことがなかった。そんな武器も、マスクも、彼らの黒い服装も。
こんな、炎の海も。

「や、やめろ！」

止めなきゃ、やっと思考が動いてシンカは叫んだ。

男の一人に飛び掛ろうとするシンカの腕をレクトにつかまれた。

「離せよ！大切だって言っただろ！」

「シンカ、君は連れて行くよ。ロスタネスには話がついている」

「なんで、母さんもこのこと知ってるんだ！？あんだ、何なんだよ
！」

振りほどこうとした瞬間にレクトの圧倒的な腕力を感じて、慌てて
膝蹴りを繰り出す。

「おっと」

レクトはにやと笑う。

この男は、こんな時に笑っているのだ。

二歩、後ろに下がると、シンカは目の前の男を睨み付けた。
父さんだと思ったのに。ずっと、そう、思っていたのに。
なんで、こんなことするんだ。

ジンロが後ろで怒鳴る。

「レクトさん。俺は反対すよ。余計な荷物背負うことになります
よ。皆殺しって命令じゃないっすか」

「皆殺し・・・！？」

皆、って？

気付かなかった。

シンカは慌てて石塀の外に飛び出した。遠く畑の炎の向こう、デイラの町も同じ海に飲み込まれていた。夕闇の中、空に火影を落とし町じゅうが炎に包まれている。空に何か大きな黒い影があつて、そこからちかりと光線が延びた。光線が落ちた場所からまた、新たな白い炎が湧き上がる。

「母さん！」

駆け戻ろうとするシンカの背後を、ジンロが追う。

「ジンロ、殺すな！」

「だめっすよ、レクトさん」

シンカは懸命に坂道を走っていた。家までの近道を、小さな川の石橋を渡るうとする。

乾燥した熱風に喉が焼け付き、痛む。煙なのか視界は白く濁っている。

と、急に視界が回転した。

背中が熱かった。

石畳に頬がすれ、丸くなった自分の背後に男を見た。

ジンロと呼ばれていた男だ。

けふ、とむせ、体が動かないことを悟った。

シンカはぼやける視界で、デイラの最後をまぶたに焼き付けた。

1・隠された街デイラ 5

背中がじわりと疼いた。

赤い夕日だった。「お父さん」は俺の隣にいた。

にかつと男前の笑顔。

俺、変な夢見たよ。父さんがさ、変な男たちと町を焼き払うんだ。そんなのあるわけない。

な、母さんもそう思うよな。

それともあの変な武器とか空を飛んでいた機械。あれは母さんが教えてくれた、遠い俺の知らない世界のものなのか。

「お父さん」は言った。

「お前を連れて行く。ロスタネスとは話がついているんだ」

母さんと、話…？

「つつ…」

ぴくりと意思とは関係なく腕が震えた。

「痛い」

シンカは目を開いた。

そんなのあるわけない。

視界にはくすぶった白い煙が漂う。ユニイラの匂い。幻覚でも見ているのか。

体を起こし、頭を振ってみる。

背中が痛んだ。

でも、きつと大丈夫。痛いだけだ。だって、ちゃんと手も動かし、息もしている。大丈夫だ。

しばらくそのまま、じっとしていた。

辺りは闇だ。

なんの音もしない。熱くも寒くもない。星が、見えるはずなのに。空は真っ暗だった。

「街は！」

唐突に思い出した。

焼かれた町はどうなったんだ。

街のあるはずの方角を見つめるが、所々にぼんやりと炎の明かりが見えるだけで、灯りも何も見えない。どれくらい時間が経ったのか。どうなっているんだろう。

シンカはゆっくりと歩き出した。

「母さん！母さん？」

橋から一番近いところにあつた酒屋さんの家はない。いや、その横も。暗がりにはぼっかりと穴が開いたように、なにもない。

瓦礫となった壁と燃えた屋根や崩れた石垣。シンカは、炎が残っている木の切れ端を灯り代わりに、町の中心部に向かった。

領主の家の横、小さいけど新しかった俺の家。白い壁が目印で、オレンジの屋根が太陽に映えて。

その場所には何もなかった。崩れた白い壁と灰にまみれた木材の形をした残骸。

「母さん！母さん？！」

返事はない。

「……か」

かすかに小さな声。隣の領主の家は頑丈な石造りだった。大ぶりの石垣がそのままの形で倒れ、井戸との間に隙間があった。声はそこからのようだ。

「母さん？」

「……助けて。シンカ」

「ミンク！」

そつと手を入れてみる。暗闇で触れる髪。耳、首。鼓動がある。このまま引き出していいものだろうか。

「ミンク、どこが痛い？動かせないとはあるか？」

「シンカ、足が、挟まっていて。動けないよ」

あれから二時間は経過している。意識が今もはつきりしているといふことは重大な怪我ではないと判断していい。松明を近くの瓦礫に差し、石をどけるため、長い柱を持つてくる。てこの原理で瓦礫を浮き上がらせ、そのすきにミンクの襟首をつかんで引っ張ってみる。何とか、引き出せた。

とにかく、どこか明るいところで手当てしないと。

シンカはミンクを背負い、まだ、火の勢いのあるあたりに移動する。

「ミンク、何があったんだ？母さんは？他のみんなは？」

「わかんない。ロスタネスさんの悲鳴が聞こえたから尋ねようとしたら、何かが頭の上から落ちてきて、後はもうよくわかんない」

ミンクの声はだんだん涙声になる。そのうち、くすんと鼻をすすった。

「…そつか。でもよかった。お前が無事で」

ミンクの足の傷に裂いた服を巻きつけながら、自分の手も少し震えていることに気づく。

「シンカは、大丈夫なの？」

ミンクの問いに、精一杯笑って答える。

「ああ。大丈夫。俺、街の外に行ってたんだ」

「街の外！？だってそれ、禁じられてるのに」

「……ん、まあ」

禁じられているのに、俺は外に出て、レクトたちを案内した。俺のせいなのか。

シンカは黙り込んだ。

レクトは、「ロスタネスとは話がついている」って言っていた。町を焼き払う前に、母さんに会ったんだ。どういことなんだ。なんで母さんに会いに行ったんだ。

父さんだから？

小さく首を横に振った。

父さんなら、本当に父さんなら町を焼き払うなんてしない。皆殺し。シン口と呼ばれた男の声がよみがえる。もしかしたら、俺が畑にいた時にはもう、母さんは……。

震える手を強く握り締めた。シンカの肩に乗せた、ミンクの手も震えていた。

横に座り、肩を抱いた。

取り乱す気力もなく、二人はそこで夜を明かした。

背にした瓦礫をつたう朝露のしんみりした冷たさで目がさめる。傍らのミンクはまだ眠っていた。

怪我は大丈夫なようだ。医者に診せたいが、それにはまず隣町まで行かなくてはならない。

「こんな大惨事が起こったのに、国の軍隊は何しているんだ」
小さくつぶやくと、シンカは立ち上がって周囲を見渡した。

朝もやに包まれた瓦礫は日に蒼い影を作り、形容し難い無残な形をしている。まだどこかに生存者がいるかもしれない。

じっと耳を澄ましてみる。目を凝らしてみる。

静かだった。何の、物音もしない。朝は、駆け回る子供たちの声、犬のほえる声、工場の動き出す蒸気の音、母さんが、起こしてくれる。

母さんのやさしい声。

何もない。何もかもなくなっている。

頬をぬぐった。

二度と、会えない。

隣のおじさんやおばさん、仲間たち。ふざけあってよく遊んだ。喧嘩した。友達だった。

いつの間に起きたのか、ミンクの細い手が、ぎゅっとシンカの手をつかむ。

「泣かないで」

ミンクも泣いていた。

「俺たち、だけかも」

ミンクの大きな目から涙が伝う。シンカはぎゅっと抱きしめた。

陽が高く昇る頃、シンカたちは泥だらけになって立ち尽くしていた。母、ロスタナスの遺体を埋葬し、となりにミンクの両親の墓も作った。その作業の間中、ミンクは泣いていた。

街はひどい状態だった。壊されたというより、ものすごい熱さの何かに溶かされたようにあちこちに深い穴が開いていて、どの遺体も無残だった。

とても、他の人たちの分も埋葬する気力はなかった。

街の中心を流れていた川は黒くにぎり、どの井戸も使えなかった。

ここには住めない。

シンカはそう判断した。

「な、ミンク。俺、聖都に行こうと思うんだ」

両親の墓の前で座り込んでいるミンクに、シンカは声をかける。

「どうして？」

泣きじゃくった後の、鼻にかかった声がシンカの涙をさそう。

「ここにも水も食料もないし。それにこの事件のこと、聖帝に知らせるべきだと思うんだ。聖帝に訴えて犯人を捕まえてもらうんだ」

「でも、遠いよ。行ったことないし」

シンカが肩に手を置くとミンクは大きな赤い目で見上げた。

「ここに、一人が残るか？」

また、ミンクの頬に涙がこぼれる。

「やだ」

「じゃ、行こう。大丈夫。俺がついてる。護るからさ」

1・隠された街デイラ 6

シンカは、もろく崩れた城壁を越え、ミンクとともに港町へ向かった。

この国、聖帝国ファシオンの首都である、聖都シオンへは、確か、船があつたはずだ。

子供の頃から、アストロードで遊んでいたシンカには、船乗りの友達もいた。

夕方。ミンクが少し嫌がったけど、酒場の知り合いを訪ねた。

「どうしたの？シンカ、ひどい有様じゃない」

客は誰もいない。

この時間は、漁師はもう眠りについていた。だから、酒場も片付けに入っている。

立て付けの悪い扉を、音を立てて入っていくと、カウンターの中で洗い上げをしていたのだろう、

コーン姉さんが声をかけた。

「うん。ちよつとね」

「なあに？また、喧嘩でもしたの？その子は戦利品なの？」

そう言いながら、シンカを手招きして、自分の部屋に連れて行ってくれた。

「あの、誰？」

ミンクが緊張した面持ちでシンカの袖を引っ張る。

その声は弱い。疲れているし、つらいことがあつたのだ。ちよつとしたことでも、泣き出しそうだ。

シンカは、できるだけやさしく笑って、ミンクの肩を抱いた。

「大丈夫。友達なんだ。でも、デイラのことは知らないから、言っちゃだめだぞ」

「……」

ミンクは黙ってうなずいた。

「ごめんね、ちらかってるけど」

「そんなのいつものことじゃん」

慣れた様子で入っていくシンカに、ユーン姉さんは笑った。

「あんたに言ってるじゃないの。その子に言ってるんだよ。まったく、女の子泣かすんじゃないわよ」

ぬらした布を二人分渡してくれながら、酒に焼けた声の姉さんがシンカの頭をこつんとつついた。

「ほら、これ、ちょっと大きいけど。その埃だらけの服、なんとかしなさいよ」

ユーン姉さんの手に、ぽんと肩を叩かれて、ミンクが一瞬泣き出しかけた。

「あ、なあに、どうしたの？大丈夫？」

少女の大きな瞳を覗き込む。

その、日に焼けた女性の心配そうな笑みに、ミンクはうなずいた。大きな瞳をぎゅっと閉じて。

「あの、姉さん、ミンクは」

服を勝手に着替えたシンカは、ミンクの肩に手を置こうとする。

それをぴしゃりと叩いて、ユーン姉さんはにらんだ。

「シンカ、この子に何したの！」

「え、違うよ」

「いいから、あんたは向こうに行ってなさい！」

シンカの肩を押して、部屋から追い出そうとする女性の服を、ミンクが引っ張った。

「あの、私、シンカのそばにいたいの」

ミンクの赤い大きな瞳に、ユーン姉さんの勢いがそがれた。

「あ、そう。」

「ごめん、ちょっと訳ありでさ。俺、この子連れてシオンに行くんだ」

着替え始めるミンクに背を向けて、シンカは言った。

「なあに、遠いじゃない」

木の小さな椅子に座って、シンカは小さくため息をついた。
隣で、姉さんはテーブルに肘をついている。

「でも、行かなきゃ行けないんだ」

「話してくれないわけ？」

「男にはそういうときがあるんだ」

プツと吹き出して、ユーン姉さんは少年の金髪をなでる。

「誰かさんみたいなこと言うんじゃないわよ」

それは、ユーン姉さんを置いていった、船乗りのことを言っていた。
シンカも、彼とはしばらく会っていなかった。

頼りになる親友だった。

ユーン姉さんが寂しげな顔をして、窓の外を見つめた。

明日もいい天気なのだろう。嫌になるくらい夕焼けが赤い。

「大丈夫、すぐに、帰ってくるよ」

「誰のこと言ってるの？シンカ、あんたは約束を守る子だわ。あの
人とは違う」

「うん」

「お金、あるの？」

「……大丈夫。俺、何だってできる」

ユーン姉さんは、少年を見つめ、次にミンクをちらりと眺める。

「上の部屋、あの人の部屋が空いてるから今夜はそこにとまって行

きなさい」

「ありがと」

酒場の二階は、宿になっている。

辺境の港では、そんなに泊り客はいない。たまに、大きな商業船が停泊すると、

その乗組員が何人か泊まる。

年上の、ユーン姉さんの恋人もそんな一人だった。

シンカもよく、遊びに来た部屋だ。

「ユーン姉さんはね」

シンカは黙ったままのミンクに、話しかける。

「俺が初めて、この酒場に来たときに、ご飯食べさせてくれたんだ」
「……」

黙って、ミンクはスープをすすった。

「なんか酒場の雰囲気が好きでさ。俺、ずっと通ってたんだ。もう十年くらいになる」

不思議そうに見つめるミンクに、シンカは話を止めた。

ミンクの赤い大きな目はまだ少し腫れていて、それを見るたびシンカの心も痛む。

「シンカ、強いね」

ポツリと言った少女の言葉に、シンカは笑った。

「そうさ。俺、遅しいんだ！ミンクはデリラから出たことないけど、俺、あちこち行ったことあるからな。さすがに、シオンまでは行っただことないけど」

「……」

笑顔にならないミンクに、シンカはまた微笑んでみせる。

「大丈夫。俺に任せておけよ」

翌日、ユーン姉さんの紹介でシンカたちはアストロードから聖都シ
オンのあるロシア州の港町キャストウェイまで行く船に乗せてもら
った。

アストロードからは、その港町が一番シオンに近い。

船にはじめて乗るミンクは、片道3時間の船旅に、すっかり参って
しまっていた。

船酔いで、もともと白い顔はさらに青ざめている。

シンカはミンクに付き添って、ずっと、甲板で風に当たっていた。

「ごめんね、シンカ。私、みつともない。」

また泣き出しそうになるミンクに、シンカは笑う。

「そういうところが、かわいいんだから、いいんだ。」

半分、照れながら言ったのに、ミンクは聞き流す。

ミンクはデイラでも、一、二を争うくらい可愛い女の子だ。小さい
頃から、みんなに

可愛いつて言われているから、俺が一言言っただくらいじゃ、ぜんぜ
ん気にならない。

ずっとそばにいて、幼馴染で。たぶん、俺が一番の仲良し、だと思
うんだ。

でも、誰にでもやさしいから、ミンクが俺のこと特別って思ってい
るかは分らない。

誕生日のプレゼント、奮発したのも、ちょっとがんばってるんだっ
てとこ、見せたかったんだ。

シンカは、渡せずにずっと持っていたそれを思い出した。

シンカはミンクの銀色の長い髪が風でふわふわ頬に当たるのを感じた。

くすぐったくて、髪を手で束ねる。

白いうなじが見えて、少しどきつとした。

十七歳という年齢にしてはかなり経験をつんでいるつもりなのに、俺、ミンクに対してはぜんぜん駄目だ。

目をそらしてうなじを隠すように肩に腕を回した。

これから、ミンクをシオンへ連れて行く。

聖帝が保護してくれるはずだ。

デイラの住民は、この国にとって特別なんだ。

普通の人は、デイラの存在自体知らないけど、聖帝はデイラを大切にしていた。

デイラの住民だけが、ユニラの栽培方法を知っていたし、精製する技術を持っている。

この国にとって、重要なんだ。

少し熱っぽいミンクに、そっと自分の上着をかけた。

1・隠された街デイラ 7

聖都シオンのあるロシア州、その玄関口港町キャストウェイは活気があった。

デイラと小さな港町しか知らなかった二人が見たことのないような大きな蒸気船が並んで少しずつ違うタイミングで揺れる。

船員が何かの合図で振る白い旗が青空に眩しい。

汽笛が昼下がりの町に響き渡るたび、ミンクはびくりと震えた。そのたびにつないでいる手に力を込めてシンカは大丈夫だよ、と笑う。恥ずかしそうに口を尖らせるミンクの子どもつばい仕草が好きで、からかつてばかりいた小さい頃を思い起こす。

でも今は。俺が支えてあげなきゃいけないんだ。

「あれが、蒸気船なんだね、大きいんだね。私、初めてのことだからでなんだか怖い」

シンカの服のすそを片時も離さずに、ミンクが愚痴をもらす。生まれて初めてデイラから出たのだ。無理もない。

「大丈夫だよ。俺がいるし。俺も初めてのところだけど、言葉が通じないわけじゃないだろ」

シンカは新しい空気を吸い込もうとするかのように、腕を伸ばして大きくのびをする。

背の低いミンクは、それをまぶしそうに見上げた。

金色の少しくせのあるシンカの髪が、潮風にゆれる。

背中 of 剣が、昼の陽光をちりりと弾く。

「ほら、大きな鳥だ。たくさんいるな。何ていうのかな。魚とつてるぞ！すごいな」

元気付けようとするシンカの言葉も、今日は上手く行かないようだ。

「シンカはやっぱり特別ね。私たちと違う。シンカは強いよ」
「特別って？」

特別な男の子という意味なら大歓迎だけれど。

「だって、たくましいというか、平気というか。無邪気というか、能天気というか」

並べる言葉が増えるにつれ不機嫌さを増す少女にシンカは肩をすくめる。

「惚れ直した？」

ミンクは真剣ににらんだ。

「もうっ！そういうことじゃなくて！！」

「なんかお腹すいたな！！あっちのほう行ってみようぜ、焼肉の匂いがする！」

強引に手を引くシンカに、引きずられながら、ミンクは見慣れない町並みを見上げる。

三階もある共同住宅が並ぶ。波止場にはレンガ造りの倉庫。倉庫の裏通りはどうやらテントが並ぶ市場だ。そこからあぶった肉の匂いがしているのはシンカの言うとおりだった。

鳥の丸焼きが軒に吊られ、それをそぎとって香ばしいタレにつける。それをスライスしたパンにはさんだ食べ物を二人分買うつと、食べながら歩いた。

「ミンク、宿についたら、ゆっくり休めよ。俺は漁師の手伝いして朝戻るよ。ごめんな、そばにいれなくて」

「いいよ。私一人で出歩くななんてできないし」

少女が小さく肩の力を抜いたのに気付く。

慣れない旅は、両親をなくしたばかりのミンクには少し酷なのかもしれない。気が晴れるようにと思いついても、今は仕方ないと考えた末の行動だった。ミンクは一人になりたいのかもしれない。

シンカは街を出て以来、泣いても笑ってもいないミンクの様子が気になっていた。

宿屋なら部屋にいれば怖いことはない。

宿にミンクをひとり残し、漁師たちが待つ港へと歩く。夜の街の様子はアストロードに似ている。酒場から喧嘩しながら飛び出す男たち。そろそろ漁の準備にと人の流れは船に向かう。

見送る家族がいて、漁師たちは夜の海に出る。

温かい陸からの風に背をあおられながらシンカはデイラが失ってしまったものを改めて思い知る。

求人看板の前、集ってきた男たちに仕事を割り振っていた男がシンカを見つけるとすぐに目をそらす。

シンカの後ろに並ぶ男に声をかける。

「なんだよ、無視するなよ。俺も働きたいんだ」

「んあ？お前がか？おい、聞いたか？」

男は抜けた前歯でしーしーと息を漏らしながら笑った。

周囲の男たちも笑う。

「子ども扱いすんなよ」

「ああ、じゃあ、お前はこれだ。一晚で3ヘル」

「は？」

「安いとか文句言つなよ？お前がなにができるってんだ？ここに来る奴らはな、みんな外洋を経験した立派な船乗りばかりなんだぜ。」

お前、まともに帆もはれないだろうが」

文句は言えなかった。男の差し出す紙切れに書かれた内容は、小さな漁船の手伝いだ。賃金が少なくても、釣った魚をもらったりはできるかもしれない。

ミンクの宿代で、ぎりぎりだろう。

デイラから持ってきた金はわずか。あの時、レクトがくれた金貨の残りが救ってくれていた。気に入らないことに。

汽笛の音が不意に響いて、窓の木枠がミシと軋んだ。

「ん、まぶし……」

朝の日差しを直接肌に受けて、ミンクは目を覚ます。窓辺の鳩がばたばたと慌てて飛び立っていった。

「あ、そうか。港町の宿屋だった」

独り言と一緒に起き上がると簡単な木のベッドがきしむ。シンカはまだ戻っていないようだった。もともと。この部屋にはベッドは一つしかない。シンカは宿で休むつもりがないのだろう。

そういう優しさは少しばかり胸が痛むが、結局何も出来ないのだからとミンクはただ黙って言うとおりに従った。

ミンクは部屋の壁にかけられている鏡にむかう。そこに映るのは少し歪んだ青白い顔。自慢の銀色の髪もくしゃくしゃだ。赤い瞳はまだ少し涙の後がある。

「まぶたがちよつとはれてる。やだな。かわいくない」

ミンクは髪を整え顔を洗う。港でシンカが買ってくれた香油を少し、首につけてみる。

白い花のいい香りがした。

ブルルッ。馬の声とともに馬車の止まる音。宿屋の前に止まったようだ。二階の部屋からミンクがのぞくと、金髪の少年が馬車から降りてくるところだ。

「ミンク！」

「はぁーい」

返事をしながらもう一度鏡を見て、にっと笑ってみる。

昨夜一人きりでたっぷり泣いた。だから、今日はもう泣かない。シン力のお荷物にはならないんだから、そう鏡の自分に言い聞かせる。

2・強盗もどき

シンカが乗っていた馬車は、隣の町ラツールに向かう商人のものだった。漁師の手伝いで得た駄賃で宿の支払いを済ませるとシンカは自慢げにミンクに説明した。

小さな漁船で、大きな魚を釣り損ねたのだと。

それは幸運を呼ぶといわれる蒼い魚。それを惜しくも逃したけれど漁師はかかったことで大喜びしたという。

しかもその後には面白いように大物を釣り上げ、予想以上の駄賃をもらった。

すっかりシンカを気に入った漁師が商人を紹介してくれた。

魚の卸業者だった。これから獲れたての魚を、ラツールという街まで運ぶらしい。そ

の手伝いをする代わりに乗せて行ってもらったことになったのだ。

「ふん、シンカはたくましいね」

ミンクは馬車の中自分の膝をぎゅっと抱きしめて座る。時折、揺れで倒れそうになるのを支えたいと思うシンカと平気だよと口を尖らす少女。

どうにも、ちぐはぐだ。

「なに、淋しかった？」

「平気ってば、暑いからもう少し離れてて」

「ちえー」

それでも、少しだけ顔色の良くなった少女にシンカはホッとしていた。

ミンクはその笑顔から視線をそらした。

キヤストウェイからラツールまでの道のりは、荒地を横切る。

乾燥した空気と照りつける日差し。それは灰色の勝った岩の海を容赦なく焼く。まばらに細い影を従える木々は、そよとも吹かない風を待ちわびるようにひっそりと景色に溶け込み。それと気付くには数を数えようというシンカの子どもつばい提案がなければ不可能だった。

それも数えられてしまうほど。

淋しい荒地には、強盗がよく出るといわれていた。

魚を運ぶ馬車は、全部で四台。

「まあ、魚は普通襲われないんだ」

魚屋の若旦那さんは穏やかに笑う。お人好らしく優しい弧を描く眉が細い目に似合う。

日差しは昼に向かってさらに強く熱く照り付ける。

一番後ろの馬車に乗って魚と一緒に揺られながら、デイラではこんなに暑いことはなかったとシンカが笑う。

魚の匂いに少々ご機嫌斜めなミンクは取り合わない。

「なんだ、不機嫌だな。せっかく珍しい経験してるのに、楽しまなきゃ損だろ」

「……魚と一緒にあって蒸されてるのって、楽しくないと思うよ」

「そうかな？ほら、この魚、焼くと美味いんだってさ。あ、そうだ、こいつその日向で焼いてみる？鉄のところならかなり熱いし」

「やだ」

つれないミンクにもシンカは笑っている。

ふいに馬車が止まった。

「なんだろ、なあ、何かあったの？休憩？」

シンカは荷物との間の布の仕切りをはらりと開いて、御者台の男に

話し掛ける。

「さあ、休憩にはまだ早いだろう。前が止まったから止まったんだ」
ぼんやりした男が答える。

ミンクを振り返るシンカ。

「なあに？」

ミンクは本格的に機嫌が悪い。

「ちよつと、見て来るよ」

シンカはそつと馬車を降りる。

本当は少し前から、走ってでもいいから全部の馬車をのぞいてみたくなっていたシンカは、これ幸いと前に止まる馬車を見物しながら歩き出す。

見たこともない珍魚に出会ったら、ミンクにも見せてやろうと画策しながら。

「ここに置けよ」

黒髪の背の高い男が、にやりと笑って言った。

馬車の列の先頭だ。

男が握り締める剣は熱を帯び、若旦那の喉もとに押し当てられていた。額に伝う汗が目に入り、何度も瞬きすると若旦那はごくりと唾を飲み込んだ。

「その金貨の袋、全部だぜ」

男の指示で従者が金貨の袋を置こうとしていた。

「おっさん」

シンカはひらりと従者と男の間に立った。

「なんだお前。動くなよ。こいつがどうなるか」

男は黒い瞳を細めて、金髪の少年を見つめる。シンカの背には長剣がある。腕を組んでシンカは面白そうに笑った。

「おっさん、見たとこ軍隊とかにいたろ。すっげえ強そうだもんな」
緊張感はない。

「し、シンカ君！無茶なことしたら駄目だ！若旦那が」
従者が小声でたしなめる。

そんなこと関係ないといわんばかりに、組んでいた腕をそのまま頭の後ろに持っていくと、シンカは黒髪の強盗に言った。

「俺さ、その人に世話になったんだ。恩人が危険な目にあっているのに何にもしないって、男として良くないと思うんだ」

2・強盗もどき 2

「ふん、で、お前に何が出来る？」

強盗はにたりと笑う。黒い長い髪を腰まで伸ばした威丈夫で、鍛え上げられた日に焼けた手足がその強さを物語る。

「俺と勝負してよ。俺が勝ったらその金貨、半分残してほしいんだ」

「お前が負けたらどうするよ」

「おっさんの強盗の手伝いするよ」

男が吹き出す。都合のいい選択だ。

「な、おっさん、どっちにしる悪くない条件だろ？」

「変なやつだな。いいだろう。けどな、お前が負けたときには、お前は死んでるわけだ。一体どうやって手伝うってんだ？」

「やってみなきゃ分からないよ」

肩の剣を抜いて構える。つかんでいた人質を突き飛ばし、男も構える。

遠巻きに二人を見ていた従者が慌てて若旦那を招きいれた。

じりと照りつける太陽に熱を帯びた剣。息を潜め動くもののない中、反射光だけがかすかに揺れた。

男の剣のほうがシンカのそれより少し短い。

軍人用の武器なのだろう、湾曲した刃の根元に返しがついている。

剣先を見てはいけない。眩しい光に視界が奪われる。

と、測ったように同時に二人の刃が硬い音を立ててぶつかる。

「ふん」

男はぐ、と間合いを詰めるが思った以上の手ごたえに一步下がる。少年も少しはやれるのだと男は悟る。嬉しそうに唇を舐めた。体格差も腕力の差も歴然としているが、シンカには恐れはない。二人の間には二つの刃。かすかな火花を散らして切り結び、また間を保つ。

数度目の接近の早い段階で男は力の差を利用しようとした。ぐ、と力任せにシンカを突き飛ばす。

シンカは後ろに転びかけ、男は剣を振り上げる。

かがんだシンカはその手首をつかんで、引き寄せつつ男の足を横から切りつけた。

寸前で転がってよける男。

立ち上がって低く構えるシンカ。

ぶる、と馬が鼻を鳴らしたタイミングで、「し、シンカ君がんばれ」と若旦那が声援を送る。じろりとシキに睨まれ、首をすくめて再び従者とともに馬の後ろに隠れた。

「若旦那、駄目ですよ、そんな」
従者がにらむ。

シンカの突きにぐんと身をかがめ、男は左拳をシンカの腹へ。

鋭いパンチの勢いを少しでも軽減しようと後ろに下がったシンカにさらに剣を振りかざす。

「う」

シンカの表情がちらりと変わる。足元の石ころ。思わぬ伏兵にシンカはしりもちをついた。

横たわったまま、両手で剣を持ち、鋭い斬撃を受け止めるシンカ。男がにやりとする。男の優勢は確固たるもの。

その瞬間、シンカはつばを男の目に吐きかけた。

「！」

下から男のわき腹にかかとで蹴りを見舞う。それを男が理解したときにはがらんと派手な音を立て男の剣がシンカの蹴りで叩き落された。シンカは男の首に剣を突きつけた。

「勝負、あつたよね」

男は、悔しげにその場に座り込んだ。

「卑怯だぞお前。つば吐くなんてよ」

「教わったんだ」

荒い息を整えながらシンカが笑って、突きつけた剣を背中の鞘に収めた。

「約束だよ。金貨の半分は置いていってくれよ」

「捕まえないのか？」

座り込んで、強盗は両手を広げて見せた。

男の言葉に誘われた従者が前に出ようとするのを、シンカが止めた。

「危ないよ。素手じゃ、かなわないよ」

少年は笑って男に向き直る。

「おっさん、約束だからな。捕まえないけど、もう襲ったりしないでほしいんだ」

「お前何者だ？」

従者が近寄ったらまた、人質にしてやろうと考えていた男は当てが外れた。

この子供、まだ十六、七歳か。腕は立つし、何より勘がいい。

「俺はシンカ。ただの子供だ。でもおっさん、ただの子供に負けたことを逆恨みしてみつともない悪さしたりしないよね。大人なんだからさ」

むすっとして言葉を失う男。

につこり笑う子供の思う壺にはまっている。わかつているのだが、子供相手に卑怯な真似して、後味の悪いこともしたくない。ちよつと、資金を調達しようと思ったただけだ。面倒臭くなった。

「金もいらん。もういい、行けよ」

金貨の袋を投げ捨てると、男は座ったまま背を向けた。

「じゃ、行きましょう。若旦那」

シンカはにつこり笑って、先頭の馬車の馬を歩かせる。脇を歩きながら、御者台の若旦那に話し掛けた。

「すみません。少し、危ない思いさせちゃって」

「いや、君のおかげで助かったよ」

汗をフキフキ、笑う若旦那。目の細い従者は忌々しそうに睨みつける。

「でも、よくあの男が君の言うことを聞いてくれると分かったね。」

「たまたまですよ、若旦那様。間違ったら若旦那の命が危なかったんだ、誉めすぎですよ」

従者がさらににらむ。

「軍隊崩れだと思っんです。でも、軍神の護符を首に下げているよな人は、まだ軍人として、男としての誇りがあるんですよ。軍人は人を傷つけることにためらいはないけど、誇りを傷つけられることには耐えられないから」

子供の頃から城壁を守る軍人たちをからかって遊んだ。剣術も彼らに習った。気のいい、でもちよつと威張った人たちだった。父親がいなかった分、年上の男にあこがれていた。だから、そういう手合いには慣れていた。

感心する若旦那を横目にシンカは歩みを止め、ミンクの居る最後尾の馬車を待ち合流する。

「大丈夫か？」

「うん。何かあったの？」

ひざを抱えて座ったまま、シンカを見上げるミンクの赤い瞳。馬車が止まっている間に飲み物をもらったらしい、少し顔色が良くなっていた。

「別になんにも」

小さい頃ミンクは俺について歩いた。俺が警備兵と遊んでいると、いつも不機嫌になった。

ちよつと、今みたいに。

あの頃のデイラの生活はもう戻らない。残っているのは、この子と、思い出だけなんだな。

シンカはミンクの隣に座ると、小さくため息をついた。

「ねえ、シンカ。馬車の後ろ。あそこ。大きな男の人がついてくるみたい」

振り返ると砂埃の先に、徒歩でついてくるあの強盗の男。

ゆっくり進む商隊にあわせるようについてくる。

シンカはわざと首をかしげた。

「どこ？俺には見えないよ。そういえば、この辺さ、死んだ戦士の亡霊が出るんだ。眼が会うと追いかけてくるって！」

「えっ！うそ！！」

怯えるミンクに笑い出す。

守らなきゃな。この子を。

そして、あの男を絶対許さない。

レクト。母さんもミンクの両親も、みんなを殺したんだ。

作り話の報酬にミンクを抱きしめながら、シンカはそつと拳を握り締めた。

『シンカ、お前は連れて行く』レクトはそう言った。
なんだろう。

答えのない疑問が、ちくりと刺さる。

2・強盗もどき 3

ラツールは商人の町。港から運ばれたたくさんの品々が、街道が集中するこの町に集まり、ここから各地へ売られていく。

魚屋の若旦那と別れ、二人はにぎやかな市場を見に行くことにした。

ミンクはあまり気が乗らないようだった。

「でも、ほら、見たことないだろ？ こういうのって」

「別に、興味ないもの」

「ええと、じゃあ。お腹すかないか？ ほら、いい匂いするだろ？」

香ばしい魚を焼く匂いがしている。近くに料理屋があるのだ。

「別に……」

「だめ！ お腹すいたから俺、来いよ。な？」

料理屋まで歩いてみると、どうやらそこは魚しか売っていない。

ミンクが顔をしかめたので、じゃあ、肉を売っているところを探そうとまた二人は歩き出す。

店先のきれいな石や見たことのない花、動物や町並みに、少しでもミンクが喜んでくれたら。

元気を取り戻してくれたら。そうしたら、俺は少し安心できる。

そう願えば願うほどシンカはニコニコと笑い、逆にミンクは元気をなくしていくようだった。

店先できれいな花をサービスで髪につけてもらっても、小さなサルがかわいく首をかしげてミンクの手に乗ろうとしても、笑わない。

市場の通りを一つ過ぎたところで、ミンクが言った。

「私、疲れちゃった」

確かに長く馬車に揺られていたしこの町は気温が高いから、体の弱

いミンクにはつらいのだろう。

「そうか。じゃ、宿に行こう」

「どこにあるの？」

「さっき、若旦那に聞いた。二、三軒あるからどこか空いてると思うよ」

宿の方向を目指しながら、シンカは微笑んだ。

「私、一人の部屋がいいな」

「ああ。分かてるよ」まあ、当然か。と落ち込みつつも、シンカはあと少しがんばってみることにした。

「あ、そうだ。ミンク、これ。忘れてた。」

シンカは荷物の中からあの首飾りを出した。一瞬レクトの顔を思い出すが、シンカは頭を小さく振って残像を追いつ追いつ

あいつは関係ない、これでミンクが喜んでくれるなら。

「なあに？」

いつもなら、「わーきれい！」とか言うのにさ。

それでも、それを手にとって見つめるミンクの目は、嬉しそうでもあった。

「ほら、誕生日、過ぎちゃったけど」

「そうか。そうだったね。ありがとう」

やっと、笑った。

ミンクの笑顔に無理がないことに安心し、首にかけてやる。

思った以上に似合っていた。

よかった。

本当によかった。

シンカは少しばかり水っぽくなった瞳で少女を見つめている。

「シンカ？」

「あ、なんでもないよ、埃っぽいな、目に入った」

月並みなごまかし方をしながら、笑ってみせる。

人ごみの中立ち止まる二人。周囲は子ども二人に興味などなく、それぞれの方へ進んでいく。

これだけ遠い町まできたのに、俺たちの気持ちは未だに動けずにいる。あのときのデリラに、あの惨劇の跡地に留まっているかのように。

それでも、ミンクが笑ってくれれば、少しだけ、時間が経ったのだと感じられた。俺の行動は、間違っていない。

「おい」

振り向くと雑踏の中、あの強盗の男が立っていた。

「おっさん！まだついてきてたの？」

「亡霊！」

ミンクが慌ててシンカの背に隠れた。

「なんだよ、亡霊って」

男は怪訝な顔で眉をひそめ、ミンクを睨んだ。

シンカは笑いをこらえながらも、肩にしがみつくミンクの手を感じて嬉しくなる。護っていると実感できる。

それはシンカを強くする。

素早く男を観察し、腰の剣にも男の構えにも戦意を表すものはないことを知る。

「何か用？」

「お前ら、コドモだけでどこ行くつもりなんだ？家出じゃないだらうな」

シンカとミンクは顔を見合わせた。

「おっさんは家出なの？」

「まじめに答えろ」

シンカは肩をすくめた。

「俺たち、聖都に向かつてる。会いたい人がいるんだ」

デイラのことは、言わないほうがいい。あの時の罪悪感がシンカの口を閉ざす。

あの時、レクトに気を許した。だから、デイラは。

どちらにしろ、普通の人々がデイラを知っているはずがなかった。

「俺はシキ。お前らがどうしてもって言うなら、聖都まで連れて行ってやってもいいぞ」

黒髪の男は、白い歯をのぞかせて豪快に笑う。

「は？」

何を言い出すのか、この男は。あきらめるシンカの横で、ミンクが言った。

「一緒に来たいならそういえばいいのに」

素直すぎるミンクの手は痛いところをついた。

そうか、ミンクはあの強盗騒ぎを知らなかったな。

ちらりとミンクと男を見比べて、シンカはうなずいた。

「うん、いいよ。俺はシンカ。この子はミンク。俺たち幼馴染なんだ」

2・強盗もどき 4

新しい仲間は元は軍人だったんだと威張って見せた。どうりで、軍人崩れの強盗もどき。とシンカが笑い、ミンクが強盗の言葉に反応すると、慌ててシキはごまかした。

シキの声はよく通り、豪快に笑うと周囲の注目を集めるくらい目立った。

「いや、お前、変わったガキだからさ、どんなやつかと思ってさ」

「ガキ呼ばわりはなんだよな！俺もう十七だぞ」

「ガキだろう」

「じゃ、おっさんはいくつなんだよ」

「大人に年を聞くな」

そんな大人気ない会話で、夕食中シンカは久しぶりに大きな声で笑った。シキと共に取った宿は市場の外れに立つ小さな宿だった。良がある形で、一階には食事のできる場所があり、カウンターでは男たちが酒を飲んでいる。煙草の煙とざわめく会話が、シンカにアストロードを思い出させて懐かしさすら感じていた。

「シキ、知ってるんだ？」

「ああ、俺は常連だからな」

「常連だけど、上客ってわけじゃなさそうだね」

酒を運んできた女性の肩に手を回そうとし、叩かれて見送るシキをシンカは面白そうに頬杖の上から眺めている。温かいスープと卵がふわりとしたオムレツにトマトのソース。小さな手の女将さんが元気な声を出しながら作る料理はシキの言うとおり美味しかった。

小さくため息をついて、ミンクは立ち上がった。

「あれ、もういいのか？あんまり食べてないじゃないか」

シンカが、同時に立ちあがってミンクの手をとった。

「うっん。いいの。お腹いっぱいだよ。私、もう寝るね。疲れちゃった」

シンカの手をするりと払って、少女は自分の部屋に向かう。

「部屋まで送るよ」

「おい、シンカ」

シキが、呼び止める。

「すぐ戻るよ」

軽くウインクしてシンカは少女を追って行った。

残された黒髪の男は、ミンクの後姿に目を細めた。

程なくしてシンカが戻った時には、美味しいと気に入っていた鳥の蜂蜜焼きは綺麗にシキの腹に収まっていた。

「あ！なんだよ、全部食べちゃったのか？」

「お前が悪い」

悪びれる様子は皆無。美味かったぜと笑うシキに、シンカはすねた目を向けた。

「お前、酒は飲まないのか？」

すでに、何本か麦酒の空瓶を転がしているシキはシンカの肩に腕を回す。

「あんまり、強くないんだ。飲めないに近い」

「勘定は気にするな。この心やさしいジュンカ姉さんがおこってくれるってよ」

シキは酒場の女主人に手を振る。女主人はカウンターから笑い返す。

「そこのかわいい坊ちゃんただだよ。シキ、あんたにただ酒飲ませてたら、店がつぶれるわよ」

「一杯くらいいいだろ？愛してるからさ」

ウインクで食い下がるシキ。

笑うシンカ。

「ていうか、俺、飲めないって言ってるのに」

「お前、このくらいはいけるだろ」

聞こえているのかどうか、シキの頼んだ細いグラスに作られた青い色の飲み物がシンカの前に置かれた。

シンカは苦笑いしながら、ちびちび飲んでみる。

柑橘系のジュースに似ているが、少し苦い味がする。出されたつまみのナッツを食べながら、女たちをからかうシキを見つめる。

シキは、あんまり見たことない肌の色だった。

日に焼けているからといえば、そうなのかもしれないが、少し褐色が強い。瞳の黒は、とても深い色で、はっきりした目鼻立ちは凛々しい感じだ。それでいて軽薄なんだから、女にもてるだろう。

軍人特有の身のこなしと、歯切れのいい話し方。鍛えられた身体。うん、男ならこんな風になりたいって憧れるタイプだ。強盗やってたけど、悪い奴じゃなさそうだ。シンカは一人満足そうに、再びグラスを口元に持っていく。

俺たちはどう見てもお金ないの分かるだろうし。何が目的なんだろう。

「ほれたか？」

「は？」

逆に見つめられていたことに気付いて、シンカは少し慌てる。

「お前さ、聖都に知り合いがいるっていつてたけど、貴族様かなんかか？」

「なんで？」

「いや、ミンクさ。あの子、普通の子じゃないよな。見たことない種族だぞ。かわいいし、な。酒で言う最高級のぶどう酒、ロストコステアみたいな」

「人を酒呼ばわりすんなよ。そんなお酒知らないし」

ふざけているようでいて、見ているところはしっかり見ている。デリラでは普通だったミンクの姿は、多分この人たちには特別に見

える。銀の髪、色素のない赤い瞳。白い肌。

だけど、デイラを知らないということは、同時にその住民の姿も知らないということになる。

「……貴族じゃないけど、大切な人だよ」

嘘はついてないさ。シンカはかすかな同様も見せまいと笑って見せた。

本人がいたら恥かしくていえなかった台詞だろうが。

「あと、お前」

シキが睨む。

「えっ？」

俺は普通だぞ。絶対普通に見えるはずだ。

見透かされるようでシンカは何度も瞬きをする。

「それ、俺の酒だぞ。」

「えっ？どうりで変な味……」

気づくと、シンカは男が飲んでいた濃い酒のグラスを持っていた。

「あれ、やっぱり、俺、だめだ」

酔ったシンカは、今さら、目が回っている事に気付く。

目の前の男がぐるぐると回りだす。その歪んだ顔が少し面白くなつてくすくすと笑い出す。すっかり、そう、酔っ払いが出来上がっている。

「弱いなあ。おい、寝るな！」

「……うるさい寝てないよう」

すっかり立てなくなっていて、不本意ながら担がれて、部屋に運ばれる。シキの背中から眺める床はさらに遠くてぐるぐると回転し続ける。

「最悪……」

「自業自得って奴だな。情けないな、あれくらいで」

部屋に入るとシキはシンカをベッドに寝かせてくれ、水を飲ませてくれた。

胸につかえたかのような重苦しいものを少しばかり水で押し流し、

シンカは目をつぶったまま火照る額を押さえた。

「なんだ、シキ、案外優しいじゃん」

「白状しろよ。お前らどこからきたんだ」

眠くなりかけて、重いまぶたを庇う手をしぶどけてシンカは男を見上げる。ベッドの脇で、シキが覗き込んでいた。その視線は真剣だ。

「……知らない」

「可愛くねえなあ」

元軍人は黒い前髪をかきあげると、煙草に火をつける。

吸い込んだ煙を宙に一つ吐き出すとしばらく見送り、再びシンカを見る。

「よし。こうなったらとことんついて行ってやる。どうせ、行きたいところも、やりたいこともなかったんだ」

「……暇なんだな、おっさん」

ゴツッ！

軽くシンカを小突くとシキは隣にある自分のベッドで胡坐をかいた。

「なんで、知りたいんだよ」

「ふん。家で少年を放っておけないって言う親心さ。久しぶりに首都に行くのも悪くないしな」

シキは笑う。

「親心、ね。……知らないだろうけど。デリラっていう町から来たんだ」

なんで言いたくなったのか、シンカにも分からない。酔ったから、と自分に言い聞かせる。

「そうか、やはりな」

知らないだろうと思っていた。だから、適当に西のほうにあるとか小さい街だとかでごまかそうと思っていた。しかし、シキの表情は、それでは済まさない用意があると語っている。

知っている、のだ。デイラのことを。

「……知ってるんだ。あ、そうか。軍隊にいたんだもんな。警備兵は国の軍隊だもんな。噂くらいは知ってるんだな」

「ミンクは、デイラの住人なんだろう？」

シキの声が小声になる。隠された存在だと、思わずにいられない。

「ミンクのあの髪や瞳、色素がなくなるんだろ？ ユンイラの成分を吸いすぎてさ」

シンカは、観念した。そこまで知っているのなら隠しても無駄だろう。

シキの態度は噂で聞いた程度のものではない。

何かしら知識があつて確信を持つて、そう、だから俺たちに近づいたんだ。

「……うん。ミンクはデイラで生まれ育っている。デイラの人みんなあんなだよ。俺は落ちこぼれで普通だけどさ。デイラの住民が外に出られないのは知ってるだろう？」

うなづくシキ。

「ああ、寺院の連中は神聖な存在として崇めている。デイラの民は特別だ。『ユンイラのしずく』を作れるんだからな」

『ユンイラの雫』を作り出す。それは特別な能力というわけではない。ただ、その技術を知っているか否か、それだけのことだ。

「神聖、か。……代々デイラの中でしか生きられなかったんだ。そして、デイラでは誰もが皆、何かしらユンイラに関わってる。姿も変わるよ。だけどさ、俺を見れば分かれるとおり、皆普通の人間なんだ。誰も自分たちが崇められる存在だなんて考えたことない。逆だよ。閉じ込められていた。一生あの小さな町に暮らすんだ。一度も他の街を見ることもない」

「ふうん。それでも、『ユンイラのしずく』という奇跡の薬が身近にあるんだろ？ 傷とか病気とか治るし。この汚れた大気の病から身を護るんだ。普通は五年に一度、聖帝から直接もらう。ほんの少し

の薬でみんな長生きできる。それを作れるんだ、デイラの民は長寿で幸せだろ？」

胃の辺りがむかむかするのが酔いでないことは確かだ。

シンカは再び仰向けの顔を腕で覆った。

「副作用があるんだ。分かってないよ。少しだけなら素晴らしい薬でも、それに毎日浸っていたら、おかしくなる。デイラの住民はみんな中毒になってる」

「…それが、あのミンクの銀の髪か」

「綺麗だろ？透き通っていて。肌も、瞳も。綺麗なのは。夢いからだよ」

「なんだ、お前、詩人だな」
「茶化すなつて。ミンクも、他の住民も。四十歳を迎える前に、みんな死んでしまう。それが寿命だ。今だって、年に一度ユニイラを直接食べなきゃ、病気になるんだ」

そう、ミンクは誕生日のその慣わしを受けずにいる。丁度、あの朝が誕生日だった。

どこか具合が悪くなっていないといいけれど。

ミンクは、そういうことはあまり言わない。

「知られてないんだよ、ユニイラの雫はありがたい神のお薬。それがそんな恐ろしいものだなんて、国が表沙汰にするはずがないんだ」
シキは、いつのまにかシンカのベッドに腰掛けている。シンカのほうに身を乗り出し、さらに声を小さくする。

「お前たち、逃げてきたのか？」

シンカは首を横に振った。腕の下表情は分からない。

「あのさ、教えたら、助けてくれるのか？」

「？」

「……。約束、してくれたら。助けてくれるってあんたが約束してくれるなら、話す」

これは、賭けだ。

シキがデイラの話はどう受け止めてくれるのか。知って、どうするのか。

危険かもしれない。俺は、レクトたちを知ってる。俺の責任かもしれない。

捕まるかもしれない。

それでも。

ミンクのためを思えば、俺一人よりシキがいてくれたほうがいい。

「子どもが泣いて助けを求めているのに、放っておくバカはいないだろ」

「はぁ？泣いてなんかないよ！」

シンカは思わず起き上がる。

足を組んでこちらを見ているシキは穏やかに笑っていた。

「助けてやるさ。恩に着るんだぜ？」

シンカは、話し出した。

「デイラは滅ばされたんだ。何だか分からない、異世界の文明に攻撃されて。生き残つのは俺とミンクだけだった。工場も、町も、護衛の軍隊も、みんななくなった。」

「そのことを知らないのか？聖帝は」

「分からない。俺、聖帝に知らせようと思って。見たの俺だけだし。とにかく、ミンクを保護してもらわないと。デイラの住民は誕生日にユニラのスープを飲むんだ。あいつ、誕生日の前の日に町がな

くなっちゃったからさ、スープを飲んでないんだ。今もあんまり体調よくなくて、ずっと我慢しているんだ。聖帝に訴えてユニイラをもらわないとどうなるか分からないんだ。ただでさえ、あいつ両親を亡くしてつらいのに」

何も、泣き言を言わない。もっとわがままになっただけはいいはずだった。不機嫌でしかいられない自分が嫌だから、今日も早めに寝室に入った。それら全てが、シンカにはいじらしい。

「分かった。こんな子供が大変な目にあっているんだ、見過ごすわけには行かないな。ほら、飲め」

シンカはシキが差しだす水を飲んだ。喉が乾いていた。

「ぶっ！お酒？」

頭がくらくらしてくる。

「分かったから、もう寝ろ。おまえ、あの子を助けながらここまで一人でがんばってきたんだろ。両親とか友達とかさ。お前だって亡くしたばかりなんだろ？ガキのくせに無理すんな。少しは休めよ」

シキに子供のように寝かされて、額に手を置かれる。それは母さんが時々してくれた仕草。シンカはされるがままになっていた。

お酒のせいかな、打ち明けたのがよかったのか、久しぶりに眠れる気がした。

今なら眠っても、母さんのこと思い出しても、大丈夫な気がした。涙が。デイラを出て以来止まっていた涙が頬を伝った。

シキに見られていないといい。

心地よい眠りに落ちながら、うつすらそんな風に考えた。

「シンカ。おはよ」

耳元にミンクの心地よい声。

「さっさと起きないと、置いてくぞ!」

「!」

シキの怒鳴り声に飛び起きるシンカ。耳元で大声を出されて心臓が異様に踊っている。

「なんだよ、自分がお酒飲ませたんじゃないか」

二人の笑顔がのぞいている。

ミンクも今日は笑っていた。

「早くしろよ。今日中に聖都まで行くぞ」

「おはよう」ミンクが笑う。

つくづく、頼もしい仲間ができたことが嬉しい。

3・聖帝と呼ばれた男

ラツールを出て次の町ランドロまでは、あっという間だった。シキは三十五歳。この聖帝国ファシオンの隣国、工業国のダンドラの軍隊にいたらしい。そこを辞めて、今は傭兵としてファシオンの有事に備えているという。

「備えているって言ったってよ、何にも起こらなきゃ、仕事もない。たまには、誰かに恵んでもらいたくなるわけよ」

「だからって、強盗は向いてないと思うよ」

シнкаは笑う。自称色男のシキは、馬鹿にするなといきがってみせる。

ミンクは呆れた様に二人を見つめている。

「なんだか、二人兄弟みたい」

「こんなおっさんの兄貴は要らないよ」

笑うシンカに、黒髪の男は軽く蹴りを入れる。

「おっさんて言うな！」

「おっさんだろ！」

けり返すシンカ。ミンクを盾にして、シンカは逃げ回る。

「もう！」

後ろをすり抜けるシンカを捕まえようとして、シキが飛び掛ろうと構えたときだ。

シンカが止まった。

「あ、城門が見えた」

街道は右に大きく曲がっていて、枯れかけた並木がまばらに立っている。乾燥しているのか、黄色い砂埃が少しの風でも巻きあがる。

シンカは並木の間、砂埃の向こうに小さく見える土塀と巨大な扉を指差す。日は傾きかけていた。夕日が土色のランドロの城壁を照らす。

この季節は日が高い。疲れを感じないまま、三人は五時間近く歩き

つづけていた。

それほど、シキの話す遠い国の冒険談は、ものめずらしく面白かった。デイラ以外を知らないミンクにとっては、なおさらだろう。疲れているはずなのに、話の続きをせがんだ。

「寺院の町ランドロ、か」

シキが歩みを止めた。

夕方の涼しい風が黄色い地面に溜め込んだ熱を奪って流れる。

男の髪が揺れる。風をはらんだマントが長身に似合い、シンカは目を細めた。

「何、かつこつけてるんだよ？シキ」

「ばか」下がれ、と手振りで示すシキに何かを感じ、シンカはミンクとつないでいた手を離れた。

ミンクはシキとシンカの背後に隠れる。

3・聖帝と呼ばれた男 2

ランドロの町の城門には、二人の門番らしい男たちが立っている。衣装は裾の長い地味な草色のローブで、顔をフードで隠している。寺院の僧だ。こちらを見ている。

まだ、普通の会話くらいでは聞こえないはずだ。並木が三人を隠している。

「ミンクを隠せ」

「えっ、何？」

シキの言葉に驚いて、シンカの眼を見上げる少女に、少年はウインクしてみせる。

「大丈夫。ミンク、お前可愛いから目立つんだ」

つまり、デイラの住人そのもののミンクの容姿が寺院の僧たちに知られていればまずいことになる。

「ミンク、これ、かぶってる。顔が見えないように、巻くんだ」

シキが布切れを取り出す。

「うそ、なんか、汚い…これ」

「掴まりたいのか！」

シキはもたつくミンクの手から布をとり、荒っぽく巻きつける。

ミンクは目だけ少し開いた状態で、覗き込んでも、影で瞳の色が見えない。

髪の色はごまかせても、瞳の色が特殊なことはごまかせない。隠すのが正解だ。

「ひどいよ！もう！うー！！汗臭いっ」

むっとするミンクの肩に手を置いて、シンカがなだめる。

「まあまあ」

「だって！ほかに何か方法あるでしょ？シキって優しくない」

「ミンク。俺たちじゃ分からないことたくさんあるんだ。シキに従

うしかないよ」

「シンカまで」

ミンクはつなごうとするシンカの手を振り払って、先に歩き出す。

「ミンク！」

小柄な少女は、また少し苛立っているようだ。

疲れているのか。シンカは放してしまった手のひらを握り締める。つないでいた少女の手は熱かった。熱があるのかもしれない。

気分が悪いはずなのに何も言おうとしないミンクに少しばかり胸が痛む。

精一杯がんばるつもりなのか。迷惑をかけたくない、そう思っているのか。

それでも、苛立ってしまうのが可愛けれど。

シキが、歩きながらシンカにそつと話し掛けてきた。

「この町はな、寺院がすべてを治めている。村人はみんな僧侶の言うなりだ。気をつけるよ。ミンクの姿がばれたら、何されるかわからないぞ」

殺されはしないだろう。だが、面倒に巻き込まれるのは必須。シンカは頷いた。

ミンクの姿は、普通の人と違う。デイラの住民を神として祭り上げる寺院の僧侶に見つかったら、ただじゃすまない。

「分かった。あんたに任せるよ。ミンクはちよつと事情に疎いから、態度悪いけど気にしないでくれよ」

「おまえも、尽くすタイプだな」

にやりとシキが黒い瞳を細める。

「おまえもって、シキは違うだろ？」

「俺にも尽くせよ」

シンカはふざけるおっさんを「意味がわかんないよ」と肘でつつく。

城門が近づく。近くになると、土塀に見えた城壁が、土で作られた

神像のレリーフであることが分かる。

しかもかなり大きい。たくさんの人の力が使われている。

精巧で美しくもある。寺院とは無縁だったシンカには、その迫力はある種の恐ろしさを感じさせた。人が、これを作る。どんな思いで、どのくらい時間をかけるのだろう。

ここにこめられた人の思いが、この迫力を生むんだな。

「お前たち、どこに行く」

僧侶の一人が声をかけてきた。

気付くと、ミンクもまた、城壁を見上げてしまっている。それじゃ、顔が見えてしまう。

「聖都へ向かう途中なんだ。仕事でな。」

シキが答える。いつもより少し、きどった口調だ。

「俺は、聖帝に仕える傭兵だ。聖帝キナリスの命で、罪人を捕らえ連行する途中だ」

俺たちは罪人扱いか。シンカはミンクを見る。ミンクもまた、不服そうな目を向けている。

「こいつらは、『ユニラのしずく』を盗んだんだ」

「だって、それがあれば、病気が治るって聞いたんだ！だから、しようがなかったんだ」

シンカも演技に参加することにした。

3・聖帝と呼ばれた男 3

ミンクが驚く。

「うるさい、馬鹿者！」

シキが軽く突き飛ばす。よろけて、転ぶシンカ。

「シンカ！」

ミンクが駆け寄る。

「すまないが、さつさとこいつらを送り届けて、俺は故郷へ帰りたいんだ。通してくれないか」

「その娘。教えに背き、聖なる『ユニラのしずく』を飲んだのだな。神の裁きで病にでもなったか」

薄汚れた布でぐるぐる巻きになっている少女に、少しばかり嫌味な笑みを浮かべ歩み寄る僧侶を、シンカが遮る。

シンカの手が僧侶のローブに触れた。

「きさま、汚い手で私に触れたな！」

いきなり、ローブの下からシンカのわき腹に槍を突き立てる。鞘を被せてはあるものの、鋭い痛みでシンカは息ができず、うずくまった。

「僧侶殿、すまない。さつさと連れて行く」

ミンクの手を強引に引っ張り、シキはシンカに来いと促す。その時。

僧侶がミンクの胸元、光る首飾りに目を止めた。

「おい、その娘の首につけている」

「え？」

槍を首に突きつけられ、止まるミンク。立ち上がれずにいたシンカは、ミンクの胸元から、あの首飾りが引きちぎられるのを見上げていた。青い石がきらりと夕日を反射する。それは！

「僧侶殿、穢れた安物です。お手が汚れます」

シキがすかさず奪い返す。

「お、……」

遅かった。ミンクが取り返そうとして身を乗り出し、顔を覆っていた布がはらりと落ちた。

「おまえは！」

恐ろしいものをみたように、後ろに下がる。同僚の男も震えている。

ミンクの銀色の髪が風にゆれる。

「なによ！私の何が悪いのよ！」

ああ、ミンクを怒らせると、後が大変なのに。

シンカは手で顔を覆った。

「私は普通なんだから！町ではみんな同じだったわ！私たちがこんな姿なのは、あんたたちのユニイラを作るためでしょ！」

「ミンク！」

シンカは慌てて、口をふさごうとする。

「放してよ！シンカのほうがよっぽど変じゃない！私たちとぜんぜん違うし、ユニイラもいらない……」

言いかけて、ミンクは我に返る。

シンカの青い瞳が、悲しそうにミンクを見つめた。

「ミンク、おい、それは」

シキがミンクの肩に手をのばす。

シンカはそっとミンクを引き寄せて、大人たちの顔を見た。それでも、シンカは笑った。

僧侶も、シキも、今はシンカを見ている。

3・聖帝と呼ばれた男 4

「こいつ、熱があるんだ。ユニイラが足りなくてさ」
誰も、何も答えない。

シンカの姿を、改めて見つめるシキ。

シキまでそんな風にみるなよな。大丈夫、外見は普通だよ。普通のはずなんだ。

「もう、言うよ。俺たちは、デイラからきたんだ。こいつはユニイラを飲まなきゃいけないのに飲んでなくて。体調悪いんだよ。だからさ、シキ。演技なんてできないし、平気でいる俺に八つ当たりするんだ。助けてやってくれよ。頼むから」

いたたまれず、ミンクを抱きしめ、顔を伏せる。

「ごめんね・・・」

ミンクが小声で言うのが聞こえる。

立っているのがつらいのか、ミンクは体重を預けてくる。

シンカも一緒になって、その場に座り込む。

なんだって、そんなにうるさいんだ。デイラで生きてきたことがそんなに悪いことか？

なんで、俺たちがこんなに苦しまなきゃならない。

「・・・すまん。気付かなかった。」

シキが、ミンクの額に手を当てる。

「僧侶殿、理由は説明するから、まずこの子を休ませてくれないか。」

「・・・いいだろう」

ミンクの姿に気おされたのか、二人の僧侶は、すぐにうなずいた。

なにやら二人で打ち合わせすると、一人が走って、先に町に入っていく。残った一人は、

シンカの腕を引き、立ち上がらせた。

三人は町の真ん中の寺院にある、僧侶の寄宿舍に案内された。

ミンクは、シキに抱えあげられ、シンカはただ、ついていくしかない。

ミンクの声が、繰り返しシンカの脳裏に響く。シンカのほうがよっぽど変わってる！・・変わる。

自覚があるだけに、少しつらい。

デイラでは、俺は特別扱いだった。そうだろう、一人だけ金の髪、蒼い瞳。彼らのよう

に、ユニラを飲む必要もなかった。理由は知らない。

母さんが言った。「お前は、デイラの希望なんだから」

そういつて、母さんは、俺にはみんなと同じ学校へも行かせなかった。母さんが、勉強を覚えてくれた。

特別扱いが嫌で、俺はデイラにいるのがつまらなかった。母さんにも反発した。

だから、誰も俺のこと特別扱いしない、アストロードに入り浸った。ユニラの副作用を受けない、ユニラがなくても生きていける。

それは、彼らにとってはいくらやましいことだ。きっと。

だけど、俺は、デイラでの普通でいたかった。

赤い瞳がよかった。

でも、そんなこと、誰にもいえない。彼らにとって俺はいくらやましい存在だったから。

いつの間にか、うつむいて歩いていた。
立ち止まったシキにぶつかる。

「シンカ。どこ見てんだよ。」
「ごめん。」

3・聖帝と呼ばれた男 5

案内されたのは質素だが居心地のいい部屋だった。窓が二つあり、夕暮れの涼しい風が入ってくる。

日よけの麻布が、薄くやわらかい光を投げかける。

「シキどの。まもなく僧正様がいらっしゃいます。その時には、きちんと説明してくださいね。」

先ほどの門番の僧侶とは少し各が違うのだろう、綺麗な発音の丁寧な言葉で案内してくれた僧侶がいった。

横たわるミンクの傍らに、シンカが座る。

その姿は、とらわれた野生動物の子供が、互いをいたわる姿のようだ。

ミンクの言葉がこたえたのか、シンカは元気がない。

ミンクの前で、好きな女の子の前で、めいっばい意地を張っていたのだろうに。

シキは、つくづく、シンカを面白い奴だと思った。どうやら、単なる子供でもなさそうだ。

興味半分ではあるが、まあ、二人の助けにはなれるだろう。

「シンカ。なあ、どうする。」

案内の僧侶が部屋を出ると、シキが聞いた。

「うん。ミンクに『ユニラのしずく』をもらいたいんだ。話せるとこまで話す。大丈夫だよ。シキ。心配しないで。」

笑顔を見せる少年が、痛々しい。

「おっさん、何珍しい顔してんだよ。そういうまじめな顔で女をくどけば、もつともてるのに。」

「十分もててるぞ、俺は」

僧正と呼ばれる偉そうな老人が部屋に入ってきた。従者を四人も従えている。腰に僧侶独特の柄の長い刀をもち、疑わしそうな目でシンカたちを睨むが、ミンクの姿を見るなり表情を変えた。畏れというのだろうか、態度も少し変わる。

神だなんてほんとに思っているのか。

「この娘が、デイラからきたというのか」

僧正は、シキにたずねる。

「そうです」

シンカが答える。

僧正は、今はじめて気付いたかのようにシンカを見つめ、改めて向き直ると、今度はシン

カに尋ねる。長い白いひげをなでている。その手に視線を奪われたまま、シンカは話を聞いていた。

「なぜ、デイラからでたのじゃ。聖地であるデイラを出ることは許されぬはず。」

別に聖地なんかじゃない。

「ユニイラの畑が、燃えてしまったので、仕方なく」
僧侶たちがざわめいた。

シンカは、周りの僧侶たちを見回した。

「畑が燃えたじゃと？まさか」

僧正が眉間にしわを寄せ、もう一度確かめるようにシンカを見つめた。

シンカは大きな目の青い瞳で、それに答える。

「本当です。それを、聖帝キナリスにお知らせしようと思って。あと、この子に『ユニイラのしずく』をいただきたいのです。もし、こちらにあるのでしたら、分けていただだけませんか」
ざわめきがいつそう大きくなる。

「残念じゃが、ユニイラは聖帝自らが授けてくれるもの。この寺院とて、一滴も持ち合わせていないのじゃ」

「そんな」

こんな大きな寺院なと思った。甘かった。

「僧正、この子は聖地のただ一人の生き残り。このままでは、死んでしまいます。」

シキがうつたえる。

「ここから、聖都は半日もかかりません。お願いです。今すぐ、私たちを行かせてください！」

ミンクの手を握っていたシンカも立ち上がる。従者たちが、互いに見合わせ動揺している。

僧正は、シンカの瞳を穏やかに見つめた。

「私が聖帝に使いを出そう。だれか迎えをよこすようにと。『ユニイラのしずく』を持ってな。今、その娘を動かすことは、感心せん。」

「……私も行きますよ。僧正」

シキが前に出る。

「シキ？」

シンカが不安げに、黒髪の男を見上げた。

「聖帝キナリスには面識があります」

「おお、それはまた、ありがたい。貴族のご子息か？」

僧正の表情が緩む。

貴族？強盗もどきのシキが？

シンカの視線に照れるように苦笑いすると、シキは言った。

「いや、貴族ではないが。まあ、寺院の従者殿の助けにはなるでしょう」

シンカは、ここに残されることが少し不安だ。僧侶なんて得たいが知れない。

僧正は、シキの手を取り、お辞儀をした。

「では、頼みます。」

大人たちが、話をしながら部屋を出て行くと、シンカは再びミンクの横に座った。

熱が高いようだ。ユニラさえあれば。

額にそつと手をあてる。ミンクの熱が手のひらを通してシンカに流れ込むかのようだ。

明日、きっと明日の午後には、シキが戻ってきてくれる。

「もうちょつと、我慢してくれよ。ごめんな、ミンク」

額にキスして、そつと立ち上がる。水でももらいに行こう。

「……母さん」

ミンクがうなされている。かすかな叫びがあのだいラを思い出させた。

あのだいラの崩壊から、五日しかたっていない。無理もない。シンカはぎゅつと目を閉じた。

俺たち、どうなるんだろう。

3・聖帝と呼ばれた男 6

どれくらい眠ったのだろう。遠くから僧侶のなにやら唱える声が聞こえてくる。

何が楽しくてそんなことするんだろう。病人がいるって言うのに。静かにしてくれよ。

シンカは眠っていらなくて、ついに目を開いた。

ミンクのベッドから少し離れた、窓際のソファーに横たわったシンカは、目をこする。窓からはかすかな夜風と月明かりだけが透けて見える。

まだ、暗い。松明を持って歩き回ってる様子も窓にかけられた布越しに伺えた。お経でも唱えていると思っただ声は、僧侶たちのざわざわした話し声だった。

なんだよ。うるさい。

「シンカ」

ミンクの声。

シンカは一気に起き上がって、ミンクに駆け寄る。

「どうした？」

「うつん。いなくなっちゃったかと思った」

かわいい。大きな瞳が、見上げている。

「ここにいろよ」

額に手を置く。少し、熱が下がったようだ。

「気持ちいいな、シンカの手。なんだか気分がよくなる気がする」

「な、あんまり一人で我慢するなよ。つらかったらそう言えよ」

「……ん。でも、シンカは分かってくれるもん」

思わずふつくらしたミンクの唇に目が行って、シンカは慌てて視線をそらす。

こんな時に何考えてるんだ、俺。

ざわざわした声が、いつの間にかすぐそばまできていた。

「シンカ、戻ったぞ！」

「シキ！早いじゃないか！」

ホツとしたのがつかりしたのか、シンカは満面の笑みを浮かべて立ち上がった。

黒髪の男は、にっと笑って、手に持つ小ビンを差し出した。

『ユニラのしずく』か。

「ミンク。『ユニラのしずく』だ。起きられるか？……無理なら口移し、とか。」

「大丈夫」

少年のかすかな期待をミンクの笑顔がさらりと振り払う。体を起こしたミンクに、シンカは受け取った薬をそっと手渡す。

「ほんの数滴でいいらしいからな。飲みすぎるなよ」

そう説明しながら、シキが何を感じ取ったのかニヤニヤしながらシンカの頭をかき混ぜる。

「煩いよ、シキ」

「うん。ありがとう」

シンカも初めて見る。小ビンは、深い青い色のガラスでできていて、細工の模様が美しい。

液体を少しだけ口に含んで、ミンクは深いため息をついた。

見る見るうちに顔色がよくなる。

「よかった」

シキにも礼をとシンカは振り返り、その横に見慣れない男が立っていることに気付いた。

誰だろう？ 僧侶じゃない。

顔はすっぽりとフードに覆われている。夜の明けきらないこの部屋の明かりでは、表情は見えない。

シキと同じくらいの背で、金系の刺繍の衣装のすそだけが見える。

「この者は？」

深く落ち着いた、声。

「シンカだ。こいつもデイラからきたんだよ」

シキが答える。

「誰？」

「変わった色をしているな」

シンカの質問には答えず、その男はつぶやいた。

シキは首をかしげて笑う。

「そうなのか？俺はよく知らないからな。キナリスだよ。シンカ。

いくらなんでも、その名を知らないとは言わないだろ」

「皇帝陛下！？」

ミンクも息を呑んだ。

3・聖帝と呼ばれた男 7

「お前ら、ありがたく思えよ。俺が聖都に着いたのは夜中だったんだ。事情を説明したら、陛下がすぐに迎えに行くと行ってくださってな。夜通しだぜ。しかも、陛下自ら、だ。まあ、『ユニラのしずく』は陛下しか持つてはいけないとされているから仕方ないといえは仕方ないんだけどよ」

そこでシキは伸びをした。皇帝陛下の前でその態度は、一体どういう男なのかとシンカに思わせる。

「さすがの俺も夜通しはこたえたよ。酒の一杯もないとな」

シキのあっけらかんとした口調とは裏腹に、シンカは聖帝キナリスの視線に、痛いものを感じていた。こっちをずっと見ている。そんな気がする。かといってじっと見つめ返すのも失礼かと、気になりつつも気付かないふりをしている。

フードの下表情が分からないだけに、嫌な感じだった。

「あの、ありがとうございます。わたし、ミンクといいます」

ミンクが、聖帝に手を合わせるようなしぐさをして見上げる。

「よい。デイラでの不幸を、心苦しく思っていたところだ。生きていたものがいたとは、幸いだった」

「では、やはり、誰も残らなかつたんですね」

ミンクがうつむく。

「我が軍に、知らせが入るまで三日かかった。駐留軍もすべて全滅していたからな。交替の警備兵が到着するまで発見されなかった」

「すみません。もっと、早くお知らせしたかったですけど」

ミンクが咳き込む。水を渡しながらシンカがそつと背をなでた。

「お前は寝てろよ。陛下、御前で申し訳ありませんが」

「うむ。よい。ゆっくり休め」

「御前って、よくそんな言葉知ってたなシンカ」

「俺だつて少しは勉強したさ！」

からかうシキに、抗議する。確かに、皇帝陛下が目の前にいて、どうしていいのかわからないのは確かだ。誰もがシキのように平気でいられるわけじゃない。

「何の勉強だか」

「それは、ええと。いろいろだよ」

「いろいろ？ 誰に剣術を習ったんだ？ お前に負かされたことは悪いが一生忘れないからな」

「なんだシキ、お前が負けたのか」 皇帝も目を丸くした。それほど、シキの実力は買われているということか。

「信じられないだろ？ だから、こいつが何物なのか知りたくてな」 何者、つて。あれは、ジン口のやり口を真似ただけだ。

シキの目が笑いながらも真剣なことにシンカは気づく。まだ、言っていないこと。それを、悟られているのか。

「もう、いいだろ、シキ。そんなこと。根に持つ男はもてないぞ」
「だから、俺はもててるって」

「仲がよいようだな、そなたたち。それより、シキ、我らも休もう。
明日も早い」

「ああ、そうだな」

キナリスに促されて、シキも部屋を出る。

シンカは二人を部屋の外まで見送った。

「本当にありがとうございました」

深くお辞儀をする。

「シンカ、そなたに明日、いろいろ話してもらわねばならん。私には時間がない。朝一番に聖都に向かいながらになる。よいな」

「はい」

夜明けまで後何時間もない。大丈夫かな、シキたち。

「また、後でな」

シキが背を向けたまま、手をあげる。その手はそのまま、あくびを押さえる。

キナリスはその後ろを歩いていく。

シンカは二人の姿が見えなくなるまで見つめていた。

うそみたいだ。皇帝だ。この国で一番偉い人だ。初めて見た。

顔はよく分からなかったけど。

さすがに迫力がある。

ただ、一言。シンカの心には引つかかっている。

「変わった色をしている」、キナリスはそう言った。

俺は正々堂々と聖都なんかに行って大丈夫なんだろう。デイラでは俺だけ違った。その理由なんか、俺は知らない。

「変わった色」の俺を、聖帝は妖しいと思ったんじゃないのか。

いつか、母さんが言っていた。お前は確かにここで生まれたのよ。

デイラの住人なのよって。本当にそうなんだろう。

デイラで生まれて、母さんの本当の子なら、母さんと同じ赤い目をしていたんじゃないのか？勘違いで迷い込んだ、捨て子だったかもシンカは首を振った。

小さい頃から何度も想像しては、一人怒ったりイラついたりしていたそれを、今考えても仕方ない。俺だって知らないことだ。知らないって素直に言うしかないだろう。シキがいてくれるし。何とかするさ。

ひとつあくびをし、ミンクが眠っているのを確かめて、シンカは再びソファーに横になった。

うつすら見える朝焼けと、変な色の双子の月が不気味に見えて、ぎゅっと目をつぶった。

3・聖帝と呼ばれた男 8

翌朝、身支度をしながら、シンカは背中 of 剣がやけに重く感じられた。デイラを出て、五日目。もうずいぶん時間が経ったように感じられる。

寺院の外に出ると、豪華な馬車が二つ待っていた。ミンクは後ろの馬車で横になったまま運ばれる。まだ、眠っていた。ユニラが効いたのだろうか。

シキはいつもの旅の服装で、昨日の貴族風な変な服は辞めたらしい。やっぱり貴族だったのかな？

シンカの視線に気付いて、シキは笑った。

「お前、俺を信じるよ」

「何だよ。気持ち悪いな」

「まあ、なんだ。陛下の御前だからさ、剣はこっちにもらっておいていいか」

やっぱりそういうもんなんだな。皇帝陛下の前で帯刀を許されるのは限られた人だけだろう。

「うん。いいよ」

肩の鞆ごと取り外そうとシンカの背後に回ると、シキがささやいた。

「俺は、キナリスよりお前の方が気に入ってるからさ」

「は？」

シキが剣をはずすと同時に、護衛の兵がシンカを取り囲んだ。剣を突きつけられ、あっという間に縛られてしまった。

「ちよつと、何すんだ！シキ、何だよこれ、シキ！」

「悪いな、シンカ。お前がなかなかの使い手だって、昨日ばらしちまったから」

腕を後ろに縛られ、剣を突きつけられながら、馬車に押し込まれた。

派手な内装の馬車の中で、不機嫌そうに窓の外を眺めるキナリスが

座っている。ちらりと、長い金髪越しに視線をよこす。

「陛下！これは何の真似だよ！」

言葉遣いなんか気にしていられない。忠実な国民にこの仕打ちはないだろう！

「だまれ」

物憂げに窓に額を押し当てたまま、聖帝と呼ばれる男は言った。

抑揚のない冷たい口調はシンカを黙らせた。

シンカの後ろから、シキが乗り込む。

「シキ！」

シンカは睨みつける。

「まあ、怒るな」

「信じて、こういう事だよ」

縛られた手がしびれてくる。馬車は走り出していて、揺れるたびにどちらかに倒れそうになる。シキのほうへはいいが、聖帝のほうに倒れ掛かるわけにはいかない。

「なあ、シキ。俺、なんだと思われてるんだ？ものすごい凶悪犯か？こないたいけな可愛い少年か？」

ぶ、とシキがふきだし、キナリスは同時にシンカを見下ろした。

「うるさいと言ったろう！」

キナリスの腕が振り上げられる。危うく顔面を殴られそうになったシンカは、何とかよけた。

縛られているから、バランスを崩してずり落ちそうになる。

「キナリス、子供相手に大人気ないぞ」

「子供は嫌いだ」

シキのたしなめも、皇帝陛下様では効かない。相変わらず不機嫌そうな皇帝陛下の横に置かれて、シンカは居たたまれない気分になっていた。

すべて素直に話そうと思っていたのに、それすらさせない。なんだよ、昨日はあんなに偉そうにしてたくせに。少しでも、かっこいい

なんて思ったのが間違いだった。これがこの国の皇帝だなんて。

俺は皇帝しか頼れないと思って、ここまできたのに。皇帝に報告すること、ミンクを守ること、それだけが、俺ができることだと思っ
てここまで来たのに。

悲しくなってきた。

「どうした。大人しくなつたな」

シキが、シンカの頭に手を置く。

「……大人はうそつきだ」

見上げるシンカの瞳に、シキは目をそらす。

返す返事はないらしい。

味方してくれると思ったシキも。頼りにならないらしい。

信じたのに。助けてくれると、約束したのに。

だから、デイラでのあの事件を。包み隠さず話したのに。

何が信じろだよ。

シンカは悔しくて、何度も額を座席の背もたれに擦り付けた。ふと、
式の手がそれを抑えてとめたが、シンカは黙って睨みつけた。

シキが困った顔をしたから、シンカは目をそらした。

どれくらい黙ったままだったろう。シンカは、キナリスに背を向け、
柔らかな背もたれに体を預けじつとしていた。息が詰まる。

シキはシンカの縛られた手をさすってくれた。それでも、痺れた手
首は何も感じない。

「シンカ。お前は、どこから来たのだ」

不意にキナリスの声。先程とは少し違う。

「よくなったのか。キナリス」

「ああ、ユニイラが効いた」

やけに爽やかな会話をする二人を、シンカは交互に見つめていた。
キナリスはシンカと眼があうと軽く睨んだ。

ちえっ！なんだよ、いやな感じ。

「おいおい、いいかげんにしろよ二人とも。シンカ、キナリスは朝に弱いんだ。

体質ってやつか。頭痛がしてまともに話もできないんだ」

「だからって、人を殴るのかよ」

「まあ、そう、怒るな」

シキは笑って、肩をたたく。

「あのさ。いきなり縛られて、怒鳴られて殴られそうになったら誰だって怒るだろ。しかも、俺の話なんかちつとも聞こうとしてない」

キナリスを見る。睨まれたって怖くなんてないさ。って顔してやる。

「すまなかつたな」

聖帝は笑った。

いや、笑ったからって、油断できない。

「シンカ、キナリスはお前がデイラの人間じゃないって言うんだ」
シキが頭をかいて、申し訳なさそうに言った。

「悪いと思ってるんだ。でも、そう言われるとき、俺もお前の出生を証明できるわけじゃなくてよ」

出会ったばかりだから。それは、仕方ないかもしれない。俺自身だって、証明しようがない。シンカは、蒼い瞳を皇帝に向ける。

キナリスは前髪をさらりとかきあげて見せた。

「お前は、デイラの色をしていない。あの町で生まれればみな、あの娘のようになる」

やっぱりそこか。シンカは予想していたものの、落胆を隠せない。そこは。自分が何を考えて何をしたかは説明できても。どうして生まれてどうしてそこにいるのかなんか、誰も説明できない。それは、どうして男に生まれたのかを問われるのと同じだ。どうしてお前は色が白いんだとか、どうしてお前は蒼い瞳をしているのかとか。それが悪いわけでもないのに追求されると弱みを突かれた気分になる。

「俺だけ違っただ。理由なんか知らない」

「デイラではな、子供が生まれると、みな、肩に聖帝国の紋章が刻まれる。お前にはそれが無い。生まれたことを隠していたのか、他で生まれたのか。その姿からして、他で生まれたと考えるのが普通だろう」

聖帝の言うとおり、俺はやっぱり拾われたのかもしれないな。

妙に納得してしまう自分が余計に悔しい。

昨日の晩、シンカは素直に話そうと思っていた。全部、レクトのことや、あの、空を飛んでいた兵器のこと。そんな気分ではなくなった。

なんだよ、俺は何のために、ここに来ただよ。情けないよ。

シンカは黙り込んだ。話せば話すほど、立場を悪くしそうだった。

「おい。シンカ？」

「ごめん。シキ。俺、やめるよ。」

もう、話せないよ。

静寂が三人を包む。

「やっぱり、放してやれよ。キナリス」

音をあげたのはシキだった。

「かわいそうになったか？ 私には、二百万の人民の命がかかってい

る。ユニイラを全滅させたかもしれない男を、野放しにはできない」

「俺じゃない！」

シンカは叫んだ。

「俺だつて母さん亡くしたんだ！ミンクだつて、両親を、友達とかみんな・・なんで、そんなこと言えるんだよ。俺の話を聞こうともしないで！俺はあんたを信じて、あんたならあいつらを捕まえられると、そう、思ったから……」

抑えられなかった。涙が、あふれた。

平気なはずはなかった。

「もうやめだ。キナリス、俺はこいつを信じる」

シキはナイフを取り出すと、シンカの縄を解いてくれた。

「泣くなよ。悪かったよ」

シキが、うつむくシンカの髪をくしゃくしゃなでる。

「ガキ」

ポツリとつぶやく皇帝。キツとにらむシンカ。

「シキ、お前、私よりその子供を信じるというのか」

すねたようにも見える。

シンカは、気付いてしまった。

もしかして、この男、皇帝、この国の一番偉い、彼は、シキがシンカにやさしいから不機嫌なのか？

ガキ？

どっちがだよ。

よくみると、皇帝はまだ若い。シキより俺に年も近いようだ。二十五、六歳だろうか。
負けないぞ。

「ふう」

改めて背もたれに深く体を寄せて、シンカはしびれた手をさする。
赤く残った縄の跡がずっと消えていく。

シキが気付いた。

「おい？」

「俺は、大人で男だからさ、ちゃんと話すよ。陛下。信じてくれなくてもいいし、どう思つかはどうでもいいや。俺が、体験したことをそのまま話すよ」

シキはまだ、シンカの手を見ている。

「いいだろう。話してみろ」

挑むように睨む皇帝。

ああ、最初から、こいつに頼ろうと思ってた俺が間違ってたんだ。
シンカはそう思ったとたん元気が出てきた。俺はこんな奴に頼らず、俺の考えで行動する。そう、決めた。

「俺が、本当はどこで生まれたかは別として。俺はとにかくデイラで生活してた。あの日、俺はデイラを抜け出して港町アストロードへ買い物に出かけたんだ」

「抜け出す？」

キナリスが確認する。

「そうだよ。俺、外の町が好きだったからな。そこでさ、変な男たちに出会ったんだ」

シンカは話しつつけた。レクトを畑に案内したことも、その、変わった武器や、空を飛ぶ黒い兵器のことも。ただ、レクトを父親だと勘違いしていたことだけは、言わずにおいた。

二人は黙って聞いていた。

話し終わって、ふと、息をつく。

「これで全部。俺たちは、町を出て、ここまで来たってわけ。陛下、

あなたにこのことを話して、レクトたちを見つけてほしかった」

「分かった」

キナリスがうなずいた。

「探してくれるのか？」

シンカはもう、友達のような口調だ。シキもキナリスもたしなめる気にもならない。

「いや、お前が言うのは本当かもしれない。だが、その、他文明の兵器が、他の町を襲った形跡はない。私としては、ユニイラ工場を再生させることが最優先なのだ」

「そうだな」

シキもまじめな顔してうなずく。

それならそれで仕方ない。シンカも思う。

俺は、自分の力であいつを見つける。皇帝には皇帝の仕事がある。

「……何してんだ？シキ？」

シンカの手を取り、シキはしげしげと眺めている。

「指輪でも買ってくれるのか？」

「バカヤロ」

シキが笑う。いつもの、シンカの軽口にシキは目を細めた。

「陛下、俺は自分であの男を探すよ。ミンクが元気になったら、デイラに戻る」

あてもなく旅しても仕方ない。まず、デイラに戻ろう。

「だめだ」

シキも驚いてキナリスを見つめる。

「言っただろう。わが国に必要なユニイラがなくなったのだ。備蓄だけでは、一年ともたない。しずくを受けられない人民を危険にさら

すことになる。ユニイラの精製ができるのはデイラの民だけ。お前たちは国の監視下に置く」

「キナリス、ユニイラがなくなつてすぐに死ぬわけじゃない！ミンクのように中毒になつてゐるわけじゃないんだ。精製の方法だけ聞けばいいだろう？」

シキの抗議は意味がなかった。

「精製する事は危険を伴う。」

冷たく言い放つた皇帝。表情に何の感情も見えない。

デイラの人間なら危険でもいいというのか！シンカに怒りが込み上げる。

「そうやって、デイラの人々を犠牲にしてきたんだ。冗談じゃない！何が聖地だ」

いきり立つシンカ。シキも、怒りのこもった目で皇帝を睨んでいる。「シンカ、そなたは、町を抜け出し、デイラに賊を導き入れた。結果として町を壊滅に追い込んだ。大罪に値する。残念だが、自由にするわけには行かない」

キナリスが宣言するそれは、何の反論もできなかった。それが、罪だと言われるなら。シンカには、対抗する言葉はない。

シキも黙つて睨んでいる。馬車は周りを騎兵に囲まれている。逃げ出せない。ミンクもいる。

シンカは再び皇帝に背を向け、やわらかい背もたれに顔をうずめた。

4・いくつかの友情

聖都シオン。

ラシア大陸の中ほどにある。

背後にそびえるジ・リユリ山の裾野にあたるその場所は、西に向かつて低くなっており、東の果てに位置する城からは、とても眺めがいい。

暑い季節が過ぎ、北に落ちる夕日は、昨日よりさらに小さく見える。市街には貴族の豪華な邸宅や、商人の家、共同住宅のような広い屋根の家などがある。いずれの建物も、白い壁とオレンジの屋根に、夕日の赤を光らせて、美しく輝いている。

城の三階にある、小さいバルコニーのついた窓辺に、黒髪の男が立っている。長い、腰までの髪をひとつに結わえ、黒い皮でできた動きやすい服を身につけている。腰に差した短い剣は、軍人用のもので、軽くて丈夫、そして、何より血をたくさん吸っている。

シキは、くゆらせていた煙草の火を消し、身を翻した。

地下にいる、友人を助けに行くのだ。

扉を勢いよく足で蹴り開く。予想通り、見張りの兵二人が慌てて槍を構える。

「遅い」

槍を構える二人の懷に飛び込む。

シキの敵ではない。

シンカも、いや、キナリスですら今のシキの表情は見たことがないだろう。気の進まない戦争でもない、ふと思いついた盗賊稼業でもない。

自らの意思で決した行動は人を強くする。

先刻、もう一人の友人聖帝キナリスと決裂したばかりだった。キナリスの立場もわきまえ、それでも少年を牢につなぐのは酷に過ぎないかと話し合いに臨んだものの、耳を貸す様子はない。

皇帝がまだ皇太子で、ちょうど、シンカと同じくらいの年だった頃、戦場で助けたことがある。当時のキナリスは何の自信もなく、力も持ち合わせていなかったが、必死で自らの務めを果たそうとしていた。好感が持てた。

変わるものだ。

シキが軍の縛りを嫌い、自由な身になってからも、幾度となく国政を手伝ってほしいといわれた。断りつづけた。

キナリスが嫌いだったわけではない。この国のあり方そのものが嫌いなのだ。

ユンイラという植物は人々を惑わせ縛り上げている。シキにはそう取れる。

シキが生まれた国ダンドラも同様だ。隣国のファシオン聖国からユンイラを買い取り、国民に与えている。それを使って、人を操っている。人々の命を左右する薬を権力者が保持するのだ。国民は従わざるをえない。

軍に入ってから、例の五年に一度ユンイラのしずくを飲むように指示された。

しかし、シキは決して飲まなかった。それは、幼い頃に決めた自分なりの掟だ。民のためなど偽善なのだ。

ユンイラを受けるために、人々は税を納める。

納められない貧しい人々は、辺境の町に追いやられ、ユンイラも与えられず、デイラとは逆の、だが同様につらい病気にかかる。

楽園のように美しいこの聖都は、ほんの一握りの人間のためのもの

でしかない。両親を幼い頃に失ったシキにとって、生きていくことに楽しみを見出せる世界ではない。

シキの育った辺境の町はこの世界の大地に含まれる毒素で、違う姿の子供が生まれる。肌の色も聖都の人々とは違う。成長するにつれ、黒い瞳が白くにこりだし、喉をいたため声を失い、五十歳の前にほとんどが関節をやられ、歩けなくなる。そして死だ。

その人々の姿を見て育っている。心の底から、国を統べる連中とは仲良くはなれない。

世をすねて気ままに生き、目的のない旅を続けてきた。

だが、シンカたちに出会った。子供がデイラという重いかせを背負っている。放つては置けない。

シキの旅にも目的ができた。

シキは、隣の部屋に幽閉されていたミンクを助け出した。

「シキ、すごい」

廊下に累々と倒れている兵たちを見て、ミンクは驚く。

「だてに傭兵やってたわけじゃない。俺を怒らすと怖いからな。お前も気をつけろよ」

本気で怒っているのか、黒髪の男は、にこりもしない。

「やだなあ。すごいで」

言いながら、ミンクは背筋にざわざわしたものを感ずる。今まで見てきたシキとは違う。戦場に立ち生き残ると言う意味をシキは怒りを露にする背中少女に示した。

4・いくつかの友情2

二人は、地下に下りていく。

じんわりと空気が湿っている。御香のような、甘いけだるい香りがしている。

「これ！」ミンクが口をふさぐ。

「シキ、この香り、ユニラの煙よ！」

「なんだと？」

「この煙を吸うと酔ったようになる。デイラにいた私たちでさえ、長時間されされてはいけないうて言われてた。吸いすぎると何も考えられなくなる。人形のようになって、死んでしまうの」

地下に充満した香り。

いつからこんなことを。

二人は見合わせて走り出す。

地下牢は、一番奥の一室を除いて空だった。

暗い天井の低い部屋の床に、シンカが横たわっている。

何もない、毛布一つない牢。青い顔をして、深く眠り込んでいる様子の少年を見て悪寒が走る。

「どおりで、牢番もいないわけか。キナリスはここで、シンカを殺すつもりだったんだな」

「どうして？皇帝陛下は、どうしてシンカを？」

「俺に聞くな！」

先ほど倒した衛兵から奪ったカギをミンクが手渡す。シキが扉を開くと、シンカを抱き起こす。

「シンカ！大丈夫か！おい！」

強くゆする。

反応がないので頬を叩いた。

「！いて、何だよ。うるさいな。夕食か？」

意外にも少年は深い蒼色の瞳をパツチリ開いた。のんきなことを言っている。

「シンカ、大丈夫？」

「ミンク。お前こそ、大丈夫か？」

立ち上がって、逆に少年が少女を心配する。

「何だよ、平気じゃないか。脅かすなよミンク」

シキは気が抜けたようだ。

でも、と言いたそうな顔でミンクがシキを見上げる。

「……つと！」

ふらついたのはシキだ。額に手を当てて自分の視界を確かめるように瞬きする。

「シキ……！？ユニイラか！」

今さらのようにシンカが気付いた。

「ありがとう、シキ。ミンク。早くここを出よう！俺はともかく、

シキは慣れてないだろうし」

「確かに。強烈な酒を一気飲みした気分だぜ」

頭を軽く振ったシキの髪がふわ、と頬に張り付く。

「！風だ」

「換気し始めたようだな。このままじゃ、兵が降りてこられないかな。入り口には大勢待ち伏せているってことか」

壁にもたれかかったシキがうなる。

シンカが風のくるほうをくんと嗅いだ。

「草の匂いがするな」

「動物かお前」

「酔っ払いは黙ってついてこいよ。行こうミンク。多分、この先、何かある。外に出られるはずだ」

シキの懸念を無視するように、シンカは笑った。

「換気できるってことは、入り口以外に風の通る道があるってことだろ。ほら、奥から空気が流れてきている」

「分かるのか？」

シンカは目を丸くしてシキを見た。ミンクは二人を見比べるばかりだ。

「草の匂いがするだろ？あ、ダメか、ユンイラの香りが強いから。ほら、あっちだよ。俺、昔から鼻は効くから」

シンカが風のくるほうをくんと嗅いだ。

「動物かお前」

「酔っ払いは黙ってついてこいよ。行こうミンク。多分、この先、何かある。外に出られるはずだ」

三人はシキを真ん中にして、暗い牢の奥へと進む。

灰色の石を積み上げた壁が、だんだんと狭くなり、整えられていた表面も石がただ積まれているだけのものに代わっていく。

4・いくつかの友情3

「この辺、古いな」

シンカは松明を持つミンクの後から、シキを半分引きずるようにして進む。

「おっさん、重いな。な、まだ歩けないの？」

「そうよ、もうユニラの香り、しないのに」

ミンクも二人の横に来て、灯りでシキの顔を照らした。

「うるさい、お前らと違って、俺は繊細なんだ！」

「ありえない」

「可愛いくせに口は悪いな、ミンク。シンカも俺はそんなに体重かけてないだろうが！」

「随分元氣じゃないか、シキ」

「ああ？そうか？」

また、ずんとシンカの肩に体重をかけてくる。

「お、重い、シキわざとやってるだろ……」

「気のせいだ、ほら、行き止まりだぜ、どうするんだよ」

三人の前には、灰色の岩が立ちふさがっていた。

背後から、兵の気配がする。

「どうって……」

ミンクは、松明で天井や壁を確認する。

「この辺、やけに壁が平らだな」

シンカは途中でこぼこの岩肌の洞窟のようだったことを思い出した。今いるここは、少し違う。地下牢と同じように、人の手が加わった平らな壁。

「さて、どうするんだ？」

シキはシンカに体重をかけたまま、にやにやしている。

「……風は、そこから吹いてくるよ」

シンカが指差した場所には、壁があるだけだ。

「ね、早くしないと、追いつかれちゃうよ」

「そうだよなあ」

シキはやけにのんびりしている。

シンカは、肩に手を回したまま寄りかかるシキに、肘うちをかました。

「いて！」

「さつきからさ！シキ！人に頼ってばかりでなんだよ！軍人だろ？
なんか知ってるんだろ！離れるよ！」

少し息を切らして、シンカは男を突き飛ばした。

そのまま壁に寄りかかる。

自分より大きな男を背負うように歩くのは、なかなか体力がいるの
だろう。

「おいおい、せつかく助けに来た友人をその扱いか？」

「逆になってるだろ！」

シキは髪を一振りして、伸びをした。

しゃんと立って、まるで昼寝したあのようなようだ。

「わざとだ、やっぱり」

ミンクもシンカの傍らで、目を丸くしてシキを見ていた。

シキは二人をちらりと見て、笑った。

「いや、お前がどんな奴かと思つてさ。手伝つてほしいか？」
「はあ？」

シンカの呆れた声にシキは益々楽しそうに笑った。

「助けてほしいかつて聞いているんだ」

啞然として言葉を失うシンカの脇で、ミンクが松明をシキに突き出した。

ニヤニヤしたまま松明を受け取ると、シキはもう一度言った。

「助けてほしいか？」

「な、なんか、むかつくけど……助けてほしい」

シンカが睨むと、シキはにっこりと笑った。

「よし。だいたいな、お前、人が真剣に助けに来たのに可愛げないんだよ、平氣そうな振りしやがつて」

「何だよそれ！」

鼻歌でも歌いだしそんな調子で、シキは一人壁際に立った。

突き当たりの壁の一角。ちょうど、シンカが風が吹いてくるといった場所だ。

一番下のひときわ小さな石が削れたように凹んでいる。
そこを蹴った。

4・いくつかの友情4

ゴツン、という感じの鈍い音。

「シキ、痛そう」

ミンクが口を手でふさぐ。

「違うぜ。ほら、お前らこっち来いよ」

シキに引かれて、二人は通路の一番奥、突き当りの壁の前に立った。

「ぐうぐう」。

地響きがする。

「なんだ？」

「何？」

周りを見回す二人の目の前に、突然壁から何かが出てきた。

シキの蹴った場所から、二本の亀裂が天井まで走ったかと思うと、天井のほうから傾き始め、まるで切り取ったかのように、ゆっくりと壁が倒れてきた。

「うわ！」

どん、という大きな音と、土煙。

思わず抱きついたミンクを庇うように、シンカも顔を伏せた。

「もういいぜ」

シキの声に、顔を上げる。

三人の目の前には、三角の壁が立っていた。

「サンドウィッチみたい」

ミンクの感想にシンカが笑う。

「なに、だって、そうでしょ？ほら、三角に切った形してて、この階段のところがハムとかで……」

「階段？」

壁から現れた三角の壁は、上面が階段になっていた。それは斜めに壁に向かって上れるようになっていた。

「さ、ハムの上を登るぜ」

シキが松明を持って先頭に行く。

「これ、そういう仕掛け？」

ミンクが続いて、最後にシンカが登り始めた。

手すりも何もない、人一人がやっと通れる幅。

時折、よろけるミンクを前から後ろから支えながら、三人は壁の奥へと進んでいった。

両側は平らな壁。かすかにかび臭い。

足元のこの階段は、この壁に隠されていて、シキの操作した何かの仕掛けである通路に出てくるようになっていたのだ。

「まるで、ケーキを一切れ切り取ったみたい。不思議ね」

「ミンクのたとえば食べ物ばかりだな」

シンカが笑うとミンクが立ち止まる。

ぶつかりそうになって、シンカはミンクの肩に手を置いた。

「もう、からかってばかりなんだから！」

その手を振り解くようにミンクがくるっと背を向ける。

勢いでシンカは後ろに倒れ掛かる。

「うわ！バカ、落ちるよ！」

手すりも何もない平らな壁。足元は急な狭い階段。バランスを崩したまま、シンカは両側の壁に手についてかろうじて落ちずに停まる。

「だつて！」

「ほら、つかまれ」

ミンクの肩越しからシキが手を引いて起こしてくれた。

「シンカ、お前今頃になって足元ふらついてんじゃないのか？」

松明の下シキがにやつと笑った。

「そんなことないよ」

シンカは口を尖らせた。

「ねえ、それより、ここ……」

そこで階段が終わった。狭い踊り場。

その先は扉のようだ。

シンカが登りきったところで、シキは再び扉の脇の壁を蹴った。地響きがした。

「何？」

「階段を元に戻した」

シキはそういうと、扉を開く。

金属の重い扉はぎしぎしと軋みながらゆっくりと開いた。

「あ、草の匂い」

扉の外は暗かった。

それでも髪をなでる風に、三人は深く息を吸った。

「何、ここ？シキは知ってるのか？」

「遺跡だ」

「遺跡？」

シキの松明が、崩れかけた壁の残骸や、半分土に埋まった石の柱を照らし出した。

シンカたちが出てきた扉は、こちらから見ると山のがけ下にうずもれるようにひっそりとしていた。

周りには緑の苔が生え、土がむき出しになったところからは木の根がひげのように伸びる。

足元も、やわらかい草で覆われている。

周囲は林のようだ。時折、イキモノが葉を揺らす音がする。

そこだけ林にぽっかりと穴があいたようになっていて、夜空が見える。

4・いくつかの友情5

ちょうど、シンカがすんでいた家くらいの広さがある。林の向こうがどうなっているかは、暗くて分からない。

「シンカ、見て！」

ミンクが、なんとなくもたれかかっていた石壁に手のひらを当てて、声を上げる。

駆け寄ると、文字が刻まれていた。

所々草が生えたり、崩れたりしているが、読める。

「神の山ジ・リユリ山が火を吐いた後、のろいは国全体に広がった。病があふれ、目の見えないもの、口の利けないもの、歩けないものが続出した」

シンカが読み上げた。

「カンカラ遺跡だ」

シキが納得したようにあごをなでた。

「カンカラ遺跡？」

ミンクが聞き返す。

「ああ、この国ができるずっと前の、カンカラ王朝の時代のものだ。同じようなものが、俺のいたダンドラの国にもあった。さっきの階段の仕掛けも、まったく同じ。この大陸を統一していたというのは本当らしいな」

「違う国があったの？」

ミンクが変な質問をする。

「あれ、学校で習わなかったか？」

「知らない。シンカこそ、何で知ってるの？」

頬をぷくつとふくらます。シンカの好きなしぐさだ。

「シンカ、笑ってないで説明してよ」

シンカが話し出した。

「この国になる前には、この大陸を含めて、今は人が住んでいないすべての大陸を、ひとつの国が治めていたんだ。カンカラ王朝と呼ばれている」

「多分五百年前くらいかな。すごく進んだ文明だったらしいんだ。太陽の光を熱に変えて、製鉄していたとか、海の水から動力を作ったとか。すごいんだぜ、水の成分が分解するときのエネルギーで、空も飛べる船を作っていたんだ」

「お前詳しいな」

シキが感心する。三人はやわらかい草に座ったり、寝そべったりしながら、シンカの夢のような話に耳を傾ける。

「信じられないだろ？空を飛ぶんだ。そういう技術が、どこかに眠っているんだ。空を飛んで、遠い遠いところまで、人は行けたんだ」

シンカの手は夜空の星に向けられている。

「遠い遠い、ところ？」

ミンクが同じように見上げた。

「そう、俺たちが行くことのできない遠いところ。そういうところがあるんだってさ。母さんが言ってた」

あの、黒い空飛ぶ兵器も水のエネルギーなのかな。ふとシンカは思った。

あのときの、デイラの上空にいた、あれ。

あれは絶対空を飛んでいたんだ。

母さんも知っていたんだ。
だから。

レクトも母さんを知っていた。

「シンカのお母さんが？どうして？」

ミンクの問いにシンカは応えない。

少し遠くを見る少年の厳しい表情に、ミンクは視線をそらした。

「…ねえ、どうしてそのカンカラ王朝は滅びちゃったの？」

「あ、ああ。ある時、ジ・リユリ山が噴火したんだ。噴煙は遠い大陸まで広がって、この世界すべてに黒い雨を降らせたんだ。雨は長く続いた。半年で、噴火は収まったが、黒い雨のせいで、飲める水がなくなった。空気はにがり、人の体を蝕んだ」

「怖い」

「人は、全滅するところだった。でも、変化した水や大地から、新しい植物や動物が生まれだした。大気の毒で長く生きられなくなった人間は、この新しい植物によって救われたんだ」

「それって、ユニイラ？」

シンカはうなずいた。

「生き残った人々が集まって、新しい今の国々が生まれた。ユニイラはそのときの毒を含んだ水や空気で育った。当時は、毒も濃かったから、ユニイラはどこにでも生えたんだ。だけど、ユニイラはたくさん使いすぎると副作用が起こる。その成分を、今のように精製して使いこなすには時間が必要だった。でも、その長い時間の間に、この世界の毒素自体が薄れていったのだと思う。ユニイラも減っていった」

シンカは、石の柱に背を預け、背後の石版を見上げる。

「貴重な存在になった。だから、今、ユニイラは、このジ・リユリ山を水源とするシン川のほとりに栽培所であるデイラを作って、国に管理されている。人に害を成す空気の毒素はまだ完全に消えたわ

けじゃない。俺が思うにはさ、毒素がなくなったら、ユニイラもなくなるんじゃないかな。まるで、毒を消すために生まれてきたような気がするんだ」

「ふうん」

ミンクは眠くなったのか、遠い目をする。

「そう考えるとさ、俺たちは振り回されているんだけど、ユニイラ自体は悪くないんだ。母さんがさ、よく俺に話してくれた。ユニイラはまだ、なくすわけにはいかないの、ってさ。いつか、そう遠くないうちに無くなることを知っていたみたいに」

実際になくなってしまった。母さんはあの日がくることを知っていたのかな。

シンカはもつと何か思い出そうと考えたが、涙が出そうになってやめた。

「ミンク。おいで」

シンカがミンクを傍らに呼んだ。
額に手を当てて、熱を測る。

「多分、あのしずくだけじゃ足りなくなってしまうんだ」
「どうする？キナリスにはもらえないぞ」

シキが足元の草をかかとでこする。キナリスはシンカを殺そうとしていた。

もう二度とあの都には立ち入らない。

4・いくつかの友情6

「山に、さ。このジ・リユリ山にはさ、今も野生のユニイラがあると思う」

「思うつて、お前」

「行ったことないからさ。俺だつて。でも、あるはずなんだ。ジ・リユリ山のこの地下から、あの毒素が流れ出たんだ。もっとも毒の強い地域だよ」

「そいつを採つて、精製できるのか？」

「ああ。デイラではみんな、子供の頃からやってるよ。傷薬とかにしてたんだ。明日、明るくなったら行こう。ここにいても仕方ないしね」

いつのまにか眠っているミンクに、そつと自分のロープをかけてやる。

薄暗い夜の闇に、ミンクの白い肌は余計に透き通って見える。

地下を歩くうちについたのだらう、頬に埃のような汚れがついていた。

シンカは拭おうとして、自分の手を見つめた。

手も綺麗ではない。

ミンクが持っていた荷物を開けて、ごそごそと中を確認するシンカに、シキは手を伸ばした。

「なに？」

「煙草ないか？」

「あるわけないだろ」

ふーん、と残念そうに伸びをして、シキは再び自分の居場所に戻る。壁を背に、腕を組んで空を見上げた。

シンカは取り出した綺麗な布で、ミンクの頬をそつと拭いている。

「お前ら、単なる幼馴染か？」

「何だよ、単なるって」

「宿だつて別の部屋だつただろ？深い仲ならそばで守つてやるもん
だろ？」

シンカが言葉に詰まつた。

「かわいいよなあ？お前がのんびりしてるなら俺がいたでこうかな」

「ま、待てよ！それ、ダメだよ」

「早い者勝ちだろうが」

楽しいシキの口調にシンカは口を閉じる。
黙つて、足元の土をかかとで蹴る。

「いやならさつさとしろよなあ？」

「からかうなよ」

「アドバースだろ？」

「今は、言えないんだ、……だから。からかうな」

シンカは傍らに横たわるミンクを見つめた。
時折、悲しそうにゆがむ表情を、あの寺院でも見た。

両親を亡くした。

幸せだったのに、一夜にしてすべて失つた。

それは、レクトの仕業なのだ。

レクトが、何者なのか。

考えたくないが、もし、もし自分の父親だったら。

俺は、どうしたらいいんだろう……。

「どうした？シンカ」

「うるさい。俺もう、寝るから」

膝を抱えて顔をうずめる少年に、シキは目を細めていた。

4・いくつかの友情7

昨夜、林だと思っていたところは、明るくなってみると、かなり深い森であつた。

うつそうと茂る樹木は季節のせいもあり色濃い緑の薄明かりを三人の足元に投げ込む。

風も感じられない。

シキが、昨日見た星の位置から方角を覚えていなかったら、一步も動けなかっただろう。

足元をさえぎる草を、剣で払いながら進む。

「こんな状態で、ユニイラ見つかるのかよ」

もと軍人のシキは他の二人よりは山道になれているはずであるが、先頭を切るのはなかなか体力がいる。

ぐちもこぼれようものだ。

シンカが言うには、ユニイラは朝日がよくあたる、南の斜面に生えるという。

朝、彼らは山頂から南東の方角の中腹にいた。西に向かつて、進むことにした。

日が、頭上にかかる頃、三人は見晴らしのよい高台に出た。

眼下には緩やかに下る山肌、遠くシン川が、きらりと光る。

高い場所に来たからか、もう、腰以上の高さの木はない。

もうすこし、上に登れば、木はなくなり、草花だけが生息する区域になる。

そこで、ユニイラを探そうというのだ。

歩きつかれたミンクは、休憩を要求する。

シンカは、途中で捕まえた野ウサギを取り出した。

シンカが、さつさと火を起こし、シンカはウサギをさばく。見事に息の合ったすばい作業だった。

聖帝軍の姿を見ることはなく、追われているのかは、分からなかった。

「煙を流さないために、こいつをかけるんだ」

葉がついたままの木の枝を焚き火の上に立てかける。

「あ、シキそれ！」

シンカが気付いて笑った。

シキはふふんと目をそらす。

「なあに？変なおいの煙ね」

シキの乗せた枝の葉は、燻されてじわじわと縮んでいく。

「煙草にするんだろ」

「ばれたか」

ふざけあいながらもてきばきとこなす二人を、ミンクは木陰に座ってみていた。

「ミンク、もうちょっとこっちに座ってるよ、ほら、陽が当たってる。日差しが強いから、気分悪くなるぞ」

新たな場所に厚みのある大きな葉を敷き詰めてくれた。

「ありがとう。ね、シンカ。楽しそうだね」

シンカは一瞬、言葉を失った。

ミンクの表情が、曇っているように見える。

「あ、はは、うん。シキって変な奴だよな」

「シキは、ほんとに頼りになるね。ねえ、シンカ、私たちどうなるの」

ミンクの顔にかかりそうな邪魔な木の枝を手折りながら、シンカは動きを止めた。

間近にあるミンクの瞳に見上げられて、シンカは視線をそらした。

一晩考えていたことを、話すことにした。

「あの、ミンク。俺、考えたんだ。

もし、もしさ、ミンクがよければ、ミンクだけ聖帝のところに」

ミンクが顔をしかめた。予想できた表情だ。

シンカは続けた。

「そのほうが、安全だし…その。俺、シキとミンクに助けてもらっておいて、なんだけど。俺さえいなければ、シキだってミンクだってさ、聖帝に保護してもらえる」

「なに言ってるの!？」

シンカは拳を強く握り締めていた。

「そういう、方法もあるから。考えてみて。はは、煙が臭いな」

シンカは何度も瞬きすると、立ち上がった。ミンクの視線から逃れるように背を向ける。

「シンカ！」

シンカは焚き火の方に向かう。

その金色の髪がうつむいて悲しそうなことなど、今まで一度もなかった。

あのデイラがなくなった日以来、ミンクの前ではいつも笑っていた。少年の背中に追いつこうと、ミンクが立ち上がったときだった。

「おい、見るよ」

眼下に山々の見渡せる高台で、シキが叫んだ。

「なに？」

二人が駆けつける。

先ほど三人であっちが何、こっちがデイラでと話した場所だ。

澄み渡った晴れた空の向こうに美しい街並みや、遠く川のきらめきが見て取れた。

今はその水平線に黒い煙が立ち昇り、上空で風にあおられたそれは地を這うように見える。

「シキ、あれ、国境の方角じゃないか？」

シンカが煙を上げる南の方角を差す。

シキが腕を組んだ。

「そうだ。いよいよか」

「何が？」

「キナリスが言ってた。隣国のダンドラが、ユニイラを奪ったために、戦争を仕掛けてくるかもしれないとな」

三人は遠い町を想った。

歴史が動いていく瞬間を感じる。
大きな、どうしようもない流れが、
すべてを押し流していくようだ。

5・この国の現実1

「おなかすいた」

「なんだ、ミンク？」

シンカが振り返ると、ミンクとは違う姿が焚き火のそばに座り込んで、ウサギ肉をくわえている。

「なんだ、お前！」

シンカの声に、そいつは逃げ出す。ウサギを持ったまま。

すかさずシキが襟首を捕まえた。

小柄な、女の子？なのか、褐色の肌に、少し先のとがった耳、漆黒の髪に布を巻いていた。

布には赤い糸で模様が刺繍され、少女の肌の色に合っている。

吊り上げられ、もがく。

「シキ、下ろしてあげて」

ミンクがうったえた。

少女は服装を整えてシキを睨んだ。

「なによ、ウサギはこの山のものでしょ。山のものみんな平等に分け与えられるべきだよ」

「じゃあ、お前は何かしてくれるのか？」

どうどうと、皆の輪に入り、ウサギをしゃぶる少女にシキが言う。

「何って？」

「俺は、火をたいた」

シキが自分の胸を親指で指す。

「こいつはウサギを獲った。お前は何かしてくれるか？」

少女はくりくりした目を、ミンクに向けた。

「シキ」

私も何もしてない、とミンクの目が語る。

「ミンクはいいんだ。病人だからな」

少女は、そう言ったシンカを見つめる。

「あたし、ガガン。この先の村に住んでるんだ。村に案内するよ。それでいいだろ？」

少女は半分馬鹿にしたようにシキをにらんで言った。

「助かるよ。俺はシンカ。彼はシキ、この子はミンク」

「ふうん。ミンクもシンカも変わった綺麗な目をしているね」

興味深々だ。シキには目もくれない。ミンクの服の飾りや、髪の違いが気になるのか盛んにミンクに話し掛ける。

「シキ、シキと同じ肌の色なんだな」

シンカが、焚き火から少しはなれて、煙草をふかす男に言った。シキは、ちらと少年に目をやると、つまらなそうに煙を吐く。

「俺は、もっと東の民族だ」

「シキも山岳民族なんだ。知らなかった」

不機嫌を隠さない男に、シンカはどうしたものか迷う。

そういえば、シキは軍隊時代の話や、傭兵の頃の話はしてくれたが、自分の家族や生まれたところの話はしていない。だれでも、言いたくないことはある。

「村に行つて、どうするつもりだ？」

そう言つて、シキは煙草をもみ消した。

「ユニイラの精製に必要な鍋と、布をひとつもらおうかと思って」「それなら仕方ない。行くか」

「シキ、シキが行きたくないなら、俺一人で行つてくるよ」

「それはできない」

こんなに無愛想なシキは初めてだった。大体どんなときも、シキは笑っていた。

「村では、ユニイラのことは言うな。山岳民族はユニイラを使わない。逆に、ユニイラを使うものを悪く思っている」

少し遠い目をして、シキが言った。シキの経験してきたことのほとんど何も、俺は知らないんだな。

そんな風に、シンカは思った。

こうして、一緒に旅をして、守ってもらってばかりだ。

「分かった。ユニイラを人間が使い始めた頃、副作用で家族を亡くした人々の中には、ユニイラを憎んで、決して使わないと決めた人たちがいた。きっと、彼らの末裔なんだろうな」

そう、シンカが言くと、シキは黒い前髪をかきあげて、目を細めた。「昔はそうだったかもしれない。だが、今はちがうさ。彼らだって、ユニイラをうまく使えば、病氣から逃れられると知っている。だが、ユニイラを使うには、国に高い税を払わなくてはならない」

5・この国の現実2

「税？」

シンカは、知らなかった。

「貧しいからこんな山に追いやられる。貧しいから病気になっても薬がない。シンカ、覚えておけよ。そういう民族が聖帝国の人口の半分以上いるんだ」

「半分も？」

「だからさ、彼らはユニイラのない生活を受け入れているんだ。俺も同じだ。五歳のときに一回ユニイラを受けた。その後両親が戦争で死んで、俺にはユニイラを手に入れる金なんかなかった。いつか大気の病にかかるとしても、今生きるかどうかのときにそんなことは気にしていられない。成人して軍に入ってユニイラを受けられると分かったときにも、うれしくなんかなかった。結局、いまだに『ユニイラのしずく』を飲んでいない。あの、五歳のとき以来な。」

うつすら笑いを浮かべて、はき捨てるように告白する男を、シンカは見つめていた。

「体は大丈夫なのか？」

大気の病。それはユニイラを飲めなければ確実に体を侵す。シンカが心配そうにシキの表情をのぞく。

「大気の病は緩やかに進む。俺も三十五だからな。後数年で目が見えなくなってくるだろう。」

「それでも、ユニイラはいらないの？」

シンカにはわからない。子供の頃からあたりまえのように目の前にユニイラがあり、大人の目を盗んでは傷薬などにして遊んでいた。

政府に反発することと、ユニイラを憎むことは違うのではないか？

「シキ、もし俺があの子の村で、ユニイラの精製方法を教えたらくする？」

「！」

「いやな人は使わなければいい。だけど、あの子のように、小さい子が、選択の余地なく病気になるのを見過ごしていいのかな。野生のユニラを見分けて、精製する。そうすれば、国に操られることもないし、病も防げるじゃないか」

「俺は、いらなからな」

男は、悲しげに微笑んだ。

「シキ」

膝を抱えて考え込む。シキが、少年の頭に手を置いた。

「お前が悩むことないだろう」

「けど、人を助ける方法を知っていて、助けないのは良くないと思うんだ」

シキが病に侵されるのを、ただ、見守ることはできない。

「助けを望んでいる奴は、助けてやれ。助けてって言わない奴は、そいつが悪いんだ」

そう言っつて、シキはにやりと笑った。

シンカは膝に顔をうずめる。

一方でミンクのためにユニラを求め、一方でシキはいらなという。俺は二人とも元気でいて欲しい。

5・この国の現実3

ミンクは、この褐色の肌の少女に、なんともいえない可愛らしさを感じていた。

言葉遣いや動作は荒っぽい、素直な表情がくるくる入れ替わる、大きな黒い瞳に、吸い寄せられるようだ。

「あたしはね、この山のもう少し向こうに行った、ほら、あっちの草原。その村に住んでるんだ。」

よくよく見ると、小さく家らしき影が見える。

「ガガンは一人でここまで来たの？」

「ううん。違うよ。グラン・スーと一緒に」

「グラン・スー？お友達？」

たずねると、黒髪の少女は、瞳をくりくりさせて、あたりを見回す。

「ううん。お母さんのお母さん」

「お母さんのお母さん？」

ミンクは繰り返す。そんなの聞いたことない。

「途中までそばにいたんだけど、どっかいつちゃったみたい」

「お母さんの、お母さん」

ミンクはまだ、こだわっている。

「ねえ、それより、どうしてミンクは白い髪なの？赤い眼をしてるの？」

「え、うんと、私……」

どうしよう。言ってもいいのかな？

「ガガン！そんなところで何をしているのじゃ！」

突然、しゃがれた怒鳴り声が聞こえた。

振り向くと、麻で織られた衣装をつけた、黒髪の老婆が立っている。腰には小さな籠を下げ右手に杖を持っている。

「グラン・スー」

駆け寄る少女。

シキとシンカが、いつのまにかミンクの左右を固めている。

少女は、老婆に何やら叱られている。老婆は一通り小言を並べ終えると、少女には見向きもせず、こちらに向かつてきた。

「すみませんな。旅のかた。あの子が何かご迷惑をおかけしませんでしたか」

見合わせるシキとミンク。

「いえ、別に。たまたま、ウサギを焼いていたところに通りかかって、お腹がすいているというので、誘ってしまいました。

こちらこそ、すみませんでした。ご心配をおかけしてしまって」
ミンクが丁寧に話す。

老婆は、しげしげとミンクの姿を眺める。

目がよくないのか、細めたり、見開いたりしている。

「あの、俺たち・・・」

言いかけたシンカをさえぎって、老婆が大声をあげた。

「誰か、来ておくれ！怪しい奴じゃ！悪神スーラの使いじゃ！」

慌てて、逃げ出そうとする老婆。ガガンを引っ張って、村のほうに逃げていく。

「何？」

あつけにとられるシンカとミンクに、シキが説明する。

「・・・多分、あの村ではユニラを忌み嫌っているんだ。

だから、ユニラの神、スーラを悪神と呼ぶ。きっと、そういう民族なんだよ。

昔からの言い伝えか何かで、ユニラの中毒になったものが、ちょうど今のミンクのような白い髪、赤い瞳だったって知ってるんだ」

「・・・失礼ね」

私を見て逃げたってこと？ガガンは綺麗だって言ってくれたのに。変なの。

ミンクは頬をぷくつと膨らませた。

「お出迎えた。どうする、シンカ」

シキが、周りを遠巻きに囲んでいる村人に気付く。

「うーん。鍋、欲しいんだ」

「とっつかまるぞ」

「話して分かってもらえないかな」

ミンクが言う。

だって、別に私は悪者じゃないし。それに、ミンクはグラン・スーの存在が気になった。

「じゃ、行こう」

シンカがミンクの言いなりになって、三人の行動が決定した。

「俺は暴れるぞ？」

シキが非難がましく言う。

「いざとなったら俺だってやるよ。けど、鍋もらうまでは我慢しようよ」

シンカがなだめる。

三人は、村人におとなしくついて行った。

5・この国の現実4

小さい村には、木で作られた平屋建ての建物が三つ立っていた。この建物に、家族が十組くらい住んでいるらしい。長い形で、一部屋に一家族という風だ。

その建物の真ん中に、集会場のような丸い建物があり、そこに三人は連れて行かれた。

どこも、山で手に入る材料だけで作られている。質素で、素朴だ。

集会場（と、勝手に決め付けている）の真ん中には、シキと同じくらしい年の男が座っていて、そこに村人たちが三人を立たせる。シンカは不思議に思っていた。彼らを捕らえるときから、皆、無言だ。代わりに手振りでなにか合図めたことをしていた。

ちらちらと、横に立っているミンクを見る。彼女の視線も、あちこちを見回している。

目が会うと、にこつとする。シンカも目配せを返す。

シキは、手を動かして、何か真剣に目の前の男を見つめている。

「シキ、それ、会話してんの？」

シンカが気付いた。

「まあな。この村は、通常会話はみんなこの方法らしいんだ。」

「意味わかる？」

「なんとかな。」

ミンクが感心する。

「シキ、すごい！城でバシバシ兵隊やつけたときもすごいと思ったけど、今度は尊敬するすごいだわ！」

「そんなにすごかったの？」

シンカがたずねる。

「うん。すごい怖かったの。」

ぷっ！吹き出すシンカ。

「黙れよ。」

ちよつと、むつとして、シキは二人をにらんだ。声を出して会話する三人を見て、周りにいた村人は少しざわざわと手で会話する。

「仕方がない。」

シキと手で会話していた代表の男が、話した。初めて、村人の声を聞いた。

三人のうち二人が、手話を理解しないと分かり、声を使って会話することにしたらしい。

「私は、この村の村長。ハン・ルクという。お前たちの名前はいま、この男に聞いた。」

この村の大半は、まともに声が出せない。だから、通常は声を使わないようにしているのだ。」

「鍋が欲しくて、山に迷い込んだそうだな。」

微妙なところが通じていないのかもしれない、とシンカは思った。

「はい、鍋をひとつ譲っていただけたら、俺たちはすぐ、出て行きます。代わりに、これを差し上げます。」

シンカは、懷から塩の石、つまり岩塩を取り出した。小指の先ほどの小さな塊を、一袋分。旅に塩は必需品だが、いつの間に手に入れたのか？シキは首をひねる。

魚屋にでももらったのか？

「塩か。よいだろう。我らにとって塩は貴重だ。」

「だまされてはいかんぞ！そやつらは悪神スーラの使いじゃ、その娘の姿がそれなのじゃ！」

事の成り行きを見守っていたグラン・スーが叫んだ。つかつかと、村長の横に立ち、三人を睨みつける。

「なぜ、悪神の使いだなんて思うんです？」

ミンクが言った。悪者にされるのは本当に、腹が立つ。しかも、容姿のことだから、余計にいやだ。

一応デイルでは可愛いほうだったんだから！

「・・・ああ、ミンクを怒らせちゃだめだよ。」

小声でシンカがつぶやく。

怒るとすぐく、早口になって、口論では負けない。普段おっとりしているからそうは見えないが、けっこうしっかり物事を考えているんだ。

「お前の、その髪の色、瞳の色。それはユニラの仕業によるものじゃ！」

「・・・この村ではユニラを使っていないんですよ。」

ミンクは村長に話し掛ける。

「ああ、そうだ。」

「では、なぜ、私の髪の色や瞳の色がユニラの仕業だってわかるんですか？」

ユニラを使っているふもとの町の人たちだって知らないのに？」

「あ、いや、その。グラン・スーが昔から伝わるというので。」

今度は、グラン・スーに質問する。

「グラン・スー。あなたは見たことがあるの？」

「わしは、・・・わしもわしの親から聞いたのじゃ。」

老婆は、落ち着きがない。

「この、ユニラのない村で、どうしてあなたは長生きしているの？」

ミンクの言葉に、集会場はしんとなる。

「ユニラのない村では、人は五十歳まで生きられない。グラン・スー。あなたはどう見ても、

五十歳は過ぎているわよね。」

5・この国の現実5

「わしは特別なのじゃ！」

「どう、特別なのか？まさか、」

「ミンク！そこまでにしておけ！」

シキが、あの怖い表情で、止めた。

「だって！」

「お前のいいたいことはもう、分かったから。みんな、伝わっているよ。」

シンカもなだめる。

「ここで、ユニイラが禁止されていようが、どんな神様を信じていようが、俺たちが干渉することはないよ。

ミンクが悪い神様なんかじゃないことくらい、承知しているし、その姿も可愛いと思うよ。」

シンカの言葉に、ミンクは照れて頬を赤くする。

「お、やるなシンカ。」

シキがからかうから、余計にミンクはおとなしくなった。大きな声を出したことが気恥ずかしいようだ。

「あの、すみません。我らも、別に、ユニイラを怖がっているわけではないのです。ただ、必要ないと思っただけで。グラン・スーは昔の人だから、どうも過剰に反応するんです。」

村長が、詫びた。

グラン・スーはミンクの言葉がこたえたのか、黙り込んでいる。その横で、ガガンが、くりくりした瞳でミンクとグラン・スーを見比べている。

「いえ、こちらすみませんでした。」

シンカが、ミンクの肩に手を置きながら微笑む。

村長は、ほっとしたようで、お詫びに、村で一晩休んでいってくれといった。

三人も、喜んでその好意に甘えようと決めた。

夕食をご馳走になって、三人はいい気分で割り当てられた部屋に戻る。

部屋は、木の壁に刺繍を施された布が一面に張られ、まるで、アストロードの生地職人の家にいるような気分だ。

シンカには少し懐かしい。

部屋には、先客がいた。

ガガンだ。

「ごめんね。勝手に入って。」

少女は、部屋の真ん中の、小さいテーブルの横にちょこんと座っていて、可愛らしい。

「どうしたの？お家でお母さんが心配するわよ。」

ミンクが笑う。

「大丈夫。うち、お母さんいないの。早くに死んじゃった。」

「そうか。じゃ、グラン・スーとお父さんと暮らしてるんだ？」

「うん。あのね、お母さん、ミンクと同じだった。」

酒はないかと物色していたシキも振り返った。

「あのね、グラン・スーを怒らないで欲しいの。」

「聞かせてくれるかな？ガガン。」

シンカが懷から、小さな飴玉を取り出して、ガガンに渡す。ガガンは一瞬驚いていたが、同じものを口に含むシンカやミンクを見て、おそろおそろ口にしてみる。

「おいしい！」

「港町の市場で買ったんだ。白花の蜜が入っているんだ。」

「ありがとう。あたしのお母さんはね、生まれたときから、ミンクみたいに白い髪に赤い目をしていたの。」

それはね、グラン・スーが、間違えてユニイラを食べちゃったからなんだ。

そのときグラン・スーのお腹にいたお母さんに、その毒が入ってしまった。それで、お母さんはあんまり長く生きられなかったの。あたしが産まれてすぐに、死んじゃった。グラン・スーはすごく後悔しているの。

自分がユニイラを与えたために、早く死んでしまった。しかも、自分だけなかなか死なないって。」

ミンクは、見開いた目を、すでに潤ませている。

「そうだったんだ。ごめんな。俺たち知らなくてさ。」

「ごめんね。」

ミンクの瞳から涙がこぼれる。

「ううん。あたしも、今日のはグラン・スーが悪いと思うもん。あたしは、ミンクを見て、お母さんってこういう感じだったんだって思った。うれしかったよ。」

ミンクはたまらず、少女を抱きしめた。

「最後まで言わなくてよかっただろ？」

シキがぽつりと言う。

何も言えず、うなづくミンク。

そういう姿も可愛いと、シンカは思う。

「あつたぞ！んー、ちと匂いがきついが、まあ同じだろう。」

部屋の隅の棚から、シキは酒瓶らしいものを引っ張り出した。

「シキ。」

「それ臭い。」

シキをのぞいた全員が、鼻をつまむ。

「大丈夫だよ。」

コルクのふたを開ける。

「うわっ！」

シンカがあまりの匂いに声をあげた。すでに、酔ったのか頬が赤い。

「飲むなら外行けよ！」

「お前も来い。つきあえ。」

嫌がるシンカを無理やり引きずって、シキは外に出て行く。女は女

同士、話も合うだろう。

鼻をつまんだまま二人を見送ったミンクは、改めて、ガガンとおしやべりをはじめた。

「なあ、シンカ。お前、お父さんは知らないって言ったな」

集会場の外にある木のベンチに座って、シキはその、ものすごい匂いの酒を、ごくごく飲んでいる。

「……匂い、気持ち悪いよ。シキ」

「匂いはきついが味はなかなかだぞ」

すっかり肩をつかまれているので逃げ出そうにも逃げ出せない。

シキは、シンカの瞳を覗き込み、もう一度質問をする。

「お前、自分が何か特別だって知っているか？」

「うん？デイラではそんなふうにも言われていたよ」

シンカは、視線をそらす。

5・この国の現実6

「キナリスにも言われただろう?」

あの、不快な馬車のたびを思い出す。

「あんな奴の言葉を信じるの?」

「キナリスは、お前の話が信じられずに、拷問にかけたって俺に話した」

「……それで?」

足元に視線を落とし、シンカはシキを見ようとしない。シキは、再び酒をあおる。

「俺はそこでぶちきれかけていたしな。耳が変だったかもしれん。あの時、お前は平気だったとキナリスは言ったんだ」

「それは……、痛かったさ。つらかったよ」

シンカは痛みを思い出していた。焼きごてを背中中に当てられたときの、あの激痛。自然に険しい表情になる。

「でも、傷が残らない。と。治ってしまうといていた」

「それはさ、だれだって、自然に治るだろ? 時間はかかるけど」

そこで、シキは小さくため息をついた。

「お前は、俺たちが駆けつけたとき、傷ひとつなかったよな」

「……化け物とでも言うのか? あの皇帝はそう言っていたけどな。」

それで、手に余ってユンイラで殺そうとしたんだ。……残念。それも平気さ」

「シンカ?」

シンカは黙り込んだ。

皮肉に浮かんだ一瞬の笑みも、今は消えている。

「昔からそうなんだよ。どんな傷もすぐ治る。母さんには人に言うなって言われていたから、隠していた。だってさ、ただでさえ姿が皆と違うんだ。それ以上、変な奴だって知られなくなかった」
急に顔を上げ、シンカがこれまでにないくらい真剣な表情で、シキに頼む。

「ミンクには黙っていて欲しいんだ」

「あの子だって、俺と同じで、お前を化け物扱いなんかしないぞ」

「……どうだか」

ゴツッ！

シキの拳がシンカの額にあたる。痛い音だ。

「いてっ！何すんだよ」

「信じろといっただろう！」

シキは怒っている。

「何だよ、なんでそんな怒るんだよ」

「俺は、お前を信じて、キナリスを裏切ってここまで来た。お前がどんなだろうと、俺の知っているお前を信じている」

シンカが、見開いた青い瞳でシキを見ている。

「なのに、お前は俺を信じないのか？」

「ごめん。信じてるよ」

「じゃあ、いいじゃないか」

「？」ミンクに言えって？

シンカは頭一つ分背の高いシキを見上げた。

「一杯くらい飲んでも」

シンカはそこで初めて気付いた。シキは、酔っている。
いつから、どこからおかしいのか分からないけれど、多分、信じる信じないあたりから記憶には残らないだろう。

「いやだよ。ばか。もう、匂いで十分酔っているよ」

笑い出すシンカ。

「くくく。」
シキも笑う。

翌日、シンカは、村の集会場の外にある、木のベンチで目がさめた。背中が痛い。気付くと、ベンチの下、つまりシンカの足元に、シキが眠っている。

あきれるよ。恥ずかしい。

あれから、シキと何を語ったのか覚えていない。とにかく、匂いが強烈で、何も考えられなかった。

考えられなくて、よかったのかもな。

ふと笑う。

今まで、自分の中で、隠していたこと、いやだと思っていたこと。そういうことを、すべて「それでいいんだ」といつてもらっている気がする。

だから、シキのそばにしていると心地いいのかもしれないな。

涼しい朝の空気を吸って、大きく息を吐く。気持ちのいい朝だ。鳥の声を聞きながら、部屋に戻るとミンクはまだ眠っていた。

室内はいつかミンクに上げた白花の香水が香り、様々な模様の布の中に包まって眠る少女は幻想的ですらある。

一人残したら、きつと悲しむ。

でも。シキがいてくれれば。

「信じないのか」そう言ったシキの言葉を思い出す。

お前がもたもたしているならもう、そんな冗談も言っていた。冗談か？

違つかも。

ミンクは、やっぱり可愛い。

じっと見つめていたシンカはポツリとつぶやいた。

「…やっぱり、やめた」

ミンクを誰かに取られるなんて許せない。たとえ、シキでも。

「止めちゃうの？」

「そう、やめ…ミンク、起きてたのか!？」

シンカはいつのまにかミンクの頬を手で包んでいたことに気付いて慌てる。

「止めちゃうの？」

同じ質問を繰り返す少女は瞳の色に映える朱色の布を肩にかけたまま、起き上がる。

不安げな様子にシンカは笑った。

「ああ、止める。ミンクを安全なところにおいていこうかと、思ってたけど。止めた。悪いけど、一緒に連れて行くから」

「あ、止めるってそういうこと？」

「え？なんだと思っただ？」

ミンクは頬を赤くして拗ねたように視線をそらす。

「なんだよ？なんだと思っただよ？なあ!」

「なんでもないもん！もう、いいから向こうにいつてよ!」

口調とは裏腹に布に顔を隠そうとする。真っ赤になって、何を想像したんだ？

「なんでもないって言われると気になるだろ？」

「やだよだ、言わない!」

「言えってば」

「やだ!ずるいよ、言わないもん!」

「…キスしていい？」

「…!!!!!!」

まん丸に見開いた目に半分涙を浮かべているミンクに、シンカは笑い出した。

くく、あはははは!

「男のそういう想像力は遅いんだからさ。わかんない分けないだろ?」

「い、意地悪!！」

「それとも眠ってる間が良かった？」

「シンカ!」

だめだ、やっぱり手放すなんて出来ない。

しつかりミンクの唇はいただくことにして、シンカは覚悟を決める。そばにいるからには護らなければ。

シキは、村長と話をし、鍋をひとつもらって戻ってきた。

一夜の仮宿を出ようとしたところに、ガガンがグラン・スーを連れてやってきた。

ミンクはなんと言っているかわからない顔をしていた。

「お別れを言いに来たの。あたし、ミンクにあえてすごいうれしかったよ。一緒に旅して、いろんな町を見てみたいって思った。でも、あたしにはグラン・スーがいるし。お父さんもいるし」

「うん」

ミンクがうなずいた。やさしい笑顔だ。

「また、いつでも来てね」

ガガンとミンクはそっと抱き合う。

「その」

今まで黙っていたグラン・スーが口を開いた。

「すまなかった。わしは、どうも、その、どうかしていたんじゃ」

「いいえ、こちらこそすみませんでした。事情もわからないのに、ひどいこと言ってしまった」

ミンクが笑って手を差し出した。

老婆は恐る恐るミンクの手を握った。痩せたしわのある手は弱々しく冷えていた。彼女の生きてきた時間がそこに見て取れるように思

い、ミンクはぎゅと握り返した。娘を思い出しているのだろうか、グラン・スーの濁りかけた小さな黒い瞳には涙が浮かんでいた。

「また、いつでも来るがよい。歓迎するよ。あの子が生き返ったようじゃ」

「はい。ありがとうございます」

シキにはミンクが少し大人びたように見えた。

ガガンの村から半日ほど山を登ったところで、シキが休憩を要求する愚痴を始める。なだめているうちにシンカがユニラを見つけた。ユニラは、薄い緑の色の葉で、根から伸びるまっすぐな太めの茎に四枚が対に生える。

茎には細かい毛が生え、その先から粘液を出すため、人によっては皮膚がかぶれる。

茎には触らないように、器用に葉だけを切り落とし、沸かした湯にさっと浸す。

色が薄紫に変わったところを水で冷やし、細かく刻む。

粗い布にくるみ、ぎゅっと絞る。青い滴がいくつか落ちる。

これを繰り返し、以前もらったユニラの小ビンに一杯になるまでためた。

「この沸かした湯に、青い輝石が必要なんだ。この首飾りにはね、青い輝石と、金、銀、水晶とがちょうどいいバランスで使われているんだ。ミンクのお守りになると思ってたさ」

シンカはミンクにあげた首飾りをそのまま鍋に入れている。

無理をしなくても女を幸せにできる性格、シキはそう評してシンカをからかう。

常に相手のことを思い遣っているから、その行動が後になって生きてくる。運がいいというのは、こういう事なのかもしれない。

6・知らなかった世界

デイラの跡地には、建物と呼べるものは一つも残っていない。あの悲劇から、十一日が過ぎようとしていた。

四日目の雨で、灰や土砂が、シン川に流れこみ、美しい川はにごっていた。デイラの真

ん中を流れているその大きな川にかかる橋も、崩れたままだ。

朝、まだ夜が明けきらない青白い風景の中、瓦礫の野原は黒い影を落とす。

その中を、一人の男が立っている。瓦礫の一部のように動かない。男は、濃い金色の髪を短くしていて、白く鈍い光を反射する変わった服を着ている。年

齢は、四十歳くらいか。

背が高いので小柄とはいえないが、あまり、体を動かすことをしていたとは思えない体型をしている。

男が立ち尽くしている場所には、小さな木の棒が地面から突き立っている。三本。

その一つに、白い真珠をあしらった首飾りがかけられていた。

港町、アストロードまで戻って来たあたりで、シンカたちは、帝国軍の兵が、町のあちこちにいろのを見かけた。

一応、お尋ね者の三人は、ユーン姉さんのいる酒場によることはせず、あまり馴染みのない町外れの宿に夜のうちにもぐりこんだ。ユーン姉さんに迷惑をかけるわけには行かない。

デイラのことも、三人のうわさも知らない港町の人々は、遠い町で起こっている戦争のために、帝国兵が来ているのだろうと感じていた。

宿屋の主人も、「ここんどこ、戦争だなんだで物騒だからね。お客さんたちも、いざというときは自分で自分を守ってもらわんなあ。ま、お兄さん強そうだから大丈夫だろうけど。どうせなら、帝国軍の兵隊さんたちも、この宿に

泊まってくればいいのに。安心だし、儲かるしねえ。野営なんかしないでさあ。」

などと、客がくるたび話し掛けていた。客から何か情報が入ることでも期待しているのだろう。

こういう時には、宿屋は情報が行き交う場所となり、傭兵時代のシキはそれをよく利用したという。

だから、港町キャストウェイの宿屋の酒場で馴染みになっていた。ま、こんな辺境では、旅人も少ないから、あてにはならんけど。な。そういうながらも、夕食の後、シキは一人で酒場に行き、さまざまな情報を仕入れてきてくれた。

一部屋に集まり、デイラに入る前に確認する。

「まずな、デイラに資材や木材、鉄の鑄造の機械なんか運び込まれているらしい。

町の人間は、国が、ここに基地でも作るんじゃないかとうわさしている。

多分、ユンイラの精製工場再建のためだろう。デイラには、帝国軍がうようよしているってことだ。入るのも難しいかもな。」

「今城壁はかなり崩れてるしさ、目立たずに入れる場所はたくさん知っているよ。大丈夫。そこは任せてくれよ。」

シンカが請合う。

「次にな、十日くらい前に、変わった客が泊まったって言うんだ。四十歳くらいの男で、変わった服装で、背が高い。デイラのほうに旅立ったまま戻ってきていない。」

シンカは、身を乗り出した。

「レクト？」

ぞくつと気分が引き締まる。

「いや、一人きりで、金色の髪をしていたらしい。レクトは確か栗色の髪だったよな。」

うなづくシンカ。

「レクトのことは、あのデイラが襲われた日に町の人間が見ていて、けっこう印象に残っていたらしい。人数がいたからな。目立つよ。なんでも、街中で喧嘩していただのなんだのって。

だから、レクトなら、町の人間もわかったと思うんだ。」

「そうか。」

残念そうな複雑な顔をしたシンカを、じっと見つめてシキは言った。

「なあ、お前、なんか隠してないか？」

「・・・え？」

6・知らなかった世界2

目の前の黒い切れ長の瞳ににらまれて、シンカは目をそらす。そらした先で、今度はミンクの視線とあった。

「隠してるの？」

「え。」

「なあ、シンカ。おかしくないか？」

「なにがだよ。」

「だってよ、お前の話だと、街を破壊したのは空を飛んでた黒いものだろ。」

シンカはうなずいた。確かにそうだった。

「じゃあ、レクトたちがわざわざ、お前に案内させる必要があるのか？」

「・・・。それは、俺も知らないよ、理由なんか。」

シンカは、少しむっとして、伸びた前髪をかきあげた。

「お前、全部話してないだろ。」

シキがにらむ。

もう一度うつるさそうに、金髪をくしゃくしゃする少年の手を、シキがつかんだ。

「なんだよ、放せよ。」

「お前こそ、話せ。」

強引に手を振り払って、シンカはため息をついた。

「わかったよ。何で案内させたかは、分からないけどさ。・・・俺、父さんだと、思ったんだ。」

「なに？」

「・・・俺、子供の頃から父さんいなくてさ。」

ミンクが傍らでうなずいた。

「俺が、三歳とか五歳とか、とにかく小さい頃に、遊んでくれたんだ。レクトが。」

「・・・はあ。」

予想外の話だったためか、シキは気の抜けた表情になっている。

「あたしも、覚えてる。一緒に林で遊んだような。」

「うん。その人なんだ。けど、あの頃母さんは、あの人はお父さんじゃないのって言い張ってたし。本当のことは分からない。」

シキはコップに麦酒を注いだ。

「で、お前、確かめたのか？お父さんかどうか。」

シンカは、首を横に振った。

「そんな余裕なかったんだ。俺のこと捕まえようとするし、街は黒いのに攻撃されてたし。」

「！・・・お前に、会いに来たんじゃないのか？」

「母さんには、会ったらしい。よく、分からないよ。だって、逃げようとした俺を変な武器で撃ったんだ。」

お父さんが、そんなことするのかな。それに、・・・デイラと一緒に、母さんを殺したんだよ？」

痛いほど握り締めていた拳に、ミンクがそつと小さな手を添えた。

シキは、目を細めた。

「お前、自分のお父さんが街を破壊したって、そう思って、言わなかったんだな。」

「！あいつは、父さんじゃないよ！」

また一口、酒を飲み込むと、黒髪の大きな男はにんまり笑った。

「うそつくなよ。お前、そう思い込もうとしてるだけだろ。本心では、お父さんだいいと思うてる。」

「そんなこと、思っていない！」

「・・・どんな親でもさ、生きててくれたら嬉しいもんだろ。いないと、あえないと思ってた父親が、生きて目の前にいたら、それは嬉しいだろ。」

シンカは、黙った。

「分かる気がするな。」

ミンクが、ポツリと言った。

「生きていてくれれば。」

その大きな赤い瞳が、涙をためる。

ミンクは、両親を亡くしたばかりだ。しかも、それは、レクトがやったんだ。

シンカは目をつぶった。

どう、思っているのか、分からなかった。

いろんな、感情がうずまいて。どれが本当の自分の気持ちなのか、よく分からない。

「ま、とにかく、探し出すしかないな。」

「うん。」

シキとミンクがうなずきあって、うつむいたままの金髪の少年を見つめた。

「会ってから、話してから決めろよ。きっとその時には、何が本当か分かるさ。」

「・・・。」

うつむいたままの、シンカを横目に、シキはミンクを手招きする。

「あんな、ミンク。」

「なあに？シキ」

シキは、にやにやしている。やけに小声で、でもシンカに聞こえるようにミンクの耳元で言った。

「面白いこと聞いたんだ。シンカ、この街でかなり遊んでたんだぜ。」

「！何だよ、シキ！」

驚いてシンカが顔を上げた。

「シキは酔っ払ってるんだ！本気にするなよ、ミンク。」

シンカが睨む。

シキはにやり。

ミンクは二人を見比べながら、酒のビンにコルクを詰め、酒場から持ち出された魚の干し物をシキのほうに押しやる。

「お前のこと知ってるって、酒場の女が言ってたぜ。」

慌てるシンカ。ミンクの頬がぷくつと膨らむ。

シンカはやめるといわんばかりに、テーブルの下でシキの靴をける。

「それにな。この宿屋の娘が、ほれてるんだと。」

「俺、何にもしてないって！」

「シンカ！」

「そうか？俺は真剣に聞かれちまったぜ、一緒の女の子とはどういう関係なの？ってな。お前、ちよくちよく町の港や酒場に入ったりしていたって言うじゃないか。」

シキが女口調を真似る。気持ち悪い。

「俺、知らないぞ！確かに酒場とか、遊技場とか闘犬場とか行っただけだよ！」

「ろくなこと調べてこないな！シキは！」

「ま、色男はにくいね。歩くだけで女を泣かすってか？」

「私、もう寝る。」

ミンクが立ち上がる。

「ミンク！」

慌てて追うシンカを面白そうに見送って、シキはうまい酒を飲む。多少は進展するんじゃないか？

想像すらも、酒と一緒につままれている。

「まあ、今を楽しめよ。レクトに出会って知る真実が、何だとしたって、今さら変えられるわけじゃないんだ。」

だっ
たら、
悩んだ
って仕
方ない。
┌
足を組
んで、
煙草に
火をつ
ける。

6・知らなかった世界3

「待てよ、ミンク」

「待たない」

ミンクの部屋は廊下の反対側、一番奥だ。廊下をずんずん歩くミンクに扉の前で追いついた。

「あのさ、本気でシキの言っただの信じてるのか？」

「だって、遊んでいたってシンカも言ったもん。それに、小さい時からこの町のいろいろな話してくれたよね？酒場であった人の話とか、年上の友達のこととか。なんか、その。皆が噂してたけど、シンカは経験豊富だって」

「覚えてるんだ」

「だって、帰ってこない日とかあったよね？隣だから、シンカの部屋の明かりがつかないとすぐ分かるんだから」

「気にしてたの？」

自然とシンカの表情はほころぶ。

「！……おやすみ」

「！？って、待てって」

バン！

木の扉を軋ませてシンカが手で止めるのとミンクが勢いよく閉めるのと同じ時。

挟んだと思ったのかミンクが「あ」と小さく声を上げた。

「大丈夫！？」

シンカが右手を左手で覆うとごめん、痛かった？見せて、と真剣だ。実際は音を立てたのはシンカの足で、扉が閉まるのをしっかり防いでいたのだが。

心配する顔が可愛くてシンカはうつむいた睫が長いのをじっと見ていた。

「ごめん、冷やす？ねえ、入って」

ミンクは慌てて室内の水場で布を濡らす。
どうしようか？シンカは両手とミンクの後姿を見ながらしばし考える。

ふと夜風が吹いたことに気付いて、部屋の奥、開け放たれた窓に向かった。

宿の一階の酒場は盛り上がっているようにでにぎやかな歌や笑い声が聞こえる。二つの月が時折雲間に隠れながらも仲良く並んでいた。
上空は風が強いのか雲は流れるように動いていき、まるで月が夜の海を泳いでいるようにも見える。

「あれ？シンカ」

「空の上って、どんなかな」

ミンクが首をかしげながら、隣に立った。

「風が気持ちいいね」

「ああ。ね、ミンク。俺さ、大人になったら旅に出ようと思っていたんだ」

「旅？」

「そう、俺、父さんを探しにね、旅をしたかった。いろんなところに行くのが好きだし。いろんな人がいる。デイルでは皆が顔見知りで、それはそれでよかったけどさ、俺はもっと広いところに行きたかった。母さんがね、遠い、俺たちじゃいけないような遠いところにも人が生きていて、俺たちの知らないような生活をしているんだって、そういつてた。行ってみたくないか？」

ふわりと甘い香りが喉元に漂う。

ミンクがシンカの腕にしがみついて、のぞき込んでいた。

「どうした？」

ミンクの瞳は大きくて、月明かりにつるんと光る。夜のしっとりした空気を吸い込んだみたいに綺麗だ。

瞬きする。

「シンカはね、どこか遠いところを見てるの。そういう気がするの」
「ミンクは、……その、一緒にいてくれないかな？俺、一人じゃ淋

しいし」

「…淋しいから？」

「…違うよ。いてほしいから」

「…わかんない」

少し拗ねて尖らせる唇。見下ろすと少しだけ胸元が見える。
余計に鼓動が早くなる。

「だから、さ。ミンクだからそばにいて欲しいんだろ？」

「それだけじゃいや」

背に手を回してうつむけば目の前に小柄なミンクのおでこ。キスしてそのまま抱き寄せる。

「それだけじゃ嫌って、後何が欲しいんだよ？」

「ちゃんと……」

口を塞ぐ。

慌てて押しのけようとする手も丸ごと抱きしめる。

白い手が胸元にしがみついている、それも。切なげに身じろぎするのも。もう、どうしようもなく愛しい。

「好きだから、ミンク。ずっとそばにいたい」

ミンクは黙って頷いた。

翌朝、シンカに起こされて、シキは目がさめた。

港町は朝が早い。だからといって、俺たちまで早起きしなくたってよ。まだ暗いじゃないか。

ベッドに横たわったまま愚痴る。

「帝国軍が動く前に移動したほうがいいだろう？」

シンカはすっかり、出かける準備が済んだ様子で、剣を背負ってい

る。やわらかい金色の

後ろ髪が剣の鞘にはさまれている。気になるのか、はずそうとするがうまくいかないらしい。

こいこい。体を起こして手招きするシキ。

近づいて、取ってとばかりに背を向けるシンカ。

不意についてシキがシンカの首に左腕をかけてベッドに倒す。

「いてっ！」

「お前、昨日どうだったんだよ！明け方まで戻らなかったの知ってるんだぞ！」

「起きてたの」

「白状しろ」

もがくシンカを押さえつけるシキの、なんと楽しそうなことか！

「離せつて。うらやましいんだろ」

「うまくいったのか？」

「俺を馬鹿にしてんのか？」

そこで、シンカがにっと笑う。余裕の笑みだ。

「なんだ、つまらん。いいよなあ、若いつてさあ」

しみじみ言いながら、やっとシンカを離す。シンカは余計に絡んだ髪を撫で付けて、息を整える。

「自分だつて酒場でしたい放題じゃないか」

「人聞き悪いな、お前！」

笑いながらまた組み付こうとするシキの手をさつとかわして、シンカは飛びのく。

「感謝しろよ。きつかけは俺なんだぞ」

「面白がつてたくせに、何が感謝だよ」

不ぞろいな兄弟みたいな二人は、ミンクを迎えに行く。

ミンクは銀色の髪を綺麗に結って、オレンジ色の刺繍模様の入った

絹のストールをちょこんと肩にかけている。シキにはミンクもまた、大人っぽくなったように見えた。

6・知らなかった世界4

アストロードから、二時間。シンカは、レクトたちを案内したところより、さらに回り込んだ城壁の奥の割れ目から、町に入った。

ここなら、すぐに林に紛れることができるはずだ。

三人は、荒れ果てた町を見渡して、改めて、破壊の力の大きさを思い知る。直撃を受けたらしい大人の背丈ほどもある深い穴が、あちこちに開いている。

ユンイラの畑の跡は、瓦礫が片付けられていて、脇に帝国軍の野営地だろう、テントの群れが見える。

まだ、起きていないのか人影は見えない。

「ひどいな。」

シキは、二人の肩に手を置いた。

改めて、気持ち引き締まる。残骸が一面広がり、何があつたところなのか、まったく分からない。

よく、二人が無事だったものだ。この惨状を、聖帝キナリスは見たのだろうか？

いや、知らないのだろうか。

見たのであれば、この破壊をシンカがやったなどと、考えられるはずがなかった。

この国のどんな兵器の力で持つてしても、不可能な攻撃。火薬を使つても、石壁やレンガを溶かすことはできない。

たくさんの、人であつたものが、この瓦礫のあちこちにある。ひどい異臭がそれを想像させる。

戦場で、いろいろなものを見てきたが、こんなに吐き気を感じるのは初めてだった。

「母さんのとこ、ちょっと行っていいかな。」

シンカの言葉に、二人は黙ってうなずく。

この、不毛な廃墟で、どんな手がかりが得られるのか、何もないような気がした。絶望感が漂う。
自然と、三人とも無言になる。

瓦礫をよけて歩きながら、三本の木が立った場所、もともと、シンカの家だったところに三人が立った。

三本の木の一つに、母さんの気に入っていた首飾りをつけておいた。
・・・はずだった。

「あれ、ない。ここに、母さんの首飾りをつけておいたんだ。」
シンカが座り込む。

シキは眉間にしわを寄せる。

「盗まれちゃったのかな？」

ミンクも、シンカの横にしゃがむ。

「ごめん、母さん。一緒に入れてあげればよかった。」

シンカの声が少し震えている。ミンクがくすんと鼻をすすった。

背後に、人の気配を感じて、シキが振り返る。同時に、腰の剣に手が行っている。

「おい。」

シキの声に、墓を見つめていた二人も立ち上がって振り返る。

背の高い、金髪の、四十歳くらいの男。うわさの、あの男だとすぐわかる。

想像していたより細い。あまり日にも焼けていない。

「君たちはなんだ。」

そいつが怪訝そうに三人を見つめる。男の手には、小さな白い花束がある。

「そっちこそ、誰だ！」

シキが睨んで、剣を抜く。朝日が、男たちを横から照らす。

「何のつもりだ。」

男は、腰に手をやる。腰に、何かかかっている。剣ではない。シン

力には、見覚えがあつた。

6・知らなかった世界5

「あんだ、レクトの仲間なのか？」

シンカも剣を抜いた。ミンクを後ろにかばう。

「その、変な武器、あの日レクトの仲間が使っていた。」

シキも男の手元を見つめる。

男は落ち着き払った様子で、シンカを見つめた。

「レクト・シンドラなら、知っている。」

同時に、シンカは飛びかかった。男との距離は約八歩。

シキも、続く。

ミンクは後ろの瓦礫に隠れる。

男は、飛びのきながら、あの武器で、シンカを撃った。
一瞬だった。

黄色い細い光が、シンカの肩を撃ち抜いた。

シンカは撃たれた右肩をかばうように転がった。動かない。

「シンカ！」

駆け寄るミンク。

シキは、シンカを気にしながらも、二人の前の盾となる。

「シンカ？」

男がそうつぶやいて、武器を下ろした。

「きさま！」

シキが飛び掛る。男は武器を腰に戻した。

「待ってくれ！」

相手が両手をあげて、繊維喪失を表現する。

振りかざした短剣を、止めた。

軍人のシキには、丸腰の相手を斬ることができない。

「その子供、シンカというのか！」

剣を男の喉に突きつけても、抵抗する気配がないので、シキも剣を

納めた。

「シンカ！」

ミンクがシンカの体を揺らす。

シキも、剣を納め、シンカの傍らにひざをついた。シキは、落ち着いている。

気を失っているシンカを、男も見守る。

「シンカ、しっかりして！」

ミンクの泣き声で、シンカはうつすら目を開けた。

「大丈夫だよ。ちよつと、痛いけど・・治るよ。」

シキが、シンカの背の鞆を外してやる。少年は小さく息をついた。

「ミンク、シンカはちよつと特殊なんだ。大丈夫だよ。」

血が止まっている。シンカが、体を起こそうとするのをシキが支える。

「多分、傷はもうふさがったよ。」

シキが、そつとシンカの手をどけて、破れた服をめくってみる。

「ああ、傷はない。」

「本当？よかった。」

素直に、うれしそうにしているミンクの表情に、シンカは弱々しく微笑んだ。

「痛みが消えるのには時間がかかるけど、つつ！・・・傷だけは早いんだ。」

ミンク、ごめん。だまっついて。」

「ううん。撃たれたときはすごい怖かった。今は、うれしいすごいな。」

涙を拭きながら微笑むミンク。シンカはその額に手を当てて慰める。ミンクはたまに変な言

葉使うな。

「君は、ロスタネスの子供なのか？」

三人はすっかり忘れていた男を見上げる。

「そつだよ。母さんを知っているの？」

残る痛みに、表情を硬くしながら、シンカが問い掛けた。男は、近づいて、シンカの顔をよく見ようとする。

シキとミンクがシンカをかばう。

「いや、すまない。君たちがいきなり飛び掛ってくるから。でも、大事に至らなくてよかった。

私はダン・デリストという。科学者だ。」
かがくしゃ？

シキとミンクはは顔を見合わせる。聴いたことのない言葉だ。
シンカが二人を見る。

「知らないの？母さんが、教えてくれた。なんか、いろいろ勉強する人だつて。本物は初めて見たけど。」

「そつだよ。この地下に研究するところがあるんだ。」

シキが、不意に立ち上がった。
野営地のほうを見つめる。

「そろそろ、やばいぞ。」

兵が起きだしたらしい。

「ここでは危険だ、研究所にこないか？そこなら安全だ。」

シンカが、二人を見る。

二人とも同時にうなずいた。行ってみよう。レクトにつながる手がありだ。

ダンに導かれ、三人はデイラの真ん中を流れるシン川の、橋があったあたりに来た。痛みの残るシンカは、肩で息をしている。

ミンクが心配そうに手を添えている。きっと、すぐく体力を消耗してしまふんだ。ミンクは思った。

傷が消えたからといって、治ったと判断するのは早い。体の中はまだ、傷と戦っているのかもしれない。

二人の男の後姿を見つめながら、ミンクは頬を膨らます。

もう、大人二人はぜんぜん気にしないんだから！

6・知らなかった世界6

シン川の水は、あまり多くない。白くにこった水が、緩やかに朝日を反射しながら流れている。

ダンは、腰につけた機械を操作した。

「ここから入る。」

川の真ん中から、筒状の大きな塊が突き出てきて、とまった思ったら岸に向かって大

人一人がとおるだけの幅の、黒いわたり板が延びてきた。

「うへ、なんかなあ。」

シキが嫌な顔をする。

「はじめてみるね、こういうの。」

ミンクがシンカにしがみつく。

シンカは黙ってうなずいた。緊張を隠せない。

レクトが、いるかもしれないのだ。

四人はそこを渡り、筒に開いた穴から、中に入った。

筒の中は、予想以上に広く、ダンの操作で四人が立っている床ごと、下に降りていく。

「怖い。」

しがみつくミンクの肩をシンカが抱いている。その様子を、ダンが見ている。

「なんだよ。ミンクが珍しいのかよ。」

睨むシンカを見て、男が笑った。

「いや、ロスタネスも同じだったろう？まあ、見るたびに、デイラの人々は美しいなと思うがね。」

ダンはシンカより少し黄色味のかった肌をしていて、短い金髪に、茶色い瞳。穏やかな

顔で、やさしそうでもあった。レクトとは正反対に思う。

床の下降がとまる。機械を操作しながらダンがシキに言った。

「私のような研究者が、もう、十五人ほどいる。後、ここを守っている兵士も数人いる。だ

が、君たちに危害を加えるようなことは私がさせない。安心してくれ。」

「あの、レクトは、いるの？」

シンカがたずねる。

「ん？いや、彼はもういない。以前は、そうか、かなり前になるのか。ここに来ていたこともあったがね。」

「そう。」

「あんた、レクトの仲間なのか？」

シキはまだ、腰の剣に手を添えていた。

「私は、レクトの仲間ではない。シンカの母親のロスタネスとは仲間だった。

大丈夫、ロスタネスの大切な子供を危険な目に合わせるわけはないだろう。」

「・・・分かった。」

シキはしぶしぶ、剣から手を放す。

部屋の壁の一部が不意に音もなく開いた。

シキはつい、剣に手が行く。くせなのだ。

扉の向こうには、白くて明るい光の中、通路が先に伸びていた。

この灯りはなんだろう。三人とも、初めて見る世界に圧倒されている。

「ここは、太陽帝国の研究所なんだ。」

ダンが、先頭を歩きながら説明する。

「分かるかな？君たちのいるこの惑星のほかにも、人が住んでいる星があるんだ。」

「わくせい？星？」

ミンクが問い返す。聞いたことがない。

シンカは、うなずいている。

「お前知ってるのかよ。」

シキがシンカに問う。そういえば、歴史にも詳しくかった。

「母さんが、話してくれた。俺、ミンクたちみたいに学校行けなかったから、何でも母さんが教えてくれたんだ。

この俺たちの惑星はリユードって言うんだ。惑星って言うのは、今、この同じ空気を共有しているすべての土地のことを言うんだって。だから、他の惑星って言うと、空のずっとずっと上の方、夜空に見えるあの星のことなんだって。」

「あれに、人がすんでいるのか！」

「全部じゃないけどね。昔のカンカラ王朝にあったような進んだ技術とかがあるんだってさ。」

ミンクは尊敬のまなざしをシンカに向ける。

ダンが、うれしそうに笑った。正確に言うと少し違うのだが。この文明レベルにあって、ここまで理解しているなら、上出来だろう。

「私の生まれた惑星リドラは、ここからずっと遠いところにあるんだよ。このリユード星に一番近い惑星セダまでの距離でも、人が一生歩きつづけてもたどり着かないくらい、遠いんだ。」

ダンが説明する。

「どうやってきたんだよ。」

シキが聞く。

「光分子エネルギーという力を使った宇宙船で来る。とても早いから、ここからセダまでなら4時間くらいで着くよ。」

「シンカが言つてた、水が分解するエネルギーっていつの？」

ミンクがたずねる。

「それは、もう少し違うものだよ。」

「すごいな。」

シンカは単純に感動している。

「その船に乗ってみたいな！」

「私、怖い」

「お前ら単純だな。」

シキがぼやく。

「ここだ。」

ダンが立ち止まり、三人も止まった。

通路はそこで行き止まりになっていて、ダンが機械を操作すると、壁ごと開いて、その先が見える。

女性が立っていた。

「ダン。久しぶりね！」

三十歳くらいの女性は、体にぴったりした鈍く光る服を着ていて、赤い髪が肩あたりでゆれている。綺麗な人だ。ダンと握手すると、ダンの頬に軽くキスした。

「いつ帰ってきたの？知らなかったわ。」

「二週間前にね。君はステーションに行っていたって聞いたから、すれ違いだったな。十七年ぶりか。ずいぶん色っぽくなったな。」

「ダンはすっかりおじさんになったわね。」

「ずいぶんだな。」

「ふふふ。会えてうれしいわ。」

首を傾げて笑うくせは、その女性の年齢にしては少し幼いしぐさだ。それがまた、魅力的でもあった。

そこでその女性は、三人の存在を思い出したらしい。

「ところで、このリユード人は？」

三人は顔を見合わせた。リユード人って呼ばれているのか。

「！・・・シンカ？」

女性がシンカに気付いた。

「俺のこと知っているの？」

ダンが、ウインクしながら紹介した。

「ああ、彼がシンカだ。ロスタネスの子。

横にいるのがミンク。デイラの生き残りだ。で、後ろの青年がシキ。見たところ、山岳民族だと思うんだ。」

「この人はだれ？」

ミンクが聞いた。

「ああ、ごめん。彼女はセイ・リン。この研究所を警護している太陽帝国の軍人なんだ。」

セイ・リンはシンカをじろじろと見ている。

ダン、セイ・リンと別れて、さらに奥へとシンカたちを案内した。鈍い鉄色の部屋が続く。白い不思議な灯りが天井の隅から足元を照らす。

「この先は大勢いるぞ」

そう言っ、ダン、扉を開いた。

そこは、白い壁、白い光、広い部屋だった。

大勢の大人が立っていたり、機械の横に座っていたりする。みな、白い上着を着ている。

ダンに気付いた一人が、三人を見て声をあげる。

「シンカ！」

「えっ？」

一斉に注目を浴びて、シンカはどきりとする。

6・知らなかった世界7

ミンクがつないでいた手に力を込めるのが分かる。ミンクも驚いている。

若い男性が、かけよってきて、シンカの肩に手を置いた。すごくうれしそうに。

「よかった。無事だったんだな。心配したよ。」

心配って、俺はあんたたちのこと知らないけど・・・シンカは思った。「ダン、よく見つけたな。」

「いや、ロスタネスの墓に来ていたんだ。」

シンカたちは、大勢の白い人たちに囲まれてどうしていいかわからず、ただ、一人一人を

呆然と見詰める。

握手してきたり、髪に触れたり、涙ぐんでいる女性もいる。

「あの、何なんだよ。」

シンカの声もうまく届かない。

「もうっ！ 私たちにも説明してよ！」

ミンクが怒った。

一瞬、シンとなり、ダンが笑った。

「ごめんごめん。みんなすまない、奥の部屋を借りるよ。」

にこやかな白衣の研究者たちに見送られながら、四人は奥へと進む。広い部屋の隣に、小さい部屋があった。

そこには、革張りの大きな椅子のようなものと、ガラスのテーブル、壁に絵のようなものもかかっていて、くつろげるようになっていた。向かい合わせの大きな椅子に三人を座らせ、ダンは壁にある棚から、飲み物らしきものを取り出してきた。

氷の入った薄いガラスでできたコップに、淡い黄色の飲み物が入っている。

お腹のすいた三人は、すぐに飲んでしまった。おいしいというのかよく分からない味だ。

「お腹すいているのか。すまない、気付かなかったな。後で、何か作らせるよ。まずは、説明しないとね。」

ダンは、シンカの正面の位置に座った。

「まず、なぜ私たちがここにいて、何を研究しているかから説明するよ。」

ダンは話し始めた。

この、宇宙には、太陽帝国って言う大きな国がある。そこは、たくさん惑星を持っていて、地球人が住んでいる。

太陽帝国は、新しい惑星を見つけては、そこに移住している。

太陽帝国に属さない惑星もある。そのほとんどが、地球人が住めない環境の惑星だ。

惑星はそれぞれ環境が違う。氷ばかりだったり、熱くて水もなかったり。地面がない星もある。

地球人以外のその惑星で生まれ育った人たちも住んでいたりする。

ダンのリドラ人は惑星リドラの原住民なのだ。

惑星リドラは、このリユードに大気成分がよく似ていた。地球人には住めないところだったのだ。

しかし、宇宙図の重要な拠点になりうるリドラ星を手に入れたかった太陽帝国は、その科学力で惑星リドラを変えてしまおうとした。

それは、見方を変えれば、そこに住んでいたリドラ人が生きていけない環境になるということだった。

そして、さらに悪いことに地球人は、失敗した。

一つの惑星の環境を、根本から変えるなどということは不可能なのだ。

その惑星が今の環境になるには、何億年という時をかけて、なるべくしてなったのだ。

鉱物の組成、惑星を囲むガスの成分、太陽からの距離、公転軸の傾きや距離、軌道、すべてが複合した結果が、惑星の環境になっている。それを、表面上変えようとしてもバランスが崩れるだけだ。惑星リドラは、誰も住めない環境になってしまった。死の星に。リドラ人は星を追われ、他の惑星への移住を余儀なくされた。リドラ人が生活できる環境のコロニーが出来上がり、地球基準の共有区域で生活するための特殊マスクが完成するまでに、数十億いた彼らは、数千人にまで減少してしまった。

その事實は、すべての惑星政府から非難された。有人の惑星では、その原住民で組織する政府がある。

太陽帝国の支配を快く思わない惑星も多い。そこで、強大な太陽帝国の横暴を防ぐために、「惑星保護同盟」という、団体ができた。

そこには、もちろん太陽帝国の皇帝も参加しているが、対等の立場で他の惑星の代表者が参加している。

リドラの事件から、惑星保護同盟は、新しい惑星を発見した場合、まず五十年間の調査をすること。

地球人が移住できる惑星でも、もともとそこに住んでいる人々の文化や歴史を壊さないようにすること、という約束を決めた。

リユードは最近発見されて、今調査の段階だという。

調査団は、大気に適応できるリドラ人で構成されていて、有人大陸に五チーム、無人大陸に二チーム派遣されていた。

「ここまででは、いいかな？」

・・・分かったような分からないような。

しかし、そのまま受け止めるしかない。

三人は先を促した。

「ここでの研究はもう三十年になる。」

「このリユードで、私たちはユニイラを発見した。」

三人の表情がこわばる。ユニイラは、ほかの惑星の人にも興味があ

たれるようなものなのか。

「ユニイラは、人の、免疫に何かしらの効果がある。」

「免疫？」

シンカが聞く。

「そう、免疫というのは、人が自分の体に入ってきた毒素に対して、対抗手段をもつ機能のことだ。

一度入ってきた毒素を、覚えていて、次にまた入ってきたときに、攻撃をする。」

「ふうん。一度蛇にかまれたら次にかまれても平気ってことか？」
シキが想像している。

「平気ではないが、攻撃するすべを持っているということになるんだ。しかし、その機能は両刃の刃だね。その生き物が環境に順応するために免疫が邪魔になることもある。」

「順応とは、免疫があることとは違っていてね、我々リドラ人が、ここリユードで平気で息ができることと同じようなことだ。

免疫は、さっきの例でいうと蛇の毒を有害とみなすことなんだ。

このリユードの大気を、有害とみなして武装してしまう体は、常に戦っていることになる。だから、君たち山岳民族は長く生きることができないでいる。」

「うーん。」

シキがうなる。

「免疫は、生き物には必要なことなので、なくすわけにもいかない。ユニイラは、免疫という概念をなくしてしまうんだよ。」

「？順応できるようになる？」

シンカが、言ってみる。

「そうだ。まだ、研究中なのでその仕組みまではわかっていない。ただ、ユニイラを使えば、地球人だろうと、ぜんぜん環境の違う惑星の人だろうと、ここリユードで生きていけるようになることは、分かっているんだ。」

「そうか。それは、この星の歴史で実証されているんだ。」
シンカが思いついたように話す。

「環境が変わったここで、人が生きていくためにユニイラが必要だったように、その地球人がここで生きていくためにもユニイラが使えるってわけか。」

「そのとおり。基本的に、リユード人と地球人は似ている。」
ダンがにっこりと笑う。

「ただ、ユニイラ自体は、今この星と、この星の上空にあるステーションでしか栽培されていない。
なかなか、デリケートな植物だね。まだ、実用化にはいたらないんだ。」

「実用化したら、地球人とやらが、この国に大勢来るのか？そんな物騒な武器をもって？」

シキがムツとした表情で言った。

「そう、なるかもね。」

ダンが穏やかに言う。

「そんなの、困るよ。」

シンカの言葉に、ミンクが答える。

「でも、惑星保護同盟との約束があるから。ねえ、大丈夫よね？」

ダンミンクを見つめた。

「つい一ヶ月前に、太陽帝国は同盟を脱退したんだ。」

「えー！」

「なんと言っても太陽帝国は強大だからね。君たちが心配するように、同盟に参加している惑星の人々も心配しているんだ。」

ユニイラを使って太陽帝国は、宇宙のすべてを地球人だらけにするつもりではないかとね。だから、同盟は、ユニイラの研究には反対している。」

ダンが続けた。

「レクトは、今、ミストレイアという会社に所属しているんだ。そのミストレイアも、帝国に対抗する組織だな。」

「会社？」

「ああ、同盟だけじゃなくて、いろいろな惑星政府の依頼を受けて活動しているんだ。まあ、傭兵のような仕事だな。」

シンカは拳をぎゅっと握り締める。

ダンは、じっとシンカを見つめた。穏やかな笑みは、不思議と彼らを安心させる。

「シンカ。そういえば、何でレクトのことを知っているんだい？レクトの仲間とか何とかって。」

レクトとは昔、仲間だった。彼は、以前は帝国軍の軍人でね。この惑星を含む広い地域を管轄していた。」

「だって、あいつがデイラを滅ぼしたんだ。」

シンカがうつむいたまま言った。

「君は、見たのか？」

ダンは顔色を変えて、シンカの肩を強くゆすった。

さっきの傷が痛むのか、シンカが表情をゆがめても気にしない。

「見たのか？証拠があるのか？」

さらに強くゆする。その表情は、嬉しそうでもあった。

「痛い、放せよ！」

シンカが訴えるのと同時に、シキが、ダンを引き離した。

「あんだ、止めろよ、痛がつてるだろ！」

「あ。ああ、すまない。」

あれほど、穏やかな印象だったダンが、違う人間のように思えた。

「教えてくれないか。レクトがデイラの破壊に関わったという、確たる証拠があれば、あいつを犯罪者として指名手配できる。捕まえられるんだ。」

「捕まえる？」

「ああ、そうだ。君もロスタネスを殺されただろう？捕まえて、罪を償わせよう！な。教えてくれ。」

シンカは、うつむいた。

「どうした。デイラを破壊したんだろ？あいつが。」

「・・・あんた、やけに嬉しそうだな。昔仲間だったんじゃないのか？」

シキが、シンカの迷いをかばうように、口を挟んだ。

ミンクがそっと、シンカの手を握る。

「レクトはね。冷酷な男なんだ。力もあるし、才能もある。太陽帝国軍にいた頃は、いや今もそうだが、ちょっとした有名人だな。若くして大佐にまでなつて。軍の情報部の将校だったこともある。」

ダンは、室内を腕を組んだまま行ったり来たりしだした。

「あいつは、まあ、大げさだが、宇宙最強の軍神とまで言われたことがあつてね。奴が軍を辞めたことは帝国軍にとって大きな損失だった。」

しかも、なぜか、帝国軍に逆らうかのように、民間の軍事会社を立ち上げたんだ。」

「帝国の人間からすれば、裏切り者だ。皇帝陛下もレクトのことは気にしている。きつかけさえあれば、捕らえてしまいたいわけだ。今後の憂いを無くすためにもね。」

不意に立ち止まると、シンカの顔を覗き込んだ。

「な、教えてくれ。見たのか？」

シンカはぎゅっと目をつぶる。

「なあ、ちょっと待てよ。考えさせてやれよ。」

シキが、ダンの肩に手を置いた。

ダンは、ピクリと眉をひそめた。

「まあ、いいだろう。そろそろ、部屋も用意できているだろうからね。ゆっくり休んで、その後でもいい。」

シキの手を振り払うように、肩を引くと、ダンは身を翻して、部屋

を出て行った。

まだうつむいているシンカに、シキが声をかけた。

「腹減ったな。」

クス。

シンカが笑った。

「シキったら。」

ミンクも笑う。

やっとシンカが顔を上げた。

「うん。お腹すいてたら、ちゃんと考えられないもんな。」

「ああ、そうさ。」

にやりと笑うシキ。二人は拳を合わせる。

7・シンカ

そこに、彼らの会話が聞こえたかのように、食べ物らしきものを乗せたワゴンに従えて、ダンが入ってきた。

ワゴンは、どういう仕組みなのか、ダンが進む方向にゆっくりついてくる。

三人のいるテーブルまで来ると、ワゴンはテーブルの高さにせり上がって、テーブルにぴったりと一体化した。

目を丸くして、その様子を見ている三人に、ダンは笑う。

最初の印象の、穏やかな研究者だ。

「お口に合うといいが。ロスタネスは気に入ってくれていた。」

すでにスープリしきものを口に入れようとしていたシンカが、熱さに舌を引っ込めた。

スプーンを掲げたまま、ダンを見つめた。

「ダンはお母さんと仲間って言うていたけど、こういうことなんだ？」

「ああ、その話もしてあげないとね。」

穏やかに笑うと、ダンはポケットから、あの首飾りを差し出した。

「！それ。」

「君が、ロスタネスの墓にかけてくれたんだろう？これは、私が彼女にプレゼントしたものだ。」

「！」

「ロスタネスはね、デイラで一人暮らししていた。偶然、研究所のことを知られてしまったね。」

でも、彼女は聡明だったから、新しい世界に前向きな興味をもってくれた。私たちにとっても、ユニラの情報を得るためにとっても貴重な存在となった。

当時十八歳だった彼女は、私や仲間の研究員から、いろいろな知識

を得て、二十歳の頃には立派な研究員になっていた。」

「母さんが・・・」

「彼女はね、デイラの人々を救いたかったんだ。私たちとユニイラを研究すれば、デイラの人たちを救えるのではないかと考えていた。彼女には、時間がなかった。だって、そうだろう？」

デイラの人たちは四十歳まで生きられるかどうか。彼女は人生の半分を過ぎていた。」

「そこで、君に、すべてを託したんだ。」

シンカは見つめるシキとミンクとに視線を合わせた。

「・・・俺に、いろいろ教えたのはそのため？研究者になれてこと？」

「うん、まあ、・・・そういうことかな。後継者として、必要な知識を、教えてもらっていたんだ。」

「お前、そんなに覚えてるのか？」

シキがニヤニヤしてからかう。

シンカは、野菜のようなものをかじりながら、顔をしかめた。

「変な言葉なら覚えてるよ。あと、なんだっけ、惑星の名前とか、なんか、そういうの。」

「なんだそれ。」

「ああ、共通語を覚えてもらったんだろう。この星の言葉とは違うからね。」

シンカがパンを口に含みながら、もごもごと変な言葉を話す。半分ごまかされているような。

「お前、本当かそれ。あやしいぜ。」

シキがあきれて笑う。

「いや、正しいと思うよ。」

ダンが真顔でそういうので、シキはつまらなそうに鶏肉らしき料理に手を伸ばす。

「そっか。だから、みんなシンカのこと知ってたのね。」

ミンクが言った。

「私は、研究の都合で、ロスタネスが二十歳になった頃に、他の惑星に行くことになった。」

そのとき、お別れのしるしにその首飾りをプレゼントしたんだ。」

「ふうん。」

「デリラが攻撃を受けたとき、我々も、ここを守るのが精一杯だった。ロスタネスを、助けに行く余裕がなくてね。残念なことだ。」
シンカの口がとまった。

「まあ、ゆっくりしていつてくれ。歓迎するよ。好きなだけいるといい。仲間の家族なんだから。」

・ 家族。シンカは久しぶりに聞いた気がする。家族か。

ダンが部屋を出て行ってから、三人は食事に夢中になった。

味付けや形は変わっているが、基本的なことは同じらしい。肉は肉だし、野菜もそれらしい。

なにより、おいしかった。

「驚きだよな。惑星だの太陽帝国だのはまあ、そういうもんかも知れねえが、シンカのお母

さんが研究員だなんてよ。」

シキの言葉にミンクがうなずく。

「なんだか、一度にたくさん、いろんなこと聞いたから、実感わかないね。」

「うん。そうだね。」

シンカもうなずく。

そこで、ふと、シンカはフォークを置いた。

顔を上げて、二人を見つめる。

「なんだ？食べないのか？」

返事が来る前にシキは、シンカの目の前の肉を焼いたものを一つ取り上げる。

「あ、もう。あのさ、二人とも、さ。」

「なんだ？」

「なあに？」

シンカは二人の顔をかわるがわる見つめて、話し出した。

「俺の、ことでさ、二人を巻き込んだる気がしていて。もし、その、

」

バシンと大きな音を立てて、シキが少年の頭を叩いた。

「いってえ！」

「馬鹿か、お前。前にも言っただろ！とことんついてくつてな。」

「そうだよ、シンカ。シンカが私のこと守ってくれるって言ったんだから。最後まで責任とってね。」

そう言つて笑うミンクを、シキがからかう。

「お、それは愛の告白か？」

「もう！おじさんなんだから！じゃあ、シキのだってそうじゃない！」

「俺がシンカに愛の告白してどうすんだよ。」

「・・・ありがと。うれしいよ。」

につこり笑うシンカのタイミングに、二人は吹き出した。

「お前今、受け入れたぜ、俺の告白！」

「馬鹿、なに言つてんだよ！」

顔を赤くして、言い争いに少年も加わった。

7・シンカ2

研究所の中を自由に歩いていいといわれ、食後、散歩を始めた。見たことないものばかりで、シンカはわくわくする。

シキは途中で面倒くさくなって、部屋で寝るといいだした。

「また、お酒？」

ミンクがあきれる。

「ミンク、口うるさい奥さんになるとシンカに嫌われるぞ。」

「奥さんじゃないもん！」

顔を赤くしながら怒る。

「シキ、本当に体調には気をつけろよ。もう年なんだからさ。」

シンカは知っている。あの、山岳の村に入る前、二人で話した時、シキの瞳に、少しにこりが出てきているのをみた。

だんだん、視力が落ちてくるはずだ。喉にも痛みを感じていのではないか。

体調が悪いから、部屋に帰るって言っているのか。

「お前！人を年寄扱いするなよな！」

シキは笑いながら、シンカの首を腕で締め付けてふざける。

この、楽しい時間が続くといい。ミンクはつくづく思っていた。ミンクは十七歳。シキは三十五歳。

平均寿命で言うとミンクに残された時間は後二十三年、シキにいたっては十五年しかないのだ。

シンカは、特別だから分らないけれど。・・・だから、この楽しい時間が続けばいい。

ロスタスもきつと、そう思ったんだな。

短い人生を嘆くより、みんなが哀しい思いをしなくていいように、精一杯自分にできることをして生きようとしたんだ。

だから、あんなにいつもちゃんとしていて、かつこよくて綺麗で、素敵だったんだ。

シンカは知らないけれど、私の目標は、いつも彼女だった。

ロスタネス、私がシンカを守る。あなたに代わって、精一杯。

そこで、ふと、アストロードでのシンカのぬくもりを思い出し、頬を赤くした。

「ミンク、熱でもあるのか？」

シンカに声をかけられ我に返る。

「ううん。大丈夫。」

シンカに額に手を当てられ、ますます赤くなる。

いつのまにか、シキは部屋に戻ったらしい。廊下には二人しかない。

「行こうぜ。」

「うん。」

シンカの後を追いつながら少女が気付いた。

「ねえ、シンカ、背が伸びてる！」

「そうか、気付かなかった。」

自分とミンクとの差を測って確認しようとするシンカに、ミンクが口を尖らせる。

「私だつて伸びてるもん！」

「え？それは気付かなかった。」

笑うシンカ。

二人はふざけあいながら、楽しい散歩を続けた。

「いや、本当に、驚いたよ。ロスタネスの報告で、知ってはいたけ

れど、まさかあんなに早く傷が治るとは。

レーザー銃で撃ち抜かれた傷が、ものの二分もたたずにふさがるんだ。」

ダンが、他の研究者に話している。

「すごいですね。私も見てみたかったです。」

若い、あの、一番最初にシンカに駆け寄った研究者が興奮気味に聞き入っている。

他の研究員は、それぞれの席から、自分のデスクでコンピューターに向かいながら耳を傾けている。

「君は最近、赴任してきたんだろう？この研究は、確かに過ちから始まったが、だからこそ宇宙で唯一の研究だ。参加できることを誇りに思いなさい。」

ダンが微笑む。

「あ、はい。所長は、これが原因で辺境へ行かれたんですね。大変でしたね。」

「まあ、帝国が同盟を脱退した今、この研究は急務だ。倫理がどうの人権がどうのという議論はなくなったのだろうな。」

「相変わらずね、ダン。あなたの子でしょ？よくそんな風に話せるわね。」

セイ・リンだった。研究室の入り口を背にして立っている。

「俺の子ではないさ。誰の受精卵だったとしても関係ない。単なる被検体だ。たくさんの中の一つに過ぎない。」

ただ、それが成功して、あそこまで育った。ラッキーなことに、皇帝陛下の期待通りにね。それだけのことだ。」

「冷たいこと。」

セイ・リンが腕組みをして眉間にしわを寄せる。そんな表情まで美しい。

セイ・リンは女性にしては大柄であるが、バランスのいい美しい体型をしている。

ふくよかな胸元に、つい目が行く。

「君の子なら別だったかもしれないよ。」

「そうかしら？期待はしてないわよ。」

セイ・リンは赤い髪を翻して、研究室を去る。

警備兵の集まる制御室へと歩きながら、セイ・リンは考えていた。

ロスタネスは、ダンのようにには思っていないかった。彼女が倫理上の問題を超えてしまったのも、ダンが手助けしたからだ。

ダンへの想いがあったからだ。ダンは、善良な表情の向こうで残酷な笑みを浮かべる。

実際、ロスタネスの研究を影ながら補助してきた研究者たちにとっては、シンカは家族同然になっていた。

シンカはまっすぐ、素直に、賢く育っていく。誕生日には、研究者も警備兵も集まって、本人抜きで密かに祝ったものだ。

あの若い研究者は、最近派遣されてきたから分かっていない。

ダンにしても、研究が表ざたになって、研究所を追われてしまったから、あの子の成長を見守ったわけではない。

今になって、戻ってくるなんて。

「ふう」

一つ、大きなため息をつく。ロスタネスが、幼いシンカが熱を出して、慌ててここに運び込んだことを覚えている。

デイラの人々に知られてしまうから、できるだけ、研究所に入れないようにとの指示だったが、動揺した彼女は聞き入れなかった。

研究員みんなも、シンカが三日後に意識を取り戻したときは手をたたいて喜んだものだ。

「本人が気付いたら、どうなるのかしらね。ねえ、ロスタネス、本当にこれでよかったの？」

セイ・リンの瞳に涙が光る。

そのとき、不意に研究所に警報が鳴り響いた。
「何があったの！」

セイ・リンは制御室に向かって走り出す。

7・シンカ3

シンカたちは、あの研究室の横の部屋で宇宙の図鑑を見せてもらっていた。新しい知らなかった世界。

空気のない宇宙空間。最大十万光年を四時間で移動できる最新の宇宙船。

興味は尽きない。

そのとき警報が鳴る。

「なんだ？」

研究室に行くと、研究者たちも慌てている。

「制御室、何があった？」

ダンが、制御室に報告を求める。

「シン川の水位が下がった模様です。上流で、ファシオンの軍が、橋の建設工事を始めたのではないかと」

「影響は？」

「先日の攻撃でカモフラージュ装置が故障していますので、水がなくなる」と丸見えですよ！」

「なんで直しておかなかった！」

「人手不足ですよ！警護班は五人しかいないんです！とにかく、エントランスからと、排気口からの侵入に備えて、人員を配置します。システム修復に数人、よこしてください。」

「しょうがないな。分かった。」

通信をきると、ダンは穏やかな表情とは少し違った雰囲気で、三人を見る。

「シンカ、危険だから、君たちは部屋に戻っていてくれないか？」

「あの、お手伝いします。」

「侵入してきた聖帝軍をやつつけるくらい、慣れたもんだからな。」
シキが腕をぐつとまげて力こぶを作ってみせる。

ダンは少し考えて、言った。

「では、シンカはセイ・リンとともに行動してくれ。シキとミンクは制御室の警備兵を手伝ってくれ。」

「分かった。」

シンカはそう言って、シキと拳を合わせる。

「後でな。」

「ミンクを頼むよ。」

にっこり笑って、三人は出て行く。

ダンは、シンカたちがいなくなるのを確認して、研究者に命令を下す。

「データをすべて本国へ送れ。リスクマニュアルのレベル4で行くぞ。場合によってはここを放棄する。」

「了解しました。」

研究者たちは、それぞれの場所に散り、作業を始める。

ダンは、腰につけた通信機で、セイ・リンを呼び出した。

「セイ・リン。シンカを地球へ送る。警備のふりをして、至急エントランスへ連れて行くんだ。」

あの二人は引き離せ。」

「・・・了解しました。」

シンカたちが入ってきたあの通路の途中に、緊急脱出用の小型艇がある。

その船でステーションまで行けば、後はなんとでもなるのだ。セイ・リンは、苛立っていた。

ダンは、本当に冷酷だ。ロスタネスの気持ちを知っていながら利用していた。そんなダンに気付かず、当時はセイ・リンも惹かれていた。セイ・リンは、ロスタネスをライバルとして意識していた。

結局、シンカの誕生で、私はあきらめたのだけれど。ほろ苦い記憶。

「ダン、なんだって？」

セイ・リンの後を追って走りながら、シンカは問う。

「エントランス、あなたたちが入ってきたあの入り口を警護するの。一番侵入しやすいから！」

うそを言いながら、苛立ちを感じる。

シンカたちが初めてセイ・リンと出会った扉の外に出ると、赤毛の女兵士は立ち止まった。

「はあ。すごい足、速いね。さすが軍人さんだ。」

「あなたの鍛え方が足りないのよ。あ、これ、持っているようにってダンが。」

「え、何？」

受け取るうとして手を差し出す。

同時だった。セイ・リンが何か筒状の銀色のものをシンカの手のひらに押し当てた。

ちくりとした。

「何・・・」

「悪く思わないで。あなたのことは嫌いじゃないんだけど。仕事だから。」

ウインクを一つして、セイ・リンは小型艇の準備をはじめ。

シンカは、視界がぐらつくのを感じる。足の感覚がない。

向こうで、セイ・リンが通信機で誰かと話をしている。

壁にもたれかかったまま、シンカはずるずると座り込んだ。

気分が悪い。目が回る。

何だよこれ・・・シキ、ミンク。

二人は大丈夫だろうか。

視界が暗い。目を開けているのかどうかも分からない。

耳鳴りがひどい。

そのまま、どれくらい時間がたったのだろう。手足の感覚もない。ぐいと肩を起こされ、相手がダンだと気付いた。

「・・・」

ダンと呼んだつもりが、言葉にはなっていない。

「セイ・リン、準備はどうだ？」

ぼやけた視界の端で、赤い何かが動いている。セイ・リンの髪かな。なんだか暗い。

「ポッドは準備できたわ。」

不意に、ぐらりと通路全体がゆれた。

「しまった、もう来たか！」

爆発音。足音と、火薬の匂い。

（聖帝軍かな？驚いただろうな、こんなところにこんなものがあるなんて、さ。・・・）

シンカはぼんやりと考えていた。

「きゃあ！ダン！」

セイ・リンの悲鳴でシンカの心臓がドクリと脈打った。

はあ、一つ大きな息をついて、シンカは目を開けた。目の前に、腕がある。シンカはダンの

体に半分埋もれている。ねっとりと、生暖かいものが肩を伝って落ちる。血の匂い。

ダンの体を何とかずらす。顔だけ起こすと、背中に矢が見える。

聖帝軍の矢が、ダンの背中に刺さっている。

「セ・・リン。」

シンカは、まだうまく言葉が出ない。

セイ・リンがああレーザー銃で、応戦している。シンカは、壁に手をつきながら立ち上がる。

背中 of 剣に手を伸ばす。

「・・・う。」

ダンの声。大丈夫、まだ生きている。

シンカは、よろめく足で、聖帝軍に切りつける。

セイ・リンも援護する。

必死だった。

何とか、最後の一人を片付けると、肩で息をして座り込む。

こんなに、聖帝軍ごときに必死にならなきゃいけないなんて・・・シンカはセイ・リンにぶつくさ

言う。

「いつもなら、簡単なのに・・・バカヤロ。」

「悪かったわね。」

こちらもあり余裕はないようだ。ダンのそばにかがんで、傷を見ている。

再び壁に寄りかかって座り込んだシンカは、ぼやける目をこすつて、たずねた。

「どう？」

セイ・リンは何も答えず、ダンの体に突っ伏した。
死んでしまった？

「ダン！ねえ、いいの！シンカはどうするのよ！あなた、何も話さずに死んでしまうつもり？」

7・シンカ4

シンカは、這って二人のところに行く。

ダンは、胸を矢で射抜かれていた。助からない。シンカは直感した。

「・・・陛下に、届けるんだ。そのために・・・セイ。」

「あなたがいなくてシンカはどうするのよ！あなたの子なのよ！」

「！」

驚いてセイ・リンの顔を見、そしてダンを見つめるシンカ。

「違うだろ。研究所皆の、子だ・・・」

ダンの呼吸が途絶えた。

蒼白な顔から急速に生氣が抜けていく。

「ダン！」

セイ・リンが泣いてすがった。

シンカはその姿をただ見ているしかなかった。ダンがお父さん？じ

ゃあ、レクトは？

まだ、先ほどの薬が残っている。頭がぐらぐらしている。

うまく、考えがまとまらない。

ダンの腰の通信機が、ピピとなった。

セイ・リンが涙を拭いて、応答する。

「所長は？」主任研究員だ。

「今、息を引き取ったわ。聖帝軍は一応抑えたけど、またすぐ来るわよ。」

「所長がレベル4を発令されました。データ転送が終わったので、すべてをダウンします。」

我々は、脱出艇でステーションに向かいます。」

「了解。私もシンカを連れて行くつもり。爆破は何分後？」

「爆破！」

ダンを見つめていたシンカが、驚いて顔を上げた。

「五分後です！急いでください。」

「了解！ステーションで落ち合いましよう！」

通信機を放したセイ・リンに、シンカが詰め寄る。

「なんで、あんな事したんだ！俺を連れて行ってくて、どういっつもりだよ！爆破って、シキたちはどうなるんだ！」

「ここは、ファシオン帝国に知られてしまったの。ダンから聞かなかった？この調査は見つ

かっではいけないの。だから、すべてを破壊して、何も残らないようにするのよ。」

美しい赤毛の女は、レーザー銃をシンカの額に突きつけた。

「動かないでね。」

セイ・リンは通信機で部下を呼び出した。

「ラカント少尉、あなたたちはリユード人とともに排気口部のポツドで非難して。五分後に

爆破よ！私はシンカと行くわ。ステーションで会いましょう。」

一方的に話して通信を切ると、セイ・リンはシンカを見た。

「シキたちは、警護兵がいつしよに助けるわ。大丈夫よ。さ、このポツドに乗るのよ。」

「まだ、質問に答えていないぞ！」

セイ・リンは無言だ。

「ダンが黙っていたことを、あんたが教えてくれればいいんじゃないのか？」

あきらめたように、シンカを狙っていた銃を下ろした。

「分かったわ。でも、代わりに逃げないでね。」

「いいだろう。」

シンカは青く深い瞳を、逸らさずまっすぐ向けてくる。

「あなたの父親はダンよ。」

セイ・リンはさらっと言った。

「！」

「正確に言っと、ダンの精子と、ロスタネスの卵子で作った受精卵から産まれた。」

「じゅせいらん？」

「後、そうね、ユニラの遺伝子とか、いろいろと一緒に。」

「え？」

「私は研究者じゃないから、詳しくは分からないし、立場上は教えてもらえないんだけど、ロスタネスが私に言ったのよ。」

あなたは、ダンとロスタネスの子供。でもその受精卵に、ユニラの遺伝子を組み込んで、作られた、のよ。」

セイ・リンは言いにくいのか、言葉を選んだ。

「作られたって……」

「つまり、新しい人間。地球人でも、リドラ人でも、リユード人でもない。」

そして、その、植物のユニラが入っているから……正確に言っと、人間といっていいかどうか。あたらしい生き物なの。ああ、うまく説明できないわ。」

生き物？

人間じゃない……だから、すぐに傷が治ったり、ユニラがいらなかったり、……シンカは自分の手のひらを見つめていた。

血だって流れている。言葉も、姿だって人間だ。それなのに？

「ロスタネスは、デイラの人々を救いたかった。だから、そういう研究をしたの。」

でもね、それは、宇宙で禁止されている研究なのよ。だってそうでしょ？人間を作り出せてしまったら、子供を産む必要がなくなってしまう。」

死んだらまた作ればいい、なんてことになってしまいうから。でも、ロスタネスはダンにそそのかされて、やってしまった。

失敗を繰り返しながら、成功してしまったの。ダン、あなたが生

まれてすぐ、罪に問われて、遠い星に転勤になった。

残された私たちは、あなたを処分することも考えたわ。けれど、それこそ人道に反する。皇帝陛下の命令で、そのまま、あなたを監視し、研究を続けてきた。」

シンカは瞬きもできず、赤毛の女性兵士を見つめていた。言葉もない。

「見て。これは、研究所の皆が持っているわ。ロスタネスが、毎年くれたのよ。」

セイ・リンがカード状のものを、壁面のスクリーンの横に挿し込んだ。スクリーンに映像が映る。

「俺・・・？」

幼い頃のシンカ。母親と笑っている。三歳、四歳。どれも、誕生日のお祝いのようなのだ。

毎年決まって、母さんがシンカの好きなケーキを焼いてくれた。十歳。十一歳。

次々と映っては消える自分の姿を、シンカは呆然と見つめていた。小刻みに体が震えている。

「ロスタネスはあなたを本当の子供のように可愛がったわ！私たちだって、こうやって、小さい頃からずっと見守ってきた！」

本当の、子供。

じゃなかったんだ、俺。

「・・・母さんは、・・・俺にデイラの希望を託した。じゃあ、あんたたちは、俺に何を期待したんだ？」

シンカの悲壮な表情が、セイ・リンの胸を締め付ける。

「・・・ユニイラよ。」

「ユニイラ？」

「あなたは、からだの中で、ユニイラの成分と同じものを作り出し

ているの。人体に害のない、新しい成分を。」

「・・・それ、を、地球人に使う？」

シンカは自分の胸を押さえた。この体にユニイラが入っている。うそだろ・・・？

「ええ。帝国は、あなたを必要としている。だから、連れて行くわ。」

「いやだ！」

シンカの頬に涙がつたう。

俺が、人じゃない？ユニイラ？作り出された、生き物。

7・シンカ5

「ショックなのは分かるわ。でも、あなたは必要とされているし、愛されていたわ。さあ、一緒に来て。」

シンカの手を引いて行こうとするセイの手を、シンカは振り払った。
「嫌だ、いやだ。」

「もう、しょうがない子ね。」

逃げようとするシンカの手には、再びあの銀色のものを押し当てた。
シンカは驚いて手を引き、振り向きざまに転ぶ。

「抵抗しないでよ。時間もないんだから。」

シンカが、頭を振って、立ち上がろうとする。

「え？効かない？」

もう一度、薬を注射しようとして、シンカの肩を押さえた時だった。
電流が流れたようなぴりりとした痛みを感じて手を離す。

「何？シンカ、あなた？」

そうか、免疫ができてしまったのかしら、セイ・リンは想像した。
ユンイラはそういうものらしいって聞いたことがある。
どうしよう、時間がない。

セイはふと、ダンが自慢げに研究員に話していたことを思い出した。
レーザー銃を構えた。

どこなら、意識を失わせて、大事に至らなくて、運びやすくなるだろう。

シンカは、床に座り込んだまま、どこか遠くを見て、つぶやくように話し出した。

「オレさ、二十歳になったら、旅に出て、世界中あちこち回って、父さんを探すつもりだった。」

母さんだけじゃなくて、オレ家族が欲しかった。夢だった。．．ばかみたいだ。

そんなの、最初から、何もなかった。」

「．．．オレ、なんで生きてきたんだろう．．．」
強く閉じた瞳から、涙があふれた。

ぞくりとした寒気が、セイ・リンの背をなでる。

セイ・リンの放った一閃が、シンカの左肩を貫いた。
その瞬間、白い光がシンかを包んだ。

まぶしくて閉じた目を開けると、シンかが横たわっていた。

「早く、しなくちゃ。」

シンかを抱き起こすと、手が張り付くような感触。

「あつ！」

慌てて、引き離すと、手のひらを見つめる。

まるで、ドライアイスに触れたかのように、真っ赤になっている。
冷えきっている。

再びシンかを見つめると、その体の周囲には、温度変化のためだろう、ゆがんだ空気の層が見える。

（何？どういうこと？熱を、エネルギーを吸収している？）

通信機がおかしな音を立てる。電灯がちらつき、小型艇の表示パネルも乱れて点滅している。

「シンカ！あなたなの？シンかやめて！」

遠くで爆発音が聞こえた。

（時間？そんな、まだ．．．）

その瞬間、セイ・リンの視界は真っ白になった。
シンかも、白い光に飲まれていく。

7・シンカ6

シンカが、セイ・リンとともに聖帝軍と戦っていた頃。シキとミンクは制御室に走った。

制御室には、警備兵の軍人たちが三人いた。

「手伝うよ!」

そう言ったシキに、若い警備兵がうれしそうに言った。

「助かります!正直、この設備に警備が五人だけなんて、きつくて

」

「おい、レベル4だ!」

通信機で何か話をしていたもう少し年上の、ひげを蓄えた警備兵が叫んだ。

「なに?」

不安そうにミンクが先ほどの若い兵を見る。

「この研究所を引き払うことになりました。惑星調査のことは、フアシオン帝国に知られてはいけません。この惑星の歴史に干渉することになってしまつので。」

「どうするんだ?」

シキがたずねる。

「研究所のデータをすべて太陽帝国の本星へ送ります。それから、この施設を破壊します。我々は小型の脱出艇で、宇宙へ退避するんです。」

シンカはどうしているのか!

二人は見合わせると同時に、走り出していた。

それに気付いた警備兵が、「あつ!だめです勝手に動いちゃ、危ない!」

「リックス!二人を追うんだ、セイ・リン少佐から、二人を同行させろと!我々は、排気口部から、脱出するぞ!」

「はい!」

リックス少尉は、二人を追った。施設内はそんなに複雑な作りではない。制御室と、研究室が一番広い部屋として真中にあり、その上の階に研究者や警備兵の宿舎がある。

施設は川の地下に作られているため一直線の形をしている。

制御室側からは排気口部が一番近い脱出経路となる。

二人は研究室のほうへ行った。逆方向だ。

リックス少尉が、研究室の前に向かうと、避難する研究者たちとすれ違った。

「リックス！どこへ行くの？」

「リユード人を助けに。」

女性研究員が声をかける。

「危険よ！」

「命令なんだ！」言いながら走る。女性研究員は、一瞬迷ったが、リックスの後を追った。

他の研究員の姿はすでにない。

研究室とエントランスとをつなぐ通路は、侵入者の警報で、自動的にロックされていた。

リックスはそこで二人に追いつく。

「おい、ここを開ける！シンカはどこなんだ！」

リックスも知らない。

「すみません、緊急事態で閉じられてしまうと、ここでは開かないのです。シンカは、多分セイ・リン少佐と一緒にいます。だから大丈夫ですよ！」

「とにかく早く行きましょう！」

ついてきた女性研究員が言った。

「サーナ！なんでついてきた！危ないだろう！」

リックスはその女性、サーナの手を取る。恋人同士なのだろう。

「シンカはどうなっちゃうんです？」

ミンクが二人に水を差す。

「大丈夫、シンカは地球に送られるはずだから、ダン所長も一緒だ

と思うわ!」

サーナが言った。

「行こう。どちらにしろ、ここにいっても仕方ない!」

リックスに促されて、シキとミンクももと来た方角へ走り出した。走りながら、シキがサーナにたずねる。

「なんで、シンカは地球に送られるんだ?」

「えっ!」

サーナがしまったと言わんばかりに、口を押さえる。

シキがいきなり、サーナを押さえこんでとまった。

ミンクは前で立ち止まったシキにぶつかって、鼻を押さえる。

「何するんだ!」

リックスが怒りに銃を抜く。

だが、すでに、シキの短剣がサーナに当てられている。

「教える!何か隠しているな!」

「彼女を放せ!」

「リックスっていったな。あんたがこの子を大切に思うように、俺たちにとっても、シンカは大切な仲間だ。」

リックスは、あきらめたように、銃を下ろした。

「私たちにしても、彼は大切です。いいでしょう。」

「だめよ、リックス、話してはいけないって命令が・・・」

止めようとするサーナの首に、シキが剣を押し当てる。表情は本気だ。

「サーナ。俺だって、君だって、シンカのこと嫌いじゃないだろ。」

いや、研究所のみんなが、彼のこと、自分の子供のように思っているじゃないか。

大丈夫だよ、話しても分かってくれるよ。」

「どういうこと?」

ミンクのほうにも視線をやり、リックスは話し出す。

ロスタネスがはじめた研究のこと。たった一つだけ成功し、それが

シンカであること。

帝国に研究の継続を命じられ、シンカを見守ってきたこと。シンカが、新しい生き物であること。

「本当に私たちは、シンカが子供の頃から、彼を守ってきたんです。新しい命だから、いつ、どんなことが起こるか分からない。突然死んでしまうかもしれない。」

彼の誕生日には、ここでお祝いをしたりしてたんです。また、一年無事に成長してくれたって。」

シキも、ミンクも、言葉が出ない。

「十五年経って、やっと安定したんだ。突然出す熱もなくなった。私たちは、あなた方よりずっと長く、見守ってきたんです。」

「だから、初めてここに来たとき、あんなに喜んでたんだ。」
ミンクが納得したようにうなずいた。

「ええ、デイラが攻撃を受けた後、我々は必死で彼を探しました。やっと、皇帝陛下も、彼を保護してくれる気になったらしいんです。大丈夫、彼に危害を加えるようなことはしません。信じてください。」

「・・・わかった、とにかく、無事でいるんだな。」

シキもサーナを離れた。

「悪かったよ。」

「さあ、行きましょう!」

詫びるシキをチラッと睨んで、サーナが、リックスの手をとる。盛んに鳴る警報が、四人の不安をかきたてる。

「よし、ミンク。」

「キャ!」

シキはミンクを脇に抱えて、二人の後を追う。

走りながら、聞いた話を頭の中で反芻している。

シンカは、このことを知ったらきっと、ひどくショックを受けるんだろうな。

きれいな事言ったって、こいつらは自分たちの目的のために、シンカを利用しようとしている。

ユニイラと人間の合いの子。

自分自身がユニイラの成分を持っているから、怪我也治る。ユニイラの煙を吸っても平気なはずだ。

ロスタネスにとって、シンカは理想の人間だったんだ。シンカなら、この大気のごったリユードでも、普通に生きていける。

だが、彼女は、普通に自分の子供が欲しくはなかったんだろうか？
愛する男と自分の間に生まれた子供であれば、理想でなくても、愛するものだ。

ロスタネス、どんな女だったんだ・・・。

8・レクト

デイラの中ほど、シン川の橋のあたりにファッション帝国の軍隊が集まっていた。

水の止まった川底には、黒い大きな鉄の塊のようなものが浮き出ている。怪しげなそれをこじ開けて突入した一団は戻ってこない。

そこからかなり上流で、大きな爆発音が響いた。

土砂が飛び散り、黒い煙がもうもうと視界をさえぎる。轟音は続いた。二つ。三つ。

風下になる国軍は黒い煙が流れすぎるまで動けずにいた。

と、そのとき。

水のなくなった川底が不気味にゆれ始める。振動で泥が液状化し、浮き出た水はさらに振動を波紋として伝える。

泥に足をとられかけた兵たちが堤防の上に逃れようと隊列を乱す。地中から熱いエネルギーが生まれ、建設中の橋、ユニイラ畑に作られた野営、残っていた城壁、すべてを強烈な白い光が飲み込んだ。太陽の光すら遮るほど強く、デイラを焼いた。

その光は、惑星リユードのはるか上空にいた黒い戦闘艦グレスデーンからも捕捉できた。

グレスデーンは最新の高速艦で、最大十万年光年を四時間で移動できる。

搭乗人数は百人までと小型だが、戦闘性能や移動性能、どれをとっても現時点で宇宙最高のものだ。

黒い太陽光吸収素材を使用した表面が、つやりと黒く光る。流線型に近い形態で、美しくもある。

グレスデーンの艦橋では、栗色の髪の方が腕を組んで、惑星リユードの大気を揺るがす白い爆風を見つめている。

「レクトさん、あの研究所の連中やりましたよ！」

ジンロが、大きな体を揺らす。

「デイラもろとも消したか。ふん、俺たちのこと責められる立場じゃないな！」

レクトがつぶやく。

「レクトさん！生体反応があります！」

通信士の報告に艦橋の全員が振り返った。生きているわけがない。爆発は半径十キロにわたっている。

惑星の黒いあざのようになった、デイラの存在した座標をスクリーンで見つめる。そこに確かに、何か息をしているものがある。

「場所は？」

レクトの言葉に、一人が慌てて計器を見直す。

「信じられない！爆心地の研究所ですよ！」

「そこに行くぞ。探査機を準備しろ」

「了解！」

そこは、白い部屋だった。窓には、外光を調整するスクリーンがついている。

リユードに降り注ぐ太陽アストの光を、人工的に採光したコロニーの公共光源は、かなり明るく、今は正午くらいの設定なのだろう。窓の外には、人口樹木が外からの視線をさえぎるように植えられていて、その枝の間から、正面に公園があるのが分かる。子供たちの声が聞こえる。

さほど広くないその部屋には、少年の横たわるベッドと、ベッドに座ったまま使えるようにセットされた回転式の小さい丸いテーブル。シルバーに輝くシンプルな椅子が二つ。

一つに、赤毛の三十歳代くらいの女性が座っている。

背が高く、美しいスタイルの彼女は、いつもの戦闘服とは違う、薄い桜色のブラウスを身につけている。

胸元が深く開き、そこにゆれる赤い輝石のアクセサリーがまぶしい。セイ・リンだった。シンカの手を握っていた。

「シンカはどうだ？」

栗色の髪の方が入ってくる。

「大佐！」

立ち上がって敬礼するセイ・リンに、座れといった手振りをし、レクトは隣に腰掛ける。

「俺はもう大佐じゃない。」

「でも、私にとっては尊敬する上官です。今も。」

美しい元部下にそう言われて悪い気はしない。

「ありがとうございました。助けていただいて。」

「ああ。だが、本当に助けたのは、こいつじゃないのか？」

レクトは横たわる金髪の少年を見つめる。

「はい、多分。あの爆発の前、シンカは回りのエネルギーというエネルギーを吸収していました。」

驚きました。彼の周りの空気が熱を奪われ、私は身震いしました。

爆発のエネルギーさえ、吸収したのではないかと。だから、私も彼も無事だったのだと思います。」

「エネルギーを吸収する、か。助けたとき、君は凍えかかっていたからな。そんな力があるとはな。・・なにかきっかけがあったのか？」

レクトが眉をひそめる。

切れ長の目で見られると、どきりとする。

これは、昔も今も変わらない。セイ・リンは思う。

この人は、底知れないものを秘めている気がする。美しく、恐ろしい。猛獣のような何かを秘めている。惹かれるけれど決して近寄れない。

「私が、彼に、真実を告げたのです。ダンのこと、研究のこと、彼自身のこと。」

自分が人間ではないことを知り、シンカはショックを受けた。

「俺のことは？」

「大佐の、ですか？」

大佐は無関係だと思っていたが？

レクトは、赤毛の元部下の、困惑した表情を見て納得する。

「ロスタネスは、あの男に惹かれていたからな。」

「あの？」

「・・・まあ、いい。そんなことは、もうどうでもいいことだ。」

レクトは、立ち上がる。ロスタネスは、もういないのだから。

「君は、どうしたい？われらは、太陽帝国に相反する組織だ。君も立場上、我らと一緒にいるとまずいだろう。」

シンカを渡すことはできないが、君を帝国のコロニーまで送ってやつてもいいぞ。」

「！いえ、私は・・・」

さっきまで、冷静な口調だったセイ・リングが、口ごもる。

「シンカのそばにいてもいい。こいつも目覚めたとき男ばかりじゃ、つまらないだろうからな。」

くすくすと笑って、レクトは部屋を出ようとする。

「大佐！あの、教えて欲しいのです！」

ゆっくり振り向くレクト。

「なぜ、そんなにも、反帝国の破壊活動をなさるのですか？」

「俺が選んだ仕事だからな。君も同じだろう。軍人なんだ。命じられればそのとおりに動く。」

「大佐・・・」

そんなはずはない。レクトが組織する軍は、この宇宙でもっとも名の知られた傭兵集団だ。

ミストレイア・コーポレーション。きちんとした会社組織でもあり、軍事組織でもある。

会社経営部門のトップはレクトの親友で、太陽帝国の大手銀行、スターバンク社の若きオーナーでもある。レクトは、軍事部門のトップなのだ。

惑星保護同盟はクライアントとして重要ではあるだろうが、自らが不利になるような任務は受けないはずなのだ。

レクトたちが、デイラを破壊したという、確たる証拠が見つければ、依頼した同盟だけでなく、ミストレイア・コーポレーション自体も危うくなる。

さらに何か言おうとするセイ・リンをさえぎって、レクトは言った。「もうすぐ同盟の研究医がくる。シンカがこの調子じゃ、動かせないからな。仕事が進まなくて困っているんだ。せいぜい、看病してやってくれ。」

部屋を出て行く。

見送るセイ・リン。

再び、椅子に腰掛け、シンカの手を握る。

両手で、ぎゅっと。

そうすることで、彼女自身の不安が消えるかのように。

ここ、リユード宇宙ステーションは、惑星リユードの探査の時代から作られた国際ステーションだ。

ステーション内は、宇宙船発着のドック区域と、各惑星固有のコロニーがそろった居住区域と、ステーション全体を制御している制御区域でできている。

制御区域の一角に、太陽帝国の施設があった。

太陽光吸収素材でできているそれは、黒く光り、異様な圧迫感を感じ

じさせる。

入り口は厳重に警備されている。

建物の二階の窓から、その様子を見ながら、ミンクはため息をつく。彼女の後ろには、日に焼けたたくましい青年、シキがソファアに腰掛けて、組んだ手にあごを乗せて、ぼんやりと宙を見ている。

ミンクの瞳は、赤く、はれている。

二人はここ二時間ほど、一言も口を利いていない。

ほぼ二時間前。ステーションのドックに派遣されたラカント少尉が帰ってきて、到着した小型艇はなく、搜索した結果も思わしくないとの報告を受けたのだ。

「シンカは、どこ？」

ミンクはそう言って泣きくずれた。

小型艇で退避したとき、その窓からデイラごと研究所が消失するのを見た。

恐ろしい光景だった。

ステーションに到着して、三日、ずっと待っていた。リユードに戻って、探したいという衝動を押さえ、研究所の人たちを信頼して。だが、返ってきた報告は、絶望的だった。

この小さな部屋は、横の扉から、それぞれ、ミンクとシキにあてがわれた寝所に続いている。

リビングという風情だ。三人がけの革張りのソファアと、一人がけのものが二つ向かい合わせになっている。間にはテーブル。

ここで、二人は食事をする。

研究所施設のため、あまり派手でもないが、野宿を当然としていた彼らには、立派過ぎる場所だった。

ウイイ。

扉が開いて、リックス少尉が入ってきた。

小さな自信なさげな目が、今日はさらにうつろと落ち着きなく、

緊張している。

「あの、すみません。・・・シンカは大丈夫、だなんて、言ってしまうて・・・」

この青年は、軍人らしくない。だからなのか、ミンクは信頼していた。

「ううん。あなたが悪いわけではないです。ダンも、セイ・リンも戻らなかったんでしょう？みんなも、つらいでしょう？」

また、少し涙声になる。

「・・・。私は、少佐はまだ、死んだとは信じられないのです。ダン所長は、リン少佐の報告で亡くなったことが分かっていたらしいです。」

少佐は爆破の時間を理解しておられましたし、あの時にはすでにフアシオン帝国の軍を排除していたはずです。」

「・・・そう。」

「俺たちを、リユードにかえしてくれないか。」

うつむいていたシキが、声を発した。

「！・・・その、私は権限がないので、何ともお返事できないのですが、この研究所の所長に話してみます。」

お二人がそうなさりたいのなら、そうするべきだと思います。」

シキは、笑わない。

鋭い黒い瞳は、やつれたせいか、凄みを増している。近寄りがたい雰囲気をもし出していた。

「あの、お二人を気分転換に、外にお連れしようかと思ひまして。」

「外？」

「ええ、このステーションにきた人なら必ず行く商業施設です。居住区の中にあるんですが、いろいろなものを売っていますし、珍しいものも見られますので。」

ミンクが、シキのそばに立った。

「行こうよ。」

うるさそうに見上げるシキ。

「もしかしたら、会えるかもしれないよ。」

「・・・気休めは言わなくていい。」

「あたしは、信じてるもん。シンカは私を一人ぼっちになんか絶対しないもの！」

強く、信じる瞳で、まっすぐ見つめられ、シキも心が動く。泣いていたくせに、女は強いな。

「・・・しょうがないな。行つてやる。シンカの代わりにじゃないぞ。お前を守るのはシンカの役目だからな。」

すこしだけ、声に元気が出た。

公共光源が、三時の角度に変わる。

8・レクト2

居住区の各コロニーはオリジナルパイプという名の通路で繋がれ、そのパイプ内で環境変化に備えることができる。

リドラ人のレクトは、仲間とともにオリジナルパイプから共有の商業スペースへ向かう。

パイプの途中のフィルター装置で、大気が変わるので、特殊マスクをつける。

このマスクをつけることで、地球基準の空気を備えた共有スペースで活動できるのだ。マスクといっても顔や口を覆うものではない。彼らに必要な成分を、耳から伸ばした小さいバーで口元に流している。通信装置に似ている。

耳の後ろに取り付けられた小さなカプセルに、リドラ人の肺を痛めないための成分が入っているのだ。

共有スペースの商業区はにぎやかだ。宇宙船で補給に立ち寄った人々が、さまざまなものを手に入れられる唯一の場所だからだ。

もっと、大きなステーションであれば、何箇所かに分けられている。

さまざまな人種が入り乱れ、ごった返す市場通りを黒い一団が切り分けていく。

総勢六人。シンカと一戦交えた、あのジンロと呼ばれていた男もいる。グレーの髪に褐色の肌、頬骨がはった四角い顔で、いかにも強そうだ。

その脇には少し細めの、顔色の悪い男がいる。皆、一様に貫禄を見せつけながら歩くので、自然と彼らの行く先には通り道ができていく。

「レクトさん、ボウズはまだ、だめっすか？」

ジンロが斜め後ろから話し掛ける。

「ああ、まだ、熱が下がらない。あれをなんとかしないと。そう

すれば、このいまましいステーションともおさらばだ。」

「レクトさんは何であの子供にこだわるんですか？ デイラでもわざわざ、案内させてみたり。」

ひよろりとした若い部下が尋ねる。

「お前、知らないのか？」

ジンロに肘でつつかれて、歩みが止まり、二人は一団の後ろに残った。

「何ですか？」

「あれは、大佐の隠し子らしいですよ。」

ジンロは小声だ。

「隠し子？」

「隠してなんかないさ。誰に対して隠す必要があるんだ？ おい。それにな、ピーカン、「大佐」はやめろと言っただろう！」

「す、すみません。レクトさん。」

胸倉をつかまれてひよろりと痩せているピーカンは慌てて謝る。怒らせてはいけない。

……けど、あの子供本人はわかっていなかったよなあ。

ピーカンは、ぼんやりと考えていた。

レクトがふと歩みを止めた。

「レクトさん？」

視線の先を追うと、人ごみの中でこちらを見つめている少女がいる。銀色の髪、赤い瞳、たぶんアルビノであろうその少女は、立ち尽くしてレクトを睨んでいる。

「ありや、デイラの子供じゃないっすか？」

ジンロが言った。

「そうだろうな。あそこで俺たちを見たんだろう。こっちを睨んでるぞ。」

それにしては楽しそうに、元大佐は言った。

「やりますか？」

ピーカンが懷に手を入れる。

「いや、いい。下手に騒いで、俺たちの存在が帝国にばれると厄介だ。まだ仕事も残っているしな」

少女は歩み寄ろうとして、人ごみに遮られる。その時、レクトは、少女の胸に何かが光るのを見た。

あれは……そう、確かシン力が買おうとしていた。

「そうか」

「なにか？」

嬉しそうに笑うと、レクトは煙草に火をつけ歩き出した。

「お前ら、今のうちに羽のばしておけよ」

男たちは散り散りになり、あっという間に人ごみに消えていた。

ミンクはあまりの鼓動の早さに胸に手を当てていた。

見たことがある。

あの男。

8・レクト3

セイ・リンは迷っていた。

逃げ出して帝国のコロニーにさえ入れれば研究所の皆と合流できる。

それにシンカを医者が診てどこまでできるとは思えない。

それよりはこのステーションのユニイラ研究所で、デイラから退避してきているはずの彼らに診てもらったほうがいいのではないか？
設備もある。そして、それが私の任務でもある。

だが。

太陽帝国は本格的にシンカを研究するつもりだ。シンカは太陽帝国
の中枢の研究機関に送られるだろう。

地球か、セトアイラス星か。それがシンカにとって幸せとは思えない。

シンカの母親、ロスタネスの顔が浮かぶ。

セイ・リンは深くため息をついた。

どちらにしる、この状態のシンカを担いでこの同盟のリドラコロニーから脱出するのは困難に思える。

せめてシンカが意識を取り戻し、自分で歩いてくれさえすれば。

セイ・リンはシンカの額に手を当てた。まだ熱があるようだ。

あれだけのエネルギーを吸い取ったのだ。

熱くもなる。そう勝手に理論付ける。

……この子は、この不安定な生き物はどうなってしまうんだろう。
ロスタネスはこの子の幸せをどう考えていたんだろう。

ふわりと窓から風が入る。

あの研究所の爆破から六十時間たっている。

熱い。まぶたの裏を白い光が焼いているようだ。

シンカは思った。

何があっただろう。

ふと動かした自分の手が、何かにあたって、感覚を思い出す。指を少し動かしてみる。
ぎゅっと、握られる。

だれ？……ミンク？母さん？

だれ？

あったかい……。

「……セイ・リン」

窓の外に視線が行っていたセイ・リンは慌てて少年を見た。
少年は目をこすって起き上がろうとする。

「あ、まだ無理よ」

それを制して寝かせた。

「ここ、どこ？」

シンカが見回す。

「……ごめんなさいね。私も気付いたときここにいたの。たぶん、

リドラコロニーの中の居住区だと思うわ」

「ここにー？研究所は？」

あの時確か、セイ・リンが俺のこと話して、それから……覚えてない。

「研究所は爆破したのよ。私たちは偶然レクトに助けられたの。ここは惑星リユードの上空にあるリユード宇宙ステーションというの。宇宙に作られた小さな町とでも言うのかしらね」

「レクトに！？」

少年が起き上がる。

ふらつくのか額を押さえる。

「大丈夫？あなたはずっと眠っていたの」

「つかまっているの？」

シンカが顔を上げる。

「ん。まあ、そうね。逃げ出すにしてもシンカ。あなたがもう少し回復してくれないと」

「ごめん」

シンカは乱れた金髪をなでつける。ぼんやりする頭で考える。

レクトに会える。セイ・リンについていても帝国に連れて行かれる。そういえば、レクトはあの時、俺をどこに連れて行こうとしたんだろう。

でも、セイ・リンについていけばシキたちに会える。

考えがまとまらない……考えるんだ。

俺は、どうしたい？

ぐう

「！」

シンカのお腹が鳴った。

「そうね。ずっと食べてないものね！」

笑いながらセイ・リンにいわれ、シンカは顔を赤くする。

セイ・リンがベッドサイドのボタンを押して人を呼んだ。

ボタンの機械音にシンカはじわりと研究所での出来事を思い出した。からだの奥が重く疼く。

俺はレクトに会って、父さんなのか確かめたかった。けど。

ぼんやりする頭を一振りする。

今さらそんなこと、聞く必要もない。俺には親なんかいなかった。母さんですら俺のことをデイラのために作ったんだ。

俺が生きてきたことに、何の変わりもないのに。

どうしたらいいのか、分からなくなっていた。

食事はおいしかった。

すべて見たことのないものだったが、味を想像してから食べると想像が当たっていたり外れたり、面白い。

白いぷるんとした丸い粒が、房になっている果物が甘くておいしい。すっかり平らげると、窓の外を見る。歩いてみることにする。

今は室内にはシンカ一人だ。

テーブルを回転させて押しやると、もぞもぞと足を動かしてみる。

床に足を下ろす。

普通だ。裸足に床がひんやりして気持ちいい。立ち上がる。

「わっ」

体が重い。歩こうとすると少しもつれる。その時、部屋の扉が開いた。

「シンカ！」

セイ・リンが声をかける。隣にいる、レクトが笑った。

「情けないな」

シンカは壁に両手をついてやっと立っている。

「レクト！」

片手を離し振り向いてレクトを睨むと、バランスを崩して座り込む。

「ついて」

「いきなりは無理よ。ばかね、ここはリドラ星基準なのよ。重力があなたの惑星より少し強い」

セイ・リンが駆け寄る。

「ほら」

手を差し出したのはレクトだ。

シンカは躊躇するが、男はごく自然な動作で手を引いて立たせるとシンカの肩を抱いて歩かせる。

シンカの中にどんな感情が渦巻いているのか、それを疑いもしない様子で。

レクトはデイラを滅ぼした、張本人だ。

シンカの鼓動が早まる。
見上げる。

鍛え上げられた腕は、シキと同じくらいたくましい。身長はシンカより頭ひとつ高い。

切れ長の目に通った鼻筋。少し大きめの口。シキのようなたくましさ、セイ・リンに似た繊細さが同居している不思議な雰囲気だ。ベッドに腰掛け、改めてシンカは男を見上げた。

この人が、俺が子供の頃、遊んでくれたのは確かなんだ。

8・レクト4

「俺、聞きたいことが」

何から聞けばいいんだろう。整理できずに、シンカはまたうつむく。
「なんだ」

レクトが椅子に腕を組んで座り、面白そうに目を細めてみている。
そんな二人をセイ・リンが観察している。

散々迷い、「……母さんを殺したのか？」

シンカの口から出た言葉は、それだった。

睨みつける少年は拳を握り締めている。

「ストレートに言うな」

それでもレクトは口元の笑みを消さない。

「殺したのか？あの時、母さんと話をしたって言ってたろ！」

シンカは、テーブルを支えにして立ち上がる。声を荒げれば呼吸が乱れる。まだ完全でないためか息が切れる。

「別にその場で殺したわけじゃない」

「だけど！あの宇宙船でデイラと一緒に殺した！」

「そのとおりだ」

「なんで、だよ。なんで、デイラを破壊したんだ！なんで……」俺の前に現れた？

そこで、肩で息をして、シンカは言葉をつなげようと顔を上げる。
とん、と肩を押され、シンカはベッドに座りこんだ。

「仕事だからさ。俺には、思想だの政治だの、愛情だのは関係ない。
与えられた任務を遂行する。お前を連れて行って欲しいと頼んだのはロスタネスなんだ」

「母さんが？なんで、母さんがあんなに頼んだんだ？」街を破壊し

に来た、この男に。

「……お前を護りたかったんだろ」
「！」

実験体として、俺を作った母さん。

それとしてなのか、子供としてなのか。護ろうとした？

「なぜ泣く」

黒い瞳で、男はうつむいた少年を見つめている。

うつむいたまま、シン力は首を横に振った。

「泣いて、なんかない。何で母さんに会いに行っただよ」
レクトは一つ静かに息を吐いた。

「さあな」

「ちゃんと答えるよ！」

「ふざけるな、俺がお前に答えなきゃならん理由などない」

シン力の怒鳴り声に、レクトの声は逆に低く迫力がこもった。

その睨み付ける視線は、人をぞっとさせる。

セイ・リンは一瞬、レクトがシン力を殴るのではないかと思った。

「大佐、あの、」

言いかけたもと部下に、レクトは冷たい視線を返す。

「口を挟むな」

なにを言っても、話してくれそうにない。シン力は質問を変えることにした。

それにどうしても、やっぱり、確認したかった。

「レクト、俺、小さい頃遊んでもらったよな？」

「！」

これはレクトも意表を突かれたらしい。一瞬、眉をひそめる。
セイ・リンも一瞬驚いたようだったが、黙ってレクトを見つめ、答
えを待った。

「ふん。覚えていたとは。まだ、三歳だったろう？」

「その後もあるよ。四歳か、五歳くらいの頃。ミンクも一緒に遊ん
だ」

「！ああ、あれが……仕方ないな。俺はな、お前に会いに行つたわ
けじゃない。ロスタネスにだ。勘違いするな。一途でいい女だった」
レクトは遠い目をして、思い出しているようだ。穏かに微笑んでい
る。

「……俺、あんたのこと、お父さんだと勘違いしたよ」

レクトの笑みが消えた。

シンカの蒼い瞳は、まっすぐに男を見つめていた。

その目元はロスタネスに似ている。

「俺、ずっとあんたに会いたくて、確かめたくて、さ。今、思えば
馬鹿みたいだけど」

俺に親はいない。

「ほんとに馬鹿だな。」

レクトが煙草に火をつけながら、目をあわさずに言った。

「こんな父親じゃ、困るだろう？シンカ。俺はディラを破壊し、ロ
スタネスを殺したんだぞ」

シンカは蒼い大きな瞳を見開いて、レクトを見上げている。

否定、しないのか？

鼓動が早くなる。

「だから、確かめたかったんだ。自分がお父さんだと思った人が、そんなことをするのは、何か訳があるんじゃないかって」

だって俺はずっと会いたかった。あの幼い日からずっと、会いたかったんだ。

「言っただろう。仕事だ」

レクトは冷たくそう言うつと煙を吐きながら、時計を見る。それ以上語るつもりはないようだ。

シンカもそれを悟り、視線を床に落とした。

セイ・リンは不思議でならなかった。なぜレクトは否定しないのか。彼の前では子供に見えるシンカに、あれほど期待させているのに。答えを待っているのは明白なのに。残酷だ。

「大佐」

「セイ・リン。余計なことは言うなよ。そろそろ医者が来る頃だ。そうしたら、お前は同盟の代表星、チームへ連れて行かれる。そんなに窮屈な思いはさせないさ。心配するな」

栗色の髪の男が立ち去っても、シンカはしばらくじっとしたままだった。

セイ・リンも突っ立ったまま考え込んでいた。

（なぜ、大佐は否定しないのだろう。ロスタネスに愛情を抱いているから？それはおかしい。

シンカに出生の秘密を話したといったとき、大佐はおかしなことを言っていた。「俺のことは話していないのか」と。その後、彼はな

んと言った？)

「ロスタネスはダンに惹かれていたからな」

(ロスタネスがダンに惹かれるがために、レクトのことを話さないつまり、シンカをダンとの子供だとロスタネスが言っていた、それこそが嘘だった？私は研究員から直接シンカのことについて聞くわけには行かなかった。その権限がない。だから私に、シンカが誰の子かを話したのはロスタネスだけ。私に、確かめるすべはない。すぐにダンも転勤になってしまっていたし)

(私は、ロスタネスの話を聞いて、ダンへの恋をあきらめた。まさか、ロスタネス、私を騙していたの？)

ほろ苦い思い出が、怒りに変わりつつあった。

かといって、ダンが転勤になったためにロスタネスも恋が成就したわけではなかった。

それでもロスタネスはセイ・リンの気持ちを知っていた。セイ・リンが、彼女の気持ちに気付いていたように。

想像は、確信を身にまとい始めていた。

あの研究で、検体はダンとロスタネスの受精卵だけではなく、リユード人のロスタネスは欠かせないとしても、多くの検体を用意したはずだ。

その中にレクトのものもあったとしたら。

可能性は高い。当時レクトは大佐として惑星リユードを含む宙域の統括をしていた。

研究所にもよく来ていた。

だが、ダンを愛していたロスタネスは嘘をついた。

（そうよ、ダンは研究所で、あの時はつきり否定した。「私の子じやないさ。」と。死の間際ですら、その態度は崩さなかった！私はダンを冷酷な男だと、そう受け取った。自らの子を検体扱いする。でも、もしかしたら、それも間違いだったかもしれない。ダンは、真実を知っていた。いえ、他の研究者皆が知っていた。私だけ、知らなかった。うそを、信じていた）

セイ・リンはシンカを子供と認めないダンを、冷酷で冷たい人間と思いついた。そして、敗れた恋とともにそれは、憎しみのようなものに変わってしまった。

セイ・リンはぎゅっと目をつぶった。両腕で、自分自身を抱きしめた。

（ダンは、死んでしまった。私は彼の本当の姿を分かっていたのだろうか）

不意に、シンカが目をこすり、立ち上がった。少しよろけながらテーブルに手をつき、しかし凜とした目で、セイ・リンを見上げた。

「俺、帝国の研究所に行くよ。そこに行けば、セイ・リンの仲間も、俺の仲間もいる」

「いいの？」

「本当のことなんか、分からないんだ」

「！」

シンカの蒼い瞳が、少しうるむ。

「もういいんだ。レクトには二度と会えないかもしれないけど、それでいいんだ。俺、決めた。帝国にも行かない。リユードに戻るよ。シキも、ミンクも待つてる」

穏かに微笑んでいる。哀しげな、やさしい笑みは、ロスタネスの表情に良く似ていた。

セイ・リンは不意に怒りがわくのを感じた。

「リユードには帰れないわ。地球に連れて行かれるのよ？そこで、実験される。あなたは、人間じゃないんだから」

少年は黙った。

何か言いたげにセイ・リンを見つめたが、唇をかみ締めた。

その蒼い瞳を見つめて、セイ・リンは罪悪感を覚える。

それでも言葉ばかりが先走る。

8・レクト5

「あなたは覚えていないでしょうけど。月に二回は、眠らされて研究所に運ばれていたのよ。あなたを眠らせるのはロスタネスの役目だった。なかなか大変だと言ってたわ。あなたはどんな薬も二度目には効かなくなるから」

「！」

シンカが拳を握り締めた。

「あなたが思うほど、ロスタネスはいい母親じゃなかったわ！」

少年は睨み付けた。涙がこぼれている。

「それでもいいんだ。母さんのことだって、レクトのことだって、俺の中では、いまだに母さんと父さんなんだ。それでいいんだ。誰かが話してくれる真実なんかより、俺は自分の気持ちを信じるんだ！」

シンカは涙をぬぐいもせず、目の前の赤毛の女性を見つめていた。

「俺は、母さんのこと好きだったし、父さん、レクトのことやっぱり好きなんだ。誰かにあいつは悪い奴だとかいわれたって、嫌いになんかなれない！お父さんじゃないんだから嫌いになれって言うほうが、おかしいだろ！」

シンカの視線はまっすぐに、赤毛の女性を見つめていた。先に目をそらしたのはセイ・リンだった。

「そう、ね。ごめんね。私にもその強さがあつたら……」
ダンの事を誤解などしなかった。

ダンから身を引いたのも、いつの間にか嫌っていたことも、すべて

自分がしたことだと、セイ・リンにも分かっている。ダンのことを信じ切れなかった、それだけだと。

美しい赤毛の女性は、一つため息をつく、今度はやさしく言った。

「でも、本当に、地球に連れて行かれちゃうわよ？」

「……仲間に、会いたい」

そこで、シンカは涙をぬぐった。

「二人に会いたいんだ」

「分かったわ。行きましょう」

セイ・リンは、シンカが使ったナイフとフォークを拭いて、ナイフをシンカに持たせる。窓のスクリーンをフォークで器用にはずすと、薄くて硬いそれを割った。

破片に、破ったシーツを巻きつけ懷にしのばせる。

「そこはだめなの？」

シンカが窓をさす。

高い場所ではない。すぐ、地面が見える。

「だめよ。強化ガラスだからね。しかも、センサー付き。殴っただけで警報が鳴るわよ」

「ふっん」

さすがだな。軍人なんだもんな。

シンカも、気を引き締める。

泣いている場合ではない。

「いい？敵に遭遇したらレーザー銃を奪うこと。さっき、観察したところでは、あまり見張りはいないわ。このスクリーンの破片はレーザー銃を通さないの。胸のところに付けておくのね」

破片をもらう。薄いけれど思った以上にしなるし、硬い。

シンカは動きにくい長袖を破り取る。

その袖に破片をいれて両側を縛ると、服の下から胸にあたるように巻きつけて縛る。

セイ・リンが、ブザーを鳴らし人を呼んだ。

「私についてきて。走るのがきつかったら、ちゃんと云うのよ」

「了解」

扉の両脇に分かれて隠れ、うなずくシンカ。

足音が近づいてくる。

用事を聞きに来た兵士は、あっけなくセイ・リンの膝蹴りの餌食になった。

セイ・リンは、兵士から銃を奪うと構え、ドアの外をうかがう。

さつと飛び出していく。シンカも後を追う。

走るたびに、手足のけだるさが増す。

重力が強いつてこんなに違うんだ。シンカはつくづく、環境の違いを感じる。こんなに重いところで軍人やっているんだから、セイ・リンの足が速いのは当然だ。

あの時も後をついて走った。

研究所でのことをふと、思い出す。あの、いやな薬の感覚と哀しくて恐ろしい感情が、ふと脳裏によぎる。ざわと肌が引きしまる。

部屋の外は廊下になっていて、そこを突っ切ると、施設のエントランスらしいところにでた。

案外、誰もいない。

入り口の警備は、さすがに厳しそうだったが、セイ・リンが詰め所の横においてあった、二輪の乗り物をそつと奪って、シンカが、兵の注意を引いている隙に、ゲートを開けた。

シンカを後ろに乗せて、走り去る。

途中、黒い大きな乗り物とすれ違った。中に、医者らしき老人と、レクトがいた。

レクトが、驚いてこちらを見ていた。

あっという間に小さくなって、見えなくなる。

シンカたちが、オリジナルパイプに到着したときには、すでに、薄暗くなっていた。

人工の光なのだが、人間の生態パターンとして、やはり昼と夜は必要らしい。日が昇って十二時間で落ちるようになっているのよ。

と、セイ・リンが、説明してくれた。少し涼しい風が吹く。

パイプ内は、乗り物は禁止されている。パイプ自体が繊細な精密機械でできているためだ。丸い筒状の天井の一番上から、絶えず空調整の風が流れている。

ここで、細菌やウイルスの消毒もいっしょにされるのだという。

二人は、黙ったまま歩きつづける。

シンカは息が切れてつらいが、泣き言は言っていられない。

真ん中のフィルタールームに到着する。扉の中に入ると、背後の扉が閉まる。「マスクを装着してください」と声がして、通路の側面にある、黒い棚が開いた。

青いランプが点滅する。中に、何か小さい機械のようなものがある。

「シンカ、あなたもこれをつけたほうがいいわ。」

「何？」

「今までいたところは、リユードやリドラと同じ大気成分だったの。ここから先は、地球基準の大気だから、調子を崩す可能性があるわ。だから、これをつけておくの。」

「わかった。」

セイ・リンに手伝ってもらって装着する。

正直、何が違うのか想像もできないが。

「行くわよ。」

セイ・リンが前方の扉をあけた。

シンカは目をしばたいた。乾燥しているのか、ちりちりする。

セイ・リンが背後を見て、走り出す。

「急いで！」

シンカが後ろを振り向くと、遠くオリジナルパイプの入り口あたりに数人の人影が見える。

追っ手か。

シンカも、走り出す。

住宅街のような、整った町並みを二人の黒い影が走る。街灯が通りに沿って立ち、ぼんやりと下を照らしている。

コロニーの「夜」は、公共光源がない。太陽アストの光をリユードが遮っている。すぐそばに、青い大きな惑星が見える。リユードだ。宇宙の濃い闇に、青白いリユード。異様なほど、静かな風景だ。どれくらい、走ったのだろうか。「夜」には人は出歩かないのか、すれ違うものはいない。

セイ・リンは、商業区のステイマーク（専用の駐車場）に止まっている、トラムに乗り込んだ。

シンカも肩で息をしながら、座席に座り込んだ。四角いその乗り物は、人を大勢乗せるためのものらしく、白い弾力のある金属の椅子が、左右に2列ずつ並んでいる。セイ・リンが運転

席で操作した。かすかに振動を感じる。次にふわりと浮き上がり、静かに夜の町を進みだす。

8・レクト6

「はあ。これでひとまず安心ね。後は、このトラムが自動的に銀河帝国制御区域に連れて行ってくれるわ」

「せいぎよくいき？」

「このステーションはね、宇宙船が発着するドック区域と私たちの今いる居住区域、そしてステーションそのものを制御、つまり管理している区域があるの。」

その中に、銀河帝国の研究所があるのよ。ほら、ユニイラの畑があるってダンに聞かなかった？」

「そうか。」

いまや、宇宙で唯一のユニイラの畑。惑星リユードで、ファシオン帝国のキナリスは、新しい畑を作れただろうか？

ふと考えた。

いやな奴だったけれど、リユードの人々を思っているんだもん
な。

俺は、仲間のために、何ができるだろう。まずは、シキたちにあつて、三人で帰るんだ。

心配しているだろうな。ミンクはきつと泣いてる。

「どれくらい時間かかるの？」

「そうね、居住区を出て、制御区域の真中あたりだから、三十分くらいかな。」

「ふうん。」

シンカは、一番前の椅子に腰掛け、改めて、車内を見回す。人が立って乗ってもいいように、椅子の列には銀色のポールが立っている。床はふかふかして寝転んでも気持ちよさそうだ。

「なんだか、すごいな。これ、磁力を使っているんだろ？初めてだ。」

「

嬉しそうに尋ねるシンカに、セイ・リンが首をかしげる。

「ずいぶん、いろいろ知ってるのね。」

「ああ、母さんが後継者にするように勉強教えたんだって、ダンが言ってたよ。共通語も話せるんだ。」

「そう、すごいわね。」

セイ・リンはグリーンの瞳を細める。

どという方向で育てたのだろう。単なる検体にそんな教育を施して何になるのだろう。

研究者は、彼を可愛がっていたから、だからロスタネスの好きにさせたのかしら。

そこで、セイ・リンは気付いた。平走している黒い乗り物がある！中から、何か青い火花が散った。

唐突に、トラムが止まった。

「しまった。」

セイ・リンが、かちかちとあちこちを押しているが、反応はない。

「磁気レーザーで壊させてもらった。」

聞き覚えのある声。

レクトが、乗り込んでくる。背後からあの部下たち。

銃を構えるセイ・リン。

「セイ。うしろ！」

「！」前方の窓から入り込んだジン口に背後を取られる。セイ・リンは羽交い絞めにされる。

同時に、レクトがシンカに飛び掛った。狭い座席の間でよけきれず、そのまま、殴られ、座席と窓の間にぶつかる。

「ぐー！」

耳元でガチャリとなにかが壊れる。

レクトは、右腕の内側を切った。血が滴る。

シンカが倒れながら、とっさに、あのナイフを構えたのだ。さらに突っ込んでくるレクトのすねを、蹴ってけん制する。

「！」

抵抗に腹を立てたのか、立てずにいるシンカに、レクトが襲い掛かる。

手に持っていたナイフを蹴り飛ばされた。

さらにレクトが足を振り上げ、踏みつけてくる。とつさに顔を覆った腕ごと、ひどく踏まれる。

体の下で座席がミシリと鳴った。

胸にも、ずしんと痛みを感じる。靴の固い感触が、気味悪く響く。

息ができず、意識が遠のく。

怖いと感じた。

「やめて！」

セイ・リンが叫んだ。

「・・・」

レクトの腕が、シンカを引っ張り起す。

「俺を、怒らすな。」

青白い顔、怒りに燃える黒い瞳が、少年を見下ろす。

額が切れたのか、シンカの白い顔に、赤い筋が流れる。

「レ・・・」

うつすら、瞳を開けるシンカ。その目はうつろで、印象がいつもと違う。

「？」

シンカのまぶたを親指で押し上げる。瞳の色が、金色に変化している。なぜだ？

「チッ！大気にやられたか。」

シンカの耳につけられたマスクは、こなごなになっていた。

「ばかが！なんでいつも俺に従わない！」

セイ・リンは、少年を抱きしめるレクトを見た。

少年の血の赤が、ある女性の瞳の色を思い出させる。

・レクトの、その想いは、誰に向けたものなんだろう。
目の前の少年に向けて、ではないような気がしていた。

8・レクト7

再び、もとの部屋に戻される二人。それでも縛ったりしないのがレクトの方針なのだろう。

だが再びベッドで寝る羽目になったシンカはぼんやりしていた。

怪我ではない。怪我はここに到着するまでに治っていた。

瞳の色が地球基準の大気で変色し元に戻らない。本人はそれでも平気そうなのだが、レクトは医者呼んだ。高齢の医者はトレンと名乗り、シンカの熱を測ったり心音を聞いたりしている。

「強いな、レクト」

トレンを無視して天井を眺めたまま少年がいった。表情はない。

「感心してる場合じゃないわ」

ため息をつくセイ・リン。

「すまないが、少し血をもらうよ」

デイラでは見られないくらい老齡の医者は注射器を取り出す。

「……」

シンカは動かない。トレンがお構いなしで数本採血する。

「多いんじゃない？」

セイ・リンがとがめる。

医者の傍らに立って警戒していた。この男はシンカの傷が治ったと聞いて、見られなかったことを残念がっていた。

セイ・リンの目からするとこの医者にシンカの事が分かんとは思えなかった。

レクトから聞いているはずなのに、この状況で採血してどうなるというのか。しかるべき装置のある施設でなくては意味がない。

同盟のレベルが知れる。

「うるさい。だまっておれ」

老人は白いひげをさすり、しげしげと採血管を揺らしながら眺める。

血液は不意に薄い緑色に変色して凝固した。

「なんじゃ！」

驚いた様子の老人。管に入っていた血液を凝固させないための薬剤へパリンと反応したのだろう。

シンカは老人の声にちらりと視線を向けて、またすぐに天井を見る。シンカが誰かを怖いと思ったことは初めてだった。

小さい頃から特別扱いされていたからか怒鳴る近所の酒屋のおじさんも、酔っ払った警備兵もちつとも怖くなんかなかった。

胸の奥でまだ、少し痛みが残っている。

たぶん、アバラがどうかしたのだろう。思いっきり踏みつけられたもんな。

「うっむ」

老人が、道具の入ったバッグから銀色のケースを取り出した。

ふたをスライドさせると、中に入っていたメスを取り出す。

「何するの！」

「痛い！」

セイ・リンが老人の襟をつかむのと、シンカが叫ぶのと同様だった。二の腕をざくりと切られている！

「はなさんか！小娘！」

老人がもがこうが、叫ぼうが、セイ・リンには我慢できなかった。

手刀でメスを叩き落とすとそのまま右腕を取って、老人の腕を後ろ手に締め上げる。

「シンカに何するの！」

騒ぎに気付いたのかジンロが入ってきた。

「おい、何してんだ」

セイ・リンがきつと美しい顔で睨む。

「この医者、シンカをメスで切り刻もうとしたのよ！」

「なんすか、そりゃ」

慌てて判断がつかないのか、廊下にもどってレクトを呼んでいる。

「何を騒いでいるんだ！」

「レクト、この女を何とかしろ！」

老人がうなった。床に座り込む老人の腕をねじ上げ、セイ・リンはレクトを見上げる。

「大佐！」

レクトはゆっくりセイ・リンに近づくと、腕をぐいとかんだ。セイ・リンはあきらめたように手を離れた。

怒りで唇をかみ締めている。

「まったく、小娘が！」

老人が腕をさすりながらメスを拾い上げてシンカを見る。

シンカは腕を押さえて睨んでいる。腕から流れた血の跡が生々しい。シートにも血が滴っている。

「悪いが、もう一度」

シンカの蹴りが老人のあごを捉えた。

「ふざけるな！」

シンカは怒りに震えている。

「俺を何だと思っているんだ！人形じゃないんだぞ！」

「れ、レクト、こいつを押さえろ！」

顔を赤くしてあごを押さえ、トレンが怒鳴る。

「トレンさん。貴重な存在なんですよ。無茶しないでください」

レクトが気持ち悪いくらい丁寧に言った。

「いいから、押さえろ！お前、わしに逆らうつもりか！」

お前呼ばわりされ、ちらりと老人をにらむと、ベッドの一番奥で、壁を脊にしている金髪の少年を見る。

シンカの顔が青ざめる。レクトがその気になったら、かなわない。先ほども思いついたばかりだ。

「大佐！やめてください！」

シンロに押さえられているセイ・リンが叫ぶ。

「だまれ！小娘！」

老人はヒステリックに叫んだ。

レクトが、ベッドに片ひざをついて、手を伸ばす。

シンカが後ろによけようとする。

背が壁にあたる。

「逆らうなっというたよな」

8・レクト8

レクトの低い声がトラムで捕まったときの痛みと恐怖をよみがえらせる。シンカが悔しそうに目を伏せる。かなわないことが証明されている。

レクトがシンカの腕をとった。少し震えていた。二の腕の傷口があったはずのところを見る。

「痛いのか？」

シンカは、こわばった表情のままうなずく。

レクトはそつと手を離れた。

「傷がない分、どう手当てしていいのか分からないな。そうやって、痛みに耐えるしかないのか？」

「ああ」

「すまん。同盟はもう少し、ましなのをよこすと思った」

「！」

シンカはレクトを見つめる。金色の瞳が、不思議な雰囲気をかもし出している。

「なんじゃと！きさま、ならず者のくせに、何を偉そうに！」

老人がわめいた。

ジンロがすでに老人の背後にいて両肩に手をかけた。

「やめだ。お前を同盟に預けるのは危険だ。研究所のほうがまだましだった」

レクトがシンカの表情を覗き込みながら、言った。

「ジンロ、お帰り願え。」

「了解」

ジンロは老人を引きずって出て行く。

「いいのか！レクト！きさま、同盟からも追われるぞ！」

捨て台詞が小さくなっていく。

「なあ、シンカ」

レクトはベッドに腰掛けた。

まだ、壁にくっついていいるシンカを見る。

「お前が逆らうから、抵抗するから殴らなきゃいけない。だから、逆らうな。俺だって、お前を傷つけたくはない」

「……」

「大佐、シンカを帝国に、私たちに返してくれませんか？」

セイ・リンが言ってみた。同盟に渡すつもりが変更になったのだ。帝国に、もともとの研究者たちの見守る研究所に返してはくれないか？

セイ・リンの提案にレクトは眉をピクリとさせる。黒い切れ長の瞳が、険しくなる。

「俺は反対だ。君たち研究所の皆がどうのというつもりはない。ただ、皇帝は本気でシンカを利用しようとしている。ダンが戻されたのもそのためだ。ダンをはじめから、シンカを帝国の首都星、地球に送るつもりだった。地球で皇帝が待っているからな。あの男にシンカを渡すわけには行かない。まあ、君が我々と行動をとにもするというのなら、歓迎するがな」

と穏やかに語り「シンカ、お前は一緒に来るんだ」と付け加える。
「なんで？」

シンカの声が少しかすれる。

なんでレクトは俺を連れて行きたがる。いったい、どこへ？

レクトがシンカの肩に手を置いた。温かい。

「俺たちは自由だ。お前にも自由を保障しよう。それが、ロスタネスの最期の望みだった」

「でも、レクトは俺を同盟に売ろうとしてたじゃないか！」

「誰が売るなどと言った？保護してもらおうと思っただけだ。」

残念だが、惑星保護同盟では無理だ。レベルが低すぎる」

その様子を観察していた赤毛の女性が、あっ！と小さく声をあげた。
「大佐、もしかしてそれは・・シンカを仲間にしたいってことですか？」

「仲間？」

シンカが目を丸くする。

レクトが、むっとした表情で立ち上がった。

「最初からそのつもりだが。ミストレイア・コーポレーションの一人員として、迎えるつもりだ」

シンカも、セイ・リンも驚いて顔を見合わせる。二人とも声が出ない。だったら、最初からそう言えばいいのに。あんな強引な言い方されれば、誰だって誤解する。

シンカはレクトの表情を見あげた。変わらない、長いまつげの奥の黒い瞳が、シンカを見ている。無表情だ。

母さんが死の前に、レクトに望んだ。俺に自由を与えてくれて。母さんはレクトを信用していた。そしてレクトも、その約束を果たそうとしている。

俺に憎まれても人殺しって言われても。

俺もレクトを信じていいのかもしれない。

シンカは、うれしいのか哀しいのかよく分からなくなっていた。

「もっと、分かるように言えよ。勘違いしたじゃないか」

「それくらい気付け」

男は視線を逸らし煙草を取り出す。少年のその笑顔は、ロスタネスのやさしい表情にひどく似ていた。

あなたを愛することはできない、だから、一緒に行くことはできない。そう言った彼女の悲しげな笑顔だ。

セイ・リンはほっとしていた。レクトの組織にいれば確かにシンカも安全かもしれない。

そして、もし本当に親子であれば、一緒にいて当然なのだ。

そこでセイ・リンは口元を緩めた。

レクトの強引さはまるで不器用な父親のようだ。そう思いつくと近寄りがたい男が以前と違う印象に感じられる。

ロスタネスはなぜ、この男を愛せなかったのだろうか。そんな疑問が心によぎり、今は亡き女性にセイ・リンは問いかけていた。

「分かったよ。俺、一緒に行くよ」

シンカは笑顔だ。

「当然だ。それにしてもお前、白兵戦の基礎がなっていないぞ。情けない」

「あんたが強すぎなんだよ」

「ほら」レクトが拳を作って突き出せば、シンカは受け止めようと腕を差し出す。

不意打ちに受身は失敗し先ほどの二の腕にとんと当たる。

「痛いって!」

「バカだな、そこはそうじゃないぜ」

「どうせ教わるならセイがいいよ、どうせならさ!」

「贅沢抜かすな。ガキの癖に」

じゃれあう二人を見ながらセイ・リンも微笑む。

シンカの笑顔を久しぶりに見た。珍しく、大佐も笑っている。うれしくなっている自分に気付く。

セイ・リンは心を決めた。

「大佐、私も一緒にしてよろしいですか？」

リドラ人であるセイ・リンは、心から太陽帝国に忠誠を尽くすわけではない。リドラは惑星政府がなかったために、太陽帝国の人間として扱われているだけなのだ。

研究所の皆もそうだ。

孤児として育ち、十八で帝国軍に入り、すぐに惑星リユードに赴任した。もう、十五年近くリユードにいた。生まれた星には何も残してきていない。ここで帝国軍を辞めたからといって、失うものなどない。

「ああ。かまわん。君は優秀だし、部下たちも喜ぶ」
シンカは、何か考えレクトを見上げた。

「あの、俺、仲間がいるんだ」

「仲間？リユードにか？」

「いえ、大佐、ステーションの帝国の研究所に」
セイ・リンが説明する。

「そいつらも連れて行けって？」

「だめなら、俺もいけない」

レクトの顔に今までになく真摯な表情がのぞく。見かけたあのデリラの少女を思い出す。

「大切なのか？親友か？」

「ああ」

真剣に見つめあう二人。

「いいだろう。俺も一仕事あるんだ。研究所にはな」

9・再会

「私、ね。あの町で多分レクトを見かけたの」

ミンクが、ぼつりと言った。

シキと二人で共有のリビングで食事をしていた。

二人とも半分以上残している。味気ない食事。

「早くいえよ！いつだよ」

「商業区の、市場の人ごみで。多分、そうだと思うの。すぐに奥の細い道に入って行っちゃった。あのね、私がレクトを見たのは四歳くらいのことだから記憶はあてにならないんだけど、でもシンカに少し似ていたの」

「シンカに？」

「うん。でも、人ごみで近づけるわけでもなかったし、怖くって。

五、六人の、シンカが言っていたような仲間を連れていた」

ミンクはフォークで魚の残りをつつきまわしながら言った。

「シンカ、小さい頃から、ずっとお父さんがほしかったんだ」

「ん？」

「シンカは、デイラでは特別だったの。姿が違うことも、ユニラを必要としない体質とか、そんなのすべて含めてデイラの大人たちはみんなシンカのことを大切にしていたの。」

いい意味で特別だったの。聖帝キナリスからも匿っていたわ。シンカ自身はそれをすごく嫌がっていたのね。そんなことより、普通にお父さんとお母さんがいることにあこがれていたの。デイラではそういう子供はいなかったから」

シキは、遠い目をする少女を見つめた。

「私の家はデイラの領主をしていたの。だからよく、帝国の警備軍が交替になるたびに、家に招いてもてなしていたりしたの」

「そのたびにね、シンカはそっと見に来ていたの。あの時、遊んでくれたレクトが、軍服を着ていたから、だから、もしかして会える

んじゃないかって」

結局、あの、私と一緒に三人で遊んだのを最後に、レクトは現れなかった。

「そんなに慕っていたのか」

ミンクはうなずいた。

シンカがどんな気持ちで破壊されたデイラを見ていたのか。改めて苦しくなる。

そこに、リックス少尉が突然、入ってきた。顔には満面の笑み。

「シンカが！その、ここに来たんです！」

「え？」

ミンクが立ち上がった。フォークを持ったままだ。

「ミンク！」

リックスの後ろから、あの、金髪の髪が見える。

「シンカ！」

駆け寄ったシンカに抱きしめられ、ミンクは胸が一杯になる。

「もう！心配したんだから！」

涙がこぼれる。

「ごめんな」

ミンクの頭をシンカの手がなでる。その胸の感触も腕の回し方も背の高さも、ミンクは覚えている。少しユニラの甘い香りがする。

それが余計にミンクを安堵させた。

「あ、ミンク」

魚のソースが二人の服についている。

「あつ。ごめんなさい」

ミンクが慌ててフォークを置く。シンカがそれを待って、また抱きしめる。

「お前、少しはこっちも気にしろよな」

シキがふてくされる。笑っているのだが。

「シキ！ごめん。俺……」

シキは少年の肩をつかんだ。

「お前、目をどうしたんだ！」

「あ、なんか、変わっちゃったんだ。ここの空気の影響じゃないかな」

「本当！大丈夫なの？」

ミンクも覗き込む。

「俺は別に平気だよ。見えないわけじゃないしさ。それよりシキだつて瞳の色が変わっているじゃないか」

笑うシンカ。元氣そうで、瞳の色以外何も変わらない。

「お前、よく分かったな」

シキが照れたように笑う。

「ここの空気があっているらしいんだ。ここの空気はあの噴火以前の毒素のないリユードの大気と同じなんだと。研究所の医者が言っていた」

シキの黒い瞳はリユードの大気に含まれる毒素でにこり始めていた。それが今は澄んでいるのだ。本人ですら医者に言われるまで気付かなかったのに。

「そつか。よかった。ミンクは、ここの空気は大丈夫なのか？」

シキだけでなく、ミンクもあの小型マスクを装着していないことに気付いた。

「うん」

シンカの胸にはミンクがしっかりとしがみついている。

無理もない。ずっと我慢していたのだ。

リックス少尉はもらい泣きの涙をふいてそつと部屋を出る。三人だけで話したいだろう。

「シンカ、お前、どこにいたんだよ」

「そうよ！なんでもっと早く来てくれなかったの？」

ソファーにシンカを真ん中にして座ると、二人が責める。

「ごめん。俺、昨日まで眠っててさ、ほら、ミンク。俺昔から、た

まにひどい熱出ただろう？あれで、動けなかったんだ。セイ・リンも一緒だったんだけど」

そつと、うそをつく。

「どこにいたの？」

「……」

シンカは、髪をかきあげた。前髪が伸びて、うるさいのだ。

「……俺とセイ・リンは、レクトに助けられたんだ」

ミンクとシキは身を乗り出す。

「大丈夫？」

「お前、話できたのか？」

シンカは、少し照れたように、頭においた。

「その、お父さんかどうかは分からないままんだけど。ただ母さんがレクトに、俺のこと頼んだらしいんだ」

「頼むって何をだ？だいたい何でお前の母親がレクトに頼むんだ」

「あら、シキ、それはシンカのお父さんだからじゃないの？」

ミンクの一言に、シキもシンカも黙った。

「え、何か変なこと言ったかな？」

二人の様子にミンクは首をかしげる。

「……何を頼んだってんだ？」

シキが問いかけると、シンカはまた困ったように視線を落とす。

「俺、その、ほら、ちょっと普通じゃないだろ。それでさ。太陽帝国の首都星に連れて行かれることになってるらしいんだ」

少し、濁して話すシンカに、シキはため息をついた。

（教えられたのか。自分が何なのか。それでも、やっぱりミンクの前では平気な振りするんだな）

「シンカ。あのね」

ミンクが話そうとする。それを遮ってシキが割り込む。
「それでレクトはそれをどうにかしてくれるのか？」

ミンクはぶくりと頬を膨らめた。

そのかわいらしい表情をシンカは横目に見ながら彼女の髪をなでた。
「あの、俺、レクトと一緒にいこうと思うんだ。俺を仲間として迎えてくれるって言うんだ」

「仲間！？」

ミンクが声を大きくした。

「ミストレイア何とかって、会社のか？」

「うん。セイ・リンがいうには、その会社なら太陽帝国の皇帝から逃れられるんじゃないかって言ってた。今のままじゃ、俺は研究材料として捕まる。何の自由もなくなる」

シキが、久しぶりの麦酒を味わいながら、言った。

「レクトに会ったことないからさ、よく分からんが、まあ、わざわざ仕事の合間に危険を冒して助けようとしたわけだろ？お前の母さんのためだったとしてもさ、結構いい奴なのかもナ」

「俺もそう思うんだ」

嬉しそうに微笑むシンカ。

「……私は、そうは思わない」

ミンクは複雑そうな表情を見せる。

彼女の両親はデイラとともに亡くなっている。それを実行したのはレクトだ。仕事だと言った。

「ごめん、ミンク」

「シンカが謝ることないよ！だって私の父さんと母さんを殺したのは、シンカじゃないもの！あの人たちだもの！」

ミンクはシンカの手を振り払って、部屋を飛び出して行った。

「ミンク！」

後を追おうとしたシンカの肩をシキが抑える。

「シキ、俺、……」

「俺が行ってくる。お前は、自分のことだけ、考えてろ」

「！シキ」

シンカが顔を上げたときには、黒髪の男は閉まる扉の向こうに消えていた。

シンカは、椅子に座って、うつむいた。

俺、ちつともミンクのことを考えてやれてなかった。

レクトは二日間時間をくれるといった。

二日後の夜迎えに来ると。

それまでにミンクを説得できるんだろうか。

……それとも。

ため息をいくつかついた後だった。

「シンカくん」

リックス少尉だった。

「はい」

シンカは立ち上がった。

少尉は、いつものおどした表情で、言った。

「健康状態を確認したいということなので、一緒に来てほしいんです。」

「え、はい」

迷ったが、シンカはリックスの後についていった。

9・再会2

ミンクは建物の外に出ようとして、エントランスの警備兵に止められていた。

「何で外に出ちゃいけないの！」

泣きながら怒る小柄な女の子に、困ったように二人の警備兵は顔を見合わせた。

「外は危険です」

「わりい、ちよつと癪癪起こしてさ」

追って来たシキの姿を見て警備兵はほつとしたように手を離れた。その瞬間、ミンクは駆け出す。

「あの、ばか」

「待て！あんたも、外に出すわけには」

シキは肩に手を置いて止めようとする警備兵の一人を、睨みつけた。その口元は笑っている。

「どうせ、門より外には出られないんだろ。あいつは俺が連れ戻すから、黙って通せよ」

シキは腰に剣を持っている。剣を抜く様子は見られないが、それをも辞さない迫力にもう一人の警備兵が同僚を止めた。無用な争いは避けるべきだと判断したらしい。

「仕方ない。すぐに戻れ」

「ああ」

にやりと笑って、シキはミンクの後を追った。

建物の正面にあるロータリーを抜け、その先に芝生のある一角がある。

その芝生に座り込んでミンクは泣いていた。

「よう」

顔を手で覆って、ミンクは返事もしない。

「お前さ、気持ちは分かるんだ。親の敵だもんな。しかも、シンカがそちらを選んだことが悔しいんだよな」

ミンクがかすかにうなずいた。

「けどさ。俺たちに、他に何かしてやれるか？あいつのために何かしてやれるのか？」

ミンクは涙でくしゃくしゃになった顔を上げた。

「でも」

シキはにっこり笑って、その頭をなでる。

「お前もさ、がんばってるんだと思うんだ。見かけよりずっと強いし、しっかりしてるしな。けどさ、今のあいつの状況を救ってやるのって俺たちじゃないんだ」

「……リユードに、帰ろうよ」

「ああ、帰りたいな」

「また、三人で旅しようよ。楽しいよ、きつと」

「きつと、シンカも同じこと考えたさ。けどさ。いくら考えても、逃げられないと判断したんだ」

「じゃあ私たちはどうなるの？ねえ、シンカはレクトと行っちゃうんでしょ？」

「お前を置いてくわけないだろ、あいつが。置いてくつもりなら、ここにも来なかっただろうし。俺たちの前には現れなかったさ。そうだろ、あのまま死んでしまったことにしておくのが一番よかったはずなんだ。それでも俺たちのために来てくれたじゃないか。守ってくれるって言ったんだからさ。信じてやれ」

「シキも一緒？」

「俺はレクトが嫌がろうとシンカについてくって決めたんだ。それなんだかもう、戻れないくらい遠いところまで来ちゃったしな」
空には一面の星。

夜のそこには蒼い星が見える。

「あれ、リユードなんだってな」

ミンクがうなずいた。

「遠くに来ちゃった」

「うん」

ミンクは立ち上がった。

「戻るぞ」

「うん」

「あ、そうだ。シンカの、ほら、生まれのこと。あいつが言うまで知らなかったことにしておけよ」

「でも」

「あいつが言わないのは自分の中で消化し切れてないからだ。笑って話せないからだ。だから、あいつが自分で言えるようになるまで見ていてやれよ」

「シキって、なんでシンカのことそんなに分かるの？」

歩きながら前を歩く男の背中を見上げる。

「お前が分からなすぎ。俺にとってはそっちのほう不思議だ」
「はしとミンクの小さな手が叩く。」

「なんで、シンカ、これに惚れるかなあ」

頭の後ろに腕を組んでシキは笑う。

「ひどいんだから！」

部屋に帰ると、そこにはシンカはいなかった。

代わりに赤毛の女性、セイ・リンがソファに座っていた。

「お、シンカはどうしたんだ？」

「今、メディカルチェックを受けているわ」

「ああ、あの医者が見るやつ」

美しい女性兵士の隣にちゃっかり座り込んでシキが笑う。

セイ・リンは、足を組みなおして腕組みをすると、ちらりとシキを見つめた。

「シンカから聞いたかしら」

「なにをだ？」

「シキ、そばによりすぎ」

正面に座つてにらむミンクに、シキは手振りであつちに行けと合図する。

ミンクの頬がぷくつと膨らむ。

「私もシンカに同行するわ。あなた方は、決めたの？」

二人の様子に気付いているはずなのに笑み一つ浮かべずに、美しい赤毛のセイ・リンは淡々と話した。

「なんだ、お堅いな。軍人さんは」

「心配、じゃないの？」

「なにがだ？」

セイ・リンはため息をついた。

「今、何をされてるか、私では知ることができない」

「え？」

ミンクが身を乗り出して聞き入る。

「もし眠らされたり私たちから隔離されたりした場合には、大佐に、レクトさんをお願いするしかなくなるわね」

「ま、大丈夫さ」

にやりと笑いながら肩に手を回そうとするシキに、セイ・リンは声を強くした。

「何のんきなこと言ってるの？シンカにとって、ここに来ることがどれほど危険なことか！」

「その時には助け出さず。何が何でもね」

穏やかに笑っているシキを、セイ・リンは改めて見つめた。

「なんだ、あんた、いつの間にかシンカと仲良しになったんだな。うらやましいな」

「シキ」

ミンクが睨むのと、シキの手がセイにつねられるのと同じだった。

9・再会3

そこに、シンカが入ってきた。

三人に向ける笑顔にセイ・リンはホツとする。シキが立ち上がって、二人は拳を合わせる。

「おう、心配かけたな」

「ごめんね、シンカ」

ミンクが駆け寄った。シンカに抱きつく。

「あれ、なんだ、泣くことないだろ。俺も悪かったよ。お前の気持ち、ちゃんと確かめてからにするべきだったんだ。一緒に来てくれるか？」

ミンクはうなずいた。

シンカは微笑んで抱きしめる。

「おいおい、ミンク、さっきまでとずいぶん違うじゃないか」

「うるさいの！」

シキに反論するその声は、本当に涙声だ。

「シキ、俺の前では、ミンクは可愛いんだ」

ウインクするシンカ。

「それって、どういう意味？」

ちらりと非難めいた視線を送る少女にシンカは笑った。

「俺にとって一番可愛いって意味だよ」

「け、やってらんねえ」

シキがふてくされる。

隣でセイ・リンが笑った。その笑顔は、シキを嬉しくさせた。

翌日、シンカは朝から再びメディカルチェックに連れて行かれた。いずれ抜け出すことと思えばここで警戒させてもいけない。そう、心

配するミンクに笑いかけシンカは再び真っ白な壁に囲まれた研究室へと向かう。

昨夜の採血の結果、変化したのが瞳の色だけでないことがわかったらしい。シンカの体内で生成されていたユニイラが変質していた。つまり、シンカはすでに地球基準の大気にも、リドラ基準の大気にも順応していた。

その時点で、シンカの小型マスクははずされていたが、さらに研究するためということで、診察台から出してもらえない。

「……あのさ、いつになったら部屋に返してもらえるのかな」
横たわったまま、シンカは傍らで忙しそうにしている研究員の一人に声をかける。

チクチクする小さな針のついた管をあちこちに繋がれ、動けない。そのまま、研究員たちはモニターやコンピューターに向かっている。話をする人もいなければ、何をどうしているのか説明もない。いい加減、我慢できなくなってくる。

「あ！動かないでくれるかな。正確な数値が出ないだろう。」
眉間にしわを寄せて、睨む若い研究員。名を、セドリック・ラッセウとかいう。眼鏡の奥の細い目で見られると気分は憂鬱になる。

「もう少し、我慢してくれるかな。ごめんね。朝から何も食べてないしね。つらいと思うけど」

女性研究員が取り成すように微笑んだ。
ため息を一つついて、シンカはもう少し、と自分に言い聞かせる。
地球行きをやめて正解だった。こんなの毎日されたらたまらない。
視界の隅に赤いものが動く。セイ・リンが少し離れたところにいるようだ。

何とかしてくれないかな。
せめて、この眩しい光を消して欲しい。

なんだか暑いし、喉が渴く。

「ユウリ所長、彼は体調が戻ったばかりです。そろそろ休ませてあげてはいかがです？」

宇宙ステーションの研究所所長は、まだ若かった。二十六、七歳の、しかも女性だ。

太陽帝国の最も優れた研究都市であるセトアイラスでの実績を買われ、この研究の所長に抜擢されたのだ。

その上、ここでのユニイラ栽培を成功させている。傲慢になっている、とセイ・リンは感じる。

小柄で少しぼつちやりした体型の彼女はくつきり描き込んだ眉をよせて、ガラス越しに処置室の横から見つめている。

セイ・リンの声など聞こえていないようだ。

もともと軍人のセイ・リンには研究員の考えることや感覚はあまり好きになれない。研究員は研究を成功させるためなら何をやってもいいと思っているふしがある。リユードでの研究メンバーは見守ることに重点を置いていたが、すでに方針は転換されているようだ。

正直、シン力をこの処置室の診察台に乗せておくこと自体、不安でならない。

いつ眠らされてしまうか分からない。

だが今の彼女では、何の力もない。

レクトが明日の夜、任務のついでに迎えに来るといった。それまで我慢しなくてはならないのか。

「セドリツク、ランク3を試してみるわ。明日、陛下が御着きになる前に結果を残しておかなくては」

「はい。了解しました」

「陛下がいらっしゃるの？」ユウリの言葉にその顔を見つめるセイ・リン。

だが年下の所長はセイの存在自体を認めないかのように振舞う。

「始めて」

「はい」

完全な防護服に全身を包まれたセドリック・ラッセウがさらに分厚いグローブに替え、小さな液体のアンブルを取り出す。慎重に注射器にはめ込むと、シンカの手首の点滴に注入した。

「暴れたらいけないから、ちゃんと押さえてよ」

ユウリ所長が命じる。

「暴れるって、何を入れたんですか？」

「ランク3。つまり、空気感染の恐れがあるウイルスよ。地球人はこれにかかる二十パーセントの確立で死にいたる。症状は発熱、嘔吐、リンパ球の腫れ、人によつては神経障害もあるかしら」

「そんな！もし、死んでしまったらどうするんですか！？」

赤毛の女性兵士をこの研究所所長は快く思っていない。ユウリより頭二つ分高い背丈美しい体型、リドラ人特有のしなやかな手足と強さ。地球人の彼女はどれ一つとして持ち合わせていない。勝てるのは頭脳と色の白さだけ。

冷ややかに、セイ・リンを見上げて、言った。

「あら、大丈夫よ。すでに、ランク1とランク2はすんだわ。何の反応も示さなかった。ランク2では黄熱病c5を使ったのよ」

「そんな危険なウイルスを！」

地球でもはるか昔に克服したはずのウイルス性の熱病だった。しかし、それは他の惑星で新種を生み出し、c1から最新のもつとも危険なウイルス、c5まで発展している。それを、使ったのか！ワクチンがないわけではないが、危険な病気だ。ランク3とはいったい何を使ったのか。聞きたくもない。

「あら、セイ・リン少佐、顔色が悪いわよ？お気に召さないようでしたら、ごらんになってなくても結構。どうぞ退室なさってください。あなたが、どうしてもって言うから、入れてあげているのよ」

セイ・リンは拳を強く握る。

「所長、反応ありません。白血球数も変化ありませんが、ウイルス自体は消滅しているようです。ユニラの坑ウイルス反応は素晴らしいものがありますね！」

「ありがとうセドリック。ご苦勞様。記録して、シンカを休ませてあげて。私たちも休憩しましょう。三時間後に、経過を見るために診察と採血して」

ほっとするセイ・リン。

時間は昼をとくに過ぎていた。向かって左側が全面ガラスになっている廊下を歩きながら、明るい日差しにセイ・リンは目を細める。傍らを歩くシンカは、黙っている。疲れたのだろう。

「俺、もういやだな」

しばらく歩くと、少年がポツリと言った。

「明日、彼が来るまで何とか引き伸ばしたいわね。このままじゃ、参ってしまうわ」

「目が、さ」

「どうかしたの？」

「うん。チクチクするって言うか。あの、金色になる前に感じたみたいな、変な感じなんだ」

それで、先ほどからしきりと擦っていたのか。

「あの場では、言えなかったのね。ごめんね。つらい思いさせて。

私は何もできない」

「いいよ。あそこで言ったらまた何されるか。あーあ。腹減った！」

首の後ろを軽くもみながら欠伸するシンカ。

セイ・リンは明日、レクトが来る予定時刻より早く太陽帝国の迎えがきてしまうことをシンカに伝えるのをためらった。

太陽帝国皇帝、リトード五世も来る。レクトに知らせて、時間を早めてもらわないと間に合わない。それくらいは自分がやらなくてはと、生来の生真面目さで覚悟する。

皇帝が自ら辺境へ赴くなど珍しいことだった。地球を出ることすら滅多にないのだ。

だが、所長がああ言ったからには本当なのだろう。

自分が、もう少し立場が上であれば、情報も入るというのに。

「あれ、蒼くなった」

気付くと、シンカはガラスに映った自分の瞳をのぞいている。

「そうね。元に戻ったみたいね」

「やだな、なんか擬態する虫みたいだ」

「どっちも似合ってるからいいわよ。私も変えられるなら赤毛を何とかしたいわ」

「いいじゃん。どこにいてもすぐ見つけられるし」

赤毛のセイ・リンが青い瞳を見開いた。

「ロスタネスと同じこと言うのね」

「そっか。俺も同じこと言われたな。俺、デイラでは目立ってたから、いつでもあなたを見付けられるから、それでいいのよってさ」

「そういう問題じゃないのよね」

「そうそう。母さんその辺はちよつとずれてた」

笑うシンカ。

シンカもちよつと似てるのに、とセイ・リンは少年を見つめる。

「セイは好きな人とかいないの？」

「いないわよ。今は」

少し、遠い目になる。かまわずシンカは続けた。

「シキとかどう？いい奴だよ」

「目の前にいれば好きになるってものでもないでしょ？」

「なあんだ。残念」

もう一度伸びをする少年を、セイ・リンは穏やかに見つめた。

9・再会4

部屋に戻ると、すでに食事が届いていた。

シキが待っていた。心配していたのだろう。苛ついたようすだ。ミンクは中庭で、もらった子犬が気に入って遊んでいた。

まだ、シンカが戻ったことに気付いていない。部屋の窓から、遊んでいる姿が見える。

「あの果物はないの？白くて、ぷるんとした。」
セイ・リンに問い掛ける。

「ああ、レンエの実ね。夕食に出すように言っておくわ。」そのくらいなら、してやれる。

「ありがとう！」

うれしそうにほお張る少年を見つめる。

いつの間に近寄ったのか、シキがセイ・リンの横に立って、小声で言った。

「何されたんだ？」

「いろいろ。」

赤毛の女性はうつむく。悔しさが顔に出る。

「いろいろって」

セイ・リンを不満そうに見つめるシキ。

「シキ、もうくどいているのか？まだ、昼だよ。」

サラダで、頬を膨らませながら、少年が笑う。

「そんなんじゃないって！」

「大人なんだから見せつけんなよ！」

にんまり笑うシンカ。

シキはばつが悪そうに、セイ・リンのそばを離れる。

「シンカ、午後は自由にできるようにするから。」

そう言って、赤毛の美しい女性兵士は部屋を出て行った。

「おまえ、俺のことなんだと思っっているんだよ。」

シキはむっとしながら、シンカの横に座って、デザートのチョコレートをつまむ。

「俺が、自分で話すからさ。セイ・リンに聞かなくなっただけいいだよ。」

「聞こえてたか。」

拍子抜けしているシキ。

「でも、お前、自分のことちゃんとかわねえだろーが。いつも、我慢してよ。」

「分かったよ。でも、結果として俺は今、ぜんぜん平気なんだからさ。いいだろ。あいつらは、俺がどんな病気にかかるか試したただけだよ。」

「病気？」

「地球のが多かったな。多分、地球に連れて行くつもりだからだろう。あわただしくいくつか試してみたんだ。俺に注射した薬に、病気の名前があったから。」

「本当に、平気だったのか？また、前みたいに、傷が治ってるから隠しているわけじゃないだろうな？」

「大丈夫だよ。セイ・リンだってここでは立場弱いんだ、あんまり無茶言わないよ。」

シキは、少年の金髪をくしゃりとなでた。

自分の至らなさに、恥じ入る。

「悪かったよ。」

「彼女に直接言ってみたら。少しは進展するかも。」

「お前、女なら何でもいって訳じゃないぞ！」

「つまんねー。」

そこに、ミンクが戻ってきた。

「シンカ！戻ったの？大丈夫だった？」

「もちろん。」

にっこり笑う。

（そうだ。三時間後だってあの女所長が言ってたな。今のうちに研究所内を見て回っておこうかな。脱出するときに役立つかもしれない。うまくいけば検査を無しですむかも）

シンカはそう思いつくと、わくわくしてくる。基本的に、冒険は大好きだ。

「俺、ここにあるっていうユニイラの畑を見たいな。」

「ここにあるのか？」

シキは知らなかったらしい。

「そう聞いた。言ってみようぜ！」

三人は部屋から出る。廊下や中庭には、警備のカメラがある。かわりに、変な見張りとかがいなくて、気持ち的には楽だった。

研究所側で不都合を感じれば何かしら手を打ってくる。そうなるまで、何してもいいわけだ。

「シンカって、本当にこういう時、すごく生き生きしてるね。」

「え？そうかな。」

研究所の建物は、四角いビルが二棟で構成されている。敷地は半円の形をしており、ちょうど正門が円周の真中にあたる。

その敷地に、二棟のビルが斜めに平行して立っていた。

シンカたちは、門から見ると奥になるビルにいた。二棟のビルは地下で繋がっていて、その地下にユニイラの栽培所があった。

栽培所の入り口には、兵士が立っていたが、見学したいというと、通してくれた。

そこは、蒸し暑い空気で満たされ、低い天井から明るい照明が照らされている。確かに、デイラの栽培所にも似ている。

ただ、デイラより、栄養を与えられているのがユニイラ一つ一つが大きい。

「すごいね。デリラと同じくらいは、あるかも。」

ミンクの感嘆の声に、シンカもうなずく。

「ああ、広いな。ほら、ちゃんと花がついてる。実もなるなこれは。」

「野生のとはだいぶ違うな。」

シキが、首をひねる。

「野生のは、栄養が足りないから、まともに実なんてならないんだ。だから、減っているわけだしね。ここでなら、きつと、かなりの量の成分がとれるな。」

眺めるだけで、実際に植物そのものには触れられないようになっていた。植物のある部屋は、透明なガラスに覆われ、さらにその表面には薄く水のまくが張られている。

常に滴り落ちているその水には何か意味があるんだろう。

「ミンク、お前、体は大丈夫なのか？」

「今のところ、しずくが残っているから。」

「そうか。」

シンカたちがいる場所のちょうど右手側。栽培室の壁面に窓らしきものがある。

畑に向かってガラス張りになっている小部屋で、中に、青い液体の入った細長いビンが、たくさん保存されているのが見える。

こちらからでは入ることができない。ここで手に入れようと考えていたシンカは、当てが外れた。

「・・・いずれ、ミンクを連れて、レクトたちと旅立てば、方法は、一つしかない。」

シンカは覚悟を決めた。

「俺、ちよつとさ、」

言いかけたところを、ミンクがさえぎった。

「私も行く」

「え？」

「俺たちだって、考えているんだぜ。研究所の女所長さんに、あれ

をもらいに行くんだろ？」

シキが、小部屋の青いピンを指差す。

「一人で行っちゃだめよ」

につこり笑う二人。少し、目的は違うのだが。

「まあいいか。じゃ、奥のビルの最上階だ。行こう。」

そこは、警備兵がいた。

胡散臭そうに三人を見、所長のユウリ・ケスネルに取り次いだ。

正直、シンカは自信はなかった。一度自己紹介されただけで、彼女には親しみも何も感じていない。その後の検査にもいたはずだが、口も利いていない。

ミンクと同じくらいの背の、小柄な女性。

「こちらへ。」

案内されて、入った部屋は広く、ふかふかした毛皮を敷き詰め、金色の縁取りがされた絵画が、壁を埋めつくしている。

甘い香の匂いがし、シキはおえっと喉を手で押さえた。

白いふさふさした毛皮のカバーのついた大きな椅子に、不似合いな小柄な女性が座っていた。

その前にある大きな机も、彼女を小さく見せているだけだ。

「用件は何？忙しいの、手短にして頂戴ね。」

こちらの表情も見ない。手元の資料に目を通している。

「あの、俺のユニラの成分を取り出すにはどうしたらいいのか教えて欲しいんです。」

シキとミンクがこちらを振り返るのが分かる。

「変わったことを聞くのね。」

はじめて、シンカの顔を見つめた。ユウリ所長は、かけていた縁のないめがねを少し動かし、じっと、シンカを見つめる。

「教えても、実行できるのかな？」

子ども扱いした口調。シキがいやな顔をしている。

「はい。多分。」

「・・・コンイラの成分は、君の白血球に含まれているわ。顆粒球にあるのよ。通常の超遠心分離で取り出せるわ。」

「それは、他の人体に使用しても大丈夫な状態ですか？」

「そこは保証できないわ。なんなら、その女の子で試してみる？私も興味あるわ。」

シキがミンクを見る。ミンクはいつもの頬を膨らますしぐさで、女所長を睨んでいる。

「それは、させられないです。分かりました。」

につこり笑うシンカ。

ユウリは少年をじつと見つめる。基本的なことは、知っているよね。

確か、育てた母親が、研究者だったという。リユード人でありながら、短期間で帝国医師免許を取得し、生物学の博士課程を終えた天才だとか。

「・・・ロスタネス。優秀な研究者だったと聞いたわ。さすがね。あなたに教育することも怠らなかったのね。」

ユウリは科学に興味ある優秀な人間は基本的に好きなのだ。つまり、どんな人より、科学者が優れていると考えている。

「いいえ、あなたには及びません。それに、俺は、基礎知識だけです。別に、それが何に役立つのかも知らなかったから。」

「君は、科学者になる気はある？」

シンカは首を振った。

「もう、注射や点滴は見たくもないです。」

「そうかもね。そういえば、そろそろ時間なんだけど、どうなの？」

「今のところ、インフルエンザM3ウイルスも、黄熱病ウイルスも、メスイナウイルスも平気みたいです。」

につこり笑うシンカに小柄な所長は目を見張った。

「知っていたの！では、その症状もよく分かっているわね？」

「はい」

シンカはにこやかに嘘をついた。知っていたのは黄熱病だけだ。後は名前が読めただけで、どんな病気か、なんて知らない。

「ですから、午後の検査はなくてもいいかなって」

「仕方ないわね。何か変化があつたらちゃんと言うのよ」

ユウリが、初めて笑った。多分、この研究所に来て初めてだ。もちろん、リユードから来た三人は知らないことだが。

「ありがとうございます。」

シンカが、きつちりとお辞儀する。

「いいえ。君が、こんな面白そうな子だと思わなかったわ。その気があれば、もっといろいろ教えてあげるわ。いつでもいらっしい」

丸い白い顔に、パツチリした瞳が笑う。笑うとそんなに悪くない。

シキはそう感じた。

（多分、俺やミンクが口を利いたらとたんに不機嫌になるだろうけどな）

すでに、不機嫌なミンクを見ながらシキは思う。

（シンカは、女に取り入るのはうまいよな。年上に受ける。セイ・リンにも気に入られているし。俺も今度真似してみるか？）

シンカが礼をいい、残る二人もそこそこに頭を下げ、部屋をでた。

背後で扉が閉まると、シンカが大きく息を吐いた。

「シンカは誰にでも、うまくお話するのね。」

ミンクが口を尖らせる。

「まあ、まあ。ミンク。なかなか、才能だと思っぜ俺は。」

「ああいう人には、いい子でいるのが一番なんだ。」

ふーん。冷たく言って、一人先を歩き出す。すねている。

そういうミンクのほうがよっぽど可愛いのに、分かってないよな。シンカは思う。

「お前、ユニラ、どうするつもりだ？」

「いつかは、俺の中の成分でつてことになると思う。でも、今は、このユニラから取った成分が保管されていたる。

あれをもらおうと思ってさ。大量になるから、レクトがきたときに、どさくさにまぎれていただく」

「……悪党」

「強盗経験者にいわれたくないな」

金髪の少年は、可愛い顔で笑ってみせた。

9・再会5

その夜、部屋に子犬を入れてもらえないとかで、ミンクがすねて大変だった。自分も外で寝るなどと言い出す。

「ミンク、研究所の環境はきちんと管理されているんだ。動物は入れないんだよ。」

シンカがやさしくなだめても、かわいそうの一点張りだ。

仕方なく、庭でクンクン鳴く子犬のために、三人は警備兵を説得して、外に出た。

警備兵が背後から見張っているのが感じられる。

「お前、女に甘いのもいいかげんにしろよ。」

シキが酒ビン片手に、不機嫌だ。

「まあまあ、リユードを眺めながら飲むのも、おつだと思うよ。」

人工の空は、光源がなければ宇宙が見える。すぐ近くに、青い美しい惑星が見える。大陸の形が見えるくらい鮮明だ。

リユードの大气も、今日は澄んでいるんだな。シンカはしばし、思い出に浸る。

傍らに立つシキも、濃い蒸留酒を口元に運びながら、遠い目をしていた。

「俺はさ、一生、あの星で、国とユニイラを恨みながら、ろくでもない生き方して、後、十年くらいで死ぬつもりだった。」

ぽつりと、シキがつぶやいた。

「嘘みてえだな。俺は、すっかり体調がよくなってよ、医者があと三十年は普通に生きられるって言うんだぜ。」

「・・・いつか、みんなそうなるといいのにな。」

シンカが相槌を打つ。

ミンクは、医者に、ユニイラを少しずつ減らせば、もう少し長生きできるようになると言われたという。それほど、大気の違いは大き

いのか。

この、人工の空気が、惑星リユードでも作れたらいいのに。

「お前さ、今後レクトと行くだろ？その後どうするんだ？」

「俺、ミンクの体を治してあげたいんだ。長生きは無理かもしれないけど、せめて、ユニイラがなくても、ちゃんと普通にしていられるように。」

できれば、医者になりたいな。」

「何だよ。ロスタネスと一緒にじゃねーか。」

「そうだね。シキは？」

「俺はさ、せつかく人生が長くなっただ。もっと、腕を磨いて、あちこち行つて。面白いもんみてみようかな。」

「酒と女？」

「それはお前、男の人生になくてはならないものだぞ。」

「一人の子を守るのもいいと思うけどな。」

「そういうのに、出会えたらな。」

黒髪の精悍な男は、にやりと笑う。

ワンワン！

子犬が吼えて、駆け出した。

「あ、待って！」

ミンクが追う。

「おい、ミンク。離れるなよ。」

二人も仕方なく、歩いていく。

庭には、人工の芝生が敷かれ、しっとりとした感触が足に心地いい。建物の角を曲がり、裏庭に続く小道に出たときだった。

「シンカ。」

「！」

セイ・リンとミンクが立っている。よくみると、背後に黒づくめの男が数人。

レクトたちだった。

「あれ？明日じゃなかった？」

「皇帝が明日の昼に到着することが分かって早まったの。連絡しようとしたら部屋にいないんだもの。」

「ごめんなさい。」

そこはミンクが謝った。

「あんたが、レクトか。」

黒い男たちの中で一番背が高く体格のいい、栗色の髪の人にシキが声をかけた。

「君が、シキか。」

軽くにらみ合って、しばし、沈黙。

「ふん。スカウトしたくなるな。腕も立つんだろ？」

レクトがにやりと笑う。シキもふんと笑っていつのまにか構えていた手を戻す。

「レクト、頼みがあるんだ。」

シンカは、ミンクの肩に手を置いて、男を見上げた。

「お前たちの荷物なら、持ってきたぞ。」

ジントが後ろから取り上げられていた荷物を渡してくれる。

シキはうれしそうに腰に剣を戻している。

シンカは、長剣を背に負いながら、言った。

「ユニイラの畑にある、ユニイラの成分を取ってきたいんだ。栽培所の横の部屋にあるんだ。」

少し待っていてくれないかな。」

「必要なのか？」

レクトの眉がピクリとする。後ろの部下たちも顔を見合わせる。

「ああ、ミンク、この子なんだけど、今のところ、それがないと生きていけないんだ。」

シンカが、肩の剣を整えながら言った。

「場所は分かっているから、行ってくるよ。」

「俺も行くぜ。」

シキがついていこうとする。

レクトが、シンカの肩を押さえ止めた。

「何？」

「俺が行ってくる。」

そう言つて、少年の肩をたたく。

「レクトさん！時間がないっすよ！危険です！」

ジンロが止めようとする。

「危険？」

「俺たちは畑を焼くために来たんだ。もう、時限装置が動き出している。」

ひよろりとした部下が、言った。

「レクトさん！」

「ジンロ、頼んだぞ。」

片手を挙げて、にっこり笑いながら、レクトは駆けて行ってしまった。シンカも、後を追おうと飛び出しかける。

その腕を、ジンロがつかんだ。

「俺も行くよ！」

危険なんだろう？

「だめっすよ。あれは命令なんす。俺たちは、レクトさんの命令には絶対服従で。」

シキも、残りの部下に押さえつけられてもがいている。ミンクは半分泣きながら、セイ・リンにしがみついていた。

「だけど！死んじやったらどうするんだよ。」

「ばっかっ！声がでかいぞ！」

警備兵が走ってくる音がする。ちょうど、建物の反対側で、脱出の陽動作戦用に仕掛けた小さな爆発が起こる。

警備兵は方向を変え、爆発のあったほうへと走り去った。

「チツ！行くぞ。話は後だ。」

9・再会6

ジンロはシンカを強引に担ぎ上げると走り出す。裏庭の奥に止めてあった、後ろが荷台になっている大きい車に、乗り込む。

「レクトを置いていくのかよ！だめだよ！」

ジンロの皮手袋をした手のひらが押さえるので、声になっていない。強引に車が走り出す。

まだ暴れるシンカを、がつつとジンロが殴る。

「ボウズ！行っても足手まといだ。レクトさんは、口下手で無愛想で乱暴だけど、あんたのことを思っでしているんすよ。言うことを聞けって言われたじゃねえっすか？」

（俺に逆らうな）

そう言ったレクトを思い出す。

シンカは、ジンロを睨みながら、シートに座りなおした。

シンカの左右と正面に二人レクトの部下が座り、後ろの座席にシキとミンク、そしてセイ・リンがいる。

ひどくゆれる。

「レクトさんは、非情な振りしてるけど、結局俺たち部下にも、あんなたちにもできるだけのことでしてくれてるんすよ。リユードでだって、ボウズをアストロードまで、探しに行つたんだ。デイラで、ロスタネスさんをあきらめなきゃならなかった。だから、危険を冒してあんたを迎えに行った。俺とやりあったときに、荷物に発信機をつけておいたんすよ。危険から遠ざけるために、首飾りを買に行かせて、その間に仕事を済ますつもりだった」

「！」

ミンクが首飾りに手をやる。

「あんたが、何も知らずに抵抗して、レクトさんを危険な目にあわせそうだったから、俺はあんたを撃った。レクトさんも、これ以上チームに無理させられねえってわかってたから、何にも言わなかったす。あの日、任務の後ふさぎこんでて、正直つらかったすよ」シンカは黙って足元を見つめていた。

「……母さんは、なんでレクトと逃げなかったの？」

ジンロの灰色の小さい目が少年を見つめる。穏かに答えた。

「俺たちが行ったときロスタネスさんは、ダンと喧嘩していたつすよ」

「ダンと？」

「ダンが、あんたを帝国の本星に連れて行こうとしていたから。ロスタネスさんは、そこではじめて、帝国があんたをどうするつもりなのか知った。泣いていたつす」

「ダンが去った後レクトさんが話にいった。ロスタネスさんはあの町を離れることができなかった。あの町のためにすべてをささげて研究してきたつす。彼女は三十七歳。ユニイラの中毒で余命も少なかった。それに、これまでずっとレクトさんを拒否してきたんだ。今さら、助けてくれとも言えないつす。レクトさんの仕事を止めることはできない、それもよく分かっていたんすよ」

「それで、シンカだけでもって？」

セイの言葉に、ジンロがうなずいた。

「レクトさんは、いつものあの人らしくなかった。いつもなら強引にでも連れて行くつすよ。あんたたちにしてみたいに。だけど、ロスタネスさんにはできなかった」

ミンクが静に涙をふいた。隣にいたセイが、そつと肩に手を置く。

ロスタネスを一途でいい女だと、そういったレクト。想いを遂げることも出来ず、失うしかなかった。

一途だったのはレクトの方ではないか。

その時だった。研究所の方角から、大きな爆発音がした。爆風がここからも感じられる。

振動に震えた車内で全員がびくりと身体を強張らせた。

ジンロも、哀しそつに目を伏せた。

「今の、レクトは？」

ジンロは首を横に振る。

「わからないっす。けど俺たちはレクトさんの命令どおり動くだけっす」

「俺、いやだ！助けに行かなきゃ……」

言葉が終わらないうちに、シンカの力が抜け隣にいたジンロに倒れかかる。

ジンロは反射的にシンカを支えながら、背後のセイ・リンを見つめる。

「だめよ。今、シンカを暴走させるわけにないかないわ」

セイ・リンの厳しい表情に車内の誰も口を開かなかった。

火災を止めるためのものか緊急車両が何台も、赤いランプを点滅させながらすれ違う。

赤い光が、シンカの頬を光らせていた。

宇宙船グレスデーンは、二日前からステーションを飛び立っていた。後に疑われないためだ。

研究所で爆発事故のあった直後、ステーションの裏側にある警備用小型ドックから、三艇の小型艇がそつと飛び出してきた。

グレスデーンは三艇とも回収する。

シンカはセイ・リンの主張で、眠らされたままグレスデーンに運ばれた。

不満はあるがシキもミンクも、ついていくしかない。

翌日、シンカは目を覚ました。

広い部屋だった。シンカ以外だれもいない。レクトが使っていた部屋だった。男の着ていた服がクローゼットにあることで気付いた。ほんのり煙草の匂いがする。

寝室と書斎、そしてリビング。黒い家具と、シルバーフォックスの毛皮で覆われた床がしつとりと馴染み、落ち着きのある空間になっている。

書斎もきちんと整頓され、分厚い本が並んでいる。この時代に紙でできた本が残っているのは珍しいことだった。

もちろん、シンカにはそんなことはわからない。いくつか、本をめぐって見るが、難しい言葉が多くてさすがに読めない。

母さんの部屋にもこんな感じのがあったな。

ぼんやりと考える。レクトは戻らない。

また、風景がにじむ。

まだ、誰にも会いたくなかった。だから、一人でソファに沈み込んでいる。

母さんが亡くなった後、レクトもこうして、ぼんやりしたのだろうか。

10・カツツェ

戦闘艦グレスデーンは、惑星リユードから五千光年離れた惑星セダ上空に停泊していた。

リユード宇宙ステーションの研究所爆破から二十時間が過ぎようとしていた。艦内では、艦長の部屋の前で、三人がもめていた。

銀色の髪の少女が、食事を運び入れようとするが、黒髪の青年が止める。

「いいじゃない、だってシンカもご飯食べないと。きっとお腹すいているよ」

「自分から出てくるまで、待ってやろうぜ」
「でも」

セイ・リンがため息をつく。

「そつとしておいてあげたほうがいいと思うわ」
「でもっ！」

ミンクは頬を膨らめて怒る。

「ミンク」
「もう！シキも、セイ・リンも、なんで！」

シキは、こういうときほどミンクが成長してくれればと思うことはない。
ない。

男が、落ち込んでいる姿をみられたいはずはないのに。

「ミンク。いらっしやい。」

セイ・リンが、ミンクを強引に引っ張っていった。
はあ。シキがため息をつく。

シンカ、女に甘いのはよくないぞやっぱり。

「セイ、なんでだめなの？」

ミンクは自室のテーブルに持っていた食事の盆をおいて言った。

「ん。ミンクは、ご両親を亡くしているわね、確か。」

「！うん」

「その時、シンカはどうしてくれた？」

「シンカは一緒に町を出て。働いて、旅の資金を稼いで何もかもしてくれたの。私、ただついて行っただけだった」

「シンカもお母さんを亡くしたんでしょ？」

「うん。でも元気だったよ。ずっと笑ってたし」

セイ・リンは天を仰いだ。赤毛の長い髪が、ふくよかな胸元に流れている。

軍服ではないが、動きやすい乗務員用の作業着を着ていて、男性らしい服装がよけいに色っぽさを感じさせる。

ミンクは、大人の女性に、負けたくない。

だって、私はずっと小さい頃からシンカのこと見てきたんだから！
「あの時にね、シンカが私のためにがんばってくれたの。だから、今度は私が大切にしてあげるの」

「ミンク。あなたがそばにいとね。デリラを出てからずっとあなたを守っていたときのよう、シンカはがんばってしまうのよ。シンカだってロスタネスを亡くしたばかりだったのに笑っていたでしょう？無理させていたのよ」

「……」

「あの時あなたのために弱気なんて見せなかったシンカが、今は誰とも話をしたくなくて、出てこないのよ。それだけ今はつらいのよ。そっとしておいてあげましょう。きっと誰にも、弱い自分を見せたくないのよ」

「でも、私は弱くてもシンカのこと好きなもの！」

「もちろんよ。女は、男が弱いことを知っているものよ。知っていて、知らない振りをするの。」

「セイ」

「そうして、男が意地を張ってでも強くいよつとする姿を愛しいと思うもののなの」

セイ・リンは赤い髪をかきあげ、小さくため息をついた。

偉そうなこと言ってると自分をふと振り返ってしまふ。

「待つことはつらいでしょ？でもシンカは今もつとつらい気持ちでいるのよ」

ミンクはうつむいて、自分のベッドに座り込んでいる。

「きつい言い方して悪かったけど、ねえ、ミンク。もう少し大人になつて」

ミンクは大きく首を横に振つた。

「私が子供だから、分からないって言うの？シキやセイは大人で、私は子供だから、私が考えるのは違うの？」

「そうじゃなくて」

ミンクは泣き出していた。

どのくらい眠っていたのだろう。

黒い革張りのソファでシンカは目を覚ました。

天井を眺めたまま大きなあくびが出る。

ああ哀しくてもあくびなんか出るんだ。前もお腹だけはすいたよな。

ぐう。

またかよ。

自分の体の要求にいまいましたさを感じながら、起き上がる。

怪我してもすぐ治るし、病気にもかからないし、どんな空気でも順応するし。母さん、本当に丈夫な体につけてくれたんだな。

変に感心しながらバスルームでシャワーを浴びる。しっかりと瞳が蒼いことを確認して、あーっと声を出してみる。

いつもどおり。

また、みんな心配しているんだろうな。

少し照れくさいな。緊張しながらも部屋の外に出ることに決めた。

あれからどのくらい時間がたったのかは知らない。

リビングのドアを開けようとしたその時だった。

誰かが外からドアを開けた。

「ちよつと待てって！」

シキの声。

目の前の男は、知らない顔だった。

どうやら、シキはこの男が入ることを止めようとしたらしい。後ろから、男の肩に手をかけている。

「シンカ！」

誰より早く、この、見知らぬ男が声を出した。気付くと、男にがっしり抱きしめられている。

「誰だよ。」

シンカより頭半分大きいこの男は、とろけるような笑顔と、滑らかな口調で言った。

「私は、カツエ。レクトの親友であり、同僚でもあるんだ。」

とても、軍人には見えないが。身長の割りに華奢な腕、服装も、詰まった襟のぴったりとしたスマートなもので、とても動きにくそうだ。

「・・・あの。離してくれませんか？」

「おお！あの、レクトの子とは思えない綺麗な発音ですね！」

「俺、レクトの子供じゃないよ。」

「いやいや、この眉は奴にそっくりじゃないですか」

うれしそうに笑う。ちょうどレクトと同じくらいの年齢。亜麻色の髪に、緑の瞳。

やさしげな瞳がレクトとは違う魅力を放つ。

女性ならきつとつられて微笑んでしまうだろう。

カツツエと名乗った男はシン力をそのまま、ソファアのところまで引っ張ってくると、自分と向かい合わせに座らせた。

シキがむっとした表情でついてくる。

「いや、感激だな。奴から話は聞いていたけど、こんなに可愛いとは！それは、奴も夢中になるはずだ！」

10・カツツエ2

「いい加減に、説明してもらえますか？」

さすがに、シンカもいやになってくる。完璧な笑顔を崩さず、一人で感心している。

「ああ。私は、このミストレイア・コーポレーションの経営管理をしている。カツツエ・ダ・シアス。

よろしくね。レクトとは、太陽帝国の大学で一緒だね。まるっきり正反対なんだが、妙に気が合うんだ。

この会社も、奴と共同で経営している。奴が軍隊を辞めたって言うんでね、常々才能を惜しんでいた私が、誘ったわけだ。

君のことは奴から聞いているんだ。もちろん、かのロスタネスのこともね。」

そこで、カツツエは一瞬、遠い目をした。

「あの。」

「いや、本当に、奴が落とせない女性がいるとは思わなかった。私もね何度も忠告したんだ、やめとけてね。けど、奴はほれ込んでさ。」

まあ、君を見るとよくわかる。美しい女性だったんだな。」

ものすごいおしゃべりだ。

シンカも、シキも、口を出す余裕がない。

カツツエは話し続けた。レクトがこのミストレイアでどういう地位にあるか、どれだけ有能であるか。部下に慕われているか。などなど。

「俺、お腹すいたんだ。」

強引にシンカがうつたえてみた。

「！そうか！良かった！レクトのことで落ち込んでるって聞いてたからな、心配したんだ。今日、到着したばかりなんだが、私が今、

この艦の臨時の艦長をしているんだ。

なんでも私に言ってくれたまえ。ああ、食事だったね。すぐ用意させるよ。何か食べたいものはあるのかい？」

相変わらずニコニコして、話し続けている。

（もしかして、この人は俺のこと慰めようとしているのかな？）
ふと、シンカは思った。

「レンエの実が食べたい。」

カツツエのしゃべりがとまった。

「あの、だめですか？」

ぶはつと吹き出して、お腹を押さえる。苦しそうに笑っている。

シンカはシキと目を合わせる。どうすりゃいいんだ、この人。

「ハッハッ・・ごめん、いや、レクトと同じだったから。つい。」

レクトと同じ。レクトの子供。

「カツツエさん。落ち込んでるんじゃないですか？」

シンカの言葉に、男は黙った。

「・・・利口だね。本当に、レクトが気に入るのも良くわかる。」

先ほどまでの、派手な笑顔が消えて、哀しげな、物静かな表情になった。

自分をまっすぐ見上げる少年を、改めて見つめる。蒼い大きな瞳、金色の髪。白い肌。

レクトとは違う。けれど、どこか似ているのだ。あの、お人よしの
大ばかやろつに。

「シンカ、ミンクに顔みせてやれよ。心配してたぞ。」

「ああ。シキも、ごめん。心配かけて。」

「俺はいいさ。お前の気が済めばそれでさ。」

拳をつきあわせて、こつんとやる。いつのまにか、それが挨拶になっていた。

そんな姿を、カツツエは穏かに見つめている。

食事を待つ間、シンカはミンクの部屋に行ってみた。

が、外出中らしく、鍵がかかっている。通りかかったセイ・リンに聞くと、資料室で宇宙史の勉強中だという。

宇宙史？

「もつと、いろいろ知りたいんだって言ってたわよ。シンカも女の子追っかけてばかりいないで、少しは体鍛えたら？前より痩せたわよ。」

むっ。

「シキといっしょにするなよな！」

なんだか、自分がしばらく一人の世界に浸っていたせいで、みんなが変わってしまった感じた。

ミンクが、歴史の勉強？

別にサ、心配されるのを期待したわけじゃないけど、・・・

俺、甘えてたんだな。

この、なんとなく感じる違和感も、久しぶりに出てきて歓迎されない気がするからた。心配して欲しい、って、心のどこかで思っていたのかも。

やだな、俺。

シンカは、無機質な通路をとぼと歩いた。静かで、自分の足音ばかりが響く。

シンカは首をふって、食堂に行くことにした。食事ができているか

もしれない。部屋に運ぶって言われたけど、そんなことしてもらわなくてもいいもんな。

ミンクにだって、すぐに会えるし。会ったら、ごめんって言わなきゃな。

食事を済ますと、シンカは、ミンクを探しつつ、艦内を探検することにした。本能のようなものだろうか、今、自分がどんなところにいるのか、確認しないと気がすまないのだ。

何もかも、珍しい。前回、デイラから助けられたときは、寝込んでいたので記憶になかった。

手をかざすと自然に開く扉とか、人が通ると灯りが点く仕組みとか。最も気に入ったのが、重力のない区域だ。

艦の動力部で、大きな機械が動いている。動力部には重力がないほうが効率的だそうだ。

「ボウズ！あんまり邪魔すんなよ。」

レクトの右腕か、左腕あたりのおっさんが、声をかける。

シンカは遊泳を楽しみながら、手を振った。動力部の周囲から、艦の両側にある艦砲に続く空間がある。その座席にこっそり座り込むと、外が見える。

スクリーンは、動いていないのでただ、目の前の宇宙空間を映しているだけだ。それでも、シンカには十分面白かった。

セダ星らしき、赤い惑星の表面が見える。

どんよりした赤い大地に、灰色の雲のようなものが放射状に広がっている。大きい雲から小さいものまで。ぜんぜん違うんだ。リユードとは。

その時、スクリーンの端に、何かが横切った。

「？」

不意に、響き渡る警報。

艦内に機械的な声が響いた。

「太陽帝国軍艦隊接近中。乗員は配置に戻れ。臨戦体制をとる。」
なんたる！

シンカは慌てて、そこを飛び出すと、その勢いそのまま空間を泳いで、動力部を突っ切る。

中央通路に戻って、重力を重く感じながら、艦橋に向かった。

10・カツツエ3

艦橋では、カツツエが誰かと通信している。

シンカが近寄ろうとするのを横からジンロが止めた。

「だめだ」

「？」

なんで、と言おうとしてジンロの背後、隅にシキとミンクが立っているのが見えた。

につこりして、シンカが歩み寄ろうとした時だった。

「レクト・シンドラは貴艦の艦長だな」

レクト！？

シンカは振り向いた。

中央の大きなスクリーンに太陽帝国の軍服を来た、五十歳くらいのひげの男が映っていた。恰幅のいいどっしりした人で高い階級の軍人だとわかる。

「そうですが、何か？」

カツツエが穏かな表情を崩さずに対応している。

「ある事件の容疑者として、我々が預かっている。よって、貴艦内の搜索を行いたい」

生きていた！

シンカが振り向くと、嬉しそうにミンクが微笑む。そちらに駆け寄ると「よかったね」と声に出さずに話し、両手を握り合った。シキも笑ってシンカの背を叩く。

再びスクリーンのほうに向き直ると、ジンロがこちらを見て目を細めていた。シンカも満面の笑みを返すと親指を立ててみせる。

シンカたちに限らず、グレスデーンの乗組員皆がここ嬉しそうなそぶりを見せていた。それもシンカには嬉しかった。

密やかに沸き立つ艦橋で、カツツエだけが緊張を穏やかな笑みで覆い隠し、話し続ける。

「容疑者とは穏かではありませんね。ステーションで誘拐されましてね、心配していたところです。彼は被害者ですよ」

軍人はカツツエの言葉にあからさまに嫌な顔をして見せた。

「ほう。あ奴を誘拐しようなどと、そんな恐ろしいことを誰がたくらむのだ。戯言はやめてもらおう」

「太陽帝国の皇帝陛下程の力があれば、簡単でしょうね」

「おのれ、貴様、陛下を侮辱する気か！」

ひげの軍人は顔を赤くしている。

「いいえ。すでに貴官はシンドラを捕らえているではありませんか。宇宙協定では固有惑星の宙域外で法を犯したものの平等な扱いとして、中立星軍の保護下にすることが決められているはず。たとえ貴官のおっしゃるとおり、レクトが何かしらに関与していたとしても、中立星軍に引き渡す義務がある。捕らえている時点で、すでに誘拐でしょう？」

カツツエの穏かな物言いがさらに相手を怒らせている。

「貴様、太陽帝国に逆らうつもりか？」

「太陽帝国大佐ともあるう方が、力づくで連れ去った人質を使って、我ら民間人を脅すのですか？」

「人質などではない！」

「では、返していただきましょう。私たちは逃げも隠れもしません。逮捕するなら容疑が固まって、証拠がそろってからにしてくださいだけですか」

「そ、それは……」

カツツエは表情を変えない。シキは背後で腕を組んで観察していた。さすがに宇宙でもっとも大きい銀行のオーナーだけはある。見かけによらず豪胆な男にシキは面白みを感じるのだろう、目を細めて行方を見守っていた。

シンカに出会ったときにも感じた、「面白いかもしれない」という興味がシキを動かす。

「もうよい。下がれ」

スクリーンの向こう、大佐の背後から黒い衣装を身に付けフードを深くかぶった大きな影が動いた。

苛ついた様子だ。その姿を見て、グレスデーンの艦橋の乗務員が互いに目を合わせたり、立ち上がりかけたり。スクリーンの向こうの相手に明らかに動揺した。

「これは、皇帝陛下」

シンカはその真っ黒な姿を見つめた。

太陽帝国皇帝？

この、大男が？

「カツツエ・ダ・シアス。そなた、我を甘く見ると困ったことになるぞ」

影がいう。ガラガラした、重苦しい声だ。

ミンクはぞつとしてシンカの手を握り陰に隠れるように寄り添った。シンカは少女の髪を腕に感じながら抱き寄せる。

とにかく、レクトが生きていることが嬉しかった。

カツツエはあの完ぺきな笑みを消し、皇帝から目をそらさず睨みつけていた。

「どちらにしろ、レクトは重傷だ。今は動かせぬ。我はそこにいるリユード人を、いや、シンカという少年を渡してもらいたいのだ。私の研究所から逃げ出したようなのでな。そちらにも迷惑をかけていよう」

名を呼ばれてシンカはびくりとスクリーンを見上げた。ミンクが寄り添う。

相手から見えているのか？

ジンロは、だから俺を止めたのか。

そつとジンロのほうを見ると、彼は大丈夫だと手で合図した。

「いいえ、ここにはそういうものはありません。第一、リユード星はまだ、調査期間のはずです。太陽帝国皇帝といえども、調査中の惑星の人間を、惑星外に連れ出すことは禁じられているはずですが？」

さらりとカツツエが言つてのけた。

「くく。惑星保護同盟に加盟していればな。我が帝国は今や自由。シンカは我々が作り出し、育てたのだ。返してもらおう。ああ、カツ

ツエ・ダ・シアス。君たちのそのミストレイアも、我が帝国に属する法人だな。逆らわないほうが身のためと思うが？」

「もちろん存じ上げております、陛下。私たちはごく一般の民間人として、自分の会社を運営しているに過ぎません。陛下が壊そうとすればそれこそ、たやすいことでしょう。ですが陛下。太陽帝国皇帝が強引な方法を取れば、ますます、他の惑星政府が疑念を抱くでしょう。例の、ユニイラの騒ぎもそうです。ユニイラなるものの研究は太陽帝国が全宇宙を制するために行われている、などという不埒な噂が流れているではありませんか」

「ふん。大義名分を振りかざしおつて。まあ、よい。そこにシンカがないなら、どこにいるのかレクトに尋ねるまでのこと」
黒い影の皇帝はスクリーンから消えた。

「チツ。陛下までそこにいるとは」

カツツエは額に浮き出た汗を感じながら、息をついた。

「カツツエさん。帝国軍、離れていきます。ワープに入るようです」
「警戒態勢を解く。今の通信記録は保護しておいてくれ。何かに役立つかもしれない。他のものは従前の作業に戻ってくれ。お疲れ様」
につこりといつもの笑顔に戻ると艦橋内の緊張が解けた。

通信士や操縦士など、約十五、六人がざわざわと感想を語り合っている。ちらちらとシンカのほうを見る者もいる。

レクトが生きていたことには皆一様に嬉しそうだったが、帝国軍に拘束されているとは。

シンカはレクトが気になっていた。皇帝は恐ろしげな男だった。レクトは大丈夫なんだろうか。重傷だとも言っていた。

「シンカくん。来なさい」
カツツエに促されて、三人は乗組員の個室が並ぶ船室の奥の会議室についていった。

会議室には大きな楕円のテーブルがあった。取り囲むように椅子が三十脚程。縦長の部屋は広く、調度品も他の部屋より豪華に見える。もたれるとぐんとしなる気持ちいい椅子に三人は腰掛けた。その隣にカツツエが座る。

少し疲れた様子だ。顔色が悪い。

「あんた、すごいな」
シキが言った。

「あの状況で、よく分けに持っていたよ」
「ありがとう。まあ、あの太佐くらいなら何とかなるんだが。リトード五世陛下は威圧感があつただろう？」

三人は黙って頷いた。

「声は低いし、迫力があるし。すごい、怖かった」
ミンクが素直に言う。

そういえば、ミンクの顔色も良くない。

ミンクが最後にユニイラを使ったのはいつだろう？はなれていた間に使ったかな？大丈夫なんだろう？
シンカはそつとミンクの手を握り締めた。

「太陽帝国皇帝、リトード五世。太陽帝国は代々血筋で継承しているね。五代目ともなると、血が濃くなるんだろうな、人間離れしているんだよ。地球人なのに百歳を超えているって話だ」

「百歳？」

シキが繰り返す。

「ああ、最近は常にあの姿でね、顔をまともに見た人間はいないんじゃないかな。偽者説が流れることもあるくらいだ。君たちリュード人は宇宙でもかなり短命なほうだから驚くだろうね。今、この宇宙で人科とされる種族のうち最も長生きなのは、この下にあるセダ星でね。

平均は二百歳前後だそうだ」

「ふえーすごい！」

ミンクが変な声を出す。

シンカはあまり興味がなかった。実際、シンカは自分自身が「通常」何歳まで生きるのかなど、知らない。それよりもレクトが気になっていた。

「カツツエさん。レクトは、どこに連れて行かれたと思いますか？」

亜麻色の髪の穏かな男はにっこりいつもの笑顔を見せる。

「おそらく地球だと思う。そこに君を連れて行く予定だったらしいから、おびき寄せるならそこが一番手っ取り早いだろう？」

「おびき寄せるって」

「皇帝も君を救出に向かわせるために、わざとあんな言い方をした。君はそれに、乗るつもりじゃないだろうね？」

シキが横で大きくうなずいている。

10・カツツエ4

シンカは納得できない。

「でも、レクトが！」

「当然、罠が仕掛けられていると思うし、状況的に我々はかなり不利だぞ。表向きはミストレイアは動けない。つまり、何の護衛もつけられない。政治的な根回しをしてそれからするべきだと思うね」

「確かに。俺は、何の力もないけど。でも、あいつらがレクトを捕まえている事だって、俺を捕まえようとしていることだって、合法的なことじゃないんだよね？ だとしたら、なりふり構わず行動している気がするんだ。そんな相手に政治的な根回しなんて、できると思えないよ」

シンカの言葉にカツツエは首をかしげた。

「なあシンカ。相手は太陽帝国なんだ。君には実感がわかないかもしれないが、この宇宙に百以上もの殖民惑星を持っている。宇宙最大の軍隊もある。もしうまくいってレクトを助け出せたとしても、だ。彼は永久に追われる身になる」

「俺を、かくまった時点で、レクトは覚悟してたんじゃないのかな」視線をテーブルの上に組んだ自分の手に落としたまま、シンカはつぶやくように言った。

デイラから救い出した、その時からレクトは俺のために行動していた。そう、母さんとの約束もあるだろうけど。すべて俺のため。

「シンカ、それはないよ。いくらレクトでも一生帝国を敵に回して逃げ切れるなんて思っていないさ。あいつははじめから君をデイラ

の事件で死んだことにするつもりだったんだ。それが最善の策だった」

「！それ、って！？」デイラの事件？それは、最初の？

驚いた三人の表情に、カツツエは内心、面倒なことを言ってしまったと後悔していた。

「なんだ、あいつ。言ってなかったのか。……甘いな」

「それって、まさか、あの」

立ち上がって、シンカが身を乗り出してカツツエの顔を覗き込む。

「聞きたいのかな？」

カツツエは一つ息を吐く。

その緑色の瞳は三人の顔を順に見渡す。

ミンクは大きな目を潤ませて胸の前で拳を握り締めていた。

シキはシンカの肩に手を置いていた。

シンカは。テーブルに手について、真っ直ぐカツツエを見つめている。

話し出さないカツツエに待ちきれないのか、シンカが口を開いた。

「レクトは、仕事で。任務だから、デイラを破壊したって、言ったんだ」

「ああ、そうだね」

カツツエはうなずく。

「……その、はじめからって？」

「言ったら、俺がレクトに殺されそうだな」

「……言えよ」

シキも待ちきれなくなっている。

「言ったとして、誰一人、救われないのか？ シンカ、そんなものを君に背負わせたくなくて、あいつは黙っているんだよ」

カツツエは、ゆったりと背もたれに体を預けて、足を組み替えた。

「……それでも、俺。あの人を誤解していたくない」

10・カツツエ5

シンカの真剣な視線を受けて、また一つカツツエはため息をついた。

「強いんだな。さすがに、受けた教育が違うのか？怖がるってことを知らない。レクトにそっくりだ。少し、いじめてみたくなる」

シキが怪訝な顔をしてシンカとカツツエを見比べた。

「話してください」シンカは強く拳を握り締めている。

「確かに、レクトはミストレイアの任務として依頼を受けた。断りにくい相手だったからね。君のことがなくなつて、引き受けたかもしれない。だがレクトはそれを利用したんだ。畑を焼くだけなら、あんな攻撃必要なかった。最初からレクトは計画していたんだよ。リトード五世から君を保護する目的で、カモフラージュのためにデイラを焼き払った。すべて、計算づくだ。レクト・シンドラという男は、そういう奴だ。聞かなかったかな。宇宙でもっとも冷酷な、軍神と呼ばれる男だと」

誰も、口を利かなかった。

「シンカ。君のために、あいつはデイラの住人を皆殺しにしたんだ。ロスタネスすら、含めてね」

シンカの肩が小さく震えていることにシキは気づいた。

視線を机に落とし、鼓動を落ち着かせようとしているように見える。

ガタン。

振り向くと、ミンクが部屋を飛び出していった。

「あ、」

シンカが振り向いて、飛び出しかける。シキはその肩を抑えた。

「やめとけ」

シンカは一瞬振りほどこうとしたが、抑えられて動けず。シキの顔を見上げて、そのまま力なくうなだれた。

「今は、そつとしてやれ」

シンカは黙ってうなずいた。

「お前も、部屋に戻って休めよ。食べたのか？」

シンカが、首を縦に振った。

「じゃあ、また、少し寝ておけよ」

髪をくしゃくしゃとなでられてシンカは大人しく部屋を出て行った。

見送ると、シキは改めて、亜麻色の髪のレクトの親友を見つめた。

「あんたもなかなか」

そういつて座りなおした。

「なんだ？」

穏やかに、柔らかい笑顔を崩さないカツエに、シキは底知れないものを感じる。レクトと、同類なんだなこいつも。

「まあ、うまくごまかしたってとこだな」

「何をかな？」

にやりと笑うシキに、やさしげに微笑み返す。

「どうせ、あんたもレクトを助け出すつもりだろう？シンカが言ったとおり、すでにシンカの所在はばれてる。根回しなんかできない」
「ほう」

「俺は参加させてくれよ。さっき聞いたぜ、この艦、すでに地球に向かってるってな」

カツツエは目を細めた。

「レクトには悪いが。私も知りたいことがあってね。シンカも連れて行くことにしたんだよ」

シキは眉をひそめる。

「何だ？あいつも行かせるつもりなのか？行かせないために、ディラの話をしたんじゃないのか」
くくつとカツツエが笑う。

「そこまで計算高くないね、私は。やさしくもない。それにだ。レクトは、私にすら話そうとしないことがある。それが、気になっ
ていてね」

「何だよ」

カツツエはシキに顔を近づけた。

シキより少しだけ背の低い彼は穏やかに笑って、シキの耳にはめられた自動翻訳機を軽く引つ張った。

「おい？」

「あいつは、何かたくらんでいる。私にも黙って画策するときにはね、必ず、歴史を動かすようなことをしでかすんだ。過去にいくつも例があるんだ。今回こそは、何をたくらんでいるのか、知りたく
てね」

機械を元に戻す。

「なんだ、なんて言っただよ！共通語とやらか？おい！」

くすくす笑ったまま、カツツエは立ち上がった。

「地球までは一週間はかかる。それまでに、シンカを立ち直らせて
おいてくれよ」

「おい、なんて言っただよ！」

亜麻色の髪の男は、振り向きもせずに出て行った。

グレスデーンは地球に進路を取り、約二億光年先の太陽系を目指していた。到着まで一週間はかかる。

艦内は今ちようど、深夜の設定のようだ。通路は足元のぼんやりした明かりだけで、ところどころにあるスクリーンから見える宇宙も、暗くただ時折小さな星の瞬きが通り過ぎる。

ワープ航行中はほとんど何も見えない。

それでも、深夜、そのスクリーンの一つにもたれて、じつと宇宙を見つめる少年がいた。

金色の髪が襟についておかしな方向にはねようとしている。くすぐったいのか、先ほどから気にしている。

深夜。

静かなそこに立ち宇宙を眺めるのがシンカの日課になって、三日が過ぎていた。

昼間はいつもどおりの笑顔でレクトの部下から格闘技の稽古をつけてもらったり、リユードにはなかったさまざまな技術について教えてもらっていたりした。

シキも、「何だ、案外元氣だな」と、喜んでいる。

ミンクとは、まだ、あんまり話ができない。

ミンクは資料室にこもって、歴史の本を読んでいるのだそうだ。

セイ・リンが彼女に付き添ってくれているので、会えないのは寂しいが我慢した。

会ったとして、何をどう話しているのか、よく分からなかった。

一度、通路で偶然すれ違った。

「ミンク」

声をかけた。

彼女は悲しげに笑って小さく手を振り、何も言わずに歩いて行って

しまった。

俺はその後姿を引き止めることが、できなかった。

小さく、息をついた。

その蒼い瞳には、暗く深い宇宙の闇が映っていた。

「眠れないのかい？」

びくりと驚いて、シンカは背後を振り返った。

薄明かりの中でカツツエが笑っていた。

それは、一瞬恐ろしささえ感じさせる笑みだ。

「あ、はい。地球ってどんなところだろうと思って」

「ふうん。なんだ、私は君が落ち込んでいるのかと思ったよ」

「正直、最高の気分はず、ないです」

再び、宇宙を見つめるシンカの肩にカツツエは手を置いた。

案外、華奢な少年の肩。カツツエは一瞬、眉をひそめた。

大人たちに混じっていつも元気に、怖いものなしの顔して笑う少年もやはり子供なのだと思い知らされた気がした。

十七歳。地球なら、その年齢は間違いなく守られる存在。

「本当に君も地球に降りるつもりか？」

「はい。レクトを助けるんだ」

「あいつを恨まないのか？君のお母さんを、ロスタネスを殺したんだよ？」

シンカは、肩越しに男を振り返った。

「それは、もう決めたんです。自分の気持ちに正直になれば、レクトを嫌いになんかなれない」

シンカは人懐こい笑みを浮かべていた。肩に置かれた手をそっと、引き離して振り返った。

悲しげな微笑み。

以前カツツエに、レクトが語ったことがあった。ロスタネスの悲しげな笑みが、なんともいえないんだと。

それがこれなのかもしれない、と男は目を細める。いつの間にかカツツエはシンカの手を握っていた。

「あの？」

「あ、ああ」

慌てて手を離して、カツツエは気付いた。

「シンカ、その手首の」

「！」

シンカはびっくりと、右手を引つ込める。

「今の、リングだね？」

穏やかに、しかし強く睨むように見つめられて、シンカは右手を差し出した。

その腕にはめられた金属の薄い輪は、どうやっても取れなかった。研究所では様々なことが起こったから、すっかりその存在を忘れていた。

「これ、リングっていうんですか？ステーションの研究所ではめられて。取れないんだ」

鈍く黒く光るそれを、シンカはこつんとつついて見せた。

「何の、説明もなかったのか？」

「痛かったです。麻酔みたいなの打たれて、なんだか知らないうち

にはめられて。はめてから、一生取れないとか言われてもさ、困るよね」

悲しげにシンカは笑った。

あのステーションの研究所で、ミンクが飛び出してシキが追っていた、あの後だった。

健康状態をチェックすると言われてついていった。

そのときにはめられたのだ。

何なのか、たずねても誰も答えてくれなかった。

研究材料なのだと、思い知らされる気分だ。

カツツエはリングをしげしげと見つめていた。

「いや、まあ、普通はたいしたものじゃない。地球ではね、これ自身分証明代わりにしているんだ」

カツツエが見せた、彼の右腕にも同じような、でも少し違う感じの物がはまっていた。

「私のは簡単に取れる。これに、クレジット機能や、通信機能、さまざまな機能をオプションでつけることができる」

そういつて、カツツエはパチンとそれをはずして見せた。

「どうやるの？俺、これ取りたいよ」

カツツエがはずそうと試みるが、首をひねるばかりだ。

「だめ？」

「ああ。ちよつと、私のとは違うな。赤外線に反応するんだ、身分証明らしき機能はあるようだが」

「ふーん。便利かな？」

カツツエは、無言でシンカの腕を引いて歩き出した。

「あの、ちよつと。なんだよ」

「いいから来なさい。何の認証なのか、確認したい」

10・カツツエ6

カツツエは確信があった。

この全宇宙に広がるネットワーク、通称、星間ネットワークのための認証だろう。そこに、カツツエの知りたかった情報があるのかもしれない。

レクトの部屋に入ると、そのままシンカを、デスクの端末のところまで引つ張ってきた。

デスクの側面の細いスイッチに指をかざすと、ふわりとホログラムが立ち上がる。

「うわ、なんだ？」

四角いスクリーンが、画面だけ空中に浮いているように見える。

シンカが一瞬驚いた後に、それに指を突っ込んでみる。

映像だけなのだが、シンカの指に反応してそこだけ虹色に歪む。

カツツエがシンカの腕をつかんで、強引とも言える力でリングの中央をホログラムにかざす。

ふわりと画面が数倍の大きさに広がって、白く光る。

が、次の瞬間、大きなそれは消え、もとの小さなホログラムが小さく点滅した。

「……今は、無効か」

不満そうにあごに手をやって、カツツエは考え込んでいた。

「説明、してくれないのか？」

シンカが鼻息をふんと吹き出して軽く睨んだ。

「……何も、言われなかったか？ 思い出してくれ、何も言われなかったか？」

肩をつかまれてシンカは天井を仰いだ。

この人、相手に説明するの嫌いなのかな。

「所長だつて言つてたユーリつて人が、なんか言つてたよ」

「なんて？」

「あの人もつける理由が分からないって。ぶつぶつ言つてた。そこは同感だったから覚えてる。不満そうだった。正式な何とかがないのにとか、なんとか」

「まあ、いい」

手で制されて、シンカは自分の番とばかりに早口で質問する。そうしないとまた、横槍を入れられてしまいそうだから。

「あの、カツツエさんは何を知りたいんだ？それと、これと、なんか関係あるのか？」

今度は、シンカがカツツエの袖を捕まえていた。

「あ、ああ。仕方ないな。君が特殊な存在なのは私も知っている。しかしね、ただユニラの成分を取り出すためだけの検体であれば、何も認証なんかつける必要ないだろう？」

シンカは黙って首をかしげる。認証、自体になじみがない。

「認証は持つことで人として登録されているということなんだ。この星間ネットワークにね。戸籍を持つて事なんだ。おかしいだろう？実験で作ったとか、検体だとか、散々人間扱いしなかったくせに、なんで今、君に認証を与えたんだ？」

「……質問してるの、俺なんだけど」

「あ、ああ。私はね、シンカ。皇帝の目的が、どうもユニラだけではない気がするんだ。そして、きっと、レクトもそれを知ってい

る」

「目的？」

「それを、知りたくてね。だから危険を承知で君を地球に送ることにしたんだ」

そこで、シンカはにつこりと笑った。

「そうか。だから、あんなに反対してたのに、救出に行くことになったんだな」

嬉しそうに笑う。

「シンカ」

「なんで、何をそんなに心配してるんだよ、俺、大丈夫だよ。レクトを助け出せば、きっと、カツエさんの知りたいことも分かるよ」
「……君の、その根拠のない自信は、どこから来るんだろうね」

あきれたように両手を挙げる男に、シンカは笑った。

「きっと、若さからだよ！」

「！」

小さく舌を出して、頭の後ろで手を組んでみせる。
いたずらっぽく笑うシンカ。

「なんかさ、俺、考えてもしようがないって、思っちゃったよ」

「はあ？」

「俺、思ったように行動する。分かりもしないこと悩んでも仕方ないし、済んでしまったことで落ち込んでも、元に戻るわけじゃない。なんだか、分からないことばかり、たくさんありすぎてさ、逆に、どうでもよくなったみたいだ」

「投げやりって言わないかな、それは」

「それでもさ、俺は生きてるし。ミンクも、レクトも。今まで、俺なりにがんばって生きてきたしさ、これからも同じだと思う。感じ

たとおりに、生きるだけだよ」

子供だからなのか。

あきらめているのか。

それとも、それほど、心が強いのか。

カツツエは金髪の少年に目を細めた。

まぶしく感じた。

「俺、そう思ったらさ。ミンクにあいたくなつた！行ってくる！」

「おい、夜中だぞ！おい」

シンカは部屋を飛び出していった。

静まり返った室内。広い、レクトのための部屋。今はここにいない部屋の主を思い、カツツエはつぶやいた。

「そうやって、母親の死も故郷の思い出も、背負う重圧も。乗り越えていくのか。ただ、感じるままに、生きること？そんなに簡単なこととは思えないのだが。……レクト、お前すら乗り越えられないものを、あの子はもう笑って話すんだ。お前、すでに越えられているかもしれないぞ」

シンカはミンクの部屋の前に立って、一呼吸した。

「ミンク？」

ノックしても返事はない。開けてみると、かぎはかかっていない。

10・カツツエ7

シンカの部屋、正確にはレクトの部屋だが、そこはぜんぜん違った雰囲気だ。白い、ふ

んわりした床には薄いピンクの花の模様みたいなものが一面にあり、テーブルと椅子は精

緻な彫り物が施され洒落た感じだ。横に長いその部屋は、入り口側にテーブルと椅子、

本棚などがあり衝立をしきりにして、その向こうにベッドがあるらしい。

「ミンク？眠ってる？」

そつと、のぞいてみる。

ミンクがベッドの前にあるソファーに横たわっていた。足元に、歴史の本が転がっていた。

「ミンク！」

駆け寄って、そつと額に手を当ててみる。意識がない。

熱が高い！

抱き上げて、ベッドに運んでやる。

想像以上に軽く、それが不安をかき立てた。痩せたんだ、前より。

「ん…」ミンクの白いまぶたが震えた。

「ミンク？医者を呼ぶか？」

「シンカ。ごめんね」

声に力がない。

「何を言ってるんだよ。今、医者を呼んでくるよ！」

「待って」

ミンクはシンカの袖を握り締めていた。

「だけど、調子悪いんだろう？」

ミンクに引かれるまま、シンカは横たわる少女のそばにかがみこんだ。

「ごめんね…大好き」

小声でささやく。

鼓動が早くなるのを感じながら、シンカはミンクの大きな赤い瞳を見つめた。ミンクから、そういう言葉を聞いたのは、初めてだった。

「ああ、俺も」

笑って見せつつもシンカは内心穏やかではない。

ごめん、ってどういう意味だよ。

どうしちゃったんだよ！

ミンクは、ほっとしたように目を閉じ、シンカの服を離す。

そのまま、何も動かない。青い顔をして、やけにゆっくり細く息をしている。

「ミンク？」

「ごめんね。ユニラ、もうないの」

「なんでもっと早く言わないんだよ！」

「でも、誰に言っても、ないものはないんだもの……」

シンカはミンクの手を握り締めた。そのとおりだった。

ステーションでユニラの成分が爆破され、もう、この宇宙にはないのだ。惑星リユードで野生のユニラを見つければ、いいのだが、それも今は不可能だ。

青い顔をして再び目を閉じるミンクを見ながら、シンカは不意に立ち上がった。

腰にある短剣を取り出し、バスルームの熱湯で洗う。一緒に手も洗った。

「ミンク。目を閉じたままでもいいから、これ、飲むんだ」
ミンクは、もう、目を開けるのも、口を開けるのもつらかった。
どうしようもないことと分かっているから、ずっと我慢してきた。
食欲もなく、日に日に力を失っていくような感覚。怖くて、何度も泣いた。

歴史の勉強は、部屋にこもるいい口実になっていた。

「ミンク？」

シンカの手が、やさしく体を起す。温かい手。

そのまま、抱きしめていて欲しい。深く眠れそうな気がした。

ふいに、口元に温かいものが触れる。

唇？ううん、だけど。ミンクは少しだけ口を開いた。

何か、覚えのある苦い味。甘い香り。キスとは、違う。

ユンイラ・・・？

温かい液体をほんの少し口に含んだだけなのに、体が温かくなっていく。

「シ・・・ンカ」

もつと。

声にならなかったが、シンカが、また甘い香りの液体を含ませてくれる。少しずつ、何度も何度も。

「ふう……」

小さく息をついて、ミンクは目を開けた。

シンカの耳がアップで見える。抱きしめられているみたいだ。

「よかった」

少し、震えている。

それがシンカなのか、自分なのか、ミンクにはよく分からなかった。

「ごめんな。もつと早く、こうすればよかった」

シンカが、泣いていた。

胸が締め付けられて、ミンクも涙があふれた。シンカの泣き顔。あまり見たことがなかった。

「シンカ……怖かったの」

「うん」

「怖くて、でも、どうしようもないって思ったから……」

「大丈夫。俺が守るって言ったろ？お前は何にも無理なんかしないでいいんだ」

「うん」

ミンクはまた、瞳を閉じる。シンカのぬくもりが、うれしい。

「もう少し、寝てるんだ。医者を呼んでくるよ」

「だめ。もう少しこうしてて」

シンカの腕に、力が入る。

「私、シンカがいてくれば、ほんとに幸せだな。あのね、たくさん、なくしちゃったけど、シンカだけは、そばにいてくれる」

「うん」

「そばにいてね……」

「うん」

ミンクが眠ったのを確認して、シンカは、部屋の通信装置で、シキにそつと医者を呼んでくれるよう頼んだ。セイ・リンも呼んだ。グレスデーン みんなに心配をかけたくない。

程なくして、シキとセイ・リン、船医で女医のガンスさんが入ってきた。

シンカを見るなりシキが叫んだ。

「シンカ、お前も怪我してるじゃないか！」

「自分でやったんだよ」

指先ではすぐに傷がふさがってしまふので、シンカは手首を切ったのだ。それでも、数回切り直さなければならなかった。

気付けば、血まみれになっていた。

それでも、自分の血で、ミンクが助かったことに満足していた。この後、何の問題もなければ、これからこの方法でミンクを助けることができるのだ。

「それより、ミンクを診てやって欲しいんだ。ユニイラが切れてずいぶん経っていたんだ。俺、気付いてやれなくて。俺の血で、何とか良くなったと思うんだけど、でも、まだ油断はできないから」

「シンカ君、君も、少し診察が必要ね」

「え？」

すでにミンクの様子を見ていたガンスさんが、こちらを振り向いて言った。

「かなり、出血してるじゃない。シキ、医務室に連れて行って。服を着替えさせてね。それじゃ、目立つちゃうから。後から行くから、待ってて。ミンクは動かさないほうがいいから、ここで診るわ。セイ。手を貸して」

「ええ。ほら、シンカ。あなたも顔色悪いわよ」

セイ・リンが二人をせかして部屋から追い出す。

「ガンス、どう？」

セイ・リンが、ミンクの口元の血をそつとふき取りながらたずねる。「そうね。この子、もともとかなり内臓をいためていたからね。しばらくは、起きられないわ」

「そんなに悪いの？」

「内臓は、治る性質のものではないわ。生まれつき、ユニイラの副

作用だつて言つてたわね。ある意味、この子だつて十分突然変異なのよ。健康という概念からすれば、シンカのほうがずっと健康ね」

「そう。私、この子にきついことを言つてしまったわ」

セイ・リンの言葉には溜息が混じる。

「何を？」

ガンスはミンクの腕に、点滴をつけながらさりげなく尋ねる。

「ずっと、シンカに甘えていたから、つい。もっと大人になつてつて」

「別に悪いことじゃないじゃない？」

「そうね。でも、私には、この子の生きてきた道はわからないわ。

シンカが何であんなに甘やかすのか分からなかった」

ガンスが少し笑った。

「あら、私ならあれくらい、やさしくしてくれる男がいいわ。セイ、あなたいい男に恵まれなかったんじゃない？」

「俺みたいなの、ね」

黒髪の男が、戸口に立っている。

シキは白いシャツに白い合成繊維のブルゾン、織り柄の入ったグレイのパンツをはいている。このグレスデーンの乗員服だ。

すっかり地球人らしい感じだ。背が高く体格がいいので、様になっている。長く伸びた黒髪はそのままだが、返つて野性味を増して色っぽい。

「シキ！驚かせないでよ、シンカは？」

ガンスが、口元に人差し指をあてる。

思わず声が大きくなって異湖とに気付いて、セイ・リンはあわてて黙った。

その様子を、にこやかに見つめながら、シキが答えた。

「医務室で眠っちゃった」

「そう」

シキは気を使つてか、ベッドの見えない位置で壁に寄りかかったま

ま、話し出した。

「あいつはさ、親も故郷もなくして、ぼろぼろだったけどさ。ミンクを守るうとする責任感で、あいつ自身を普通に保っていたんだと思う。俺が出あった時、ひどく気を張ってた」

「まだ、十七歳だって言うのにね。なんだか、つらいわね」
ガンスがぼつりと言った。

「さて、この子は当分、安静よ。シンカのユニイラがどのくらい持つのか分からないから、目が離せないわね」

「ありがとう。ガンス」

シキが、深く頭を下げた。

「やあねえ。シキ。これが私の仕事なんだから。次は可愛い坊やねむさくるしい男たちばかりだったから嬉しいわよ。私は」

五十歳は過ぎていると思われる恰幅のいい女医は、にっこりと笑った。

セイ・リンは二人を見送って、ベッドの横のソファに座る。

シキたちは地球に向かうと言う。セイ・リンも、カツツエに同行を命じられていた。

シキの言葉から、自分が始めてシンカとであつた時を思い起こしていた。研究者ほど幼い頃のシンカを知っているわけではない。だから、予想していたより遅く生意気に感じた。

スクリーンや映像でしか知らないシンカは、自分がそれと知って涙した。

怒って、悲しんだ。

やはり、普通の子供ではなかった。

シンカがどんな生き方をするのか、見てみたくなった。手助けした

くなった。だから、帝国軍を抜けたのだ。

カツツエが、要求することは、実行できそうもない。

「もし、シンカが皇帝の手に落ちたら、シンカを殺してほしい」

カツツエ・ダシアス。あの顔であの笑顔で。よく、そんなことがいえる。

セイ・リンはため息をついた。

ミンクの状態は、徐々に良くなっていった。シンカの血液を口から摂取したことが返って良かったとガンスは言った。

輸血のような方法は、やはりまだ危険なのだ。

シンカは女性乗務員がうらやむくらい、毎日ミンクのところに通った。

「お前はほんとに尽くすタイプだな」

「シキにも尽くしてるだろ？」

「足りない」

「ほんとにわがままだな！」

笑うシンカ。

その笑顔が以前よりずっと優しげになったことに、シキは気付いていた。

ミンクを失うかもしれないと言うショックが、変えたのかもしれない。以前に増して、シキにも、ミンクにもみんなに気を使うようになっていく。

最後の最後で、自分だけで何とかしようなんて。全部自分で背負お

うなんて考えるなよな。

シキは、一抹の不安を覚える。

10・カツエ8

グレスデーンは、月にあるミストレイア・コーポレーションの基地に到着した。

あの、皇帝と通信した日から、二百四十時間がたっていた。

途中の磁気嵐や、帝国の警備艇から逃れるために、時間がかかったのだ。

そこからは、グレスデーンではなく、小型のシャトルで地球に行かなくてはならない。

通常、宇宙船はすべて、宇宙空間で作られる。専門のステーションが惑星のはるか上空にあり、そこで無重力空間を利用して製造される。

つまり、大型の宇宙船が離着陸するステーションは惑星上にはないのだ。

人々は、月からの定期的なシャトル便で地球と月を行き来する。

シャトル便「ムーンスタナー」は、公共交通機関として、最も需要が多い。

三時間おきに地球に向かって飛び立つ。これは、スターバンク社の子会社が運営しており、カツエから渡されたスターバンク社のパスポートで四人はすんなり乗ることができた。

目的地は、首都、ブルブル。

そこに、皇帝のいる中央政府の建物があり、研究所も隣接している。ミストレイアの諜報部員の情報では、その建物のどこかに、レクトがいるらしい。

シンカは、地球人の標準的な服装をしていた。ハイネックの黒いノースリーブに、黒いふわりとしたパンツ。

すねのあたりで絞られていて、ブーツに収まるようになっていた。

黒いブーツには金色のラインが入っている。

これには、警備センサーをかく乱させるための装置が仕込まれていた。

肩からかけた、長剣は、今の地球の治安であれば、誰もが装備する程度のものだ。シキも、腰に剣を挿している。

乗務員服に黒いコートを羽織り、シンカと同様のブーツを履いている。

目立ちたくなくてそうしているのに、シキはやけに目立った。

もちろん、シキの横に立つ、赤毛の美しい女性にも、人々は視線をひきつけられた。

「ミンク、すねてた？」

セイ・リンが小声でたずねる。

「そうでもないよ。ちゃんとなだめてきたから。」

自信ありげに、シンカが笑う。

「そのほうが、いろいろとやりやすいしなあ。」

ジンロがつぶやく。

「あ。なんだよ、大人のくせに、見せ付けて。」

シンカは、セイ・リンがシキの腕に手を回すのを見逃さない。

「恋人同士に見えたほうが目立たないでしょ？」

シキの肩にもたれかかりながら、セイ・リンがウインクする。

シキは、シンカの期待する顔をしていない。無表情だ。

「なんだよ。緊張してんだ。」

少年がからかう。

「うるさい。」

シキに額をこつんとやられる。

「緊張感ないなあ、お前ら。」

あきれるジンロ。めずらしく、笑っている。

混雑したシャトルは、指定席が取れなかったので、四人は窓際に立っている。

青い、美しい星が見える。

「リユードに似てる。」

「ああ。」

ジンロ以外は、初めて見るのだ。ここから、地球人が宇宙へ旅立った。

その科学技術がなければ、各惑星はいまだに、他の惑星に生命があるなど知らなかっただろう。そういう意味で考えれば、地球人の功績は大きい。

シンカは、改めて、星の大きさを感じた。

人間が、何をして、どんなに進化しても、この星はきつと、こうして変わらず青いままなんだろうな。

同様に、たとえ、リユードの人々がすべて滅びてしまっても、あの星は、きつとあのままだ。カンカラ王朝が滅びたときも、そして、今も変わらず青い美しい星だ。

ユンイラは、星が自分を浄化するために生み出したものなのかもしれないな……。

11・地球

シャトルから青く見えた地球は、近づくにつれ、そこに含むさまざまなものを見せつける。

ちょうど、ブルブルは夜だった。都市の夜景がもう一つの宇宙のように煌いている。まるで、大きな星雲のようだ。

大気がにごっているのか、薄桃色のもやがかり、それを透かして街灯りがちらちら輝いている。それは、ぐんぐん近づいて、高く伸びた高層ビルが、幾重にも重なる黒い影が見える。

たくさん空を飛ぶ乗り物が、群れになって飛んでいるかのように、建物の間を縫っている。

無機質な大都市は、騒音とぎらぎらしたネオンであふれていた。

シンカは圧倒された。

「すげえな。」

シキが何気にセイ・リンの肩に腕を回しながら、つぶやく。

「私もいくつが惑星を回ったけれど、こんな大規模な都市は初めてだわ。」

「シンロは？」

シンカが、腕を組んでじつと景色を眺める男に声をかける。

「・・俺は、ここのリドラコロニーで育ってるからな。見飽きるくらいだ。」

故郷に戻ってきたにしては、あまり嬉しそうではない。

「さて、到着だ。行くぞ。税関は通れない。まず、地下に行くか。」

「地下？」

歩き出すシンロを目印に、人ごみに踏み込む。シキたちも後に続く。

ここ、地球は、地上と地下、二つの都市があるとシンロが言った。地下には、普通の人々が暮らしている。地上は、特権階級だけだ。彼らにしてみれば自分たちが普通で、地下にいるのは野蛮な下層民

だと呼んでいるらしいが。

「俺はもともと、地下にいたんで。」

ジン口が言う。

「特権階級のやつらと、俺たちは、人生が違うっす。けど、あきらめきれない連中もいるっす。地下には、そういうレジスタンスが縄張りを持っていて、こぜりあいしたり、帝国軍とやりあったりしてるっす。」

俺みたいに、自由に生きたい人間には、住み心地が悪い。俺は、特権階級のレクトさんや、カツエさんを尊敬しているっすよ。

到底、かなわないと思うっす。けど、それはそれ、俺は俺にしかできないことがあって、そこをレクトさんに買ってもらっているっす。

「

シンカは、背の高いがっしりした男を見つめる。いろんな、経験をすべて飲み込んで、本当は仕事のためならどんなこともできるのに、それを匂わせない。

相手に、緊張感を持たせないのんびりした雰囲気。でも、同じ顔で、誰かを殺すことなんてぜんぜん平気。

怖い男なんだ。

初めて、出合ったときには、剣を交えても、その怖さを感じ取れなかった。

我ながら、子供だったと思う。

エレベーターを出ると、そこは確かに地上とは違っていた。

古い建物、不潔な路上に、横たわる人や座り込む若者。飛んでいる乗り物も、地上で

見たほどは多くない。薄暗く、じめじめしている。

「皇帝の中央政府ビルの地下に、廃棄物処理場があるんすよ。そこから、入るのが一番だと思うんで。」

「ジン口は入ったことあるのか？」

シキが問う。

「ああ。俺たちは何かと、忙しいんでね。」

三人は、ただジンロについて進むしかない。

途中のバーで、ジンロが休憩を取る。

薄暗いバーで、シンカの金髪と、セイ・リンの赤毛は目立った。人々の視線を感じながら、あまりおいしくないスープを飲む。

カウンター越しに、太った女性がシンカを覗き込む。

「あんた、家出かなんかかい？ジンロにだまされてんじゃないの？
売られちゃうよ。」

小声で、ささやく。

「え、大丈夫だよ。」

につこり笑うシンカ。薄暗い照明にも、蒼い瞳が輝く。

「いや、もつたいたないねえ、うちで引き取るうか？」

「おいおい、やめてくれっす。ドンナ。地下を見てみたいっす言うから案内してるだけっすよ俺は。お連れさんが怖いんだ、下手なこ
と言わないでくれっす。」

シキを指差す。シキは、睨みながらも、すでに二杯目を飲んでいる。
横のセイ・リンも、グラスを傾ける姿がさまになっている。

なんだよ、俺だけいつも子ども扱いだよ。

シンカは、お酒の入ったグラスを恨めしそうに睨む。

睨んだだけで、口に入れるのは冷めたスープなのだが。

地下の町は、シンカの知っているアストロードとはまた違った。け
だるい空気が漂う。

その中を二時間ほど歩き、四人は大きな建物の前についた。そのま
ま地上まで続いているらしいその建物は、一番上まで見ることがで
きない。

頑丈な扉がついていて、そこには近づくと言う意味の文字が刻ま

れている。どこをどうやったのか、ジンロは器用に扉の横の機械を操作する。

音もなく、ゆっくりと扉が開く。

中は闇だ。ジンロに背中を押されて、三人は入っていく。

背後で扉が閉まった。

同時に、足元にだけ、小さな灯りがぼんやり点った。

「これが、センサーっす。このブーツを履いている限り、こいつに引っかかることはないっすよ。」

四人は、たくさんの水の入った池のような設備や、背の高い透明なタンクに、泡を立てる液体が流れ込む施設の、多分、点検用通路と思われるところを進んでいく。

所々、いやな匂いがしたり、蒸気が充満していたり、快適ではない。通路の終わりに、小さなエレベーターがある。

ジンロは、持っていた荷物から、小さい機械を取り出し、エレベーターの横の壁にある配電盤を開けた。そこに、機械をつなぐ。

機械は端末のようなもので、そこに何か打ち込んでいる。

「これで、いい。この先は、全部モニターで監視されているっす。だから、こうして、監視カメラのデータを凍結して、俺たちが映らないようにするっす。」

エレベーターが動いているって情報も消えるっす。」

「すごいな。」

シンカが感心する。

「この辺は、レクトさんに教わったっすよ。あの人は、こういうことに関してはすごいから。」

「そうね。」

くすりと、セイ・リンが微笑む。レクトは大佐になる前には帝国軍情報部の将校だった。

朝飯前だろう。帝国も厄介な相手を敵に回したものだ。

11・地球2

レクトはベッドに横たわっていた。

黒く鈍く光る壁に囲まれた、狭い部屋だ。

中央政府ビルの上十階ほどにある、拘留施設であることはすぐに分かった。帝国軍の大型艦船の中で、レクトは五日後に目を覚ました。いくらかの火傷と、飛び散った栽培所のガラス片があちこちに刺さった状態だったらしい。

ガラスの裂傷は、まだ、完全には癒えないが、傷口の保護シートによって日常生活程度の行動はできる。

外傷を伴わない怪我については、よく分からなかった。なにしろ、医者は何の質問にも答えず、薬や点滴の説明も何も無い。

地球に到着した七日目には、苛立ちで医者を殴りかけた。

翌日から、レーザー銃をあてがわれての治療となってしまった。

我ながら、情けない状態だな。

レクトは思う。

どうして、あの時、シンカの頼みを受けて危険を冒したのか。今考えても、分からなかった。

とっさに、そう、行動したくなったのだ。カツツエに言わせれば、大ばかやろうってところだな。

冷静に考えれば、あのミンクとやらが体調を崩したとしても、すぐに死んでしまうわけではない。

自分が、自分の組織すら危険にさらして行動するほどのことでもなかった。

どうも、シンカにかかると俺らしくなくなってしまう。

あいつが、ロスタナスに、似ているからか・・・。

まあいい。

カツツエなら、俺が自力で脱出するのを待つか、政治的に手を回す

だろう。さて、どうするか。

ついでだから、リトード五世に聞いてみるか。聞いたかったことがある。

それもいいだろう。どちらにしろ、時間はある。

レクトは、前髪を振り払う。少し伸びただけでうるさく感じる。グレスデーンで雇っている美容師は、三日に一度は、手を入れてくれていた。

それが、もう十日以上ものび放題だ。後三日もそのままでは、シンカと同じくらいの長さになってしまふ。気に入らない。

「煙草が吸いたいなあ。」

ポツリと声を出す。一人でいる時間が長いと、独り言が増えると言う。こんな感じのことか。

薄い灰色の天井は、中心に換気口がある。

天井全体に点在する小さな照明は、適度な暗さで、今が夜だと言うことを表している。

昼間は少し光度が上がる。窓一つない、小さな四角い部屋。レクトが歩いても五歩行けば突き当たる。

軍隊生活が長かったせい、空も太陽も宇宙も見えない環境や狭い部屋などは気にならない。ただ、煙草は吸いたかった。

気になっていた、いくつかの仕事を思い出しながら、ベッド以外何もない部屋を歩いてみる。継ぎ目一つない壁、騒がれてもいいように防音が施されている。

この二十階の拘留施設は、政治犯や帝国が表立って逮捕できない人間を拘留するためのものだ。レクトも何人か、ここにぶち込んだ記憶がある。

限られた者しか、この存在を知らない。皇帝と、側近、情報部の将校以上の者、帝国政府では大臣クラス。だから、この部屋には監視カメラはない。

カメラがあれば、その回線を探ることで存在を知られてしまつから

だ。

その分、気楽でいいが。

通常、この部屋にはベッドだけだ。だが、今は、レクトのために栄養剤の点滴の機材がある。体温を測る機械、体調が悪い場合の呼び出しボタン。

くつく。笑った。

ずいぶんいい待遇だ。

再びベッドに横たわる。点滴の針でも、とっておくか？医者は気付くだろうか？

いくつか、脱出のシュミレーションを頭に描き、一人にやにやしている。

ふと、誰かが入ってくる気配がする。いつもとは時間が違う。

体を起したのと、扉が開いたのと同様だった。黒い、すその長い衣装を身につけた、長身の男が入ってくる。頭には黒いフードを深くかぶり、顔は見えない。

「またか。何の用だ。皇帝陛下は暇を持て余しているのか。」

レクトは、あからさまに眉をひそめて、再びベッドに横たわる。

「相変わらずだな。」

低いガラガラした声でリトード五世は笑った。

「。。。。」

「今だ、母親のことが忘れられぬか。」

皇帝が、黒いフードの下で笑う。

レクトは、栗色の前髪が視界を妨げていることも無視し、険しい視線を天井に向けている。

母親。それが今の自分にとって、大して意味のないものとは思っている。

彼女の記憶は少ししかない。

自分の生い立ちに疑問を持ったことなどなかった。ただの、孤児。里親はいたが、大して裕福な家庭でもなく、ごく普通に育った。

大学在学中に情報部に所属し、その時に、里親とは縁を切った。

彼らは、俺を死んだと思っているだろう。

髪の色を変え、名を変えて。

得るものに対して、失うものも当然ある。

そうして生きてきた。

何も失うことなく、全てを得ることなど、不可能。

そうして、手に入れた地位を、捨てる気になったのは、自らの出生と、母親が皇帝に殺されたことを、知ったからだった。

母親の死の理由を知ったからといって、別に何ということはないはずだった。

しかし、母を死に追いやった人物を目の前にして、冷静でいられないのは、不思議な感覚だった。

自分自身、理由が分からない。

ただ、この男を目の前になると、苛立つ。

だから、帝国軍を辞めた。

それだけのことなのだ。

一つ小さく息をついて、話し出した。

「何のために、俺だけ残した。」

「残した、とは？」

皇帝が逆に尋ねる。

「俺と同じように、あんたの血を持った奴らが、五人はいたはずだ。研究資料にあった。皆、行方が分からない。どこにいるんだ？」

「知らぬな。」

「何を企んで、俺たちを産ませた？後継者にするつもりではなかったのか？」

高齢のリトード五世は、約四十年前くらいから盛んに後継者を望んだ。自らが六十歳を過ぎていたため、人工授精を多用した。

生まれた子供は五人。

それぞれ母親が違っていた。

その異母兄弟の存在を知ったのは、帝国軍を辞してからのことだった。

「どれも失敗だった。レクト、お前すら、我が望みにはかなわなかった。」

ふん、と、レクトは笑った。

「それはラッキーだった。」

嬉しげに笑う男を、太陽帝国皇帝は黙ってみている。フードの下の口元が、笑ったようだ。

「だがな。」

「シンカはやらん。」

言いかけた皇帝に噛み付くように、レクトが言った。

11・地球3

起き上がり、まっすぐ、皇帝を睨んでいた。

「決めるのはシンカ本人だ。お前にも選択肢をやるう。」

低く笑いながら話す皇帝を、気に入らない様子で、レクトは横目で睨む。

再び、ベッドに寝転ぶ。

「このまま、一生追われ続けるのも、得策ではあるまい？」

「・・・選択肢とは、何だ。」

「太陽帝国皇帝に忠誠を誓うか、死を選ぶか、だ。」

あきれたように口をゆがめると、レクトはいやみな笑いを浮かべた。

「ばかなことを。」

「お前は後継者にはなれん。だが、我に似ている。」

「吐き気がするぜ。」

「気付かないか？」

レクトは寝返りを打ち、皇帝に背を向けた。

「我が、お前の母親を殺したように、お前もシンカの母親を殺したではないか。」

「一緒にするな。」

微動だにしないレクトの表情は見えない。

それでも、皇帝は声に笑みを含み、楽しそうだ。

「血は争えん。シンカもさぞ、お前を憎んでいるのだろう。」

くくく、と低く笑う。

「・・・あいつは違う。」

ぽつりと言ったレクトの声が、皇帝に聞こえたかどうか。

「レクト、忘れるな。お前に与えられた選択肢は、皇帝に協力し、太陽帝国の政治を行うこと。断るのならば、抹殺。

お前はお前の選択肢をどうするのか、シンカを捕らえるまでに考えておくことだな。」

すその長い黒い衣装を翻し、背の高い男は去っていく。

レクトは、脱出することを決めた。シンカがとらわれてしまう前に。カツエが、選ぶだろう選択肢で、一番安全なのは、俺が自分で脱出することだ。

カツエが人質などという罠にはまるわけではないが、シンカがそれに従ったかは、分からない。

どちらにしろ、期限が切られた。なにが、選択肢だ。

レクトの独房を出たところで、リトード五世を帝国軍元帥、メイソンが迎えた。

白髪の丈高い軍人を、皇帝は押しのけるように歩き続ける。

「陛下。なぜ、お認めになられませんか！」

「うるさい。私に意見するな。」

黒い衣装を翻す皇帝に、メイソンは食い下がる。

「待望の聖血者ではありませんか！」

「メイソン、我はお前に許可したか？あれにリングをつけるなど、何を勝手にやっておるのか！」

「しかし、陛下。」

「それとも、お前は勝手に後継者を立て、我を亡き者にしようともたくらんでいるのか。」

「いえ、そんな。」

早足で歩き続ける皇帝の後ろから、メイソン元帥はついていく。

11・地球4

シンカたちは、廃棄物処理場から、研究所の地下室にたどり着いた。そこは、同じ地下でも白く明るく、清潔な感じだ。

「本来は、排気口を進むといいんですけど、研究所の排気は何が含まれてるか、わかったもんじゃないっすから。まあ、この時間なら、そう、人はいないっす。」

ジンロの後について、人気のない廊下を進む。日付の変わった深夜の研究所は、ただ白い灯りが静まり返った廊下を照らしている。

足元のセキュリティセンサーも稼動している。つまり、誰もいないと言うことだ。

四人は、非常階段を使って、研究所の五階まで上がった。そこから、中央政府ビルへ続く連絡通路がある。通路は、所々、防犯のシャッターが下ろされていて、通れない。

ジンロは、防犯シャッターの脇にある、通用口を小さな機械を使って警報が鳴らないよう、器用に開放する。

後一つで、政府ビルというところで、ジンロが、三人を振り返った。

「ここからは、警備兵がいるっす。レクトさんがいるはずのここは、二十階で、エレベーターを使うっす。」

もし、エレベーター内で警報が発動したら、自動的に一番近いフロアで止まるっす。

警報を鳴らされると、そのフロアは閉鎖されるんで、廊下の天井にある排気口に隠れます。その時は、撤退っすよ。

俺たちが捕まったら、かなりやばいっすから。レクトさんと合流したら、レクトさんに従う。あの人は、ここに詳しいっす。」

だまって、三人はうなずいた。

「しかし、便利だよなあ。」

シキがひそひそとシンカに話しかけた。

「こいつ着てれば、あのレーザー銃も通さないんだろ？」

服の下、少しずつしりと重いベストをつついてみせる。

「通さないってだけなのよ。」

セイ・リンが笑った。

「衝撃や痛みはあるし、腹部は場合によっては被弾するわ。」

「油断するなってさ、シキ。」

「はん。お前こそ、気をつけろよ。」

そこで拳をこつんとやりあう。

「ほんとに、緊張感ないっすね。」

あきれるシンロ。

最後の通用口を開くと、四人は、シンロのタイミングに合わせて、入り込む。

そこは、政府の職員用レストスペースで、市街を見下ろせる大きな窓に、カウンターがついている。

背もたれのないイスが幾つか並んでいる。脇に、壁に埋め込まれた飲み物のディスプレイがある。

たしか、同じようなものが、デイラの研究所でもあった。そこを過ぎると、広い廊下に突き当たる。

シンロが、壁の配電盤で、また、カメラの操作をする。フロアごとに制御が必要だと言う。

シンロの合図で三人は廊下に出る。広く天井も高い。

片側が、大きな窓になっていて、市街の夜景が派手な模様を作っている。中二階あたりの位置に、窓に沿って手すりのついた通路がついている。

その通路は、シンカたちのいる廊下とは別の、どこか奥のほうへと続いている。誰が使うのだろうか？

まるで、廊下を歩く人々を見下ろしているような、通路。

「あれは、皇帝専用の通路つすよ。あそこから、職員の様子を見下ろしているとか。」

「ふうん。」

気になりながらも、シンカは三人の後に続き、エレベーターに乗り込む。さすがに、人気はない。

警備員の巡回も、この広い建物ではそうそう、行われるものでもないだろう。

エレベーターは大人が二十人くらい乗っても、狭さを感じないくらい広い。

シンロが二十階を選択しようとする。

「！」

シンロが小さく舌打ちした。

「どうした？」

シンカが小声だたずねる。

「やっぱりつす。二十階は、特別なフロアなんすよ。普通じゃ止まれないつす。一つ上のフロアから、いくしかないつすね。」

「でも、二十階、点滅したぞ。」

シンカが、表示板をじつと見る。シンロも驚いて表示を確認する。

すると、エレベーターが動き出したようだ。音もなく、振動もなく、ただ、表示板の数字だけが増えていく。

「誰かが、二十階から呼んだんだわ！」

セイの言葉に、シンロはうなずいた。

「こっちからの操作は拒否されてるつす。」

「着くぞ！」

四人は、構えた。

扉が開く。同時に、シンロが、ナイフで突きに入る。

相手は黒い服の男六人だ。

シンカも短剣を構えて、黒服の男、大きなゴーグルのようなもので顔半分を隠している、かなり鍛えられた男に突きを見舞う。

「その子供を殺すな！」
ガラガラした低い声がかかるように響いた。

「皇帝！」

セイ・リンが黒服の男を後ろから締めながら叫んだ。

「！」

その時だった。頭上から誰かが飛び降りる。

セイ・リンが相手していた男を一撃で倒した男は、にやりとしながら黒服の銃を懷から取り上げる。

「レクト！」

レクトは下のフロアで見たような中二階あたりの、やはり窓際にある通路から飛び降りたのだった。

黒服を押しつけて、一瞬シンカの顔に笑みが浮かぶ。

その瞬間だった。

ものすごい力で腕を引かれ、シンカは肩から床にたたきつけられる。

「・・・っ」

すぐに起き上がれないシンカを、黒い腕が抱えて走り出す。
なんだ・・・？

「シンカ！」

シキの呼ぶ声がすでに遠い。

シンカを片腕で抱えて走るその男は異常に速い。ごっごつした腕、まるで、機械のような。

「はなせっ！」

もがいてもびくもしない。挟まれて両手は自由にならない。

皇帝は、鉄の腕を持っていた。異常なスピードも、百歳とは思えない。

11・地球5

「これは、元帥。お久しぶりですな。」

レクトは目の前の元上官に銃を向けた。

「まあ、待て。」

元帥は両手を前に出し、戦意のないことを示した。

「メイソン元帥、どいていただけますか。」

眉をひそめて、レクトが睨みつけた。

目の前の黒服を倒したシキが、立ち止まっているレクトの肩を叩く。

「おい、シンカを追うぞ！」

「まあ、待て、大丈夫だ。シンカは危害を加えられたりしない。」

メイソンがシキの前に立ちふさがる。

「どけよ！」

飛び掛ろうとするシキを、レクトが止めた。

「なんだよ、止めるな！」

シキは見詰め合っているかのようなレクトと老人を睨んだ。

ジンロも、セイ・リンも、二人の様子を見ている。

「久しぶりだな、レクト。」

「元帥、私たちはシンカを助ける。邪魔しないでいただきたい。」

「助ける？大丈夫だ。我々は彼を、後継者として迎えるつもりだ。

危害など加えない。」

メイソンの言葉に、レクトは不機嫌に眉を寄せる。

「それを、あの皇帝が、認めるならばな。だが、俺にはそうは思えん。」

「おい、何なんだよ、その後継者って。」

「あの、それは、どういう。」

シキとセイ・リンが同時に声を出す。

メイソンは白いひげを軽くなでて、話し始めた。

「シンカ、彼はそのように育てられているのだ。生まれたとき、彼のもつDNAが、皇帝の後継者としてふさわしいことが分かってな。」

「はあ？」

シキがへんな返事をする。それは、ロスタネスの後継者という意味ではなかったか。

「ユニイラのためでは、ないのですか？」

セイ・リンも、険しい表情で見つめる。研究者たちはそう命じられていた。ダンも、そのために命を懸けたのだ。

「そういうつわさも立ったが。そんな、あやふやな植物の成分より、稀にしか生まれない聖血者としての存在が重要だ。」

「せいけつしゃ？」

「確かに、知るものはほとんどいない。研究所でも知らずに育てただろう。」

元帥の話を、レクトが引き継いだ。

「皇帝になるにはな、三つの、特別な遺伝子が必要なんだ。どんなに血がつながっていても、それがなくては皇帝にはなれない。」

その遺伝子で作られる、脳神経内の伝達物質が、星間ネットワークの中枢に使われているからだ。ネットワークを維持していくために、皇帝の遺伝子は不可欠。

同時に皇帝によってネットワークは守られているわけだ。それを持つものを、聖血者と、政府内では呼んでいるんだ。」

「そう。だから、彼は皇帝の後継者として迎えられるべきなのだ。」

レクトは大きく首を横に振った。

「元帥、リトード五世に、その意思があればいつています。あの男に、誰かにその地位を譲るなどという考えはない。」

シキは、頭を抑えている。

「わけが、わからん。」

「・・・そうね、なんと、言っていないか。」

ジンロも、黙り込んでいた。

カツエも知らなかったのだろう、だから、シンカが捕らえられたら殺せと、ユンイラが皇帝に悪用される前に、殺せと、ジンロは命じられていた。

「あの、レクトさん、どうするんで？」

「もちろん、始めと同じ。助け出さず。皇帝は、シンカを後継者などにするつもりはない。ただ、利用したいだけだ。」

「レクト、まだそんなことを。お前は、母親のことで陛下を憎んでおるだけだろう！」

たしなめるように低くうなる元帥。

ふん、と息を荒く吐くと、レクトは冷たい視線を元帥に向けた。

「あれが後継者にする待遇か？何も知らされず監視され、無理やり地球に連れて行くことが。元帥、皇帝が認めているとは思えない。俺はシンカを自由にすると約束したのだ」

「レクト」

「太陽帝国を敵にまわす事くらい覚悟しているさ。まあ、どう歴史が動くのか、ご老体も見届けてください」

「生意気な口調は、変わらん」

苦笑して元帥は一步下がった。

「行くぞ」

走り出すレクトに三人も従った。

「好きにするがいい。だが、レクト。陛下にもしものがあれば、責任を取ってもらうぞ」

背後から、メイソンが声をかける。

「殺しはしません！ご安心を」

11・地球6

来たときとは違う、狭いエレベーターの中で、皇帝の脇に抱えられたまま、シンカはもがき疲れてぐったりしていた。

手に持っていたレーザー銃で、皇帝を撃つても、黒い衣装で跳ね返るだけだ。

背中の剣は、この体制では抜くことができない。銃身で殴っても、たたいても、びくもしない。

がつしり捕まれた腕と体がしびれるほど痛い。

「放せよ。あんた、人間じゃないだろ。」

「老いれば、体の自由が利かなくなるからな。多少の治療も必要になる。」

無機質な声で、皇帝は笑った。

眠らされてはどうにもならない、今はおとなしくついていくか。

シンカは考えた。機械の体は別としても、皇帝もやっぱり一人の人間なんだな。もっと、厳重な警備の奥にいて、指示するだけでふんぞり返っていると思った。

かなりの高さにまで登った。さっきのエレベーターがほぼ十五、六秒で十五階登ったことを考えれば、今はもう、百五十階くらいには着ているだろう。

首をひねると、窓からうつすら白んだ地平線が、逆さまに見えた。

まだ、黒い街の影は、色とりどりの明かりで輝いている。

エレベーターを降りると、そこには側近らしき従者が控えていて、皇帝が抱えている荷物を見るなり言葉を詰まらせた。

「陛下・・・」

「二十階にレクトと、ねずみが三匹いる。捕らえておくのだ。殺すでないぞ。レクトだけ、ここに連れてくるのだ。」

「はっ！」

皇帝の背後しか見えないシンカには、側近の姿は見えない。広い部屋に入ったようだった。頭に血が上ったのか、重い。目がくらりとする。

また、皇帝が誰かに向かつて、命じる。

まだ他にも従者がいるのか？相変わらず子供が抱えるぬいぐるみのように、黒い腕に縛られたまま、シンカはぼんやりしかけた耳を澄ます。

「ユウリを呼べ。」

ステーションの研究所にいた彼女だ。生きていたのか！

シンカからは、床しか見えない。

首を回しても研究所にあったようなコンピューターしか見えない。程なくして、「陛下、ユウリです。入ります。」と声がして、ドアが開いた。

「お呼びです……。シンカ！」

「眠らせて、我の研究室に運ぶのだ。」

皇帝の命令にユウリは少し躊躇したようだ。

「分かりました。」

横にユウリが立つのが分かる。薬を使う気だ！とつさに膝でユウリを蹴った。

「きゃあ！」

一瞬緩んだ機械の腕をすり抜けて強引に腕を抜く。シンカは頭から床に落ちながら、レーザー銃で皇帝の頭を撃った。

「ぐあっ！」

むなしくはじかれる。が、さすがにひるんで顔を覆う皇帝。

シンカは、その隙に皇帝の手から逃れると、部屋の扉を開けようと駆け寄る。

開かない。頭に血が上ったためか、視界がぐらつく。

「シンカ！」

背後に駆け寄るユウリを振り向きざまに捕らえて羽交い絞めにする。短剣を首に押し当てた。

「皇帝、ここを開ける！」
くっく。

皇帝は小さく笑いながら、覆っていた手を離した。

！

フードが外れ、あらわになった皇帝の顔は、グロテスクな機械の顔だった。

黒い人工の瞳がぐりぐりと動き、シンカを睨む。頭には透明なカプセル状のものに入った脳。

青い液体に浸かっていて皇帝が一步進むたびに小さな泡が立つ。

「止まれよ！」

ドアを背に、女を脅したまま、後ろに下がる。ドアに当たる。

「お前に、その女を殺せるのかな？」

シンカは、とつさにユウリのみぞおちを狙って、気絶させる。

皇帝の黒い手が伸びる。背中 of 剣を抜きながらかわし、皇帝の首を狙ってなぎ払った。

ガッ！

強い衝撃と同時に、機械の腕に振り払われる。

はじかれた長剣は、部屋の隅に転がった。

剣では、齒が立たない。

「化け物！」

振り下ろされる機械の手をよけながら、シンカは大きな革張りのソファアのほうへと逃れる。

広い部屋には、このソファアとテーブルのさらに離れた奥に別の部

屋があるようだ。

大きなどっしりした執務用のデスクの横をすりぬけて、そのドアへと向かう。

「お前も、同じ化け物だと聞いたが。」

くつくと笑いながら、皇帝の左手がまっすぐ伸ばされ、人差し指がシンカを狙う。

「！」

黒い指先から、白いレーザーが放たれた。

左腿に激痛が走る。

転んだ勢いで、壁にぶつかる。

ドアのすぐ前だ。

「おや、平気ではなかったのか？」

痛がるシンカの表情を、ぐるぐる動く黒い眼球が嬉しそうに見つめる。

柔らかな毛皮の敷き詰められた床を、音もなく近づいてくる。

シンカは、出血する傷口を手で押さえ、痛みにゆがむ視界で、皇帝を睨みつけた。

ぎりぎりまで、回復を待つ。血は止まった。表面の傷はただが、

骨は大丈夫。動かせるのか。

黒い影が近づいてくる。

「傷が治ると聞いた。その、蒼い瞳はどうなんだ？ 撃ち抜いても治るのかな？」

ぞわりと、背筋が凍る。

黒い手が、のばされる。シンカの顔に触れる寸前、手首を捉えてねじりながら引き倒す。

同時に足を払った。

さすがの皇帝も、少しぐらつく。重い体は、バランスを崩して、手を床についた。

その隙に、シンカは左手をのばし、ドアを開けた。
背後の扉がなくなり、転がるように入り込む。

暗い。

かすかな機械音。

皇帝の入ってくる気配を感じてシンカは部屋の奥に駆け込む。まだ心臓をつかまれ
るような痛みが残っている。

「面白いな、シンカ。」

皇帝の声は笑みを含んでいる。

扉が閉じられると同時に白いまぶしい明かりが点された。目を覆う
シンカ。

「シンカ！」

シキの声。

脇にレクトもセイ・リンも、そしてシンロもいる。

皇帝が振り向き、いやそうに首を振った。

「役に立たんな。」

先ほどの側近への言葉だろう。

皇帝を囲むようにして構える四人。シンカは皇帝の背後を見つめな
がら、室内を観察する。

広い部屋は白い壁に囲まれ、宇宙ステーションで見た研究所の設備
とほとんど同じだった。

ただし実験用の台は三つ。その分設備が充実している。先ほどユウ
リに指示した研究室とは、このことなのか。

「うへ、これが太陽帝国皇帝かよ。」

シキが皇帝の姿を見ていやな顔をした。

「シンカ大丈夫か？」

レクトがシンカの怪我を見て取って声をかける。
「シンカ！」

足を押さえ座り込んでいるシンカに、駆け寄ろうとしキが歩きかける。

皇帝がその頭を指差す。

11・地球7

「シキ、伏せろ！」

シンカの声と同時に白光が空を薙いだ。寸前で避けたシキの髪がいく筋か、はらりと床に散った。

「あぶねえ」

「やはりな。皇帝、シンカを後継者とするのではないのか？」

レクトが壮絶な笑みを浮かべている。取引だのと持ちかけるふりをするが、結局は自分に都合のいいようにするのだ。周囲や元帥が何をどう言っても聞くような皇帝ではない。

シンカを救おうとリユードに潜入しあの街を破壊した、レクトの行動は間違ってはいなかった。

皇帝は嬉しそうに笑った。

「くく、後継者など、馬鹿なことを。こんな子供に何をさせるといふのか」

「何だよ、後継者って」

シンカが睨みつける。

「それに子供っていうな」

それがカツエが言っていた、皇帝やレクトが隠していた目的なのか？

シンカは皇帝の後姿と、レクトの表情を見比べていた。

皇帝は凶器を仕込んだ指をゆっくりとセイ・リンに向けた。

「危ない！」

シンカが叫んだときには、赤毛の女性は肩を押さえて倒れかかる。あの防御服も肩は保護できない。皇帝はそれを知っているのか。

レクトの銃から報復のレーザーが放たれるが。皇帝の額にきっちり命中したそれは空しく弾かれ、シンカの腕をかすった。皇帝は平気なのだ、レクトも二発目を躊躇するしかない。

ジン口の銃もシキの間隙をついた剣も、すべて歯が立たないようだ。シキが皇帝に突き飛ばされ壁に打ち付けられて頭を押さえた。

「シキ！」

一人、皇帝の背後にいるシンカは隙を突いて短剣を皇帝の背に突き立てた。厚い黒いマントの布越しに感じるそれは、人間ではない。硬く短剣は一ミリも食い込まず、ぞつとするような甲高い音を立てた。シンカにつかみかかる黒い腕をかわして、四人に合流しようと駆け出した。

レーザーが足先を弾く瞬間に飛びのこうとし、シンカは反動で実験台に腰をぶつけた。

「いて」

「シンカ！後ろ！」

セイの声で振り返る。

肩をつかまれそうになる。腕をひねるようにして振り払うのと、シキが斬り付けるのと同時に。

痛む足を引きずりながら、レクトの横に駆け寄った。

「大丈夫か」

「そっちこそ、大丈夫なのか？心配したんだ」

まじめに話すシンカにレクトは目を丸くし、それから「は」と呆れた息を吐き出した。

「バカが、俺を心配するなど百年早い」

「はあ!？」

「痴話げんかしてる場合じゃないっすよ」

冷静なジンの低い声にシンカは複雑な顔を、改めて皇帝に向けた。皆と合流できたことがシンカを安堵させていた。

「状況は変わらんぞ。シンカ。お前が拒めば、四人は死ぬだけだ」
「なんだよ、それ!」

返事もせずに皇帝のレーザーがジンの胸を撃つ。ジンは構えるまもなく、衝撃で数歩下がった。支えようとしたレクトにも、容赦なくレーザーの光が注がれる。

「やめろ!」

「お前にかかっているのだぞ? お前さえ言うことを聞けば、四人は生きられるのだ。考えてみるがいい、このまま全員を殺し、最後にお前を捕らえることも出来る。せめてもの慈悲だぞ、シンカ。こちらに来るのだ」

シンカの肩をシキが押さえる。

「わかってるんだろ? シンカ。俺はお前のために来たんだ。お前と一緒になきゃ、死んでも帰らん」

「シキ……」

「このままお前を置いて帰ったって、ミンクに殺されるぞ」
そう言っただけはウインクしてみせる。

「そうよ、シンカ」

セイ・リンも笑う。

白い光が赤毛の女性に向けられる。

シンカとシキがそれに気付いたのは同時だった。

「セイ!」

シキはセイ・リンを庇い、二人そろって身を投げ出した。

「シキ！」

シンカが駆け寄る。

シキは腹部を押さえていた。耐熱服も、腹部は弱い。じくじくと血の流れ出すそれにシンカはぞくと震えた。苦しげに息をつくシキはうめくことも出来ずにいる。

このままでは。

「シンカ、一人ずつ、殺していくぞ」

追い討ちをかけるような皇帝に「黙れ！」とレクトが飛び掛る。腕をつかむと、人間離れたその機械の男を全体重をかけて引き倒した。露になった皇帝の首に短剣をつきたてようとする。そこは接続部。弱点ではないかと思われた。

が、剣はむなしい音を立てて弾かれた。機械の腕は尋常でない力でレクトを突き飛ばす。ジンロが入れ替わるように蹴りを入れる。皇帝はそれを受け止めると、横にひねりながら起き上がり、勢いで転がるジンロをさらに蹴ろうとする。

レクトの上段蹴りが皇帝の首を狙う。ぐらりとしめない。二回目の蹴りが腹に入ったが、平然として皇帝はレクトの両肩をつかみ、床に投げつけた。

「シキ！」

「シキ！しっかりしろよ！」シンカの叫び声にもシキの反応は鈍い。

セイ・リンが大きな瞳に光るものをたたえている。シキの日に焼けた腕が伸び、セイ・リンの赤毛に触れた。

「なんで、庇うの！貴方の目的はシンカを護ることでしょう？」

「…シンカなら、分かってくれるさ…一人の女を守るってのも、い

い」

セイ・リンがシキの名を呼ぶ声を聞きながら、シンカは短剣で手首を切った。

シキの腹部の出血を押さえようとしていたセイ・リンをそつと引き離すと、シンカは自分の血を含ませた布を傷口に押し当てた。効くかは分からない。

シンカは塞がりかけた傷口をさらに切り裂き、布の上から血を滴らせる。震えるほどの痛みも、失うことを思えば気にならなかった。あの時のミンクと同じ。失うわけには行かない。

大切な友達だ。

「シンカ…？何、してる」

シキのかすれる声。かすかに青ざめた頬に赤みが差した。

「俺は、どうせ長くない、お前も知っていただろ」

「違うよ！リユードを出れば、ちゃんと治療すれば治るって、言っていただろ！」

「…お前に会えて、最後にさ、俺らしく生きられたと、思うぜ…」
「だから、死なせないってば！」

シンカは血にまみれた手で涙をぬぐった。

「ユニイラは、嫌いかもしれないけどさ。俺、シキを死なせるわけには行かないんだ」

シンカは穏やかに笑っていた。

その笑顔は、いつか見たことがある。

シキは思い出した。カンカラの遺跡で、遠くを見ながらいつか空を飛ぶ乗り物に乗ってみたいと話した時。思いつめ、何かを考えている瞳。

セイ・リンも思い出していた。ステーションのコロニーで、レクト

から逃げ出すことを決めたとき。真実より、自分の意志を選んだとき。笑顔だ。

「おい！シンカ！」

シキが、止めようと手をのばす。

それは届かない。

「だめよ！シンカ！」

セイ・リンの声も聞き流し、シンカは立ち上がる。蒼い瞳でまっすぐ、太陽帝国皇帝リトード五世を見つめた。

「シンカ！だめだ！」

レクトが叫んだ。その瞬間に皇帝に突き飛ばされ壁にしたたか背中を打つ。

「レクトさん！」

ジンロが背後にレクトをかばう。

レクトは、思い出していた。あのロスタネスの哀しげな微笑を。それを浮かべる、シンカの表情を。

「なんだか分からないけど。要求をのむよ。好きにすればいい」

シンカの言葉に皇帝は動きを止めた。

そう、始めから、覚悟してきていた。

ミンクのために、ガンスに血清を作ってくれるよう頼んである。戦場で幾人も男たちを送り出してきた軍医のガンスは、黙ってシンカの頼みを聞いてくれた。もし帰れなかったら、ごめんって言うておいてくれるはずだ。

「いいだろう」

皇帝はジンロの足を撃ち動きを止めると、シンカに来いと促した。

シンカは皆の声を聞きながら、皇帝の手の届く距離まで近づいた。

「ユウリ！」

皇帝の呼ぶ声でレクトたちの背後から小柄な女性が恐る恐る入ってきた。先ほどから隣で様子をうかがっていたのだらう。

「シンカに薬を」

ユウリが周囲の視線におびえながらも細い金属の筒をシンカの腕に押し当てた。

ちくりとする。あのデイラの研究所で、セイ・リンが使った薬と同じだろうとシンカには予想できた。

あれ、好きじゃなかったな。

めまいと共にぐらりと視界が揺れる。

「皇帝、シンカに選ばせるといった、あれはなんだったのだ」

レクトの声のようだ。

選択？

身体はますますけだるくなり、シンカは立ってられないほど気分が悪くなっていた。悪寒に手が震えた。

「あれか。我の一部となるか、帝国を治めるか」

「我の、一部？」

シンカが、かろうじて声に出した。

「そうだ。お前は我を倒せなかった。我を凌駕できれば考えないでもなかったが。力ないものは死に値する。お前は我の一部として永遠の命を我に与えるのだ！」

「！」

「永遠の命？くだらねえ。」

顔色の良くなつたシキが血の混じつたつばを一つ吐くと、セイ・リンに支えられながら上半身を起した。

シンカは暗くなる視界にシキの様子すら理解できていなかった。思考はしっかりしているのに、どうにも体が自由にならない。耳を塞

ぐ耳鳴りやこみ上げる吐き気と悪寒、震える手足。ついに立って
られなくなつて膝をついた。そのまま、くたりとうずくまる。それ
でも意識の片隅で皇帝の声を聞いていた。

「我は、こやつの素晴らしい体が欲しい」

なに言つてる？

「こやつ細胞は老いないのだ。寿命二百歳のセダ星人でも、十五
歳を過ぎれば細胞の老化が始まる。シン力は、今だ生まれたての赤
子のような細胞を維持しているのだ。恐るべき治癒能力もその理由
の一つ。その永遠の生命力をもった臓器は我に相応しい。移植され、
永遠に我とともに生きるのだ」

「勝手なこと言うな！」

レクトが叫んでいる。

吐き気がする。移植？

何を……俺を？

「我がここまで生きてきたのも、レクト、お前のような私の血を引
く若者の臓器があつたからこそ」

「やはり、お前が殺していたのか！」

「お前の兄弟は、今、我とともに生きている。ここに」
そう言つて、皇帝は機械の体を示した。

「お前は殺すにはいささか惜しくてな。だから、お前の血を引くシ
ン力を作らせた。ユニラの成分で、まさかこんなに理想的な生き
物になると思わなかったが」

「そのために、ユニラを研究したのか？シン力を」

レクトが怒りを押し殺し、低い声でたずねる。

「そうだ。馬鹿なやつらは我が宇宙制服を企むなどと勘違いしたようだがな。この宇宙で我の力が及ばないところなどないではないか。すでに支配されていると言うのに、下らぬことよ」

「貴様！」

座り込むシンカを引つ張り上げ、手術台に乗せようとする皇帝に、レクトが飛び掛った。

「シンカ！」

皇帝の手を払いのけ、レクトは力ないシンカを抱きとめた。かすかにシンカの意識にそれが分かる。

父さん。

つぶやいたのは声になっているのか。

「レクト、そなたの選択は決まったのか？」

「誰が、お前などに協力するか！」

「ふん。死を選ぶか」

皇帝の手が、シンカを守ろうとするレクトの背に当てられた。白い一閃が男の背を突き抜け、シンカの目の前を走った。

なんだ？

肩を抱く温かい腕が、ふとなくなった。

床に座り込んでいるシンカの前に、レクトの意識を失った顔があった。

「？」

レクト？

心臓がどくり、と大きく鳴った。

とう、さん？

血液はゆつくりと男の下に広がっていく。

まさか…。

鼓動が大きく脈打ち、何も聞こえない。
聞こえないが、シンカは叫んでいた。
嫌だ、レクト、死んだら嫌だ。

閉じられた男は、動かない。

栗色の髪がかかる背に、レーザーの跡。
血の匂いが広がる。視界がぼやける。

「レ・・クト！」

あふれる涙を感じる。

ずっと、探していた、父さんなのに。
違うかもしれないけれど。

父さんだと、信じると決めた。

ぐいと腕を引く皇帝に、シンカは蒼い瞳を向けた。強い力に引きずられ、レクトから引き離される。

「太陽帝国皇帝は永遠なのだ！貴様らごときが何をしても無駄だ！」
「父さん」

引きずられながら、シンカの声が震える。

「レクトさん！」

足を引きずって、駆け寄るジンロ。レクトを抱き起こす。

「！シンカが」

セイ・リンが寒さを感じて、シンカを見つめた。
うつろな蒼い瞳は何も見えていない。

それは覚えがある光景。

シンカの体の周りの空気が歪み始めた。

「なんだ？これは、……」

皇帝が異変に気付いた。シンカの手から、熱が奪われていく。
凍っていく。

厚い黒いマントの生地 to 空気中の水分が凍りつき、白い霜となつて
ちりばめられた。それは沁みのようなものから次第に広がり、見て
いるうちに皇帝の腕全体を白く染めた。

「は、はなせ！」

もがいたとたん、機械の腕はミシと嫌な音を響かせ、パシンと碎ける音がする。

限界まで温度の下がったそれは、ガラスのように脆い。

「くそ……やめろ、シンカ」

皇帝は唸るが、既に肩まで凍った手は動かせない。

「おい、シンカはどうしたんだ！なんだ、この寒さは」
シキが背を這う寒気に、身を縮める。

「力が暴走したのよ！研究室の爆破のときも、同じだったわ！」
セイ・リンが叫ぶ。その息は白く急速に凍っていく。

「力……？」

シキはシンカを見つめていた。人間とは違つと聞かされても実感は

なかった。今それを見せ付けるようなシンカの様子はシキには切ない。

「彼の力のおかげで私も救われたわ。あの後、まるで小さい子供みたいに熱を出すの、看病するの大変だったんだから」
セイ・リンのそれはシキを慰めているようにも聞こえた。

シンロは片足を引きずりながら、レクトの体をシンカから引き離した。

「う、…シンロ」

「レクトさん。良かったつす。急所は外れてますが、肺を傷つけてる可能性があるつす。止血もしなきゃならないですし、動かないでください」

恐ろしいほどの冷氣で、レクトの唇は紫色に変わっていた。

「シンカは？」

シンロが、白く光るシンカを見つめる。

レクトもその視線の先を追った。

皇帝は、すでに首まで固まっている。

シンカの体は熱で白く光り、周りの空気のゆがみが、まるでオーラを見せるように煌く。

呪う言葉を吐き続けながら皇帝は少しずつ動きを止めていく。
すでに頬まで冷氣の白に染まっている。

「おのれ、シンカ！キサマ……ユルサン……」

皇帝の声が途絶えた。

脳を包んでいたカプセルが硬質な音を響かせて凍結した。

シンカが白く発熱する手を添えた。身体に蓄えた熱い塊をすべてそこに、その一点に吐き出すように。シンカは目を閉じた。

急激な温度変化に、それは碎け散った。青い液体は美しい宝石のように青くきらめきながら飛び散る。

シンカはそのまま、眠るように倒れた。

レクトは「シンカを」とジンロに指先で合図した。
吐く息が白い。

うなずいて、レクトをそつと横たえさせると、ジンロは少年に近づき恐る恐る触れてみる。

熱で火照っているようだが、熱を吸い取られる感じはない。
そつと、抱き上げる。

足元で割れた破片がかすかに音を立てる。横たわった黒い服装の機械は、グロテスクな姿を晒していた。

「殺しちまいましたね」

ジンロがぽつりと言った。

セイ・リンがシンカの高熱を発する額を押さえる。

シキはユニラが効いたのか、シンカの様子を見ようと這ってくる。

「どうなるのかしら。太陽帝国は」

セイ・リンの言葉にジンロが笑った。

「皇帝一人なくなつて動いていくつすよ。みんな一人一人自分の考えて生きているんだ」

「そうね」

セイ・リンが首を振って息をついた。

「さて、どうやってここから脱出するかっすね」

ジンロが室内を見回す。まともに歩けるものはいない。絶望的だ。

ドアが開き、四人は一斉に振り向いた。

帝国軍を後ろにつれ、メイソン元帥が前に進み出た。

身構える三人。レクトは、青い顔で、横たわったまま老人を見る。

「メイソン元帥」

レクトは横たわったまま、小さくため息をついた。

計ったようなタイミングに、この皇帝の親衛隊を勤める元帥が何を期待していたのかを悟った。レクトの口元には皮肉な笑みが乗る。待っていたのだろう、新たな後継者が、皇帝を倒すのを。

元帥は背後の兵士に武器を収めるように示した。

白衣の医師だろうが、数人駆け込んでくるとレクトやシキの治療に当たる。

メイソン元帥は改めて、ジンロに抱きかかえられている少年の前で膝をついた。

「なんすか？」

ジンロの眉にしわが寄る。

「新たな皇帝として、彼には太陽帝国を支えてもらわねばならん」

「だから、それは」

言いかけたシキが、判断を仰ぐようにレクトを見つめた。

レクトは医師の治療を受けながら、片手を挙げた。止めておけということか。

「どうするかはシンカに決めさせるさ。もう、リトード五世はいないんだ」

「しかし」

シキがシンカを見つめる。目を開けたものの、シンカはまだ呆然としているようだ。

「シンカ、分かるか？」シキの声に、シンカは数回瞬きをする。

「あ？ええと。俺、わけがわかんない、よ」

「皇帝がどう判断なされようと、我らは貴方を後継者として認めています。貴方は皇帝になるべくして育てられた。リトード五世陛下の亡き後、貴方が帝位を継ぐのが本来というもの」

話の内容をやつと理解し、シンカは眉をひそめた。シンカは、ジノ口とセイ・リンに支えられて立ち上がった。

「あの、分からないんだ。俺は皇帝を殺したんだよ？あなたたちだって、受け入れられないだろ？おかしいよ」

く、とかすかに向こうでレクトが笑った気配。

シンカはそちらをちらりと見て、首をかしげる。

メイソンはシンカの正面で膝をついて見上げると、微笑んだ。

「私たちは皇帝に仕えているわけではありません。帝国のためにおります。よりよい未来を築けるのならば、本来、皇帝は誰でもいいですよ。ただ、聖血者の資格は必要です。あなただけなのです。今、皇帝になれるのは。あなたはそうなるために育てられているのです。辺境の惑星にしてはたくさんの事を教えられてきたのではありませんか？そして、期待以上だと報告を受けています。申し分ありませんよ。あなたの腕のリング、それは帝位を継ぐものの証です。もう、外すことはできないですよ。そして、今、あなたがこの話を受け入れてくださなければ、太陽帝国は混乱し、たくさんの戦争がおこるでしょう」

リング、カツエが言っていた、これがそれなのか。シンカは左手で右の腕にはまった金属のそれをなでた。今は、シンカの体温のためか温かく感じた。

「いつの間にリングなんか。あきれますよ、元帥」
レクトの口調には揶揄が含まれる。

「我々には、帝国を守る義務がある。前皇帝がなんとおっしゃられようと、帝位を継ぐものを保護するのは当然のこと。もちろん、レクト。シンカが帝位を継ぐのであれば、お前も皇帝に忠誠を尽くすのである？」

元帥がにやりと笑う。

皇帝の動きを見守りながら、元帥が手を回していたのだろう。レクトはかなわねえな、と小さくつぶやいた。

「あの」

シンカが周りを見回す。

シキも、セイ・リンも少年の顔を見つめた。
メイソンは期待に満ちた目で微笑む。

答えを待っていた。

「俺のお父さんって、皇帝だったの？」

静まり返る室内で、一人だけ吹き出した。
苦しげに傷口を押さえて、レクトは横たわったまま言った。
「ばか、お前の父親は俺だ」

笑い続けるレクトに、シキも笑う。
セイ・リンも、ジンロですらにやりとした。

「なんだよ、笑うなよっ！」

少年は頬を赤くする。

それが重要なのだ、シンカには。そして、レクトの答えが笑顔を作らせる。

ちょうど、ブルブルの夜が明けた。

ガラスの壁面一杯に、金色に照らされた町並みが輝いた。

最上階のこの部屋にも金色の朝日が差し込む。

少年の髪も朝日を浴びてゆらめく。

嬉しそうに微笑むシンカの瞳の蒼は、地球の蒼を思わせた。

了

11・地球7（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！

この作品は「面白いRPGをやりたい」という私が思いつくままに書いたシナリオでした。

小説になるなんて考えてもいなかったのですが。

描き終えて、自己満足じゃ淋しいと、投稿してみました。

生まれて初めて小説を書いて、完結させて。その楽しさは言葉に表せないほどでした。

以来、物語を書くことが趣味になって、今現在は、「蒼い星」の続編3編、その他の長編ファンタジー3編、現代ものいくつかなど。ずっと書き続けています。

一人でも多くの人に、読んでいただきたい。楽しんでいただきたい。それが、私の願いです。

楽しんでいただけましたか？

感想、評価など、いただけると嬉しいです

2008・8・10 筆者拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077e/>

蒼い星

2010年10月16日02時27分発行